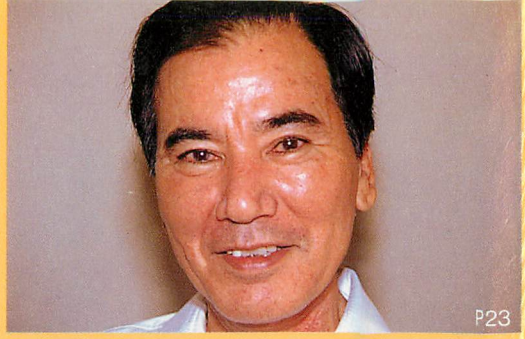
光よあれ

私たちは主のもの 70人の証し シリーズ第6集











光よあれ

私たちは主のもの 70人の証し シリーズ第6集

キリスト集会編

この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。

（Ⅰコリント　1・21）

光よあれ

私たちは主のもの　70人の証しシリーズ第6集

キリスト集会　編

はじめに

ゴットホルド・ベック

かつてイエス様は愛する弟子たちに言われました。

「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

（使徒　1・8）

この「あなたがたは…わたしの証人となります」という聖句こそ、まさに「光よあれ」第六集がこの世に出た意義そのものなのです。この日本においても、多くの方々がイエス様を信じ、受け入れ、イエス様のすばらしさ、その愛と恵みの大きさを語りたいと願っています。イエス様の証し人は、イエス様を紹介する人々です。そうして彼らはその証しを通して、決してあなたにキリスト「教」に入りなさいと勧めているわけではありません。彼らはこの本の中で、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」（ヨハネ1・29）つまりイエス様ご自身を知り、信じ、イエス様に従うというすばらしい生活を自分の体験を通して証しし、「あなたも早くイエス様のところにいらっしゃい」と呼びかけているのです。

さて、この世界は一つの大きな病院そのものです。いたるところに悩みを持つ人々、助けを求めている病人がいます。そこにいる多くの医者は、「病気」を大切にしていますが、実は病気そ

のものよりも「病人」の方がはるかに大切ではないでしょうか。しかし、医者は病人を大切にするための暇などないでしょうし、たとえ暇があったとしても、医者にはどのようにして病人に慰めが与えられるべきか、どうすれば病人が「生ける希望」を自分のものにできるのか、それがさっぱり分からない、というところに大きな問題があります。

また、あなたが悩みを抱き、それを解決してもらいたいと思って、ある「教える会」、つまり「教会」に行き、専門家の説教を聞いたとしても、その悩みや問題は解決されないでしょう。なぜならば人間は、「教え＝教理」によっては決して悩みから解放されることがないからです。

こういったすべての悩みから私たちを真に解放することがおできになるのは、この世界でただおひとり、主イエス様だけです。

たしかに、この世は、あらゆる種類の悩みごとで満ちています。

ある社会人は「私はいつもひとりぼっちでした」と言いました。精神分裂症だと診断されたある若い女性は、精神病院に入院する前に「私は友達がほしい！」と叫んだのです。誰からも相手にされず絶えず無視され続けて、愛されるということを経験したことのない人々は、確かにおかしくなり、やがて諦めの中で生活するようになります。これこそがいわゆる「宗教」がもたらした結果です。こんなことになったのは運命であると言われますし、人々は諦めるしかないと思い

込んでしまいます。

最近、次のような話をたてつづけに聞きました。ある奥さんはがんになりましたが、主人は家出してしまい今愛人と一緒に生活しています。ある若い女性は精神病院の中で飛び降り自殺をはかりましたが未遂に終わりました。ある母親の子供は突然交通事故で亡くなったのです。ある女性はまだ独身ですが、長年妻帯者と親しい関係にあると告白しました。ある母親の子供は最近外泊が多く、調べてみるとガールフレンドと親しい関係を持つようになっていたのです。この子供はやっと中学生になったばかりでした。ある女の子は登校拒否をし、家出をし、同棲した男の人との間に子供が生まれました。このようなことはおそらくあなたの周囲にもいっぱいあることでしょう。

人々は悩みます。このような問題が起こってきた時、本当に人々は悩みます。そして悩みぬいたあげく、自分の知恵や力に頼っても、残念ながら限界があると認めざるをえなくなります。どうしたらいいか自分では分かりません。そこで人々は、助言をしてくれる人を求めます。ドイツにはDer Ratgeber（助言する者）という名前の雑誌があります。助言する者とは、多くの場合心理学者であり、精神科の医者であり、つまりカウンセラーと呼ばれる人々です。悩んだあげく多くの人々がカウンセラーのところに駆けつけます。

しかし、この世界を創造された主なる神様は、悩む人々に対してどのように呼びかけていらっしゃるでしょうか。私たちが悩み、どうしていいか分からない場合、主なる神の私たち人間に対

する呼びかけは、まことにはっきりしています。それは誤解する余地のない、明快な命令です。

苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。（詩篇　50・15）

このようにはっきりした神様の命令があるにもかかわらず、今日、多くのいわゆるクリスチャンたちもまた、心の悩みを解決することができません。どうしてでしょうか。

次に、人間が心の悩みを解決することができない理由について考えてみましょう。

1．その理由の第一は、「主イエス様でなく、人間そのものが中心になっている」ことです。自分を知ることは、悩みの解決にはなりえません。自分の心をいくら追求しても、そこからは何の解決も得られません。私たちは自分よりももっと確固とした、強いお方を必要としています。この強いお方とは、イエス様です。イエス様は完全にあなたを心の悩みから解放してくださいます。「私ではなくキリスト」です。これこそが悩みからの解放の勝利の秘訣です。精神病院へ行くと、専門医は技術的、理論的に多くのことを話します。しかし、話の中心はいつも自分、自分、自分です。人間が中心になる限り、心の問題は決して解決されることがありません。

2．現代は、神の知恵よりも、人間の知識の方が大切にされている時代です。現代の心理学の土台になっているのは、人間的な知恵に過ぎません。神のみことばよりも、人間の考えの方が大事にされているのです。現在の心理学にはざっと数えただけでも二五〇以上の体系があり、一万以上のテクニックがあります。そして皆が、自分が属している学説が正しいと主張しています。人

間的な方法で問題を解決しようと思えば、たしかに一時的な解決にはなるかもしれませんが、根本的な解決にはなりえないのです。なぜならば、主なる神様のみことばよりも、ちっぽけな人間が出した結論の方が大切にされているからです。

3．悩みや問題の多くは、人間の罪の結果であり、人間のわがままこそが人間を不幸にするのです。ある親は子供のことで悩み、カウンセラーの言う通りにしました。「何でも子供の願い通りにしなさい」。子供はわがままが何でも通るということを何年間も経験した結果、最後には親は追い出され、自分の家に入れなくなってしまったのです。人間のわがままのせいで夫婦が一致できなくなり、家庭は目茶苦茶になり、分裂し、心配事が増え、その結果人々は薬に頼ったりアルコールに頼ったりします。多くのノイローゼは人間のわがままの結果です。

「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」（ヘブル9・22）と聖書は強調しています。つまり、主イエス様による贖罪こそが、罪の問題の解決です。主イエス様は権威をもって言われます。「あなたの罪は赦されています。安心して行きなさい。」（ルカ7・48、50）

4．多くのカウンセラーは、「原因は人間のわがままではなく、一つの病気である」と言います。人間の罪の問題、わがままの問題は無視されます。そして「病気のせいか、あるいは置かれている環境のせいである」と結論をくだします。その結果、人間にはまったく責任がないことになり、だれにも頭をさげる必要がなくなります。

ある女性はずっと不品行の罪を犯し続けていました。心理学者の意見は「その原因は冷たい父親と傲慢な母親のせいであるから、悔い改める必要はない。環境のせいだ」というものです。こ

れに対して聖書ははっきりと「姦淫してはならない」（出エジプト20・14）と言っています。結婚する前に親しい関係を持つことは罪であり、結婚してから他の女性と一緒になることも罪です。この女性がその罪を認めても認めなくても、主なる神様は「自分のそむきの罪を隠す者は成功しない」（箴言28・13）と言われます。この女性が精神的に不安定になったり、心配したり悩んだりするのは当たり前のことなのです。

5．多くの場合、罪の意識よりも「自信を持つ」ことが要求されます。自信があれば、一生懸命頑張ればなんとかなる、と言われますが、このような場合は喜びなどありえません。罪の告白なしには赦しはありえない、と主なる神様は断言しておられます。つまり、心理学の目的と、主なる神様の目的はちょうど正反対のものです。いわゆる自信とは、単なるごまかしに過ぎません。

6．いわゆる専門家の多くは、儲けるために聞く耳を持つのです。悩んでいる人々に耳を貸して、彼らは儲けます。それに、たとえいかに専門家たちが聞く耳を持っていたにしても、悩んでいる人々にとって本当の助けにならないのであれば、それは意味のないことであり、おおきな損失をもたらすことになります。

ある奥さんは二十年間、毎週カウンセリングを受け、治療費を払い続けました。しかし全然よくなりませんでした。また、別のある女性はこう言っています。

「私は五年間、毎週五回精神科に通いました。あまり費用がかさむので、新しく着るものを買うことも、旅行することも不可能でした」。

心理学で人の悩みを癒そうとすることは、今やお金を儲けるための商売になっているのではな

いでしょうか。

ある人が視力が落ちたので、心理学者の意見を聞いてみたところ「集中する能力がないのが問題だ。つまりあなたは無意識の内に心配を持っている。それが原因だ」と言われました。同じように視力が落ちた別の人は、心理学者に払う謝礼がないため眼科医に行き、検眼してもらってぴったり合う眼鏡を手に入れた結果、問題は完全に解決したのでした。

7．主の前にはっきりした態度をとらないで、聖書と心理学とを混合する人々があり、これによって多くの人々が惑わされています。あるカウンセラーは、心理学者たちの学説、たとえばフロイト学派、ロジャーズ学派、ユング学派と、聖書とを一緒にすれば何とかなると考えていますが、しかしそれはとんでもない誤りです。人間の罪やわがままを赦すことができ、あらゆる束縛や心配、恐れから解放できるのは、人間ではなく支配者である神様だけです。主なる神様にしかできないことを人間がやろうと思うことは、神を冒瀆することです。

8．祈ることをおろそかにすることは、考えられないほど大きな損失をもたらします。悩んでいる人と共に祈らなければ、どうして問題が解決され得るのでしょうか。主なる神様は祈りを聞いてくださり、奇蹟をなしてくださることを忘れたのでしょうか。祈ることなしに助言することは、悩んでいる人にパンではなく石を与えることを意味します。

このように、人間的な知恵に基づく心理学は有害なものです。人間の悩み、心の病の本当の原因は、自分の生まれつきの性質、つまり罪を犯す性質にあり、わがままにあります。わがままが

通ると、人間は遅かれ早かれ不幸になります。人間のわがままを治す薬はまだ発見されていませんから、医者もどうすることもできません。人間の悩み、心の病の原因を、他の人のせいにしたり、環境のせいにしたりすることは、問題の解決にはなりません。この罪の性質をなくすために、つまり罪ほろぼしのために、人間はどういう「宗教」に入っても、いくらお金を出しても無意味です。それは自己満足に過ぎないのです。

いったいどうして、主なる神様を信じているはずの多くのクリスチャンが、精神科の専門家の所へ行き、また心理学者の助けを求めているのでしょうか。その理由は、今日のキリスト「教」というものが、これらの悩める人々に対して何も提供できないからではないでしょうか。

私が知っているある人は、精神科の医者になろうと思っていたのですが、途中で止めて、脳外科の専門医になりました。理由は、壁にぶつかったからです。薬しかない、そして薬とは人間の心の病を治すことができないものだと分かったからです。

ドイツの心理学者であるサドラー博士は医学全書を書きました。その中で彼は「祈りとは、心配を取り除くために最も効果的な手段です。幼子のような素直な心をもってあらゆる思い煩いをことごとく主イエスに明け渡すこと、これこそまさにその奥義です。自分の罪、わがままが主なる神様によって赦されたという確信こそ、ノイローゼから私たちを守る障壁なのです。なぜ多くの人々は恐れたり、おののいたり、恐怖と不安の中にいるのでしょうか。その人々は、主なる神様からくる霊的な糧を日々食べていないからです。そのために聖書を毎日規則正しく読むように、

そしてこのことをすべての医者が患者に教えるように」と記しています。

体が大きくて力持ちのアメリカの大工さんと一緒に、混雑している中央線の電車に乗ったとき、彼は重いリュックサックを背中に背負ったままでした。私がどうして重い荷物を下におろさないのかと聞いたところ、彼は "I'm used to it." つまり「慣れているから」と答えました。「重荷を負うことに慣れている」、これは人間本来の姿なのではないでしょうか。重荷を背負うのは仕方がないことだと思い込んでいる人々も多いでしょう。しかし、私の勧めで重いリュックサックを下におろしたとき、この大工さんは輝いた顔で感謝したのです。

西軽井沢のゲストハウスの朝の祈り会で、ある学校の先生は自分の教え子たちの救いのために泣きながら祈りました。頭の知識だけでは心を満たすために十分ではない、イエス様と出会わなければ本当にかわいそうだ、と分かったからです。

山形の大学病院で危篤状態になったあるご婦人は、「私はイエス様に頼ります」と告白したとき、主を礼拝せざるをえなかったのです。「私は信頼して恐れることはない」（イザヤ12・2）という事実をこのご婦人は自分で経験したのです。その後彼女は天に召され、いつまでも主イエス様と一緒にいるのです。

沖縄のある重病の方は精神的に大変悩みました。病気や死のことを考えると心配と恐れで夜も全然眠ることができなくなりました。しかし、主イエス様を受け入れた日から、彼はぐっすり眠れるようになり、感謝するようになり、安心して将来に向かうことができるようになりました。

横須賀のある重病の方は、奇蹟的にイエス様に救われたのです。彼は入院などしたくなかったのですが、とうとう入院するはめになりました。私たちのキリスト集会に集っているある医者が彼を迎えて「木下さん、待ってたよ」と言ったとき、彼は「まいっちゃった」と言ったのです。彼はこの医者を見るたびに、どうして他の医者とこんなに違うのか初めは分からなかったそうです。この医者はある日彼に「光よあれ」の第四集を渡しました。それを読んで彼はいっぺんに主イエス様のことが分かり、夢中になって何回も繰り返して読み、医者と一緒に祈り、はっきりとした救いの確信を得て死に向かうことができました。今彼は天に召され、栄光に満ちた天国のすばらしさを味わっています。

沖縄のある学校の先生は倒れて手足が不自由になり、考えられないほど悩みました。自分の体を何とかして治すことしか考えられなくなってしまったのです。本人はもちろん家族や周囲の人々皆が悩むようになりました。しかし彼は主イエス様を知るようになって「私は自分の病気を忘れた」と言うようになったのです。

このように、いっぺんに変えられた人々を見ると、主を礼拝せざるをえません。聖書は約束された救い主についてこう言っています。

……その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。

（イザヤ　9・6）

三千年前にダビデ王は次のように告白しています。

まことに、あなたのさとしは私の喜び、私の相談相手です。（詩篇　119・24）

唯一の、まことの助言者であられる主イエス様は呼びかけておられます。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ　11・28）

「わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」（ヨハネ　6・37）

主イエス様のところに行くことは、キリスト「教」に入ることを意味していませんし、教会「員」になることも意味しないのです。ただ正直になり、自分を低くすることです。恵みを乞う者は間違いなく受け入れられ、罪の赦しを得、義と認められます。

私たちは今、ひとつの分かれ道に立たされています。二つの道が目の前にあります。ちっぽけでわがままな人間の助けを求めるか、あるいは意識して万物の支配者なる神に頼るかのどちらかの道です。主はこの瞬間にもあなたに力強く呼びかけておられます。

「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」（エレミヤ　33・3）

目次(1)

はじめに……ゴットホルド・ベック　7

光よあれ　私たちは主のもの　70人の証し　第6集

1　恐怖から解き放たれて……玉城新正　23
2　主おひとりだけが高められる……藤本賢二　47
3　この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。……藤本佐和代　68
4　何よりも大切な贈り物……藤本朋子　85
5　妻の安らぎとともに救われて……新井　稔　95
6　引っ張られて……金原　理　116
7　光に導かれて……金原慶子　125
8　キリストにある愛、喜び、平安……岡本広海　133
9　今あるは神の恵みです。……岡本基子　157

10　主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。……黒田清隆　205
11　主は私の羊飼い。緑の牧場に伏させます。……黒田ヤエ　219
12　祈りに導かれて……矢野雅子　231
13　あなたは豊かな所へ私たちを連れ出されました。……森島左武郎　241
14　栄光と支配がキリストにありますように。……森島久仁子　258
15　キリストの下僕の下僕……熊谷邦雄　271
16　主は私の喜び……熊谷祐子　284
17　私の病気と主の導き……故谷山雄二　295
18　私たちの救いであられる神……谷山郁子　304
19　いたんだ葦を折ることもなく……若山芳猛　324
20　主は「真実をもって私を悩まされ」ました。……若山昭子　352

続く

目次(2)

50人の証し（カラーページ）……161

・生きる喜びを神から…宇田川芳夫／二人の主人に仕えることはできません…宇田川淑子
・神は私達のうちに…柳田進／イエス様に愛されて…柳田ひろ子
わたしの所に帰りなさい…柳田毅／主にあって私達は一つです…柳田知子／感謝でいっぱいです…柳田トシヨ
・すべての栄光は主に…和田芳明／主の光の中に移されて…和田ヒロ子
主は私の助け主…和田宗勝／暗やみから栄光へ…和田周作
・主の愛と恵みによる真の平安…菅原宣昭／あなたの重荷を主にゆだねよ…菅原輝美
平安を感謝します…菅原規子／弱い私を愛してくださるイエス様…菅原章子
・ほんとうの富…岡崎龍夫／豊かなみのり…岡崎文栄
あなたの若い日にあなたの創造者を覚えよ…岡崎良弥／いのちのパン…岡崎万奈
・主は私の救い…辻田雅彦／将来の不安から解放されて…辻田ハル子
・主は天と地を造られた方である…塩瀬喜久／罪からの解放と安らぎをいただいて…塩瀬敬子
・イエス・キリストの愛…星野隆三／主は私と共に…星野広子
・光の中に導かれて…小川一夫／主が愛してくださる…小川美智代
・主に委ねた人生に平安あり…高田英彦／私たちの国籍は天にあります…高田茂子
・主の愛に導かれて…永川誠／主は生きておられます…永川智子

・従い委ねた今…飯島信太郎／罪を示されて…飯島陽子
・死もいのちも…白石光一／絶望から希望へ…白石萬里子
・苦しい時からの神だのみ…御任克彦／主にある平安…御任佳子
・私は主の家に住まいます…川股孝志／イエス様は私の主です…川股恵美子
・共にいてくださる主…友野雅志／イエス様と出会って…友野和子
・生ける望み…南原祥子／絶望から希望へ…南原恵理子
・自由に生きられるようになった…山田健・母の死を通して…上間かな恵
・私の主、神、わが救いの力よ…中俣照子・新しい歌を授けてくださった…笠井博子
・すべてを主に委ねて…小沢章雄・奇しいみわざを体験して…田嶋巳恵子
・主がくださった意志…長谷川明子

写真特集　西軽井沢国際福音センター……186

あとがき　西軽井沢国際福音センターについて……ゴットホルド・ベック　373

基礎的なみことば……378

「実を結ぶ命」のおすすめ…380　「神の愛」(上)(下)のおすすめ…381
「光よあれ」のおすすめ…382
全国のキリスト集会のご案内…386



▲ ご家族とベックさん。左は古田さん、中島さん(後)。1991年新正さんの家で。

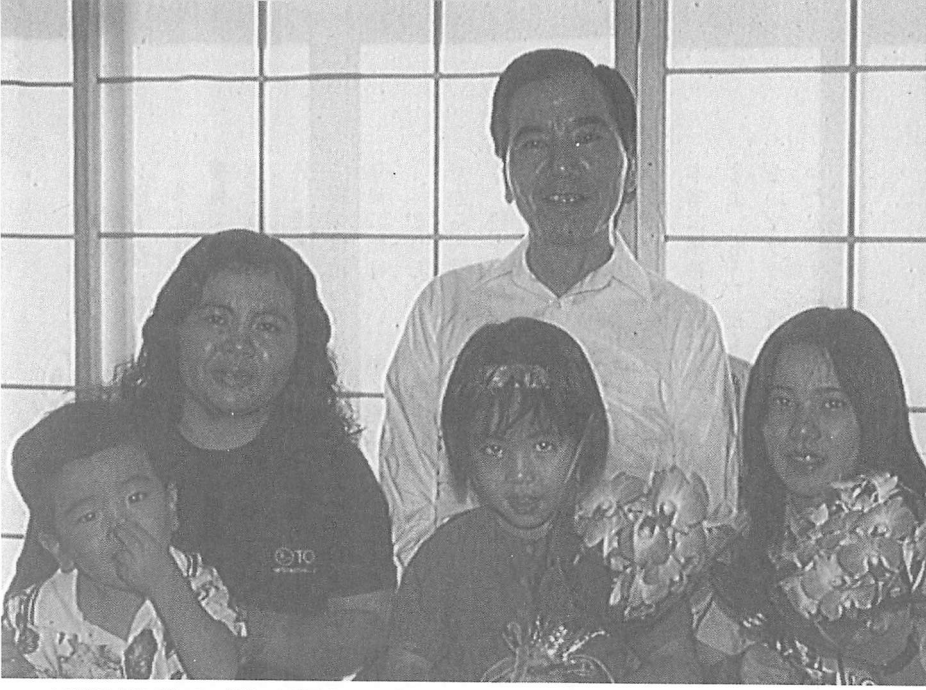
後列右からお母さん、お姉さん、一人おいて新正さん、
おばさん、左端次男の新哲さん、前列中央嫁のとみ子さん。
▼ 1948年新哲さんの結婚式で。

▼ 中央三味線を持つ新正さん。1957年兄嫁の実家の新築祝いで。





1984年クリスマス▶
に奥さんと。



▲ 玉城さん夫妻の洗礼の日に。前列左から長男正也さん、長女絵利香さん。右は共に洗礼を受けた玉城律子さん。

恐怖から解き放たれて

玉城新正（たましろしんしょう）

一九三六年に沖縄の名護市に生まれる。名護小学校、名護中学校卒業。県立沖縄工業高等学校中退。大工の父を手伝う。その後食堂経営、保険会社などに勤務。一九八四年に筋萎縮性側索硬化症を発病。家族は妻喜美江さん、長男正也さん、長女絵利香さん。

・この証しは、一九九一年夏に、玉城新正さんが「光よあれ」六集のために病床で語られた録音テープを編集したものです。

限りない恐怖の中で

少しずつ、動かなくなっていくんですよ。体が。長年かけて。怖い。それはもう怖い。もう、夢見ても変な夢しか見ないし。悪夢におびやかされて眠ることもできない。病院から睡眠薬もらってね。飲むといっときは効くんだけど、二時間ぐらい効いてるんだけど、すぐ目が覚めてしまう。それがもうずーっと、その繰り返し、繰り返し。だから自分でもこの筋萎縮性側索硬化症って病気は治らんと思っているんですけど、だけど人間っていうのは弱いもんですからね、やっぱり楽に死にたい、早く死にたい、こんなに苦しむよりは早く死にたいとか、そう思う。

「どうしたら今のうちに楽に死ねるかなあ」もう毎日、それしか考えてなかったんですよね。だから一回、首吊ったこともあるし。家内が外出している隙に。いつもリハビリやってるでしょう、紐を横に張って、手で持てるように。その紐を柱にくくりつけて。そこへ腰掛け持ってきて。それで紐を結ぶんだけど、右手が使えないから、左手でしかできんから、格好がつかない。十分に紐が結べない。のっそり、のっそりやっているもんだから、その間に家内が帰ってきて、急いで紐を切ってくれた。包丁で。

私はね、すぐにも精神病院に入れられるような、本当ですよ、これはもう嘘でも何でもない、本当に精神病院に入れられるような状態にまでなってたんですよ。そんなにまで、なってたんですよ。もう、夜も眠られん、朝までずっとテレビ、それもＮＨＫが終わった後のね、何も映ってないブラウン管をただぼかーっと見つめて起きてる。眠ることができないでしょ。そんな状態だったんですよ。そんな状態だと人間っていうのはすぐに参ってしまうもんなんですね。

だからそんな時にね、よくイエス様に出会えたもんだなーって、つくづく、そう思いますよ。

子供の頃

私は一九三六年に沖縄北部の名護市で生まれました。末っ子でね。母が四十過ぎの子供です。その頃の思い出っていうとね、山。その時分は、田んぼとか畑行ってね、日曜日など、田んぼ行ったり畑行ったり、またよく名護岳という、桜の名所がありますよね。あのへんでたきぎ、昔は燃料っていうとたきぎしかないから、日曜ごとに取りに行きおったんですけどね。また川もきれい。名護の川なんか昔はきれいかったんですよね。魚も沢山いたし。また田んぼなんかでバッタとか、それから夏になると蝉やいなごとってね。それを焼いて食べたり、いろんなことやってたんですけどね。

戦争が終わったときはたしか九歳でした。（注・戦争とは第二次世界大戦のこと。その末期に沖縄で凄惨な地上戦が行なわれ、民間人実に十九万人、日本兵六万五千人が死亡した。）小学校三年でね。名護の街もみんな焼け払っていて、藁葺の家があって。海の近くで、五十メートルぐらい行ったらもう海で、目の前が名護湾でね。よく海辺で遊んだりして……。がき大将でよく人のこと泣かせて、両親を困らせたことがあるんですけどね。よその子供たちを殴ったりして。よくつっこまれて、親が文句言いにきよったもんです。子供を連れてね。私は押入れに隠れて、いつも母親が詫びていました。

うちの父親は頑固で、もう凄かったんです。私がちょっと悪いことをしたら革のベルト持って

きてね、もう、うんと叩かれたりしました。その頃は水道がないもんだから、アメリカのドラム缶、それを二つ、飲料水を入れて天秤棒でかついで二百メートルくらい、もっとあるかなー、それを毎日運ぶのが私の仕事。子供っていうのは働くよりは遊びに行きたいという気持ちがありますよね。それでなまけるとね、やられおったんです。革ベルトで叩かれた。もう、うんと叩かれた。昔はもう、父親っていうのはほんとに怖い存在でした。

うちはね、兄弟は私が知ってるだけで四人、それと姉。もっと沢山いたみたいだけど、なんか小さいときにみんな亡くなってね。戦争もあったし。うちのおばさんから聞いたんだけど、「お前んちの兄弟は十人ぐらいいたよ」って。生まれたのは十人ぐらいだけれどみんな小さいときに亡くなって。

長男と次男は船の機関士で、漁船に乗り組んでいてね。戦争終わった後、頼まれて与那国島に荷物を運びに行って、それっきり戻らない。行方不明。そのころは沖縄近海はぶっそうで、海賊船なんかも出没していたから、それに出会ったのかもしれない。今だったら色々な情報機関があるし、警備艇とか飛行機もあるんだけれど、その頃はなんにもない。ただもう帰りを待つしかなかった。

それで私の父と母はもう仕事なんかそっちのけで、沖縄中「ユタ」を訪ねて歩いたんです。ずーっと。「ユタ」というのは、一種の占い師みたいなものでね。お告げっていうか占いっていうか、シャーマニズム、迷信なんですね。沖縄にはこれを信じる人々が今でも実に多いんです。まして昔はもうこれに頼るしかなかったんですね。これをやってもらうのが「ユタかい（注・ユ

タ買い)」。父と母は長男と次男の消息を知りたい一心で、沖縄中「ユタ」を買ってまわった。もう財産を売ってまでね、「ユタかい」をした。するとどこの「ユタ」に聞いても、長男と次男は元気でいるというんです。誰でも元気でいると言われると嬉しいですよね。で、父と母とが生きている間は、兄たちはまだ元気でどっかにいるんだろうと思って、ずっと、そのままにしていたんですけどね。

当時名護には教会ができていました。宮里という所に。でもその頃はキリストっていうとなんか外国の神様だという気がしてね。でも、クリスマスがありますね、その時お菓子を貰えるわけですよね、だからお菓子もらうために行ったことがあるんですけどね。小学校の五、六年かな。あの頃はみんな行ったでしょ。お菓子もらうために。でも、イエス様の話なんか全然聞いたことない。聞こうと思わなかったんです。知らなかったですね。

中学校は名護でした。中学二年まではウーマクー(注・わんぱく者)で、三年になると落ち着いてね。大人になったっていうかな。でも、魚釣りはずっと朝晩やっていました。海岸でね。海が好きでね。今でも好きですよ。スポーツもやりました。中学の陸上で、八〇〇とか、一五〇〇とか。選手になってね。体も大きくて、結構速い方だったんじゃないかな。

高校は、沖縄工業高校です。生徒としてはまあ普通じゃないですか、そんなに目立つほうでもないしね。一年の時には野球部に入ってたりしたんですけどね。でも、工業高校は二年までしか行きませんでした。船に乗っていた長男と次男の行方が分からないもんだから、財産みんな売り払っちゃったんですよね。あの「ユタ」買いで。それに長男と次男が船買うために借金もしてい

たし。それでこのままじゃいかんと思って高校二年で中退して、それで父の手伝いをした。父は大工だったんだけど、その手伝いして、四、五年ぐらいずっと一緒にやっていたんです。

私の母親はその頃はまだ元気でね。商売といってもね、店で売るんではなく、荷車で売り歩く、あれがうまかった。母が育った戦争前の沖縄は、女の子は勉強なんかするな、家の仕事をしろというあれだったでしょう、封建主義で。うちの母親なんか字はもう全然書けない。だから選挙になると大変。候補者の名前を書けるように教えるのにもう一生懸命。カタカナ教えてね。でも、字は書けなかったけれど、商売はうまかった。そういう字も書けない母なのに、よく商売して私らを育ててくれたもんだなあと思って感謝してますよ、ほんとに。

大根を仕入れてね。荷車にいっぱい積んで、金武とか宜野座まで持って行きよった。遠いですよ、行って帰ると六十キロもあるかな。それを引っ張っていくんだからね。今の人だったら歩くだけでのびてしまうね。そのあとはね、うさぎ。何かその頃はうさぎがよく売れたみたいでね。やっぱり金武、そこの基地の外人とかね、そこへずーっと売りに行きおったんですけどね。

あいつぐ肉親の死

ところがその母がちょっと風邪だっていうもんだから。それが「がん」だったんです。リンパ腺でね。首にぐりぐりができて。まだ六十過ぎなのに。病院でもうだめだって言われて、今みたいに設備がないですよね。だからだめだって帰されてきて。で、部屋で、危篤の母を家族みんなで見守っているわけですよね。これはね、母を真ん中に置いて、みんなで守っているんです。と

いうのは、沖縄では何ていうの……「まじむん」て言いますか？　魔物がやって来て人を連れ去っていくという迷信があるんです。その「まじむん」に連れ去られないためにね、みんなで母を守ってやってたんだけれど。

夜中に、母の妹、今も九十で健在なんですけど、その叔母さんが突然「起きなさい、起きなさい、塩もってこい、塩もってこい」って言うんです。みんな二日も三日も寝てないから、うとうとしてますよね。それで「何かなー」とみんなびっくりして起きたら、「まじむんが来てるから、姉さんを連れにきてるから、追い払おう」ということで、みんなで夜中に塩撒いたりしたこともありました。

母は次の日に亡くなりました。

それから父が死にました。六十七歳、肝臓がんで。兄、母、父と死んで、そのあと一番上の姉が、姉っていうより親がわりみたいなもんでしたがね、それが亡くなったんですけどね。やっぱりリンパ腺のがんでね。この姉は高知県で亡くなったんです。だからその時に病院行って、もう私ら何も言えないわけですよね。苦しんでいるんだけど、「治るから、治るから、治るから…」と、慰める言葉といえばそれしかないわけですよね。だから、それしか言えなくて。

今思うとね、今思うとイエス様をもうちょっと早く知っておれば、と悔やみますね。

右手が動かなくなる

その頃私は保険会社に勤めていました。一九八四年頃、営業でね。ところが手の指が、力が入

らんわけですね。右手が。おかしいなーと思って。字を書いたりするでしょう、職場で。それで気がついた。いっときはいいんだけど、長く書いているともうだらーっとして書けなくなるわけです。力が入らなくなる。それでおかしいなーと思って、一応病院に行ってみたら、「疲れだから大丈夫」ということで、私は気にしないでそのまま放ったらかしてあったんです。そのうち字が全然書けなくなって、力が入らないもんだから。最初に気が付いてから、一年位ですかね。それであっちこっち病院通って、調べたんですよね。

調べてみると、首の骨がちょっと狭いということで。それで神経や筋肉が圧迫されて手が駄目になるんだから「首を手術したほうがいいよ」と言われて。それで他の病院でも二、三カ所診てもらった。だけどどうもはっきりしない。そのうちにだんだん、だんだん右手が動かなくなって、完全に動かなくなった。右手がきかなくなって、それでもまだ左手は使えるんだから、一応手術でも受けてみようかということで。「手術したら三カ月ぐらいで治るだろう」って言われて。それを期待して手術を受けたんですけどね。那覇市の協同病院でね。

手術は、首の骨をね、足のこっちから骨をとってね。繋いでるわけですよ。こういう風にね。「首の骨が悪いから手術したら治る」ということだったんだけど、手術して終わったら、また他の症状が出てきたんですよね。

実はこの時手術が終わってから、家内は言われたみたいですね。「筋萎縮性側索硬化症」だと。うちの家内はかわいそうに気を使ってね、この間初めて私に本当のことを打ち明けてくれたんだけど、とっくに診断がついてたんですよ。だけど本人に言ったら、やっぱし筋萎縮性側索硬化症

っていったらもう、がん以上にたちの悪い病気ですからね。本人がショックを受けるから、本人には知らせてくれるなということで、それでずっと今まで黙ってたんだと。

私は手術が終わってね、もうこれで治るんだと思って……。

迷信不信

こんな時には人がいろいろ言ってきてくれるもんでね。うちの知り合いが、

「あんたはね、仏壇持ってるね、昔の人が何かいろいろ、やりたくてやり残したことがたくさんあるから、『ユタ』に行ってみなさい」って言う。

私は「ユタ」っていうのは、昔兄たちが船で行方不明になった時、父と母が「ユタ」買いしてもなにも分からなかったでしょう。財産だけなくなって。だから「ユタ」は信じないわけですよ。でも人間っていうのは何かにすがりたいという気持ちがありますよね。だから一回、だまされたつもりで行ってみたんですよ。そしたら、「あんたには四代前の人の何かがかかってるから、それの供養をしないと手は治らんよ」って言われた。

私は自分の親だったら分かるんだけれど、四代前の祖先なんてどんな人か考えることもできない。その四代前の祖先に何もしてないから、つまり法事ですかね、すうこう（注・焼香）っていうか、それをやってないから、私にばちが当たったと。そう言われるとこれはいかんと思って、この人を頼んで二日間ずっと供養してもらった。まず名護ね。それから首里の十二カ所。昔の沖縄の祖先の、何々氏、何々氏ってありますよね。私らの祖先は今帰仁（なきじん）氏なんですよね。それでそ

の今帰仁城趾まで行ってね、拝んで、それからまた兄たちが海で亡くなってるもんだから那覇の三重城でも供養して。でも、それだけやっても全然治る気配がないわけですね。そしたらまた、他にもっといい「ユタ」がいるからもういっぺん行ってみようということになって。そしたらそっちの「ユタ」は、「まだ通ってない」と言うんです。通ってないというのは、供養が祖先にまで届いてない、まだ供養し足りないというわけなんですね。そしてまた別のことを持ち出すんです。五代前とか六代前とかいろんなことを際限もなく。だからもう、これは絶対信用できないってことでね。全然信じる気がないから。それからはどこへも行かない。

そのうちね、寄宮に、うちの兄の嫁さんだった人がいるんだけど、

「あんたはね、『ユタ』なんかするから、いいようにされるんだよ。『ユタ』はみんな嘘だけついてね、金だけ使わせていいように利用するんだから」って言うんです。そんなもんで治るわけはないと。それで創価学会に入りなさいということでね。せっかく義姉さんの言うことだし、その頃は私ももうやけくそですからね。「何でもいいや」と思って、言われるままに座談会とかに行ってみた。

そしたらね、がんの人がね、医者から「もうあんたは半年しかもたない」と言われたけれど、毎日拝んでいたら治ったとか。南無妙法蓮華経やってたら。だけどそう聞かされても私自身にはぴんとこないわけですよね。それで突っぱねたんだけど、幹部の人を連れて来てね。何回も何回も、四、五名で。「一生懸命やれば治るからやりなさい」ということで。だけど私はね、「できないものはできない、できるものはできる。もう嘘っぱちのことはやりたくないから」と断ったん

ですけどね。

その時分はまだ本当の病名を聞いていないからね、ひょっとしたら治るんじゃないかなーということで、希望も持ってたんだけど。

つのる死への恐怖

そのうち、病気が病気でしょう、だんだん悪くなる。自分で分かるわけですね、悪くなっていくのが。それでもう、自分ひとりで悩んで。

その頃、私たちは那覇の繁田川から同じ那覇の石嶺の団地に移ってきたんです。住む場所が変わったせいか、よけいもう、その不安の激しさったらない。なんて言えばいいかね、怖さっていうことですか、少しずつ、動けなくなっていくことへの。

同じ頃ね、初めて沖縄病院に行ったんですよ。私はもう医者っていうのは信用できなくなって、一年ぐらいずーっと行ってなかったんだけど。前に来てくれていた保健婦さんがね、「この病気の専門は国立療養所沖縄病院だから行ってみなさい」って紹介してくれたんです。この病院は筋萎縮症や筋ジストロフィーの専門病院でね。沖縄ではここしかないんです。自分がどうなるのか、この目で見るのが怖くて中に入れなかった。一回目は病院の前まで車で行ってね、家内が車持ってるもんだから。門まで行って、中に入ったんだけどね、「帰る！」って言って帰ってきた。もう病院が怖くてたまらないわけですよ。

二回目はなんとか入口の、受付のある所ありますよね、そこまで入って、それでもうだめだっ

ていうことで、逃げて帰ってきた。

もうほんとに自分の体がどうなっていくのか怖くてね。この恐怖は自分でどうすることもできない。だから友達なんかに話しても、私の気持ちなんか分かってくれない。分かるはずもないしね。もうどうしようもない。それでもう、毎日、気が狂いそうで。

そのあと、誰に悩みを打ち明けてもどうにもならんわけですよね。いくら健康な人に話しても。口先だけの同情なんていやだし、励まされるのも抵抗あるし。たまに家内の友達や親戚の人が来ても、気休めの話しかしないもんね。「こんな人もいるんだよ、頑張りなさい」とか。「よその病院へ変わってみたら」とかね。それしか言わない。それでも話してる間はまだいいんだけれど、その人が帰ってしまうとまた寂しくなるでしょ。どうしようもない暗い気持ちになって。不安が積もってきて、どうしようもなくなるんです。特に夜は不安になる。もう寝るのが怖い。毎晩がそれの繰り返しですよ。

その頃ね、手術した協同病院の先生もね、「同じ病気の人がいるから会いに行かないか」って。その方はもうずっと寝たきりでね、もう声も出ない。ただもう目だけ、目でしか合図できないというわけです。私はこういったこと見るの、怖いわけですよね。自分もやがてこうなるんじゃないかと思えば、それはもう、怖いから。

同じ頃ちょっと熱が出て、それで痰がからまったことがあって。自分で取ることができないからその先生に取ってもらったんだけれど、先生は「入院しないと死ぬよ」って言うから、「あ、死ねるんだったらその方がいいですよ」って先生に反抗した。絶対に入院なんかしない。

この病気はがんよりもたちが悪いですよ。じわりじわりとね。もうほんと、精神的に参ってしまうんですよ。この病気は何年、何十年、こんなにしてじわりじわりねえ、いつまでやられるか分からんていう、それを考えるとねえ。もう精神的に参ってしまってどうしようもないんです。

それまでは海なんかへ、よく行きおったんですけど。海は広いでしょ。海見ると気持ちが晴れるわけですよ。家内に車で連れていってもらってね。家内は「なんのためにあなた海へ行くの」って言ってたけどね。私はね、海見てるだけで気持ちが晴れるから。去年はもう、月三回ぐらい行ったんです。だけど海見てる間はいいんだけど、帰ってきたらすぐ恐怖に襲われて。そいでこのソファーにずーっと座ってるわけでしょう。だからどうしようもない。「どうしたら死ねるかなあ」と、いつもそれが頭に浮かんでくるわけですよね。もう、早く、悪くならないうちに楽になりたいという気持ちでね。

それに体がだんだん、だんだん悪くなるのは自分で分かるから。もう、睡眠薬飲んでも効かない。それでもっと沢山飲んだら死ねるんじゃないかと思って飲んだこともあるんですよ。それでも駄目。もうどうしようもない。

「どうしたら早く死ねるかなあ」と、それしか考えられなくなってね。首吊って、失敗したのもこの頃のことです。自分の首を吊るのももう、のっそり、のっそりしかできないんでね。家内に見つかってしまって。

この石嶺団地へ来て、大きな建物見ると「ああ、ここから落ちたら楽に死ねるんじゃないか」と何回も思って。こっちへ来て、もう、夜も眠られん。もう怖い、怖くてたまらん、夜になると。

やっと眠ったと思うとね、すぐ怖い夢見てうなされる。もう、うちの家内まで怖がってね。湾岸戦争のときなんか、毎晩、夜明けまでテレビを見ていた。夜が明けないと眠れなかったんですよね。沖縄の言い伝えで、一番鶏が鳴いたらね、魔物はいなくなるとか、そういうのを聞いて育ってるもんだから。迷信だと分かっていても、こっちの頭もおかしくなってるから。もう、暗いうちは怖くて怖くて眠れない。ずーっと湾岸戦争のテレビなんかただぼかーっと見て、起きてるわけですよ。私はね、いつ精神病院に入れられても不思議はないような状態だったんです。もう夜も眠れん、朝までずーっと、放送の終わったテレビの何も映っていないブラウン管をぼかーっと見てるような、そんなだったんですよ。

それが毎日毎晩、ずーっと繰り返し。もう、その苦しさったらない。だから自分が生きてるような気がしないんですよね。

家内も、「あんた、もう精神病院に行かんとだめよ」って言ってた。もう眠れないんだから。昼も一時間ぐらいしか眠れないんですよね。だからあとは注射。強い注射打ってもらうしかない。だから精神病院行くしかないのかなあと思って。

そんな時、たまたま沖縄病院でね、口で絵を描く人がいるから会ってみないかと言われてね、じゃあ会ってみようかということで、高嶺さんという方に会ったんです。この方は手足が全然動かないんですよね。電動椅子で、口でみな操作して、絵も口で描いて。ところが堂々としてる。その顔がね、忘れられないわけですよね。私なんかこの方に比べたらまだ足もちょっと歩けるのに、私はいつも恐怖で生きた心地もしないのに、この人だけはどうして堂々として、怖さなんか

感じないように見えるのかなあと思ったんですよね。それで聞いてみたら、

「いや私はね、イエス様を信じてる。イエス様を信じていますから、だから死というのは怖くないよ」と言うわけですよ。それを聞いて、帰ってきた。

それでうちに最近来てくれている保健婦さん、平良久美子さんていう人にね、こう言った。

「あの、うち、教会でも行ってみようか」って。

このへんは教会が沢山ありますから、教会でも行ってみようかなって話したんですよ。それまでは保健婦さんに、話しかけたことなんか全然ないわけですよね。で、そう言ったら平良さんが、

「実は、私もイエス様を信じて、やってるよ」と言うもんだから、

「あ、そうですか、じゃ、私もちょっとやってみようかな」ということで。

そういうことを言ったのはね、やっぱり高嶺さんを見て、イエス様ってすごい神様だなあっていうことは感じてましたよ。感じてました。だけどねえ、まさか後で自分自身まで変えられることになるなんて思わなかったですよね。

そのうち、平良さんがね、

「ベックさんが来るから、一度会ってみないか」と言うもんだから、最初はもう気軽に、

「はい」って言ったんですよ。すると平良さんがね、

「じゃあ、この五月ごろ来られるからその時にお願いして、ベックさんにお願いしてこっちに来てもらうから」ということだったんですよ。

だけど私はまさか、あんなドイツの方が来てくれるなんて、本気にはしてなかったわけですよ

ね。それで冗談だと思って会うって言ったんだけれど、それがほんとになってきて。それで平良さんから電話が来た時「断ろうか」と言うと、「いやぜひ会ってみなさい」と言う。「ともかく一回だけでいいから会ってみなさい、会ったら分かるから。わざわざ東京から来るんだから会ってみなさい」って言うもんだから「じゃあ会いましょう」ということになって、ベックさんに初めて会ったんですね。その日までは会うか会わないか、ずいぶん迷ってね。悩んで。どうして断ろうかなあと思ってね。その頃は毎日、睡眠薬飲んで、頭もおかしいわけでしょう。モワーッとしていて。だから人が来るのがいやっていうかな、そういう気持ちだったから。

恐怖からの解放

それで、会ったんですよね、ベックさんに。最初は別に何も感じなかった。だけどだんだんと何かねー、ベックさんが手を握ってくれて話しているうちにねー、自分でも不思議なんですけど、何か気持ちがすーっと吸い込まれるような気がしてね。もう自分でも分からない。もう何て言えばいいのかな、こう、今までの不安っていうのかな、怖れがね、あれがなくなる。だんだん、だんだん、忘れていくわけですよね。話を聞いているうちに。何とも言えなくてもう、落ち着いて、ね、ほんと、落ち着いていく。

それで後はずーっとベックさんを見てたんですよね。不思議だなーと思って。生まれて初めてですよ、こんな、生まれて初めてですよ。こんなふうになるなんていうのは、生まれて初めて。もうなんとも言えないわけですよ。自分でも、言い表わしようがないんですよね。この気持ちっ

ていうのは。

それからベックさんについて、悔い改めのお祈りして。「イエス様ごめんなさい。あなたを信じて従います」って祈って。

それでもう、ほんと、そのベックさんが帰るとき、もう男泣きに泣きたかったぐらいですよ。涙が止まらないような気がしてね。ほんと恥ずかしいんだけど、実際にそういう気持ちだった。

その夜からぐっすり眠れるんですよ。睡眠薬を飲まなくても。ベックさんはね、言うんですよ。「あなたはもう救われたんだよ、毎日、イエス様にお祈りして寝なさい」って。「何も心配ないよ」って。それから毎日、寝るときにいつも感謝して、お祈りして。

次の日、今まで保健婦さんがくるのがいやでいやで仕方なかったのが、家内に「保健婦さんに早く電話しなさい」なんて自分で言ってる。もうなんかしらん自分でも変わってしまってね。「電話しなさい。もうほんとによかったってね、電話しなさいよ」ってね。

それまでは、保健婦さんが来るのがいやでね、憎んだー、もう。ずーっと憎んでましたよ。もう喧嘩。保健婦さんとか医者とかね。それと看護婦さんね。看護婦さんには言ったことあるんですよ、「看護婦さんはね、前は天使だったけど、今は悪魔ですよ」って、こういうことまで言ったことがあるんですよ。

なぜかって言うとね、医者は診たあと、どれくらい悪くなった、ということしか言わない。治るとは絶対言わないんですよね。だから病院に行くのがいやでね。病院に行く前になるとね、拒絶反応起こして行けなくなるんですよ。病気が悪くなることしか結局のところ分からないからね。

それで今まで病室を見るのが怖かったんですよ、ほんとに。筋萎縮症とか筋ジストロフィーとかの症状の患者さんを見るとね、怖くて、怖くて、もう自分が、自分もこんなになるんかなと思うと、怖くて見ることができなかった。ベックさんに会ってから、なんか知らんけどね、病室の中を見たい、どうしても見たいっていう気になって、お願いして病室に入ってみたんだけど。そこでね、重症の患者さんに会った。その方はね、病状は私と同じで、もっと進んでいるんですよね。前だったら、あんな状態この目で見たら、とっくに絶望して自殺してたんじゃないですか。看護婦さんが二人いて、喉から一生懸命、痰を出したりいろいろなことやって。声はかけなかったんですけどね。ガラス窓からずーっと見えますよね、病室が見えますよね。見ていてもまったく怖いっていう気持ちがないんですよね。もう、堂々と見ることができて。

私が病棟に入っていくとね、患者さんはみんな車椅子でしょ。筋萎縮症とかいろんな人がいますよね。みんなもう、下向いているわけですよね。そういうの見るとね、気の毒でね、イエス様を知って後のね、今の私の気持ちを分けてあげたいなーと思うんですよ。ほんとに。やっぱり神様、イエス様は偉大なもんだなーと、つくづくそう思いますよ。

「分かる方がおかしい」

私はね、今もって分からないんですよね。不思議なんですよね。イエス様知って、まだこんなに短いのに、何でこんなにまで人間が変わるんかなーと思って、自分でも不思議でたまりません。いくら考えても、分からないんですよね。

だからわけを言いなさい、どうしてそんなになったのか言いなさいって言われてもね、言えないんです。言えないけれど、心のあれでね。分からんけれど、不思議なんですね。だからベックさんが「いや、これは分かる方がおかしい」って言うんですよね。「イエス様を分かる方がおかしい」って言うんだけど。気持ちがほんとに変わってね。もう夜もぐっすり寝られるしね。また死ぬってことも、恐れなくなった。

あんなに怖かったのにね、それがみんな消えたっていうのがもう不思議なんですよね。これだけはもう何とも説明できない。もう死の怖さってのがね、消えたっていうのがほんとにねえ。ベックさんに会って、イエス様に出会えて、ほんとによかったなーと思ってます。感謝してます。ほんとに。

もうずっと肩も外れているし、完全に両手が動かない。首ももう。腰ももう。だからね、首をね、腰を固定しないと歩けない状態なんですけどね。だから家の中ではちょっとずつ歩けるんですけどね。一日一日自分の体が、肉体はね、悪くなっていくけど、精神的に強くなってる。

家内はね、私が「こんなしてよく眠れるよ。こんなして気持ちがいいんだよ、不思議だよ、自分でも不思議だよ」っていくら言っても、最初は冗談言ってるとしか思えなかったらしいんですよね。今まで宗教嫌い、絶対信じない私見てるからね。こんなこんな言っても全然信じてくれない。嘘だって言うの。皆さんが不思議がってどうしたのって聞いてくれますよね、私が今のこの気持ちを言うと、嘘みたいっていう。だけど睡眠薬なんか飲んでないのは見たら分かるからね。嘘でこんなに変われるわけないよね。

昔はどうしたら死ねるかなあなんて、楽に死ねるかなあなんて、それしか考えなかったもんね。それがイエス様知ってから、急に変わった。こんなに変わった。

家内も変わりましたよ。それまではもうしょっちゅう喧嘩。これはしようがないでしょう。他に当たる人がいないからね、もう。あれにしか当たれないわけで。夜もしょっちゅう起こして。もう夜中でも、怖いもんだからね。私は目が覚めると、怖いから家内も起こすんですよ。人間っていうのは、やっぱし睡眠をとらないといくら健康な人でももたないもんね。

だけど今はもうぐっすり眠れるから。子供たちも明るくなった。家内もね、安心したのかね、笑ったりしてくれてね。だからほんとによかったなあと思ってますよ。

家内がね、言うんですよ。

「十万人に二人か三人ぐらいしかこの病気にはかからんっていうのにね、宝くじより難しい病気にあんたかかってるよ」って。そいで二人で笑ってね。

今はもう、私はね、これはイエス様の試練であると思ってる。イエス様が私を十万人の中からね、今まで横着で何も考えたことのない私をね、イエス様がね、十万人の中から選んで、十万人の中の一人か二人として選んでくれているんだと。もうそれはイエス様の試練であると。それを通して永遠のいのちを与えてくださったっていう、それを今は感謝している。ほんとによかったと思っています。

だからイエス様を知らないとね、十万人の中から一人か二人だったらもうほんとにいやですよね。何であんな、十万人の中からわざわざ私がこんないやな病気になったのかなあと、自分でも

よけい悲観するわけですよね。だけど今はそうじゃなくて、十万人の中から私をね、選んで、イエス様がね、選んでくれたんだと思えば、もう、今からこの病気と一緒にね、一生懸命イエス様のためにね、生きてる間頑張っていこうかなーって思うんですよ。

家内が言いましたよ。「医者からも、本人に告知しなさいって言われたけど、今まで隠してた」って。「もうあとわずかしかもたないっていうのと違うから。何年も闘っていかないといけないから。本人に知らせてから一緒にやっていかなければって。だけど、もしそれを言ってしまえば、もうどうせ治らないんだったら病院なんか行く必要ないって病院へ行かなくなるからと思って。それに、あんまりショックなことだから。三カ月で治ると期待してたら治らない、しかも筋萎縮性側索硬化症だと分かったらもう大変、と思ってね、隠してたんですよ、一年近く隠してたんです。一生懸命でね。

近頃ね、毎週沖縄キリスト集会の方が家に来てくれるんです。するとね、たいてい、私は家内と聖書を読んでるんですよ。聖書を読んでるけど、あのねえ、あれ、あんまり厚みがあるもんだから、どこを読んだらいいか分からんもんだから、できたらね、一人一人に、本当によかった所をね、ここが一番慰められたって所を順番に読んでもらえるとありがたいなあと思いますよ。みなさんは私よりずっと長いんだからね、聖書もよく読まれてるし。だからほんとに自分が感じた章なんかをね、一番よかったところをね、読んでほしいなー、なんて思いますよ。

今まで四人ぐらいでしたけれど、来週からもっと沢山になるって。私が元気だったら、一回でいいから一緒に行ってね、あのー、皆さんの所に行ってね、皆さんと一緒にイエス様たたえて、

一緒にお祈りしたいね。それからメッセージも聞きたいけれどね。それができないもんだから、ベックさんの録音カセットテープ聞いたり、「光よあれ」読んだり。テープ聞いてもね、まだはっきりとは分からないんだけど、何か気持ちに、心の中に感じることがあってね。前はこんなテープ聞いたり、「光よあれ」読んだりするのは絶対だめでしたよ。もう、病気のことね、病気の方の体験なんか出てくるといやでいやでね。

一時はもう起きてるのも大変だったけど、体が、気持ちがね、充実してると体も自然と動きやすいような気がしますね。

ほんとの救い

ほんとの救いはね、病院じゃなくて、イエス様がくださるものだったんですよね。

病院とかお医者さんはねえ、ほんとは病人の悩みに手を貸すのが義務なんでしょうけど、やっぱり精神的にはどうしようもない。何もできない。今まで保健婦さんとか、看護婦さんとか、お医者さんとか頼ってみてもね。

病気すると精神的にね、弱くなるでしょう。そういった心の苦しみ、悩みを打ち明けられたときに助けてあげるのがお医者さんの務め、看護婦さんの務めじゃないかなーと思ってたんですけどね。精神的なことはもうお医者さんとか看護婦さんでは手におえない、お手上げですね。気休めしか言えないんですよね。だから今考えると、ほんとにもう、偉大なのはイエス様だなーと思ってますよ。こんなに平安をくださるんですからね。生きていく希望ね、永遠のいのちをくださ

るんですからね。

だからね、今はもう、イエス様知ってるから、病院に入院してる筋ジストロフィーの方なんか見てもね、全然怖いという気がないですね。

それに自分の病気のことをいくら聞かされても、もう、怖れはないわけですよ。何言われてもね、自分がもう治らない病気だと言われてもね。もう怖れが全然なくなってる。むしろ希望を持って、生きている間にね、イエス様を心の中、心の底から信じてね、イエス様のすばらしさを他の人に伝えていきたいな、とそれだけですよ。

この気持ちはね、同じ病気の人じゃないとね、伝わらないんですよね。健康な人がいくら言ってもぴんとこないわけですよね。やっぱり人間ていうのは、病気した、同じ病気した人しかこの気持ちは分からないから。私はまだちょっと歩けるし、ただイエス様の救いを伝えたい。イエス様におすがりして、この幸せな気持ちを伝えて、なんとかしてあげたいなー、イエス様のことを伝えていきたいなー、と思ってますよ。ずっと。イエス様のこと知ってる人まだまだ少ないから、もっともっとみんなに伝えてね、ちょっとでも伝えていきたいなーと思ってますよね。

それでね、今から、週一回、絵の勉強しながらね。今操具を作ってますけどね、それで私は生きてる間ね、勉強しながら、同じ患者同士としてね、イエス様のことを伝えていきたいんですよね。イエス様信じて救われて、その喜びを知ってからは、もう病院行って、とにかくその喜びをみんなに伝えたいっていう気持ちで一杯なんです。

みんな暗ーい表情してるでしょ。みんな昔の私のね、イエス様知らない頃のね、暗ーい心境な

んだなあと思うとね、たまらない。ほんとにたまらない。今すぐにでもその人たちの横へ行って、「イエス様をね、信じたらね、本当に幸せになれるよ、死も怖くないし、今からでも遅くないしね」

ってね、耳のそばで言ってあげたいんですよ。ひとりひとりにね……。

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなた（主）は、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。（イザヤ　38・17）

「わたし（イエス）は、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。」（ヨハネ　14・27）

神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。（ローマ　6・23）

たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。（詩篇　23・4）

主おひとりだけが高められる

藤本賢二

一九四八年東京に生まれる。三鷹第八小、三鷹第三中、桐朋高、電気通信大学材料科学科卒業。日本ＡＭＤ㈱勤務を経て現在㈱オーク・テクノロジー代表取締役。家族は妻佐和代さん、長女朋子さんと長男義矢さん、賢二さんの母シゲさんの五人家族。趣味はギター、ゴルフ、囲碁など。



▲ドイツの集会のみなさんと。1990年。

左藤本佐和代さん。右藤本賢二さん。
▼16年めの結婚記念日に高知バイブル・キャンプで。



イエス様は私の人生を完全に変えてくださいました。私は今、生きる目的を持ちました。そして、本当の希望をいただきました。また、私一人では前進できないことを知りました。本当にイエス様に生かされるようになってから、新しいことばかりです。イエス様は本当のいのちだと思っています。いつのまにかそう思うようになりました。イエス様を思うと、必ず心が落ちつきます。その反対に自分自身の問題点や、起きた様々なことに心を奪われていると疲れてきます。とても不思議なことですが、事実その通りです。イエス様に救われてから今まで、イエス様は生きて働いておられるといういろいろな方の証しを何度も聞きました。そして自分でも体験しました。イエス様が生きて働かれるという証しを見、聞くときは、とても心がうれしくなります。いつのまにか、イエス様が私の「主」として現われてくださったのです。そのことを書かせてください。

私の人生の二つの大きなできごと

まず簡単に自己紹介をいたします。私は四十二歳です。妻、長女、そして三歳の長男が私の家族です。仕事は半導体関係で米国系の会社に勤めています。

私は以前には神様の存在を九九パーセント意識していませんでした。宗教はとても嫌いでした。私が信頼していたのはお金でした。その次は人と物です。真理にはほど遠い人生を歩んできました。仕事に夢中になり、その延長で夜の時間を過ごし、仕事以外では自分の欲を満足させるために、ゴルフ、碁、パチンコ、マージャン、マンガと、あらゆることに手を出していました。また、刺激を求めて破廉恥なことをたくさんやりました。それ以外の生活があるとは夢にも思いません

でした。その時はそれがすべてでした。今その頃の状態を思うと、私は自分の中にある人間の欲そのもので生きていたのです。常に自分の考えの正しさを前面に押し出してきました。が結局、なんにもわかっていなかったのです。本当の自分も、家族のことも、何もかもです。

彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。（ローマ　1・29～31）

私はこのすべてにあてはまる者でした。大げさに言うのではなく、まさにその通りだからです。

約十二年前に私は日本ＡＭＤ株式会社に入社させていただきました。この時が私の人生の一つの節目でした。今は同じ吉祥寺キリスト集会に集っておられる古田さんが、その時私を採用してくださった方でした。その時古田さんはまだイエス様を信じておられなかったと思います。はっきり言えば、その頃の古田社長は夜の世界の過ごし方を教えてくださる教師みたいな方でした。この時の古田社長との出会いが、後ほど私に本当に大きなインパクトを与えることになりました。

私の人生の中でもう一つの大きなできごとは、私が今の妻と結婚したことです。私たちは、新幹線の中で初めて出会いました。その時はそのまま何もなく別れましたが、彼女が持っていた文庫本から写し取った住所から、その後東京で再会することができました。結婚したいと思いましたからそのようにお願いすると、妻の両親も、当人も良い返事をくれましたので、結婚しました。

今から約十五年ほど前のことです。

結婚当初は私の両親と一つ屋根の下に住んでいました。それは私と母との約束があったからです。母は、私が小さい時から病気がちでした。いつも布団を敷き、ほとんど寝ていました。学生時代は時間がありましたので、私はよくそんな母と話をしました。結婚したら同居することは当然のことになっていました。

「あなたがたは、地に平和を与えるためにわたし（イエス様）が来たと思っているのですか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ、分裂です。今から、一家五人は、三人がふたりに、ふたりが三人に対抗して分かれるようになります。父は息子に、息子は父に対抗し、母は娘に、娘は母に対抗し、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに対抗して分かれるようになります。」（ルカ　12・51～53）

イエス様が私たちに与えようとしておられるのは一時的な問題の解決ではなく、永遠に続く深い結びつきです。ですからこの聖書のみことばが、まだイエス様を知らなかった私たちの家庭にも真理として働きはじめたのは、イエス様のあわれみに外なりませんでした。イエス様はこの時すでに、母と妻との間をただの姑と嫁以上の、いつまでも続く間柄にしようと計画してくださっていたのです。

私たち夫婦は両親と別居しました。次の出会いまで心の交流はなくなりました。

ある日家の中に光があった

このようにして私たち夫婦は新たに結婚生活を始めたのです。初めは新鮮な出発でしたが、今度は私と妻との間に問題が生じました。私はそのことを数年後になって知ったのですが、当時妻は私と別れようと思っていたそうです。私は家を顧みなくなっていましたので、妻がそう思ったことは当然と思います。私はそんな妻の気持ちにまったく気がついていませんでした。

今でもそうですが、私には人への思いやりがあまりありません。それに、その時は自分のしていることが百パーセント正しいと思っていました。「給料を渡し、家に帰ればそれでいいのではないか。欲しいものはできる限り手に入れてあげるから、家のことはお前がやれ」という態度でした。ですから妻は耐えられなくなっていたのです。妻は基本的に忍耐強い人です。あまり愚痴を言いません。ですから、私には妻の悩みはまったくわかりませんでした。

ちょうどその頃、妻は武井さんと近所でお会いすることになるのです。これが私たちの家族にとって一つの重要なできごとになったのです。妻は武井さんからイエス様の話を聞いて、聖書を読み始めました。そして、私と結婚生活を続ける決意をしました。妻は聖書に書かれている天地万物を造られた神様に従うことにしたのです。

私はあまりこの辺の事情は知りませんが、ある日家に帰った時、家の中に光があったことはよく覚えています。信じられぬほど、部屋の中が明るくなっていました。そして妻は私に申し訳ないと謝ったのです。思いもよらないことでしたから、私はただ驚きました。悪い方がまともな方に謝られたのですから、何が何だかよくわからないというのが私の実感でした。

その後、私は妻が聖書を読んでいることを知ると、なぜか聖書を否定する本を集めだし、妻に対抗しようと懸命になりました。しかし戦いは負けに終わりました。歯がたたないのです。無知な者が聖書を否定しようとしても、とても勝ち目はありません。

そうこうするうちに、米国への転勤が決まりました。初めの一年半はカリフォルニア州に、後の一年半くらいはテキサス州に行きました。

米国に住んでいる時に、妻はアメリカの教会で長女とともに洗礼を受けました。その時私はとても反対したそうですが、自分ではよく覚えていません。その頃の写真を見ると私もその教会に洗礼を見に行っていました。教会は好きでも嫌いでもなく、ただ教会で歌われている歌が良かったのです。私の好きな曲はAmazing Graceという曲でした。

米国にいた三年間は、隙あらばクリスチャンである妻をやり込めようとした年月でもありました。その頃の私には、イエス・キリストについてはよくわからず、信じる気もまったくありませんでした。そうこうしているうちに日本に帰国することになりました。

どうして古田さんが……？

帰国後、ホテル住まいをしながら住居を捜していた頃のことです。新宿のＣＬＣブックスに行った妻が興奮してホテルに帰ってきました。妻は、武井さんご夫妻が本の表紙に載っていると言って、その本を買って帰ってきたのです。その本は「光よあれ」第三集でした。前にもお話した通り、武井さんは妻に聖書の話をし、初めて主にあるお付き合いをしてくださった方でした。そ

の武井さん夫妻の顔写真が本の表紙にあったものですから、そしてその本をたまたま行った本屋さんで見つけたものですから、そのことが妻に何とも言えない興奮を与えたのです。私も武井さんにはお会いしたことがあったので少し興味を持ちました。

まだその時は「光よあれ」を読む気はなかったのですが、妻の強い勧めでページをめくっているうちに、その本の終わりの部分で私の目は釘づけになりました。「光よあれ」第二集のご案内のページでした。二集の表紙に載っている小さな顔写真が目に留まったのでした。古田さんでした。私は驚きました。興奮しました。どうして古田さんが「光よあれ」二集に載っているのだろう。私は混乱しました。私の持っていた日本人のクリスチャンのイメージと古田さんのイメージがどうしても結びつかないのです。私はクリスチャンは品行方正な人がなるのであって、この世の遊びにたけている人たちにはまったく関係ない世界だと思っていました。まことに申し訳ないのですが、古田さんは私の持っていたクリスチャンのイメージにはまったく合わない方でした。しかし、私は今、このことをイエス様に感謝しています。この大きなイメージの差を「主」が見せてくださらなければ、私は決して次のステップには行けなかったからです。けれどもその時点ではまだ、私はイエス様には目を向けていませんでした。

その後、妻は吉祥寺キリスト集会に集うようになり、住まいも府中に見つかりました。さらに妻は、染野さん宅での家庭集会に集うようになりました。何回か誘われるうちに、私もその集会に渋々ながら行くことを決心しました。

初めて染野さん宅の玄関に入った時、私に挨拶してくださった方々が、本当に親しみを込めて

迎えてくださったのです。私のクリスチャンに対するイメージはさらに変わりました。

二度目に家庭集会に行った時、ベックさんと個人的にお話する機会をいただきました。その話し合いの中でもっとも印象に残ったことは、ベックさんから、「イエス様を信じることで何か問題になることがありますか」と、尋ねられたことでした。その時、私がふっと思い出したのは、普段妻と長女が祈っている時、私も一緒に祈ろうと思っても絶対に声にならなかったことでした。もちろん、心の中でも祈ることは知りません。そのことをベックさんにお話しましたら、「私の後について一緒に祈りなさい」とおっしゃいました。その時が、私が生まれて初めてイエス様に祈った時でした。私にとってその時がすべてのスタートだったと思っています。その時私には聖書の知識はまったくありませんでした。

神様を意識しはじめる

私はイエス様に心から感謝します。まったくの無知であった私を、小さなステップごとに、イエス様は導いてくださいました。初めはベックさんのメッセージを通し、「自分の力で行なうのではない」という言葉が耳に入ってきました。その時に目についた聖句は次のものでした。

私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。

（Ⅰコリント　3・6）

それから私は急に神様を意識しはじめたのです。その頃、勧められるままにマタイの福音書と

マルコの福音書を読んでいたのですが、私は自分勝手にこう思い込んでしまいました。「聖書に書いてある通りにやらなければイエス様に受け入れられない」と。

「『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。」（マタイ　5・27、28）

聖書には他にもたくさんの例がありますが、イエス様は心の持ち方によってさえも罪とみなされると知った時は驚きでした。罪とは実際行なう行為だけではなく、心に思うだけですでに罪とみなされるのです。私は罪を犯したくないと思いました。私は無意識のうちに善人になろうとしていました。なぜなら、罪を犯さない者だけをイエス様が受け入れてくださると思ったからです。この間違った思い込みによって、私の行動は非常に硬くなっていきました。自由がまったくないのです。聖書を読む前は悪に対しても自由にふるまっていたのに、聖書を読み始めたら、不自由になってきたのです。

中でも特に、私は傲慢にだけはなりたくないと思いました。聖書の中でイエス様は傲慢を嫌うとおっしゃっていたからです。そして傲慢にだけはなるまいと自分の力で必死にがんばっているうちにある時突然、家族から「お父さんはとても傲慢な言い方をする」と言われたのです。

こんなはずではなかったのです。

次の日出社する車の中でそのことを急に真剣に考え始めたのです。私にはイエス様に好まれる

人には決してなれない、もうクリスチャンはやめだ、と思いました。私はもう家族と一緒に天国には行けない、と思うと、とめどなく涙が出てきました。今思うと、それは私が経験しなくてはならない道だったのです。この、本当に愚かにみえる経験が私にとってはどうしても必要だったのです。

人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。

（ローマ　3・28）

たっぷり涙を流した後で、どうしたらよいものかと考えました。その瞬間に、もう、自分ではこちらから縁を切ろうとしたイエス様を意識しているのです。

聖書は私の心を百パーセント知っている

結局私はその後もイエス様を意識しつつ生活しました。ローマ人への手紙を真剣に読むようになりました。罪、信仰、救いなどについて知りたくなったからです。そして今度は、次のように考えるようになったのです。イエス様は十字架の上で私の罪のために死んでくださった。だから、そのイエス様を通して祈れば必ず罪を犯さなくなると。罪を犯すといつもイエス様に祈りました。次に同じ罪を犯さなくなると思ったからです。けれどもいつまでたっても私は罪を犯さなくなどなりません。罪を犯しては祈り、また罪を犯しては祈り、そんなことを繰り返しているうちに、気分は段々暗くなっていきました。この時です。聖書は本当に私の心を百パーセント知っている

と思いました。それは次の聖句を読んだ時でした。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は良いものであることを認めているわけです。ですから、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。

（ローマ　7・15～17）

私の心の中をこうも正確に聖書に書いてあるのが私には驚きであり、初めて聖書は他の本と同じような単なる読み物ではないと体験したのです。イエス様は聖書を身近なものとしてくださったのです。

このようにして自分の罪の深さを知ると、私はすぐに十字架でのイエス様の贖いのみわざに感謝し、イエス様を救い主として受け入れました。

自分中心からの解放

それからも、イエス様はさらに、次から次へと私を導いてくださいました。

ある夏の高知のバイブル・キャンプで証しをさせていただいた時のことです。私が話し終えた後で、ある方が私のところに来られ、「あなたは自分が救われたことを話しました。そして、両親の問題のことも話しました。しかし、両親が救われ喜んで生きていることは話しませんでし

た」とおっしゃったのです。その通りでした。私はいつも「自分のこと」ばかり考えていたのでした。

確かに私は自分の罪深さを示され、悔い改めて救われました。しかし、その後が問題だったのです。イエス様を信じたとはいえ、私はいつも自分、自分、自分と、あくまでも自分中心だったのです。

私はその頃、何回も証しをする機会をいただきました。これはイエス様からの大いなる恵みだったと思っています。証しの後、いつもいつも何か問題が明らかにされていったからです。この時の問題は長く心に引っかかりました。外側は元気でも、心の内では落ち込んでいたのです。どうしたらこの自分中心から抜け出せるのかわかりませんでした。

イエス様は生きておられます。そして、一人一人の上に豊かに働いてくださいます。イエス様が私の上に事実働いてくださったのです。この自分中心の問題の解決は忘れられません。それは同じ夏の軽井沢のバイブル・キャンプで起こったのです。ベックさんがメッセージをしておられました。その中で次の聖句を読まれた時です。私の内なる人間は奮い立たされたのです。何かがわかったのではありませんでした。ただ、立ったのです。この経験はすばらしいものでした。初めて、聖書のことばが、下しか見つめなかった者の顔を上にあげてくださったのです。

兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に

走っているのです。（ピリピ　3・13、14）

自分のことをごちゃごちゃ考えるのはやめました。本当に、ただイエス様にくっついて行こうと思いました。そして、すべてのことをイエス様がなしてくださることを体験しました。その、すべてをなしてくださるイエス様のことを思っている方が、はるかに気持ちが良いのです。

大切なことは心の持ち方です。上からのものを待ち望む心ではないでしょうか。イエス様に心からお願いすれば必ずイエス様は答えてくださいます。そして、確実に最も良い方法で導いてくださいます。イエス様のご計画と私たちの考えはまったくちがいます。ですから、イエス様に従っていると奇蹟を見るようになります。

主に対する信頼は試練を通してより強くなる

私は最近小さな病気になりました。今まで自分は健康で身体だけは丈夫であると思っていましたから、病状が長引くと、以前の勢いはなくなってしまいました。病院に入院している期間は短かったのですが、自然にイエス様がいつも上からじっと見守ってくださっていることを知るようになりました。それは、キリスト集会の皆さん方を通していただいたお見舞い、聖書のことば、そして多くの方のお祈りの結果でした。初めて肉体的に弱くなって、新たにイエス様に感謝するようになりました。

私は心からイエス様が十字架の上で私たちの罪のために死んでくださったことを感謝いたしま

す。この十字架のみわざがなければ、イエス様にある神の愛が現われなければ、私は罪深い者として無から無へと消えていくだけでした。まったくイエス様のことを思ったことがない罪人に、イエス様はただあわれみをかけてくださったのです。私は霊的には完全に死んでいました。今はいつもイエス様を思います。イエス様からいのちをいただきましたから。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。」

（ヨハネ　11・25、26）

私の本当のいのちはイエス様のうちにあります。ですから、イエス様に祈ります。いつもイエス様に従えるように導いてくださいと。私が生まれた時から持っているすべての能力は、もはやそれだけでは役に立ちません。イエス様が働いて導いてくださらなければ、すべては無価値です。イエス様が私を弱い人間にしてくださったことは感謝です。イエス様にもっと頼るようになりましたから。これもすべてイエス様から出たことです。ベックさんがよくメッセージで言われていることですが、主に対する信頼は、試練を通してより強くなっていくのです。今、主にあって試練を経験している方々は、後ほど大いなる恵みを受けられると思います。イエス様はそのことを体験的に知るようにと、私にも一つの試練を与えてくださいました。私の病気などは、他の多くの方々の病の苦しみに比べれば無に等しいものです。本当に苦しんでいる方々は大変です。けれども、イエス様は真実な方です。その病を通して必ず何かを常に語りかけてくださっていると思

います。上からの恵みを直接受けるようにと導いてくださっているのです。

本当にイエス様は救い主

私たちの家族は、初めに妻がイエス様のあわれみを受けて救われました。その後、イエス様を信じた長女朋子は妻佐和代とともに米国の教会で洗礼を受けました。そして私の母は妻を通して働かれるイエス様を見て救われたのです。母は私に言いました。

「イエス様を語る時のサーバンの目は輝いている。だから、サーバンの言っているイエス様を信じることにした」。サーバンというのは妻の若い時のニックネームです。私は母と一緒に吉祥寺キリスト集会で洗礼を受けました。父はそれから六カ月後に同じ場所で洗礼を受けました。母がイエス様を信じてから変わったこと、私たちの家族が変わったことが父がイエス様を受け入れる一つのきっかけでした。ともにイエス様を信じるようになってから、両親の家は生き生きとしてきました。

私には兄と弟がいます。二人ともまだイエス様を信じてはいません。私たち救われた者は、兄家族、弟家族が救われることを祈っています。そしてイエス様に信頼して待っています。

妻の実家は高知県の葉山村です。とても山奥です。この場所で数回家庭集会が開かれました。ベックさんご夫妻をはじめ、土佐山田キリスト集会の方々が何度も足を運んでくださいました。土佐山田キリスト集会の方々が葉山村の人々のためにいつも祈っていてくださることに心から感謝します。

光がない所に光が生まれてきました。妻の兄嫁の民さん、民さんの夫幸男さん、その娘である聖子さん、そして妻の両親と、イエス様はみ心によって一人一人を確実に救ってくださっています。本当にイエス様は救い主です。妻には八人の兄弟がいます。私たちはその兄弟全部が救われるように祈っています。

各地のバイブル・キャンプで

私たちの家族は、よく各地で行なわれるバイブル・キャンプにでかけます。坂出、高知、宮崎、能勢川、浜名湖、沖縄など、全国各地の多くのキャンプに家族そろって参加することを通して、私たちはイエス様から大いなる恵みをいただきました。キャンプのたびに、各地方のキリスト集会の皆さんを通して、イエス様はいろいろな新しいことを教えてくださいました。ある方々はどんな小さな事柄でもイエス様に祈ります。地方によっては独特の古い風習も根強く、そういった問題で苦しむことを通してさらに信仰が強められていく方々にも出会いました。またクリスチャン同士の交流の機会が少ないため、何はおいてもまずキャンプに参加される方々のひたむきさ……これらのことはみんな、各地のキャンプに参加させていただき、いろいろな方々とお付き合いするうちに知ったことです。

住む場所、生活環境は違っていても、イエス様を信じ救われた人々はやがて一緒に天のみ国に行きます。本当の故郷に一緒に戻るのです。

イエス様が私たちを選んでくださいました。そして、いつもいつも私たちを「神の愛」によっ

て導いてくださることを心から感謝します。すべての上に立つ栄光の主、唯一まことの生ける神、「この主を仰ぎみて救われよ」であります。

イエス様のもとに帰った父

私がこの証しを書き終えたあと、一九九一年七月十四日、父藤本淳之助は七十五歳の地上での生涯を終えました。父は晩年はイエス様を信じ、喜んで天に召される日を待つ生活を送っていました。それでこの父のことを少しつけ加えて書かせていただきます。

父は東京の品川で長男として生まれました。七十歳の時にイエス様に出会うまで、父は神事や仏事をとても大切にし、父の両親の墓まいりを初め、季節の色々な行事はいつもきちんと行なっていました。私は私が小さい頃の父の様子をよく覚えています。父はタバコ、酒は一切やらず仕事一筋の真面目人間でした。だからといって家庭のことをすべてよくやっていたというわけではありません。何事においても、仕事が第一、父の両親のことが第一でした。やがて三人の男の子ができました。私は次男坊です。身体が丈夫で、子供たちの遊び相手ができる時には、父の生活にも張りがあったように思えます。一方母は極めて病弱で、そのため少しずつ両親の間に人生観の相違といったものが生まれていったようです。これは父母がともにイエス様を信じる信仰をいただいた後に母から聞いたことですが、病床に伏せっていた母にとって、父は頼りになるというよりも、むしろ不満をぶつけるはけ口となっていたこともあったようです。

人は年をとると肉体的にも精神的にも衰えていきます。私の両親もイエス様を知る前にはまさ

にそのような状態にありました。父は、自分からは決して口にすることができなかった「死を待つ人生」「希望のない人生」を送るようになっていたのです。父には喜びがなかったのです。大正生まれで、意志が強く決して自分の弱みは外には出しませんでしたが、父の背中には何ともいえない寂しさが漂っていました。次の聖句は父の洗礼の時に読ませていただいた聖句です。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。（詩篇 103・1～5）

父は確かに主のあわれみをいただきました。イエス様を知った後の五年間の人生はいつも良いもので満たされていました。父はそれまで仏教の教えを常に心に持っていたのです。父は、葬儀の時にお配りした証しのテープの中で、自分でも言っていますが、大正生まれで、一徹な人生を送っていたのです。その父がどうしてイエス様に頼る人生、イエス様を喜ぶ人生を送る者に変わったのでしょうか。私は以前、イエス様を信じる信仰によって生きる人生を送り始めた父に、不躾にもその理由を直接尋ねてみたのです。

「父さん、なぜイエス様を信じる気持ちになったのですか？」と。父は言いました。

「賢二たちの信じている神様には愛がある」。私はそれを聞いて、イエス様のすばらしさに嬉

しくなりました。父はまた、仏教の教えに従っても結局は何も変わらなかった、と言いました。

父は、母がイエス様を信じて大いに変わっていく様子を間近で見て、イエス様のお働きを自分の目で確かめたのです。病弱で朝早く起きることができなかった母が、イエス様を信じる信仰を通して日々力強く変わっていきました。数十年間身体の調子が良くなかったのに、その時を境にして母はすっかり変わりました。生き生きとしてきたのです。父は心の中で本当に喜んでいたにちがいありません。母の受洗後、六カ月で父もイエス様を信じる信仰の証しである洗礼を受けました。詩篇一〇三篇は、父の将来を示す聖句でした。

また父はある時突然、誰にすすめられたわけでもないのに、ベックさんのメッセージのテープを聞きながら、それを文字で書きとめ始めました。毎日毎日、朝食の後で二階に行ってメッセージのテープを聞くのです。最初は、少しずつテープをまわしては、すぐに小さな紙片に聞いたままを一字一字書きとっていました。そして小さなメモ帳程度の紙片がたくさんたまりますと、今度はそれを大学ノートに清書していました。この時の様子を母はいつも言っています。

「お父さんはとても喜んで、毎朝メッセージを聞いていたの。たまに昼前頃何をやっているかな、と様子を見にいくと、お父さんの背中からは考えられない平安と静けさがにじみでていたのよ。お父さんはメッセージを聞き、そして書きとめていくことをほんとうに喜んでいたの」。

父が書きとめていたメッセージは、テープの数で五十本以上もある「黙示録」のメッセージでした。父は三年以上も「黙示録」のテープに取り組み、それが終わると、「絶えず祈れ」のメッセージを書きとり始めました。父はこれらのことを、もちろん義務でやっていたのではありませ

ん。まるで、イエス様にやりなさいと言われ、その言いつけを喜んでやっていたようでした。母によれば、その時間は父にとって主との親しく暖かい交わりの場であったのかもしれません。その父にも、主は大いなる試練をお与えになりました。

一九九〇年の秋、父は心臓の発作で倒れたのです。短い時間でしたが、意識を失いました。病院に行ったところ、ペースメーカーを体内に入れてみてはどうかということでした。父は初めはどうしようかと考えていた様子でしたが、やがてイエス様に自分のいのちを委ねることに決心しました。父は母にいつも言っていました。「もし私が倒れ、意識がなくなるようなことになった時は、絶対に延命措置は取ってくれるな」。心臓の件は、主にいのちを完全にお委ねした結果、病院から再度の勧めがありましたので、ペースメーカーを入れることにしました。手術はうまくいき、父は日々元気になっていきました。詩篇一〇三篇五節「あなたの若さは、わしのように、新しくなる」という聖句の通りでした。

それから、父はますます喜んでメッセージのテープを書きとっていきました。「主の再臨を待ち望む生活」そして、「聖書と病気」などのメッセージでした。父と母の間の会話には死への恐れは完全になくなっていました。父は天のみ国を待ち望んでいたのでした。母はよく言います。

「私は何度もお父さんをとてもうらやましいと思った。お父さんから漂ってくる平安な雰囲気はとてもすばらしく、私のほんとうに必要としているものだった」。

イエス様はその父を天に召してくださいました。脳出血でした。すぐに意識がなくなり、しばらくの間病院のベッドにおりましたが、十二日後、父は主イエス様のもとに帰りました。父は本

当の故郷に帰ったのです。父の葬儀を通して私たち家族は不思議な平安に包まれました。それはまさに、イエス様が父に与えられた平安そのものでした。

「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」（ヨハネ　14・27）

すべてはイエス様のみわざです。私たち家族にとって、父が憩っている天のみ国はとても近くなりました。父の地上の生涯の最後はとても良かったのです。そして最善の時に、主はさらに良い所に父を召してくださったのです。父はイエス・キリストを通してまことの愛を知りました。

▼ 高知県葉山の家庭集会。義矢さんを抱く賢二さんとその右隣佐和代さん。中央右佐和代さんの母石川政さんほか石川家の方々と。





佐和代さんの父石川四郎さん。▶
ベックさんと初めて祈った日に。

この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。（Ⅰヨハネ5・20）

藤本佐和代

一九五二年高知県高岡郡葉山村に生まれる。精華小、葉山西中、須崎高等学校卒業。最高裁判所共済組合勤務を経て一九七五年結婚。家族は夫賢二さん、長女朋子さん、長男義矢さん、シゲさん。

私の郷里は四国、高知県西部の山また山に囲まれた葉山という村です。新荘川という一筋の清流に沿って木の葉の形をした人口五千人余りの村です。今から三十年前、小学校一年生の私は重いランドセルを背負い、一時間のでこぼこの砂利道を毎日一生懸命学校に通ったものでした。

兄姉たちのうちの五人までは須崎市という所に生まれ育ちましたが、終戦直前に一家は空襲をのがれて父の実家である葉山村の家にもどり、以来そこで暮らすようになり、私を含めて兄一人姉一人がそこで生まれました。末っ子の私は甘えん坊のわがまま娘で、家族や周囲の人たちを手こずらせた記憶もいくつかあります。

そんな私に、中学一年の秋から、暗い、憂うつな悩みが始まりました。五年後の診断の結果、それはウィルス性の弱年性扁平疣贅という皮膚病で、精神的な誘因もあるということがわかりました。徐々にしかし確実に広がっていくので、私は不安と恥ずかしさとで人を遠ざけ、いつも顔と顔の距離や光線の具合を考えながら人と話をしていました。だれにもどうすることもできないのだと一人で悩んでいました。

やがて、恐れていた日がやってきました。高校三年の夏でした。クラスメートに「どうしたのその顔」と聞かれて、私はついにここまできたと、死を決意しました。学校の化学室の薬品棚の鍵が開いている時を狙って、赤いラベルが貼ってある劇薬の壜から、死ぬのに十分だと思われる量を持って帰りました。その夜、遺書を書きました。その時、「神様！」と心の中で叫びました。涙があふれて、あとからあとから出てきました。そして、予定通り薬を飲んで、横たわりました。喉の奥から胃のあたりが熱い感じで目ざめ、翌日の朝であるとわかりました。生きている、と思いました。なぜ死ななかったのか、その後ずっとわかりませんでした。このことは誰一人として知っている人はいませんでした。

その後、通院などの治療によって皮膚病は不思議なまでにすっかり治ってしまいました。あんなに長い間、死ぬほど悩み続けたことが信じられないほどでした。しかしこの期間を通して、私の性格は暗く、孤独を愛し、ひたすら自分を見つめてみじめになり、物事すべてを悲観的に見るようになっていったのだと思います。心の中にはいつも漠然とした疑問がありました。自分はなぜ生まれて、なぜ自分を取り巻く環境はこうであるのか、生きるとは何なのか、なぜ死があるのか、なぜ、なぜ、なぜ……？

ともかくも高校を卒業した私は、親との別れはかなり寂しかったのですが、一生をこの山の中で終える気にもなれず、どうせなら兄と姉がいる東京へ行ってみようと決意しました。そして自分だけで東京のある有名な本屋さんに就職を取り決めて、上京の日が決まったので両親に話しました。しかし両親は随分心配して、東京の姉に連絡をして、私を姉と同じ所で働けるようにしま

した。そこは最高裁の共済本部直属の共済施設で、目黒にありました。職場では波風はすべて姉の方が受けとめてくれ、私は妹という楽な立場で皆に甘えていることができました。ところが一年ほどで姉は郷里へ帰り、結婚し、私は本当に一人になってしまいました。根暗で自分に自信のない私は人間関係で悩みました。そして自分を理解してくれる人は一人もいない、と結論を出してあきらめていました。

主人との出会いは新幹線ひかり号の中でした。それから一年半後には結婚へと、話はスムーズに運ばれていきました。性格がまるで反対の私たちは、お互いに自分にないものを相手の中に見て、めずらしさに引き寄せられたかのようでした。主人は男ばかりの三人兄弟の次男ですが、結婚したら親と同居したいと相談され、「親を大切にする人は奥さんも大事にする人だよ」との私の母の言葉もあり、私はあまり深く考えることもなくその提案を受け入れました。しかし、当時二十二歳の私は、結婚が人生においてどれほど重要であるかをよく考えてはいませんでした。

こうして始まった結婚生活はただただ不自由で堅苦しく、精神的にも疲れることばかりで、女性にとってこんなにも苦しい結婚のありかたを考えた最初の人はいったい誰なのだろうかと思い、そして結婚した後で初めてそのことに気がついた自分がなさけなくなってしまいました。やがて半年後には両親と別居することになり、背中に「わがままな嫁」というレッテルが大きく貼りつけられたような後味の悪い思いだけが残りました。

やがて長女が誕生しました。周囲の人々には仲が良く、何も問題ない夫婦として取りつくろいながらも、欠点だけが目につき、お互いに相手を責める気持ちが強くなって、次第に心の通うこ

とのない、冷たい夫婦になっていきました。こんな状態では子育てにも良い影響があるはずはなく、娘は、神経質でおどおどした、やせて青白い顔をした子供でした。

彼女が四歳の時のことです。知り合いの方の自転車の後輪に足が巻き込まれ、歩けなくなりました。病院でみていただいたところ、異常なしとの診断でしたので、主人と私は「歩けない」と泣き叫ぶ娘を、甘えているのだと決めつけ、強くしかり、部屋までの四階の階段を一人で登るようにと命令しました。娘は涙をふき、這って登りました。ところがその次の日もただ泣くだけでまったく歩けないので、近所の医院でレントゲンを撮っていただくと、足首の関節を挫いており、ひどい捻挫だと診断されました。腫れもひどくなり、その後数カ月間、治療に通わなくてはなりませんでした。このことは幼い娘の心を深く傷つけていました。それからの数年間、娘は、何かで精神的圧迫を受けると必ず、夜中に「足が痛い」と言って、その足をたたき、どうにかしてほしいと私たちに訴えるようになりました。やがて疲れて眠ってしまうまで、なだめながら足をさすってやらなければなりませんでした。

こうして結婚六年目を迎えた頃には、私は将来のことを考えると、目の前がまっ暗になり、毎日離婚のことばかりを考えて暮らすようになっていました。このようにおろかで、どうしようもない私を主はあわれんでくださり、一方的な恵みによって救い上げてくださいました。私たち夫婦にとって考えられないことでした。主は、その頃世田谷区赤堤に住んでいた私を武井生子さんに引き合わせてくださり、武井さんを通して私に語りかけてくださったのです。

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告

げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。わたしはあなたがたに見つけられる。――主の御告げ。――」

（エレミヤ　29・11～14）

「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。人の子（イエス様）は、失われた人を捜して救うために来たのです。」（ルカ　19・9、10）

そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている。

（ヘブル　9・27）

将来と希望とは、失われた人を捜して救うとは、一度死ぬこととさばかれることとは一体どういうことなのかと、私はその時から夢中になって聖書を読み始めました。この時は主人の帰宅が夜遅くても全然気になりません。そして幾日か新約聖書を通して読み進むうちに、次の聖句に出会ったのです。

なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じ

て義と認められ、口で告白して救われるのです。聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。

（ローマ　10・9～13）

ここを読んだ時、私は救いの意味ももちろん知りませんでしたが、もしこの通りなら私も救われたい、と思いました。そしてこの聖書のことばに従って一人で祈ったのです。

何事もなく、数週間がたったある時、私は心が以前とはうって変わって信じられないほど晴れわたり、足どりは軽く、見る物、逢う人々に、心の底から何か暖かいものを感じている自分に気がつきました。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。

（Ⅰペテロ　1・8、9）

肉体の誕生と同じように霊的な誕生もまた、本人にはよくわからないものです。しかし主は、私の霊の目を開いてくださり喜びの産声をあげさせてくださったのです。何という主の奇しいみ

わざでしょうか。主イエス様のみ名を心からほめたたえます。

その後主は愛とまことをもって、ご自身の生きておられること、そして私のような者のすべてをご存知であることを啓示してくださったのです。

イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、『それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ。』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」

（マタイ　19・4～6）

同じくマルコの福音書十章六節から九節、エペソ人への手紙五章三十一節も示され、不思議な思いになった次の瞬間、私は「ああ、この方こそ、まことの神である」と確信したのです。そして「こんな罪深い私を赦してください」と泣きながら祈ったのでした。結婚のあり方に反抗し続け、離婚こそ解決の道とかたく信じていた私にとって、結婚は神ご自身が定められた形であり、離れることをいけないとおっしゃっていると知ったことは、想像を絶するほどのショックではありました。私は知らなかったとはいえ、生けるまことの神にまっこうから反対していたのです。けれども主はすべてをご存知で、そんな私のような者をもあわれんでくださり、私のすべての罪を、ご自身の尊い血潮を流して贖ってくださっていたのです。

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。のの

しられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。

（Ⅰペテロ　2・22～25）

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。

（Ⅰヨハネ　3・16）

その日、私は夜遅くまで、主の愛の深さ、偉大さを思い、涙があふれて、泣きはらした顔になっていました。そして帰宅した主人に、それまでの私のわがままを告白し、悪い妻でしたとあやまることができました。そのようにおだやかで素直な状態の妻の様子に主人の方も驚いていました。そして優しくなったように思えましたが、その一方で、「神というならわかるような気もするけれど、それがなぜイエス・キリストでなければならないのか」と反論してきました。そして、自分を巻き込まないようにと言いました。それからは友人から様々な宗教関係の本などを借りてきては、宗教的な知識上の質問を私に浴びせることもありました。この頃主人は、自分は神を必要とするような弱い人間や罪人ではないのだと自信に満ちていました。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。

（Ⅰコリント　1・18）

事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。

（Ⅰコリント　1・21）

神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。

（Ⅰコリント　1・27～29）

私が救われてから五カ月後に、主人に転勤の話がきました。その頃、社内のごたごたの収拾などで精神的にも疲れていたこともあって、気分転換も必要だと、主人は転勤の話を受け入れ、私たち家族はアメリカへ引越しました。本社のあるシリコンバレーと呼ばれる地域のサンノゼという町が最初に住んだ所です。慣れない外国生活でしたが、主の守りのみ手がいつも私と共にあり、すべてにおいて助けてくださいました。四人の親しいクリスチャンの方々が私を様々な面で助け、

導いてくださって、霊的なお付き合いの場も与えていただき、娘も主のもとに導かれました。

娘は日曜学校でイエス様のお話を聞いて素直に信じていましたので、「イエス様を受け入れますか」と聞かれた時、「はい」と答え、一人の婦人と共に祈りました。私はその時七歳の娘の頬を涙がつたって流れるのを見ました。娘がこのように幼い時からイエス様を信じて生きるようにしていただいたことを心から感謝しました。私と娘も今では主イエス様にあって姉妹となったのです。私たち夫婦のまちがいばかりの子育ての結果、内向的で、いじけやすく悲しげな顔をした子供だった娘は、明るく、素直な子供に変わり、心がイエス様で満たされた時、足の痛みは消えました。以来現在にいたるまで、夜中に足をたたいてのたうちまわることがなくなりました。

その年のイースターには、私たち母娘は救われた証しとして、キリストの死にあずかるバプテスマ（洗礼）を受けることができました。奇しくも、その一週間前に、「洗礼の意味」という題のベックさんという方のメッセージのテープが日本から届いていました。その頃吉祥寺キリスト集会へ導かれていた武井さんの配慮でした。武井さんは他にも、「ローマ人への手紙」「絶えず祈れ」など数々のテープと「光よあれ」第一集、「実を結ぶ命」の本を送ってくださいました。受洗後すぐにテキサス州オースティンに引越した私に、主はこうした方法で霊の糧を与えてくださっていました。それによって、霊的には赤ちゃんの状態で無防備な私の信仰を主は守っていてくださったのだと思います。

その頃私は、テープでベックさんのメッセージを聞き、それに従ってみると本当に祈りが聞かれるという体験を何度もし、主は確かに私と共におられることを知り、心は喜びにあふれたもの

です。また、「光よあれ」第一集を深い感動をもって読みました。あまりにもゆるぎない信仰の上に堅く立っておられる方々の集っていらっしゃる集会のようすが本の全体から伝わってきて、一度でいいから行ってみたいと思う反面、こんな幼稚な信仰の私などの行ける場所ではないのではないかといった卑屈な思いもありました。しかし私にとって何よりも印象に残ったのは、その本の中に登場する物部川とか、桂浜とか、土佐山田といった懐しい地名でした。それは遠い遠い故郷を身近に覚える高知県にある地名です。実家はかなり山奥の葉山村です。私は実際に行ったことはなかったのですが、葉山から土佐山田は行けない距離ではないと思いました。そして「イエス様、どうか私の両親を、兄弟たちを救ってください。高知にもこんなにすばらしい主にあるキリスト集会の方々を備えてくださって感謝します」と祈りました。

また、日本にいる主人の母と電話で話す機会があり、母が「私はこの頃、もろもろの神様に感謝している」と言った時には、「お母さん、神様はただおひとりなんです」と答えていました。母は驚いたようでしたが、私は母に対して硬く心を閉ざしていた以前の自分が、不思議なほど変わっていることに気づかされました。その頃の私はこの母にもイエス様を伝えたいという強い思いを持つようになっていたのですから。

テキサスに引越してまもなく、主人は日本へ帰ることを考えるようになりました。テキサスの州都オースティンは学生の町で、町の中央に美しいコロラド川が流れ、町の周辺を緑の森で囲まれた砂漠の中の小さなオアシスのような町でした。人口のほとんどが白人で、南部独特の保守的な雰囲気がありました。会社の中にまで、いつまでも太平洋戦争の話を熱心に議論する人もいた

りで、日本人であることの意識が強く目ざめていったのかもしれません。そして私たちは三年間の海外生活を終え帰国することになりました。

私は「日本に帰ったらどの教会へ行ったらいいでしょうか、どうぞ、イエス様ご自身が満ちあふれておられる教会へ導いてください」と祈っていました。「光よあれ」で読んでいた吉祥寺キリスト集会へすぐにでも行きたいという思いと、主人からのブレーキと、主によってのみ導かれたいという思いで待ちました。確かに主ははるか以前から、明確なご計画をもって私たちを導いていてくださり、主人の昔の上司であった古田稔さんが今では吉祥寺キリスト集会に集っておられることを、不思議な方法で私たちに知らせてくださいました。主人は主を信じる前の古田社長を思い出して、「彼がクリスチャンになったとは信じられない。一度この目で見てみたい」と言い、私は主が導いてくださっていることを知りました。

吉祥寺キリスト集会での礼拝にはプログラムはなく、今まで経験したどの教会の礼拝とも比べることのできない、霊とまことによる礼拝に徹したものでした。主への賛美と感謝と十字架の死とよみがえりを覚えることがくり返し祈られていました。イエス様がここに臨在しておられ、私のような者を愛してくださっていることを知り、感謝でいっぱいでした。また、この集会では家族の救いは現実的で、祈りが次々に聞かれていました。そして一人一人が、主の再臨の日を心から待ち望んで励まし合っておられ、心から喜び合っているのです。また、誰も上に立つ人はおらず、主イエス様だけがあがめられ、中心となっておられます。

主人は多くの方々が祈ってくださるうちに、ベックさんとお話する時が与えられ、主のあわれ

みによって救われました。その後間もなく、主人の両親も導かれ、次々と救われていきました。まさしく、聖書にこうあるとおりです。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

主人が救われたことにより、家の中はがらりと変わったようでした。今では、私たちのまん中に、イエス様がいてくださり、一人一人が主に従う時、家の中は喜びと平和があふれるのです。そして、聖霊の導きにより、私たち夫婦がいかに罪深く、汚れた者であるかを示されます。

ある朝のことでした。自転車で学校へ出かけたはずの娘が、玄関の外に立って大声で泣き叫んでいました。訳を聞くと、自転車に乗ったまま転倒し、下敷きになったということで、足が痛くて歩けないと言うのです。この時、私たち夫婦は、昔、四歳の娘にひどい仕打ちをしたことを、同時に思い出させられたのです。病院へ行って調べた結果、異常がなかったことを主に感謝し、娘に昔のことを心から謝罪する時を与えていただきました。

また、主が建て直してくださった私たち夫婦に十年ぶりに二番目の子供が与えられました。主人の両親にとって初めての男の孫です。以前は会話のない夫婦で、長い療養生活と心配と思いわずらいばかりの人生を送ってきた主人の両親でしたが、イエス様に出会ってからはただイエス様への感謝と、あと二人の息子たちとその家族の救いを祈る日々を送るようになりました。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ

去って、見よ、すべてが新しくなりました。

（Ⅱコリント　5・17）

次に主は、私の実家の両親、兄夫婦、姪や甥たちをあわれんでくださり、主にとって不可能はないこと、お約束を必ず守る方であり、信頼できる唯おひとりの方であることを教えてくださいました。家族を救ってくださるお約束と共に、次の聖句が与えられました。

あなたがたが主に立ち返るなら、あなたがたの兄弟や子たちは、彼らをとりこにした人々のあわれみを受け、この地に帰って来るでしょう。あなたがたの神、主は、情け深く、あわれみ深い方であり、もし、あなたがたが主に立ち返るなら、あなたがたから御顔をそむけるようなことは決してなさいません。

（Ⅱ歴代　30・9）

私たち夫婦はこの聖書のことばに心から感謝し、主は私たちの肉親一人一人を救ってくださると信じました。そして主は私たちの想像をはるかに越えた方法で働いてくださったのです。私は遠い不便な地である故郷の上に主のあわれみがありますようにと祈っていました。そうするうちに次々と実家の苦しみの状態を知らされ、知っていながらも、自分には何もできないという悩みが増していきました。その上私の実家のある村は今まで教会ひとつあったことのない、イエス様とはかけ離れた土地なのです。地方独特の偶像礼拝があふれています。私の両親は、常に勤勉で正直に生きてきたはずなのに、なぜ、その人生も終わりに近い今、まだ苦労が絶えないのでしょう。主よどうしてですかと、つぶやいてしまう不信仰な時もありました。しかし主は、まず義理

の姉をアルコール依存症からの解放によって救い出してくださり、次にその義姉が主によって生まれ変わり、新しい人となった事実を見て、長兄も主に頼って生きてみようと決心することができました。義姉は家庭内の不和と耐え切れないほどの子供たちの問題の重荷に押しつぶされ、滅びの道をひた走っていたのでした。そして絶望を味わい尽くした義姉に、主は救いのみ手をさしのべてくださいました。

あなたの御手が私の助けとなりますように。私はあなたの戒めを選びました。私はあなたの救いを慕っています。主よ。あなたのみおしえは私の喜びです。私のたましいが生き、あなたをほめたたえますように。そしてあなたのさばきが私の助けとなりますように。

（詩篇　119・173～175）

義姉が主イエス様による救いを確信した聖句です。

「この聖句は私へのものです」と、本当にうれしそうに証ししてくれたのでした。

また姪である聖子も救われ、喜びに満たされるようになりました。聖子は一歳半くらいの時、急性化膿性脳膜炎に犯され九死に一生を得た子でした。その後数年たってから始まった後遺症で、二十五歳の現在にいたるまで、人並みの人生を送ることのできない子でしたが、主を信じる姉妹となり、祈る者へと変えていただきました。時折来る聖子からの手紙を読むと、その素直で素朴な言葉の一つ一つに、聖霊の宮となった聖子を知ることができます。

主はまた私の両親の上にも働いてくださり、一九九〇年の五月、土佐山田のバイブル・キャン

プへそろって集うことができました。八十二歳の父は生まれて初めてこんなに沢山の方々が集まって礼拝する様子を見て、孫である聖子の受洗にも立ち合い、「ここには確かに神聖な、霊的な何かがある。皆がひとつになっている」と感じたことを話してくれました。そして、ベックさんとお話をする時が与えられ、主に祈る時へと導いていただきました。母も同じ日にイエス様を信じると告白する恵みにあずかったことを主に心から感謝します。

救われるとは以前抱えていた問題がすべてなくなることではありません。目の前の問題が解決することではなく、真の救いの喜びを体験し、主こそすべてのすべてであることを知って主に栄光を帰していくことこそが至福の道なのです。今は、主のあわれみによって救われた親族の一人一人がこの最高の幸せを知ることができるようにと祈っています。

「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」主に贖われた者はこのように言え。主は彼らを敵の手から贖い、彼らを国々から、東から、西から、北から、南から、集められた。彼らは荒野や荒れ地をさまよい、住むべき町へ行く道を見つけなかった。飢えと渇きに彼らのたましいは衰え果てた。この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救い出された。また彼らをまっすぐな道に導き、住むべき町へ行かせられた。彼らは、主の恵みと、人の子らへの奇しいわざを主に感謝せよ。まことに主は渇いたたましいを満ち足らせ、飢えたたましいを良いもので満たされた。

（詩篇　107・1～9）

カリフォルニア州サンノゼの教会で洗礼を受け
▼祝福される佐和代さん（中央）。1984年4月。





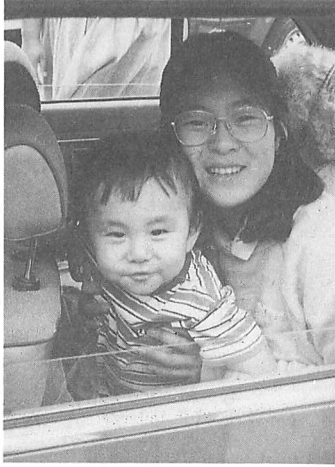
▲佐和代さんの母石川政さん。ベックさんと。

また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった父なる神に、喜びをもって感謝をささげることができますように。神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子（イエス・キリスト）のご支配の中に移してくださいました。この御子のうちにあって、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。

（コロサイ　1・12～14）

……私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。

（Ⅰヨハネ　5・20）



弟の義矢さんと朋子さん。高知▶
バイブル・キャンプの帰りに。

何よりも大切な贈り物

藤本朋子

一九七六年神奈川県川崎市元住吉に生まれる。イースターブルックスクール、オークヒルエレメンタリースクールを経て現在アメリカンスクールインジャパンに在学中。趣味は読書。家族は両親と三歳の弟の義矢さんと祖母シゲさん。

何よりも大切な贈りもの——それは私の愛するイエス様が、日々くださるものです。それは慰めであり、愛であり、喜びであり、平和であり、安全であり、あわれみであり、希望です。心が落ち込んだとき、怒ったとき、そしてこの世にいっぱいあるサタンの誘惑から、イエス様は何度私を救ってくださったことでしょう。私はまったくイエス様から何かをいただくに値しない者なのに、たくさんの贈りものをいただきました。どうやって感謝していいか分からないほどにです。

あなたは私のために、嘆きを踊りに変えてくださいました。あなたは私の荒布を解き、喜びを私に着せてくださいました。私のたましいがあなたをほめ歌い、黙っていることがないために。私の神、主よ。私はとこしえまでも、あなたに感謝します。

（詩篇　30・11、12）

私が初めてイエス様を知ったのは三歳のときでした。その頃私と母は家の近くの教会に行って

いました。私は同じ年のお友達と一緒に日曜学校の先生から聖書のお話を聞きました。私はとても小さかったので、何も考えずに、まったく疑わずに、イエス様は生きているまことの神様であることを信じていました。小さな子供たちは、まったく努力なしに、抵抗なしに、聞くと同時にイエス様を受け入れることができるのです。しかし、成長した人たちや大人たちはいつも、なぜって質問しなければ気がすまないのです。

私は、イエス様が生きておられるまことの神様だということはいつも信じていましたが、はっきりとイエス様を自分の救い主として受け入れたのは私が七歳のときでした。そのとき私の母は、すでにイエス様を信じていました。そこで私たちはカリフォルニア州サンノゼ市のある教会に行くことになったのです。カリフォルニア州はその頃私たち家族が父の仕事のために住んでいた場所です。父はまだイエス様を信じていませんでした。ですから私たち母娘はイエス様に、いつかは父も神の子とされるように祈っていました。その結果、父は私が九歳のときに救われました。

話は少し戻りますが、私がイエス様を自分の救い主として受け入れるようになったのは、こんなことがきっかけでした。

カリフォルニアに住んでいた頃、母と私はマーガレット・ヘイスティングさんというクリスチャンの方とお友達でした。マーガレットさんとは私たちが行っていた教会で出会いました。幸い家もご近所だったので、母はいつもマーガレットさんと話をしていました。私にとってマーガレットさんは、まさにおばあさんみたいな方で、一緒にいるといつも安心できました。マーガレットさんは料理がとても上手で、アイスクリームの種類を見分ける目はとてもすばらしいものでし

た。マーガレットさんは双子のシャム猫を飼っていて、私はその猫たちがマーガレットさんと同じくらい好きでした。

ある日マーガレットさんと母は、母の洗礼について話し合っていました。マーガレットさんは母に、娘と一緒に洗礼を受けることを勧めました。マーガレットさんは、子供でもイエス様を受け入れることができる、そして罪のことも分かると言っていました。それで母は、四月三日に私をマーガレットさんの家に連れて行ってくれました。マーガレットさんの家に行く前に、母は私に、イエス様を受け入れるかと聞きました。私は「はい」と答えました。マーガレットさんは私に「四つの法則」という本を読んでくださいました。その本には、人間の罪について、また人はどのようにして救われるかが書いてありました。それからマーガレットさんは、私の中に罪があると思いますかと聞きました。私はあると答えました。そして私たちは一緒に祈りました。そのときマーガレットさんは次の聖句を教えてくださり、救いとは何かを説明してくださいました。

しかし、この方（イエス様）を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。（ヨハネ　1・12）

それから十二日後の四月十五日に、母と私は洗礼を受けました。

そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、子どもたちが連れて来られた。ところが、弟子たちは彼らをしかった。しかし、イエスは言われた。「子どもたちを許してやりなさい。邪魔をしないでわたしのところに来させなさい。天の御国はこのような者

たちの国なのです。」そして、手を彼らの上に置いてから、そこを去って行かれた。
（マタイ　19・13～15）

イエス様は今まで、私の生活の中で多くの奇蹟をなしてくださいました。その中でも特に二つの奇蹟は大きなものでした。その二つの奇蹟については、永遠にイエス様に感謝するとしても、それでも十分ではないのです。

私はあなたに感謝します。あなたが私に答えられ、私の救いとなられたからです。あなたは、私の神。私はあなたに感謝します。あなたは私の神、私はあなたをあがめます。
（詩篇　118・21、28）

初めの奇蹟は、私を長いこと苦しめた足首の痛みのことです。

四歳のときのある日、私は友達と友達のお父さんと三人で同じ自転車に乗っていました。そのときはとても楽しかったので、自分が足を大きく振り始めたのにも気がつきませんでした。そして、とうとう足首が車輪のスポークにはさまれてしまいました。両親は私をすぐに病院に連れていき、お医者様にみせました。私はそのとき、どうもこのお医者様が信頼できませんでした。そのお医者様は私の両親に「まったく問題はありません」と言いました。両親はそれで安心し、普通の生活を始めました。

私は両親の行くところにはどこにでも連れていかれました。しかし、そのうちに痛みは耐えら

れないほどひどくなってきたのでした。何度も泣き叫びました。どうにかしてと頼みましたが、両親は私のことを信じてくれませんでした。両親は医者の言ったことを信じていたので、私がただわがままを言っているだけだと思っていました。その頃私たちはマンションの四階に住んでいました。エレベーターはなく、私は四階までの階段を上がるのがとても大変だったのです。「私を抱いておうちまで連れてって」と泣きました。この状態は二日間続きました。この二日間はとても長く、みじめで、痛みは最高に達しました。そのとき、母の友人が「もしけがをしていないなら、そんなに痛みがあるはずはない」と言いました。それで両親はほかのお医者様に私を連れていき、私がけがをしていることを知りました。足首は本当にけがをしていて、どんどん悪くなっていたのですが、そのときまでだれも気がつきませんでした。私自身もただ強い痛みを感じていただけで、自分がけがをしていると気がついてはいませんでした。

このとき負った痛みは私の心の中に、深い、ゆがんだ傷あとを残しました。私は心も体も傷つきました。そして両親を信じなくなりました。両親が気がつかずにしていたのは幸いでした。もしこのことが意識的におきていたならば、私は一生忘れられなかったでしょう。

それから二カ月、私は毎日電気治療を受け、けがは治ったはずでした。けれども何か気にさわることがあったり、感情的になると、足首の痛みが始まるのでした。何をしても完全に治すことはできませんでした。母は、私が「まるで月の暗い部分みたいに暗い顔つきをしている」と、途方にくれていました。私は恥ずかしがり屋で、暗くおとなしい子供でした。今の私を見ると、とても信じられないかも知れません。私は救われたとき、暗闇から光の中に移されました。イエス

様のお働きはとても素晴らしく、比べられるものはありません。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたは泣き、嘆き悲しむが、世は喜ぶのです。あなたがたは悲しむが、しかし、あなたがたの悲しみは喜びに変わります。あなたがたにも、今は悲しみがあるが、わたしはもう一度あなたがたに会います。そうすれば、あなたがたの心は喜びに満たされます。そして、その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。」

（ヨハネ　16・20、22）

アメリカに引っ越してからも足首の痛みは続きました。悪いことに、父が出張すると痛くなるので、そのとき英語が上手ではなかった母は、どうしたらよいか分かりませんでした。夜になると痛みがおそってくるので、母と私はゆっくり寝ていることもできませんでした。母は時々「夜がくるのが恐ろしい」と言っていました。

この痛みは、ほぼ三年間私を苦しめました。ところが、私が救われたとき、この足首の痛みは完全に消えてしまったのです。ですから、このことは私にとって奇蹟なのです。

ハレルヤ。まことに、われらの神にほめ歌を歌うのは良い。まことに楽しく、賛美は麗しい。主はエルサレムを建てイスラエルの追い散らされた者を集める。主は心の打ち砕かれた者をいやし彼らの傷を包む。

（詩篇　147・1～3）

やがて、イエス様を信じるようになった両親は、私がけがをしたとき、私の訴えを無視したこ

とを謝ってくれました。そして両親が謝ったとき、私の中に住んでおられる聖霊が二人をお赦しになりました。両親が謝ってくれたからだけではなく、イエス様が一緒にいてくださったからこそ、私は心の傷を忘れることができたのです。そうでなければ私はいつまでもこだわったでしょう。そして両親に反抗し続けたでしょう。私は本当に治りました。

二番目の奇蹟は、私の父についてです。私は、小さいとき父が一緒にいたことを覚えていません。事実、父は私が九歳になるまで家にいないのと同じでした。私が九歳のときに父が救われたのです。父について、母が話してくれたこと以外に私が覚えているたった一つのことは、私が灰皿の中身をカーペットの上にまいてしまったときに、それを隠そうとしたら父に見つかって怒られたことだけです。

私の父はいつもいつも家にはいませんでした。それは仕事、仕事、仕事のためでした。それが、小さい頃父が私に与えてくれたたった一つの印象です。私は父によく怒られましたから、父が家にいないのは問題ありませんでした。私たちには父と娘の親子関係はなかったのです。父は私が起きる前に会社に行き、私が寝た後で帰ってきました。週末でさえも父と私はほとんど会うことがなく、食事のときに顔を合わせるくらいでした。土曜日、私は朝のテレビ漫画を見るために早く起き、それから友達と遊びに出かけましたが、父はいつも寝ていました。アメリカに住むようになってからもあまり変わりませんでした。日曜日、母と私は朝のうちに教会へ行き、父は家に残りました。父はほとんど一緒に来ることはありませんでした。

私は父についてよく覚えていませんから、私と母が礼拝に行ったりイエス様の話をしたりする

とき、父がどう感じていたかはよく分かりません。ただ、一つのことは覚えています。ある日母と私が食事の前に祈ろうとしていますと、父が、自分が祈ると言うのです。私と母は驚いた上にも驚いて、本当に喜びました。ついに私たちの祈りは聞かれたのだと思ったのです。父はイエス様に興味を示している！　しかし喜んだのもつかの間、父は主の祈りを、仏教のお経のテンポで始めたのです。今この話をするとみんな笑いますが、そのときは母と私は本当にがっかりして、一週間父を無視し続けました。

その後家族はみんなで日本へ帰りました。

日本へ帰って間もなく、父もイエス様を受け入れて救われました。その頃私は、救われてから長い人ほど良いクリスチャンだと思っていました。これは大きな間違いですが、そのときはそう思ったのです。その頃両親はいつも私の前で、集会のことから父の仕事のことまで、いろいろなことを話し合っていました。今でもそうです。二人はよく話していましたが、私にではありません。私がその場にいることさえ意識していないようでした。私はただ聞いているだけでした。二人はよく、「成長」とか「生まれ変わる」という言葉を使っていました。

ある日、人が霊的に成長することや、まったく成長せずに霊的に生まれたままでいることを話していたときのことでした。私は思いました。イエス様を初めて受け入れたときは赤ちゃんです。四年後に幼稚園に行きます。七年後に小学校一年生です。それから思ったことは、私が成長したクリスチャンになる唯一の道はイエス様を受け入れてから二十年たつことだ、ということです。どうか皆さん、このことをまともにとらないでください。これは完全に誤りです。そしてこの誤

った考えは、父の前で私を誇るようにさせ、高慢にさせたのです。なぜかというと、父が救われたときよりも二年も前に私は救われていたからです。私はこのように思ったので、自分は父よりも良く、価値があるものだと考えました。

イエス様は、こんなふうに考えていた私が砕かれていく必要があることをご存じでした。ですからイエス様は私を打たれたのです。イエス様は私に、父があっという間に変わっていく様を見せてくださり、私が決して父よりも価値があるものではないことを教えてくださいました。短期間のうちに父が前とはすっかり変わるように導かれたイエス様のお働きは驚くべきもので、私は自分自身が恥ずかしくなりました。こうしてイエス様は私がいかに愚かであったかを示してくださったのです。私の考えは間違っていました。今、私は父を尊敬しています。イエス様は私に素晴らしい体験をさせてくださいました。

父は本当に変わりました。今では小さい頃に夢に思った以上に、父は私と過ごしてくれます。怒りかたも変わりました。前はすぐにお尻を叩き、頭を叩いて怒ったのですが、今は真剣に話し合います。今のほうが本当は恐ろしいのですが、父は単に頭を打つのではなく、むしろ心配してくれるのです。父が本当に私のことを、仕事以上に心配してくれると知るのはとても素晴らしいことです。私を変える人がいるならば、それは私の父を通して話してくださるイエス様です。私はイエス様を愛しています。そして、私はこの地上において私の父をも愛するようになりました。

「あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。」

（出エジプト　20・12）

この聖句は私がずっと心に持ち続けたいことばです。しかし、失敗するかも知れません。ほかの子供たちも同じ問題を持っていると思います。イエス様の導きと守りがありますように。



▲朋子さん。右はベックさんの娘ビッキーさんと、その赤ちゃんの由希ちゃん。

▼前列左から二人め朋子さん。日曜日の礼拝の後で吉祥寺キリスト集会の方々と。



妻の安らぎとともに救われて

新井　稔



▲ 左から一人おいて新井稔さん、長男裕一さん、長女千穂さん。
両端は小川夫妻。1990年3月ベックさん宅で。

一九四三年岐阜県に生まれる。上宝第三小学校、上宝第三中学校、県立高山高校を卒業後東芝クレジット㈱入社。現在名古屋支店営業部長。一九七〇年順子さんと結婚。一九八九年十二月十日妻順子さん天に召される。家族は長女千穂さん、長男裕一さん。

故新井順子さんと稔さん。1989年7月、
▼ 昭和病院で初めてベックさんにお会いして。



子供の教育や躾は母親と学校がやること。男の本懐は仕事であり、父親が仕事に全力を傾ける姿を見せることこそ子供の教育となり、家族の幸福につながる、などと大きな口を叩きながら、それが実は身勝手で都合のよい無責任な放任であったことを思い知らされたのは、長男裕一の高校進学を一年後に控えた頃のことでした。自分は今まで、仕事のこと、大人の世界のこと、人生についてなど、何一つ話してやったことがない、ただ怒るだけの父親であった…。考えあぐねた末、今まで話してやれなかった人生についての色々なことを、日記のような形にして書き留めていこうと思い立ちました。

一九八九年四月六日。長男にあてて書き出したはずのこの記録が、よもや妻のこの世での最後を記録するようになろうとは……天地万物を造られた神ご自身がその時既に私たちに目を留めておられ、私たちを救うために試練を用意されていたなどとは知る由もないことでした。

絶望のどん底へ

妻の順子は春先になると毎年決まって花粉症に悩まされておりましたが、この年はその徴候がなく、治ったものと喜んでいました。ところが四月終わりごろから身体の不調を訴え、咳も出るようになり、朝起きられないこともたびたびありました。病院では「疲れからくる風邪でしょう」と言われましたが一向に回復の気配がなく、心配になっていました。五月二十日頃、首の付け根のリンパ腺の部分にしこりができているのに気がつき、時を同じくして頭痛を訴えるようになりました。それからは連日のように検査のための通院でした。日を追って頭痛はひどくなり、

鎮痛薬の量も日増しに多くなり、妻も私もただならぬ不安と底知れぬ恐怖に怯えた重苦しい日々を過ごしておりました。

六月五日。リンパ腺のしこりの摘出手術の日。受付から手術室までの長く暗い廊下。重苦しい沈黙でした。

「お父さん、ここで待っててよ。どこにも行かないでよ」と言って手術室に入っていった妻の後ろ姿に、どうか何事もありませんように……心の中で念じました。

六月九日。とうとう恐れていた日は来てしまいました。手術の結果もCTの結果もすべて揃っているはずの日です。診察を終えて出てきた妻は、人目をはばかって平静を装っていましたが、結果が思わしくなかったことは顔を見ただけで見当がつきました。胸の影について精密検査の必要があるということでした。

「お父さん、きっと肺がんだよ、どうしたらいいの」帰りの車の中で、妻は泣くばかりでした。家へ帰ると妻が落ち着くのを待って、忘れ物をしたからと言って病院へ引き返し、主治医と面談、「こちらから連絡しようと思っていました」。

血が凍る思いでした。

「大変お気の毒ですが、奥様の病気は肺がんです」。

あまりの衝撃に体中から血の気が引き、目の前の物がすべて遠ざかっていくように感じました。

「治りますか。手術できますか。どうか助けてください」。

必死の願いも空しく打ち砕かれ、

「残念ですが、最も進行の速い腺がんで既に脳に転移しています。あと三カ月から六カ月の命だと思われます」。

まさか。なんということか。自分の妻が、あの順子が、どうして……。真っ逆様に地獄に突き落とされたような、あまりにも残酷な宣告でした。それから何をどう話したのか覚えがありませんが、妻にとって、子供にとっての支えとならなければという意識と、とてつもなく大きな重荷がのしかかってきたことを全身で感じていました。

妻にも子供にも決して本当のことは話すまいと堅く心に決め、急いで家に帰ってみると、泣き崩れている妻の傍らには、がんのページを開いた医学全書がありました。

「私が一体何をしたというの。どんな悪いことをしたというの」嘆く妻に、

「俺がついているから大丈夫だよ」と空しく抱きしめてやるほかに、私には為す術もありませんでした。

苦しみと思い煩いの日々

それから数日間、頭痛はますます激しくなり、就寝前に飲んだ鎮痛剤も数時間しか効かず、不眠の夜が続きました。

六月十三日。入院することになりました。先生と婦長さんにお願いして、本人には病名は絶対に秘密にしていただくことにして、肺真菌症とその感染による髄膜炎ということで入院生活が始まりました。「本当のことを知らせるべきです」と、病院のカウンセラーに勧められ、死につい

ての本を読みあさり、ホスピスへ問い合わせたりもしましたが、この世の命がすべてと思っていた私には、妻を絶望の淵へ追いやるようで、どうしても打ち明けることができませんでした。

身内や知人の情報を頼りに、丸山ワクチン、蓮見ワクチン、漢方薬、色々なお茶、あちこちの水……薬をもつかむ思いで何でも求めました。苦しみと思い煩いの毎日でした。妻の体重はみるみる減っていき、血便も出るようになってしまいました。

その頃、会社の同僚が突然亡くなったと知らせを受けました。まだ四十五歳でした。八十歳、九十歳まで生きられる人もいるというのに、なぜこんなにも不公平なのか、運不運で片付けてしまうのはあまりにも空しすぎる、とやりきれない気持ちでした。

わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。

（ヘブル　12・5、6）

この時私はまだこの聖書のことばを知らず、神の存在も知らない者でした。

子供の将来を慮って書き始めた記録も当初の意図とは異なり、毎日妻のことばかり書いていました。長男は親や先生の心配をよそに、勉強する様子もなく、ただ叱りとばしてばかりの私に対する反抗はますます強くなるばかりでした。そんな二人をとりなしてくれたのは長女の千穂でした。十キロの道程を自転車で通学しながら、受験勉強と家事、弟の面倒もよくみてくれました。いやな顔もせず、よくやってくれました。妻も弟も千穂が家にいると安心していました。

妻の心情、子供たちの進学、将来、会社のこと、迫り来る苦難を思う時、毎日が呻くような苦しみのどん底でした。自分一人ではとうてい背負いきれないにも拘らず、子どもたちにも世間にも弱みを見せることを拒み、そのくせ一人になった時溢れ出る涙をどうすることもできない、本当に救いようのない情けない人間でした。

私に御顔を向け、私をあわれんでください。私はただひとりで、悩んでいます。

（詩篇　25・16）

あの時、この聖書のことばを知って祈ることができたなら、どんなに救われたかと思います。

すがるものを求めて

何一つ希望が持てず、絶望のどん底をさまよっていた時、なぜか心に浮かんだのが小川泰徳さんのことでした。「小川さんに打ち明けてみよう」そう思いました。小川さんは同じ会社の先輩で二十年来の親交がありましたが、しばらく前に東京に転勤されてからは音信が途絶えていました。小川さんがクリスチャンであることは知っていましたが、私にはとうてい理解できない別世界のことだと、かたくなに思っていました。

「わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。」　（マタイ　23・37）

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。（イザヤ　59・1、2）

七月六日。妻には出張と偽って、東京の阿佐ヶ谷に蓮見ワクチンを取りにいった日。新宿の喫茶店で小川さんに会い、初めて妻のことを打ち明けました。

「大丈夫、きっと救われるよ」小川さんはきっぱりとそう言われましたが、私には意味が理解できず、その言葉も空しく聞こえました。けれども、死を乗り越えられる救いなどあるはずがないと思いながらも、とにかく何かにすがらずにはいられませんでした。

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。（ローマ　10・13）

神様のことばに触れる

七月九日。東京から小川さんが来てくださいました。岩上さんとご一緒でした。一刻も速く病院へ。私は気が急いていましたが、小川さんは、まず名古屋キリスト集会に寄ってからと言われました。渋々お付き合いして着いたところは、奇遇にも妻の両親と姉夫婦の住んでいるマンションの清水さんという方のお宅でした。集会は、私のような心の沈んだ者には場違いの明るい雰囲気でした。窮屈で、早くこの場から立ち去りたい一心で、どんな集会だったかほとんど覚えていません。このあと集会の方々にあんなにもお世話になろうとは、その時には分からなかったとは

いえ、何と愚かな思いだったことでしょう。

病院で小川さんから初めて聞いた神様のみことば。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

そしてこの日から、私たちはイエス様に祈ることを知りました。プレゼントされた聖書や「光よあれ」の本やテープから、毎日少しずつ神様のことばに触れるようになりました。

「あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。」

（エレミヤ　29・12、13）

この頃から妻は抗がん剤の副作用で、肉体の苦痛に加えて髪の毛が抜ける悲しみにもさいなまれることになりました。

安らぎをいただいて

七月十五日。初めてベックさんにお会いすることができました。朝九時前、病院の玄関に迎えに行こうとした時、廊下を歩いて来られる外国の方の姿を見つけました。人込みの中を真っすぐに私たちに向かって近付いてきてくださったその時の感動は、今でも脳裏に焼きついています。

ベックさんは、三位一体の話、神の救いと永遠のいのちのこと、宗教と信仰の違いについてなど、いろいろ話してくださいました。妻は六年前に大好きだった私の母が亡くなってから、知人のすすめで、ある宗教を信じるようになり、災難に合うのは先祖供養が足りないからだと教えられていました。それで、自分の病気もそのせいではないかと苦しんでいましたが、そんなことを気にする必要がまったくないことも教えていただき、妻も私もどんなに心が安らいだか知れません。また、肉体の死によってこの世では別れても、イエス様を信じる者には天国での再会という嬉しい約束があることも、この時初めて知りました。闇の中に光が見えてきました。

その夜、入院してから初めての外泊許可を貰って、一カ月ぶりに家に帰りました。そして、妻の希望で髪を剃ってやりました。剃っている間中鏡を見ながらポロポロ涙をこぼしている妻が、可哀相で仕方ありませんでした。子供たちもそんな気持ちを察したのか、

「お母さん、クリクリ頭、よく似合うよ」。せめてもの慰めでした。

神様の愛とあわれみに触れ、またその神様にすがり、祈ることを知って、その夜は本当に久し振りの安らかな夜でした。親子四人揃って床をとりました。昼間ベックさんと話したこと、自分たちの子供の頃のこと、二人が結婚するまでのこと、子供たちが小さかった頃のこと。遅くまで話は尽きませんでした。妻や子供たちの安らかな寝顔に「神様、どうかこのまま夜を明けさせないでください」と祈らずにはいられませんでした。

一歩一歩神様に近づいていった妻

妻は、それから毎日お借りしたメッセージのテープに聞き入っていました。心の中では回りに対して気を使い、捨て難いこの世の生活への愛着と神様のお導きとの狭間で一生懸命戦っていたことでしょう。けれども近所の方々やお友達など大勢の方に見舞っていただいて、朗らかな入院生活を送っている妻の様子は、とても病人とは思えないように見受けられました。

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。」（イザヤ　43・1、2）

妻の好きな聖句でした。

八月一日。病状が落ち着いたのでひとまず退院することになりました。朝早く妻から電話がありました。幼子が遊園地にでも行くかのように喜んでいました。子供たちの態度や言葉づかいからも喜びがにじみでており、父親ではとうてい代わってやることのできない母親の存在、骨肉の愛を感じさせられ「子供たちが結婚するまで、いや、せめてあと三年、裕一が高校を卒業するまで、母親の愛を与えてやってください」と祈らずにはいられませんでした。

退院してからもワクチン注射と診察で一日おきに通院しなければなりませんでしたが、幸い子供たちが夏休みだったので、私は会社に出られる日が多くなりました。しかし仕事にはまるで身

が入りませんでした。

そんな情けない弱い私ですが、妻は毎晩今か今かと帰りを待っていてくれました。「光よあれ」や聖書入門を読んでやり、二人でテープを聞きながら眠りにつくのが日課でした。私が読みながら眠りそうになると「もっと読んで」とせがまれることもたびたびでした。そうしているうちに安らかに眠りにつくことができました。

あなたは私の心に喜びを下さいました。それは穀物と新しいぶどう酒が豊かにあるときにもまさっています。平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。主よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。（詩篇　4・7、8）

それから暫くは一進一退の状態が続きました。ベックさんや小川さんご夫妻、名古屋キリスト集会の方々に見舞っていただき、そのたびに神様のみ心に触れることができ、妻は私など及びもつかない早さで導かれていきました。

「わたし（イエス様）は、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」（ヨハネ　14・27）

私は妻が元気な時に何もしてやることができませんでした。自分のようなものと一緒にならなければ、もっと幸福な人生だったかもしれないのにと思うと、済まなくて申し訳なくて仕方があ

りませんでした。どこか近くにでも旅行に行こうか、美味しいものでも食べに行こうかと思っても、妻にとっては最早そんな楽しみはどうでもよいことでした。少しでも神様に近づきたい、少しでも多く家族と一緒にいたいと望んでいたのだと思います。

「お父さん、神様はどうして私をこんな病気にされたんだろうね」。

「きっと俺が、会社だ仕事だと勝手なことをやっとったから、もっと家族を大切にしなさいということだと思うよ」。

「でも、もしそのために病気にされたのがお父さんだったら、私なんか困ってしまっただろうね。私でよかったね」などと話したこともありました。

こんなこともありました。

「私がいなくなったら一人で困るでしょうから、再婚してもいいからね。子供たちはこれからも神様がきっと守ってくださるから心配しなくてもいいね」。

「そうだな、この世での命なんて、永遠のいのちをいただくことに比べたら、あっという間だし、素晴らしい天国でまた皆で会えるから、なんにも心配することないよな」。

神様を知って一カ月。絶望のどん底で、もがき苦しんでいた私たちを神様があわれんでくださり、救いの手を差しのべてくださったので、私たちはこんな会話ができるようになりました。

あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。（ヤコブ　4・14）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

「お父さん、病気になってよかったね」

妻の頭痛は依然として治まらず、身体の衰弱も確実に進行していきました。

九月二十日。頭痛に耐え切れず再入院。この日から妻の兄や姉と交替で、終日付き添うことになりました。手厚い看護のおかげで頭痛も和らぎ、河合さん、清水さんをはじめキリスト集会の方々に度々見舞っていただき、平安な日々を過ごすことができました。

十月二十二日。ベックさんが来てくださいました。集会の方々とともに病室で祈ってくださり、聖歌を賛美してくださいました。

「……気疲れせし者、重荷負う者、隠れ家なる主に、すがれただちに。汝が友は笑い、迫害すとも、主は汝れを抱き、慰め給わん。聖歌六〇七」

その後も幾度となくテープを聞き、涙ながらに口ずさんだ安らぎの聖歌でした。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ　11・28）

イエス様の大きな愛に包まれ、兄や姉の手厚い看護を受けながら、妻は本当に安らかな最後の日々を過ごすことができました。

「お父さん、病気になってよかったね」。
この一言は、妻の安らぎだけを願っていた私にとって、何ものにも代えられない救いでした。どなたの書かれたものかは残念ながら覚えていませんが、この頃読んだ一つの詩が、強く私の心に焼きついています。

「病まなければ、捧げ得ない祈りがある。
病まなければ、信じ得ない奇蹟がある。
病まなければ、聞き得ないみことばがある。
病まなければ、近づき得ない聖所がある。
病まなければ、仰ぎ得ないみ顔がある。
おお、病まなければ、私は人間でさえもあり得ない。」

十一月十日。仕事の都合で帰りが遅くなりました。十時ごろ姉と交替し、いつものように祈ったあと、妻は目に一杯涙をためて、
「お父さん、ありがとうね」と言うのです。
何気なく聞いた言葉でしたが、これが最後の会話となってしまいました。翌朝、発熱をともなった痙攣があり、妻は意識不明に陥りました。

主ご自身があなたの先に進まれる。主があなたとともにおられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。恐れてはならない。おののいてはならない。（申命記　31・8）

愚かで身勝手な私

病院にいる時の神を頼みとした生活とは裏腹に、私は家に帰ると身勝手な人間に逆戻りし、相変わらず長男との確執が続いていました。

十二月三日。この日は長男の中学の父兄参観日で、長女の短大入試の日でしたが、どちらにも行ってやることができませんでした。

昼過ぎに家に戻ってみると、裕一が学校から帰ってこたつで寝そべっていました。私が小言を言うと、「うるさい、俺の勝手だろ」と反発され、思わずかっとなって殴ってしまいました。そして、つい、「お前なんか親でもなければ子でもない。出ていけ」と口走ってしまったのです。

夜になればおなかをすかせて帰ってくるだろうと思って私は病院へ戻りましたが、気になって仕方がありません。八時、九時、十時……まだ帰っていません。兄嫁に付き添いを頼んで、担任の先生にもお願いして、兄と私と三人で夜中まで裕一を探しましたが、どうしても見つかりません。いつになく寒い夜でした。金も持たず、着の身着のままで出ていったはずです。居ても立ってもいられませんでした。

愚か者は自分の怒りをすぐ現わす。利口な者ははずかしめを受けても黙っている。

（箴言　12・16）

その時、先生から思いがけない話を聞きました。

「裕一君もご家族の苦労はよく分かっているんだと思いますよ。以前にもそういうことがあっ

たのですが、今日も給食が休みだから弁当を持ってくるように言ってあったんです。でも裕一君は弁当を持っていなくて、腹が痛いので食べたくないと言って一人だけ外に出ていました。家のことを考えて我慢しているんだと思いますよ」。

小さい頃から母親の愛情を一杯に受けて育った子でしたから、どんなにか辛い思いをしていたのでしょう。先生に言われるまで子供の気持ちを察することもできないとは、何と愚かな父親でしょうか。朝までまんじりともせず、ひたすら子供の無事を祈っていました。

朝になって友達のお母さんから電話をいただきました。無事を確認し、息子が夜中までさまよい歩いていたことを知りました。

私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。（Ⅱコリント　4・18）

天国での再会を約束して

十二月八日。娘の入試の合格発表の日。病院へ電話がありました。「お父さん、受かったよ」の声に感謝で涙が出て、「おめでとう」は言葉になりませんでした。

十二月九日。実の姉妹のようにいつも見舞ってくださり、主にあるお付き合いをしてくださっていた名古屋キリスト集会の河合さんのピアノの発表会の日でした。妻は山を愛し、音楽が大好きでした。この日の河合さんの演奏をテープで聞くのを楽しみにしていました。十一月十一日以来、妻の意識は一度も戻っていません。それでも、河合さんは発表会を終えるとすぐに、着替え

もせずに息せき切って病院へ駆け付けてくださいました。

妻が昏睡状態に陥ってからの一カ月、私たちは話し合うことこそできませんでしたが、私はいつも天国での再会を約束して祈っていました。「神様どうか私たちを再び天国で会わせてください。順子、天国で待っていてくれよ。俺もすぐ後から行くから」と。

私はこう確信しています。死も、いのちも……私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。（ローマ　8・38、39）

十二月十日。午後五時三十三分。妻は天に召されました。あんなに心配していた娘の合格発表もすんで、肩の荷を下ろしたかのように。家族全員とベックさん、河合さんに見守られ、本当に安らかに。

やせ衰え、傷ついた身体からエアウェイマスク、心電図のモニター、点滴、今までがんじがらめにつながれていたものがすべて取り外されました。姉たちの手で美しく飾られた安らかな顔を見た時、肉体的な苦痛から、死の悲しみ苦しみから、すべて解放され、本当に天国へ召されたことが感じられました。そして神様は、私をも苦しみから解放してくださいました。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。（伝道者　3・1、2）

神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、

彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。（黙示　21・3、4）

十二月十二日。集会の皆さんに助けていただいて、聖書に基づいた葬儀を行なうことができました。妻は小川さんの奥さんにいただいた純白の衣装を身にまとい、溢れるばかりの花に囲まれていました。沢山の方々が別れを惜しんでくださいました。葬儀は、神の栄光と、順子を救ってくださったことへの感謝を証しする場となりました。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦（イエス様）がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。」（ヨハネ　12・24）

イエス様と出会う

十二月十九日。皆さんに一言お礼を言おうと、名古屋キリスト集会に行きました。私がイエス様と個人的に出会い、本当に救われたのはこの時でした。その場に座った時「本当にここにイエス様がおられる」と思いました。そして、この世に生まれた時から今まで、妻と巡り合ったことも、小川さんと知り合ったことも、妻の病の苦しみを通してイエス様のもとに導かれたことも、すべてが神様のご計画であり、神様は最初から全部ご存じだったのだと知りました。何の力もない、こんな愚かで罪深い私を、イエス様は手を差しのべて救ってくださった。何という大きな愛

でしょうか。今までに触れた聖書のことばのすべてを、神様がお約束通り成就してくださったことが嬉しくて、有り難くて、涙が溢れて仕方がありませんでした。

妻が召されて五十日の記念会では、河合さんご夫妻がサン・サーンスの「白鳥」を演奏してくださり、高木さんと鈴木さんもフルートを演奏してくださり、まるで音楽会のように夢と希望に溢れていました。音楽が好きだった妻が聞いたらどんなにか喜んだことでしょう。

「不幸とはまことの幸福を得るための手段に過ぎません。不幸という言葉には、故郷へ帰るための道標、という意味があります。だから不幸を知らない人は本当に気の毒です」。

メッセージの中でベックさんは言われました。私は妻が不幸という道標のおかげで、迷うことなく真っ直ぐに故郷である天国へ行ったことを確信しました。

イエス様、感謝します

思えば私はこの世に生を受けて四十六年、平凡ながら恵まれた人生を送ってきました。大した苦労もなく育てられ、友人や会社の先輩、同僚にも恵まれ、愛する妻と子供たちに囲まれ、幸福な人生でした。それなのにいつの間にか恵まれた境遇に感謝することを忘れ、平凡な生活に飽き足らなくなり、もっと違った人生を夢見るようになっていました。事業欲、名誉欲、金銭欲は高まるばかりで、神様に救っていただかなければ、あのまま底知れぬ泥沼に落ち込んでいたかも知れません。

主はすべて心おごる者を忌みきらわれる。確かに、この者は罰を免れない。
（箴言　16・5）

妻はいつも口癖のように「お父さんは仕事しかできない人だから、定年後は私が面倒見てあげるからね」などと言っていました。私も、自分が死ぬ時は当然妻がみとってくれるものと思っていました。神様がなぜ私より先に妻を天に召されたのか私には分かりませんが、最善をなしてくださったのだと思います。

一九九〇年五月二十日。神様は私に、浜名湖バイブル・キャンプで洗礼を受ける時をもそなえてくださいました。

「信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。」
（マルコ　16・16）

妻が天に召されて半年、寂しさと不自由さに悲しくなってしまうこともありますが、その度に神様は愚かな私をあわれんでくださり、聖書のことばを通して慰めてくださり、天国での再会のお約束で勇気づけてくださいます。

子供たちも、母親のいない寂しさに一人悲しむこともあるでしょう。そんな時まことの救い主であり慰め主であるイエス様にすがり、祈って、希望と喜びに満たされるように祈るばかりです。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学び

ました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。

（詩篇 119・71、72）

もし聖書を知らなかったら、私は苦しみや悲しみにさいなまれ続けていたことでしょう。主イエス・キリストを信じて、順子は死の苦しみから解放され、私も生き様が変わりました。今は再び天国で巡り合える喜びと、主のみ心と愛に感謝の気持ちで一杯です。

私の救いのためにいつも心を一つにして祈り続けてくださったキリスト集会のみなさんに心から感謝し、尊き主のみ名を心から賛美します。



▲ 左からベックさん夫妻、長女理佐さん、長男秀行さん、慶子さん、理さん。1989年8月えぴの高原で子供たちの洗礼の日に。

引っ張られて

金原　理

一九四五年静岡県浜北市に生まれる。古瀬戸小、名古屋学院中学、高校、名古屋大学工学部修士課程修了。一九七〇年ＮＫＫに入社。川崎、名古屋、福山と転勤し現在は福岡に勤務。一九七四年慶子さんと結婚。長男秀行さん、長女理佐さん。

・日曜礼拝　毎週朝十時半
・家庭集会　不定期
・住所　福岡市早良区原六―一一―六アムール飯倉Ⅱ-二〇一〒八一四・電　〇九二―八五一―〇〇七二

僕が妻に引っ張られてキリスト集会の群れに加えられて早や一年半以上になります。今まで行っていた教会と比べて戸惑うことが非常に沢山ありましたが、今ではここが一番よかったと思っています。私たちは福岡のささやかなキリスト集会ですが、吉祥寺キリスト集会からやってこられる方々のメッセージや証しなどに導かれて、歩みは遅いが少しずつ成長していると実感しています。これまではこのようなことを感じることはありませんでした。

ここに至るまでの状況を述べてみます。僕が最初にキリスト教に出会ったのは、将来の進学に備えて両親の勧めるミッション系の中学校に入ったためで、クリスチャン・ファミリーの中で育ったからではありませんでした。入学と同時に新約聖書と讃美歌を購入させられ、聖書の授業も、全員参加の礼拝も週一回ずつありましたが、それらによってクリスチャンになろうとはまったく思いませんでした。聖書も「信仰の書物」ではなく「歴史的物語」として理解していました。やはり僕自身に求める心がなかったからだろうと思います。しかし、この当時の聖書と讃美歌は捨てることなく今でも持っています。

二番目に聖書と出会うことになったきっかけは、結婚したからでした。子供が二人生まれ、生活も落ち着き出したなあと思った時、妻が教会へ通いだしたからです。この時は何とも思いませんでしたが、やがて僕にとっては大問題に発展し、ついに今日に至るきっかけとなりました。

妻が教会へ行くに当たって、僕に「一緒に行こう」とか、「教会に行ってもいい？」といった話があったと思います。しかし、当時は仕事も非常にいそがしく、妻の言う方向には気持ちが向きませんでした。従って、これは妻個人の問題であり、自分は興味も関係もないし、特に問題も

ないだろうと思い、「僕は行かないけど好きにしたら……」というような生返事をしたのだろうと思います。日曜日の午前中は、一週間の疲れを取り戻すと称してごろ寝をきめこみ、朝昼兼用の食事をするという怠惰な生活をしていたことも理由の一つでした。このため、寝ている間に妻がどこに行こうとかまわない、という気持ちも強く働いていました。しかしながら、妻が教会に行き始めると、礼拝だけで終わることなく、終わった後も懇親を深めている様子で帰りが遅くなることもよくありました。このため帰りが遅くなると、待っている者としてはどうしても腹がすき、怒りがこみあげてくることもたびたびでした。僕は食事を作るということはほとんどしませんでしたから、妻のことを「自分の都合で食事の支度もしないで、夫に腹をすかせておくとはとんでもない！」と特に怒っていました。だからといって、自分で食事を作って食べるということは意地でもしませんでした。こんな状態ですから、日曜日の午後はよく言い争いをしていました。こんな時、妻はよく「それならあなたも来ればいいのに」と言いましたが、僕は「とんでもない、妻の都合でそんなことができるか！」などと言って、ずっと言い争いが続いていました。

こんな状態が続いて夫婦もだんだん悪くなっていきましたが、争いの原因を考えてみると、解決の見通しはまったく暗いものでした。このつまらない言い争いは少しずつ拡大してきましたので放置しておくこともできなくなってきました。原因をよく考えると、少し僕が譲歩すればやがて解決していくだろうと考え、妻の誘いに乗って時々は教会に行くようにしてみました。こうすれば妻もいつかは教会のことを忘れてしまうだろうと期待もしていました。また、これによってたしかに言い争いを解決することができました。

しかしながら、不本意にも教会へ行くことになってしまった自分にとっては、教会に行くという必然性がまったくないため、礼拝に行っても退屈そのものであり、牧師の説教を聞いても心にとどまることもなく、右から左へ直ぐ抜けてしまいました。このため礼拝堂の出口で待っている牧師と何を話すかが次の悩みの種でした。それでも教会に行き始めて月日が経つと、「今日のお話はあなたのためにしたようなわかりやすいお話でした」などと言ってくれる人もでてきました。それでも僕にとっては理解できず、「そうだったかなあ?」と思っていました。

また、ここでは初心者コースがあり、小人数の学びの講座も開いてくれ、聖書の解説や祈り方などをていねいに導いてくれました。それでも「一匹の迷子の子羊のために九十九匹を放り出すのは、九十九匹の身が危険じゃないか?」などと質問し、みんなを困らせていました。この当時、自分はいわゆる「善人」であると思っていましたから、一匹の子羊の意味も放蕩息子のたとえ話と同様、長い間、理解できませんでした。

どう考えても決して満足できる状態ではありませんでしたが、それでも時間がたってくると、少しずつ教会の皆さんの中に入っていき、その内には「そろそろ洗礼を」という話も聞こえてくるようになりました。しかしながら周囲の人がどう見ていようと、自分では受洗の心の準備などまったくできようはずもなく、何とも心苦しい状態が続きました。このような時に広島県福山市への転勤が決まり、内心ではほっとしました。

福山では、名古屋の教会の紹介により、別の会派の教会に移りました。受洗しなければならない、という精神的な重圧もとれ、何となくリラックスした気持ちで過ごすことができました。そ

の頃、教会で本田弘慈氏の特別伝道集会が三日間開催されることになりました。そして、どういう内容の説教を聞いたのか今ではまったく覚えていませんが、氏の話に非常に感激しました。この会の最後に本田氏が「これを機会に受洗する気持ちのある人は？」と受洗希望者を募った時、多くの人が立ち上って前に出ていきました。このような状況の中でも僕は今までのこだわりから立つことができませんでした。しかし、最後に「金原、お前はどうした？」と指名され、これがきっかけでこだわりも消え、涙のうちに「受けます」と言うことができ、一人一人が祈ってもらいました。この結果、一九八六年のクリスマスに滴礼で受洗しました。受洗しても、まだ気持ちが切り替わっていなかったため、特に聖書を読むわけでもなく、依然としてサンデー・クリスチャンのままとどまっていました。それでもこの教会で証しをする機会が与えられ、「受洗前の昔と比べてみんなに優しくなったと言われている」などと話をしました。この短い二年間の福山の生活の後、今度は福岡市へ転勤することになりました。

福岡では、当初、名古屋の教会に行っていた時おつきあいのあった方が牧師となって跡をついでおられる教会に移りました。ここではりっぱな信者の皆さん方に恵まれていましたが、おつきあいの機会が少なく、ただ教会の礼拝に出席しているだけという状態になっていきました。

このような状況に不満を持った妻が、吉祥寺キリスト集会の証し集「光よあれ」を読み、ぜひこのキリスト集会に参加したいと言い始め、僕のところにも誘いをかけてきました。この本は、名古屋である方に「ぜひ読みなさい」と僕がもらった本でしたが、一度も読むことなく、本箱に入れてありました。このときキリスト集会は九州では大牟田で行なわれており、福岡から行くに

はかなり遠く、また「どこの教会でもそんなに変わらないだろうから」という理由で僕はキリスト集会に参加することに反対しました。妻はそれでも子供たちをつれて、可能な限り大牟田キリスト集会に参加し、僕は福岡の教会にいくという別々の礼拝をすることが月一回位ありました。

その内どうしてもということで、また妻に引っ張られて、須崎さんご夫妻のお宅で開かれている大牟田キリスト集会に出てみることになりました。その時は、変わった教会だなと思い、また昼食をみんな仲よく食べながらいろいろと語り合うのがおもしろいと思いました。しかし大変いい印象を受けたため、結局僕も妻に引っ張られて大牟田にも通うことになりました。しかしながら、福岡の教会もあるため、妻と相談して大牟田には月一回だけ行き、その他の週は今まで通り福岡の教会に行くことにしました。この状態をしばらく続けてみましたが、やはり大牟田キリスト集会の方がいいという妻の強い希望もあり、今度は集会がある時は大牟田へ、ない時は教会へ行くようにしてみました。この二重生活を少し続けましたが、やはり不自然でもあり、また、このややこしい生活に耐えられなくなった妻から、教会をやめて大牟田のキリスト集会に参加したいとの強い意志もでてきました。この結果、夫婦そろって教会に退会を申し入れ、集会のある時は大牟田へ、集会のないときは自宅で家族で礼拝をすることにしました。家族で礼拝をするに当たっては誰の助けを借りるわけにもいかず、自分にとってかなりの決心が必要でした。

大牟田キリスト集会に参加し始めて最初に感じたのは、ここでは日曜日だけのサンデー・クリスチャンではいられない、ということでした。特に男性は、司会し、祈り、すべての点で中心となって集会を導いていく責任を負っているということでした。集会に来て最初から戸惑うことの

多かった僕でしたが、やがて祈ることや司会など、いろいろなことをやっているうちに自然と意識が改革されていきました。また、男の方が交替で担当する「メッセージ」は、教会の説教とは異なり、社会で働く方々が自分で得た聖書に立つ信仰を自分自身の言葉で語ってくれるので非常にわかりやすく、よく共感できました。

大牟田キリスト集会に加わって半年後、一九八九年八月の宮崎バイブル・キャンプに家族で参加しました。このキャンプで中学二年の息子が洗礼を受ける予定になっていましたが、小学校六年の娘まで受洗することになり、自分にとっては大きな驚きでした。この洗礼式のとき、介添役が受洗者のために祈ることを知りませんでしたので、直前になって教えてもらい、かなりあわてました。日頃聖書もあまり読まず、祈ることも少ない者が緊張し、何か分からず涙が出てくる中で、僕は息子のために祈り、妻は娘のために祈り、洗礼式を終えることができました。このキャンプで僕はベックさんとも初めて会い、あの大きな手で握手され、手が握りつぶされてしまいました。このようなバイブル・キャンプは初めての経験でしたので、私は精神的にすっかり疲れ果ててしまい、また来年もぜひ行きたいという気持ちにまではなりませんでした。家族たちは別でしたが。

宮崎でのバイブル・キャンプが終わってしばらく経つと、福岡の我が家にベックさんが泊まりたいとおっしゃっているという話が伝わってきました。バイブル・キャンプの洗礼式の時と同じで、それが何を意味するか知りませんでしたので、「あ、いいですよ」と気軽に返事をしました。ところが後で詳しく話を聞きますと、何とベックさんが泊まられた時、そこで家庭集会を開き、

やがては定期的に家庭集会を開くことが計画されているというではありませんか。ベックさんが泊まられることはいいとしても、まだまだぬるま湯的なクリスチャンであった自分にとって、定期的に家庭集会を開く件はあまりにも重荷であり、またそんな資格もないのでお断わりするつもりでいました。それでも時がたつうちに、「どうせ転勤で福岡にきたサラリーマンだから、福岡にいる間の二、三年の辛抱ならまあしようがないか」という気持ちに変わってきました。そうして福岡のキリスト集会が一九九〇年四月からスタートしました。福岡でキリスト集会をすると決心した以上は、今までのようにのんびりしている訳にもいかず、僕は心構えを変えて、大牟田のキリスト集会にも積極的に参加するようにしました。

福岡のキリスト集会は、大牟田の集会と一週間ずつ交代で福岡地区の礼拝を守っていくようになりました。今まで吉祥寺キリスト集会に出席したこともなく、大牟田の集会のお手本だけから新しくキリスト集会を始めるのは不安でしたが、妻の助言を得て、何とかスタートすることができました。それでも、画期的な霊的体験があるわけではなく、大きな悩みや苦しみなどの人生経験をしたこともなく、ただ妻に引っ張られて知識から信仰への道に入った未熟な者にとっては、不安を一杯かかえたスタートでした。たとえれば、「主を信じます」と言って信仰の川を渡った者が、川を渡ったところで先に行く道が見つからず、向こう岸でうろうろしているような状態です。それでも川に落ち込むこともなく、何とか手探りで進んでいると思います。

これまで聖書もあまり読まず、聖句も気にしないでいましたが、集会に集うようになってから少しずつ心に留まるみことばも出てきました。

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。……あなたがたも、おのおの自分の妻を自分と同様に愛しなさい。妻もまた自分の夫を敬いなさい。（エペソ　5・22～25、33）

このみことばは、今までの教会生活の中で一度も出会ったことがなく、また覚えてもいませんでした。妻に引っ張られて妥協の産物として教会に行っていた昔と異なり、今のキリスト集会ではこれはすべての前提条件のように感じられます。あまり意識してはいけないと思いますが、このことばが自分の背中から後押ししてくれていると思うようになって、「妻に引っ張られて」ということをあまり感じなくなってきました。今は、大牟田キリスト集会が不定期で福岡キリスト集会が中心になってきて、もはや「引っ張られて」いるのでなく、後ろからイエス様に強く「押されて」いることを感じます。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。

（Ⅰペテロ　1・8、9）



光に導かれて

金原慶子

一九四七年静岡県湖西市に生まれる。鷲津小、静大附属浜松中、豊橋東高、国立音楽大学声学科卒業後、自宅にて声楽指導。一九七四年理さんと結婚。家族は長男秀行さん、長女理佐さん。

私は子供の頃から、「私ってどうして生まれたのだろう」「私は何のために生きるのだろう」「私は死んだらどうなるのだろう」などといったことをよく考えていました。どんなに考えても分からなくて、まわりの人々に聞いてみても「そんなことは考えないの」「一人でぼんやりしているから、そんなことを考えるのよ。外で元気に遊びなさい」「大人になったら分かるわよ」など、満足を与えられる返事は一つも返ってきませんでした。

その後私は、国鉄とバスを乗り継いで一時間半ほど離れた浜松にある中学に通うようになりました。一年生の十二月頃だったと思いますが、登校すると、なんとなくいつもと違ってクラスの中がざわざわとしていて、とても楽しそうなのです。何を話し合っているのかと思ってそばに行くと、クリスマスをどうやって過すのかということを話しているのでした。私は「なあんだ、クリスマスか。そんなの家で皆でクリスマス・ケーキを食べて、次の朝枕もとにあるプレゼントを楽しみにする、そんなことじゃない」と心の中でつぶやいていると、「聖歌隊の練習がもう始まるのよ」「うん、ぼくはお昼には教会へ行くよ」「私たちはもっと早くから行くわ」などと話し合

っています。教会はまだしも聖歌隊というのは私が今まで耳にしなかった言葉ですし、その教会にこの人々はもう行っているのかと思うと、どうしてか、とてもうらやましくなりました。でも私は家が遠いからか、誰一人教会へ行くことを誘ってはくれませんでした。この中学校はいつも華やかなムードのある学校でした。このクリスマスのことも、とても華やかな雰囲気の中での会話でした。そして私の心の中には、教会やクリスマス、またイエス様という言葉が強く大きく残りました。それからは、電車やバスに乗ると教会の建物を捜して、いつもほんの一瞬でも目で追いながら、あそこには何かがある、私のこの大きな疑問に対しての答えがあるんだと思っていました。でも一人で教会に入って行く勇気がないまま、中学、高校時代が過ぎていきました。

高校で入っていた合唱クラブがきっかけで、大学は音楽大学に進みました。音楽史の授業で教会音楽、特にグレゴリオ聖歌を勉強しました。仲のよい友人たちの中にミッション・スクールから進学した人が二人いて、その二人が「一度聖歌隊に潜りこんでみようよ」と言うので、私は「やった！」と思いました。四谷の大きなカトリック教会に行きました。何度かミサや聖歌隊の練習にも出席しているうちに、友達が一人、また一人と教会に来なくなってしまい、結局私一人が残ってしまいました。でも私は中学から教会というものに憧れていましたから、一人で聖書の学びにも出席するようになりました。しかし万物を創造なさった神様の存在は信じることはできるのですが、私と神様との距離はまるで天と地ほど離れていて、身近に感じることができないままでした。それでも満たされない何かを求めて、大学を卒業して実家に帰ってからも、中学時代に行きたかった浜松のカトリック教会に通い続けましたが、やはり心にはっきりとしたものはな

いままでした。

卒業して四年後に結婚しましたが、それからは主人の目をなんとなく気にして、教会には行かなくなってしまいました。しかし主は、こんな者でも本当に憐んでくださっていたのです。結婚して八年が過ぎ、転勤族の我が家は当時名古屋に住んでいました。

その頃、私の声楽のレッスンに五人ほどの方が我が家にいらっしゃっていました。その方々はママさんコーラスや聖歌隊に入っていらっしゃいました。そして皆さんがカトリックかプロテスタントのクリスチャンでした。

レッスンの後で、一人の方は、聖書について、イエス様について、罪について、十字架について、よくお話してくださいましたし、聖書までプレゼントしてくださいました。かつてカトリック教会に何年も行っていましたが、その時聞いたお話とまた違って新鮮に思えました。でも初めのうちは私にとっては単なる知識の一つでしかありませんでした。

その頃、朝早くなにげなくラジオのスイッチを入れると、五分間の「世の光」が流れていました。短いお話でしたが、とても心打たれ、毎朝楽しみにしていました。

そんな時、娘が通っている幼稚園で時々会ったことのある方ががんになられ、一年ほどで亡くなってしまわれました。幼い三人の子供さんを残してのことでした。その方が最後に「私はこの三人の子供たちを残しては死んでも死にきれない」と言っておられたそうでした。そして同じ頃、私と同年配の友人、知人が続けて三人もがんになり、私は追いつめられるような思いでした。

それまで、私にとって「死」とはまだまだずっと遠いもの、いや遠くに置いておきたかったも

のでした。もし私が死ぬことになったら、私もやっぱり子供二人を残して死ねない。でも死はいつ来るかわからない。買物に出かけたらそのまま交通事故に巻き込まれることだってありうるし……。私は死を迎えるに当たって、「死にきれない」と言いながら死にたくなんかない。そのためには子供たちに物質的な物、金銭的な物のような「物」ではなく、確かな「何か」を残してやらなければ、と思いました。私はとりあえず一日一日をよき妻、よき母であるようにがんばっていこうと決心したのです。

しかし、優しくしてあげなくてはと思っても、その時の気分によってひどく意地悪になってしまったり、思いとはまったく逆のことばかりしている自分に気がつきました。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。（ローマ　7・15）

私は考えれば考えるほど自分の愚かさやいい加減さ、主人に対しても自分の正しさだけを主張している姿に、暗い暗い中へと落ちて行きました。

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。（ローマ　7・24）

このような苦しい毎日が数カ月続き、私はくたくたに疲れはててしまいました。どこを探してもいいところのない自分。私はただ心の中で誰にということもなく「助けてください。助けてく

ださい」と繰り返し叫び続けるだけでした。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたし（主イエス）のところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

（マタイ　11・28～30）

その時ふっと、イエス様のところへ行こう、イエス様のところには私が子供の頃から考えていた疑問に対しての答えだけでなく、すべての解決があるのではないか、子供たちにも一番必要なものがあるのではないかと思いました。

そして早速次の日曜日、主人に「子供たちと三人でプロテスタントの教会へ行きたい」と話して出かけました。牧師の説教を聞きながら、自分の罪をはっきりと示され、悔い改めることができ、救いの中に入れていただき、今までの一時の慰めではどうにもならなかった重い石のような悩みと苦しみとが一度に取り除かれ、ただ感謝の涙が止めどもなく流れました。それからは喜びと平安の中に入れていただき、毎日聖書を読むことが嬉しく、心から祈り、賛美をしていました。

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。

（詩篇　119・130）

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。　（詩篇　119・105）

すべての解決がイエス様に、みことばにあること、そしていつもイエス様が私とともにおられること、この喜びを周囲の人に伝えないではいられませんでした。やがて友人の五人の方々が救われ、毎週皆で集まり、聖書を学び、祈り、語り合うようになり、二年が過ぎていきました。

そして主人の転勤のために、住み慣れたこの地や親しくしていただいた皆様とお別れして、広島県へ行くことになりました。寂しさ一杯でしたが、どこへ行ってもイエス様がごいっしょにいてくださる、主にあってはどこの教会もいっしょのはず、と少々楽観的でしたがそう考えて転勤先に出発しました。

転勤先は以前に二年間いたことのある所でしたので、生活面ではすぐに慣れました。教会へもすぐに通いだしました。初めは牧師の説教が以前と違い神学的でしたので、新鮮さを感じていましたが、なぜか喜びが少しずつ薄れていくのです。教会学校の教師、聖歌隊の指導、婦人会の役、特別伝道の時の賛美などの奉仕に追われ、献金も袋に領収印が押されている有様で、身体の疲れだけでなく、その教会のあり方に少しずつ疑問を持つようになっていきました。集うたびに疲れが増すだけでした。「イエス様、私はこのままではどうなるのですか？　信仰がなくなってしまいそうです」と祈る毎日でした。その時与えられたみことばは、次のものでした。

「わたし（主イエス）がしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」　（ヨハネ　13・7）

ただこのみことばを信じて待つのみでした。

そして二年後に、主はまた転勤をさせてくださり、福岡へと移りました。ある教会へ導かれたのですが、「主に喜ばれるようにがんばりましょう！」「ああしなくてはいけないのです」「こうしないと駄目なんです」という牧師の説教を聞いているうちに、私は目に見えない鎖でがんじがらめに縛られていくような感じがしました。

そんな時、かつて名古屋を離れる頃に、若いクリスチャンのカップルからいただいていた「光よあれ」第三集を三年ぶりに開きました。皆さんの生き生きした証しに触れて、以前の自分の姿を思い出しました。そしてそれ以上に、ベックさんが書かれている所を何度も何度も読みました。そこには「信仰と宗教」についての違いが書かれていたのです。この三年間の私の教会に対する疑問点が、「イエス様を信じる信仰」と「キリスト教」の違いとしてはっきりと書かれていたのです。私の心の曇りはすっかりと晴れ、二週間後に福岡へいらっしゃったベックさんのメッセージに接し、またキリスト集会の皆様とのお話の中で、私はこの三年間求め続けたものを見つけることができました。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。神のなさることは、すべて時にかなって美しい。（伝道者　3・1、11）



▲ 福岡のキリスト集会。後列右端が金原夫妻。1991年春、森島さん（前列右端）を迎えて。

私はもう一度、主のみを見上げ、主のみに従って歩んでいくことが最高の喜びであることを教えていただきました。そして、この荒野を行くような三年間の歩みを通して、主人と二人の子供が救いの内に入れられることができました。

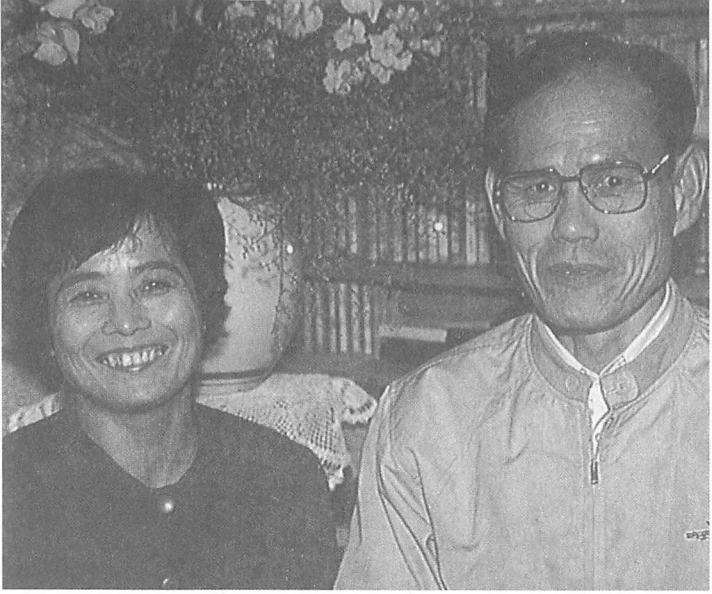
主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

お約束を必ず成就してくださる主に、真理のみことばを握りしめ、最後まで家族が一つとなって、お従いしていきたいと願っております。

キリストにある愛、喜び、平安

岡本広海



▲左が奥さんの基子さん、右広海さん。

一九二九年高知県香我美町岸本に生まれる。岸本小、城山国民学校高等科卒業。一九四四年兵庫県園田村の軍需工場入社、翌年終戦のため退社。一九四八年時計店を開業。一九七七年妻基子さんと結婚。趣味は音楽鑑賞。

・家庭集会　不定期・住所　高知県香美郡野市町西野二一二一―二〒七八一―五二・電　〇八八七五―六―一九四〇

▼左から広海さん、洗礼を受けた妹の谷美雪さんと義姉岡本博子さん。基子さんの義妹井上紀美さん、基子さん。1991年秋の高知バイブル・キャンプで。



求める心が起こる

私には、肉体に一つの弱さ、とげが与えられていました。今にして理解できることですが、これは私がイエス様のみもとに導いていただくための、主なる神様からの賜物であったのです。

三歳の時、私はあやまって右の脛を「くじり」（下駄やぞうりの鼻緒をすげる時に使う千枚通しのようなもの）で突いてしまいました。傷口から膝の関節に黴菌が入り、一晩のうちに大きく腫れ上がり、高知市の宮本病院に三カ月ほど入院しました。医師から、右足を切断しなければ命が危ないと言われましたが、母は、「どうかこの子の足を切らずに治してください」と一生懸命お願いして、何とか残してもらったとのことです。

母は召される前に、

「ひろみさん。すまざったねえ」と私に言いました。生涯私に怪我をさせたことが母の心にかかっていたことを、私はその時知りました。

だが今、私は心から思います。この障害を持ったことによって、どれだけ多くの愛をいただいたことか。肉親の愛、友人たちの愛、教師や学友たちの愛、会社での上司の方々や同僚たちの愛。そしてその背後には、いつも主イエス様が働いてくださっていたことを、近年特に感じるようになりました。

私は小学校に入るまでの多くの時を叔母の家で育ちました。香宗村土居という所で、近くには「光よあれ」第四集で証しをなさっている竹本さんのお宅、竹本歯科があります。私は、叔父、

叔母はもちろん、近所の方々にも可愛がられていました。小学校、高等小学校へ行く間だけは岸本の生家に帰っていましたが、終戦後、また叔父叔母の家に戻り、結婚するまでの三十一年間、時計店を開業していました。

戦後、学制が変わり、新制中学、新制高校、新制大学となり、教育花盛りの時代へと突入していきます。以後、私の店にも多くの高校生が出入りするようになりました。私は勉強がしたくて、小津高校の通信教育を受けていましたが、どうしてもスクーリングに行く勇気がなくて結局中途退学してしまいました。

そんな私も、コンサートとなると喜んで出かけて行きました。私は昔から西洋音楽が好きで、家から五里ほどある高知市へ、数少ない音楽会を求めて出かけていました。それは音楽を聞いている間、心の安らぎを覚えるからでした。

一九五七年七月十日、辻久子さんのバイオリン・コンサートを皮切りに、高知に「労音」が結成されると、私もそれに参加するようになりました。いつしか親しい方が多くなり、私を入れて八人で音楽のことや芸術のことなどを語り合うのが楽しくなっていきました。私にはないものを、この人たちは持っていました。この方たちとのお付き合いが私にとって新しい知識を得る場となっていました。

ある時、八人で一冊の本を一緒に読むことになりました。パウル・ベッカーという人が、ドイツの放送局で二十四回に分けて放送した話を一冊にまとめた、「西洋音楽史」という本でした。私はこの本の学びで、私の生涯を変える素晴らしいプレゼントをいただくことになりました。

何回目かの学びで「グレゴリオ聖歌」という章がありました。この章の学びのために、ある音楽の先生がレコードから録音したテープをくださいました。この章を勉強してきた者が発表しながらテープを聞きました。その曲を聴いた時、私は心の中で「なんと美しい旋律だろう、安らぎを覚えることだろう」と思いました。なぜだろう、この感動はどこから来るのだろう。私は、これはキリスト教と何か関係があるのかもしれない、教会へ行けば何かわかるかもしれない、と思いました。

「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」（マタイ　7・7）

ある集まりに導かれる

イエス様は時をお逃しになりませんでした。

ちょうどその頃、私は竹本さんへ歯の治療に行きました。帰ろうとして外に出ると、竹本さんの奥さんが、

「広海さん、私のうちでキリスト教の集まりをしていますが、おいでませんか」と誘ってくださいました。私は、

「はい」と答えて帰りましたが、心の中で「もう一度誘ってくださったら行ってみるんだがなあ」と思っていました。すると次の治療日に、竹本さんの奥さんが、

「今夜集まりがありますが来ませんか」と、また誘ってくださいました。

「はい。来てみます」と答えて、夕方出かけました。竹本さんのお宅に行くと、「今夜は本久さん宅でします」と言われて、自転車で三分くらいの本久さんのところに回りました。近くの信者さんたちが七、八人と牧師さんご夫妻が集っておられました。賛美して、聖書が読まれ、牧師さんのお話がありました。

私はこの夜、「いい人たちばかりが集っているなあ」という印象を受けました。そして、ここに来ていると、その間だけでも悪いことを考えたり、したりしないから、これからも続けて出席してみようと心に決めました。

はじめてのみことば

一九六二年十月十四日、私は伝道集会に出席しました。

その頃私は皆さんの集まりには行っていたものの、教会に行くことなど考えたことはありませんでした。そんな私に、この時も竹本さんの奥さんが、

「広海さん、香美教会で伝道集会がありますが行きませんか」と声をかけてくださったのです。

「はい」と答えて行くことにしました。

この日、沖縄の福井二郎牧師が来られてお話がありました。その時初めて聖書のことばが私の心にとまりました。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。（Ⅱコリント　5・17）

私はこのみことばを見るとすぐに、「古いものは過ぎ去って、私は新しくなった。私は新しいんだ」と思いました。そう思うと、とても楽しくなってきました。これは私の早合点だったのですが、長いことそれに気づかず、自分は新しく何か良いものに変わったのだと思い込んでいました。ずっと後になって、主イエス様のみわざを知った時、自分の間違いに気づかされました。「だれでもキリストのうちにあるなら、」というところが大切だったのです。私はイエス様のことを知らず、ただ自分の感情で「私は新しくなった」と思っていたに過ぎなかったのです。本当は信仰なしには新しくなりようはなかったのです。でも、真の意味を知らないながらも、これが私の心に初めてとどまった聖書のことばだったのです。

悔い改めのない受洗

この年の十二月のことです。三度目の竹本さんの奥さんの呼びかけがありました。

「広海さん、洗礼を受けませんか。岡村哲男さんも受けられるそうですよ」。私は、

「洗礼とはなんですか」と尋ねました。竹本さんは、

「信者になる決心をしたことを皆さんの前で公にすることですよ」と答えられました。

私は信者になることは悪いことではないと思い、受洗することを決心しました。

洗礼を受ける前日、私は父のところに帰りました。父に受洗することを報告して、生家から出発して教会へ行こうと思ったからです。私は父にこう言いました。

「お父さん。僕、明日、香美教会で洗礼を受けようかと思う」すると父は、

「それはいいことじゃ。私は今は無信仰じゃが、信仰を持つならキリストさんが一番いいと思う」と答えてくれました。

「『十戒』という映画を見たことがあるが、海が二つに割れて海の底を歩いて渡って行くすごい場面があった」と、懐しそうに話してくれたことを思い出します。

私はその晩、安心して両親のもとで泊まり、翌日教会で礼拝のあとで受洗しました。

洗礼式のあとで、クリスマス祝い会をかねて、受洗者も交えての愛餐会がありました。一緒に受洗した岡村哲男さんと友達になりました。それぞれ受洗の感謝と感想を言わされました。その時、私は信仰のことが何もわかっていなかったため、全く的はずれなことを言ってしまいました。

「私は岡村哲男さんに負けないように教会に来ます。まず一年間一生懸命教会に来て、バッハやモーツァルト、ベートーヴェンの音楽が理解できるようになりたいと思います」と言ってしまったのです。イエス様と個人的に出会っていなかった悲しさです。

この時から私の十九年間の教会生活が始まりました。聖書をただ「道徳や戒めの書物」として読んでいた私は、途中でくじけそうになります。私は聖書を通して神様が語っておられる真の目的を知らなかったのです。

ある時、青年会の聖書研究会で、牧師さんに「次はどの書を学びたいか考えてきてください」と言われました。私はわからないので、竹本のおじいさんに（この方は竹本家の最初のキリスト者で、九十四歳で素晴らしい天国への凱旋をなさった方です）聞いてみることにしました。

「青年会で次に学びたい書を考えてきなさいと言われたのですが、どこがいいと思いますか」と相談すると、即座に、

「ヨハネ伝をやってもらいなさい」と教えてくださいました。そして、内村鑑三さんの「聖書の研究」という、ヨハネの福音書についての小冊を貸してくださいました。私はこの本を手引きとしてヨハネの福音書を読んで初めて、聖書が何を言わんとしているかを知りました。

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

（ヨハネ　1・1）

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

（ヨハネ　1・14）

何ものも存在しない前から存在されていた方があった。この方は神と共におられ、この方は神であられたのです。この方によって、天と地と海とその中にあるすべてのものは創造されたのです。そしてこの方は人となってこの地上においでになり、私たちの目に見える姿で、私たちの間に住んでくださった。その方とはイエス様である、とヨハネの福音書の冒頭には記されています。

私はこの時初めて、聖書は「イエス様のことが書いてある書物」だと知ることができたのです。それ以来、聖書が身近なものとなってきました。そして聖書を読むのが楽しくなってきました。

「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたし（イエス様）について証言しているのです。」（ヨハネ　5・39）

聖書はこう言っています。「彼（イエス様）に信頼する者は、失望させられることがない。」（ローマ　10・11）

婚約と解消

教会生活を始めて五、六年たった頃、私はある信者の方と婚約しました。神様から見て、結婚にはどんなに大事な意味があるかも知らず、みことばに聞くこともせず、自分の思いで決心して婚約しました。ただ自分の思うままに行なった私の計画は、主イエス様の祝福をいただけるはずもなく、失敗に終わりました。

私はこのことを通して、自分の愛のなさをつくづく思い知らされました。神様が求めていらっしゃるように、完璧に人を愛することなど、とても私にはできない。苦しい日々が続きました。聖書を読むのが恐ろしくなりました。「愛」という文字を見るのがつらくて、避けて通るようになりました。そんな私に、次々とみことばが迫ってきました。

愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。

神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟

を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。
（Ⅰヨハネ　4・18、20）

「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」
（ヨハネ　13・34）

私は教会での皆さんとのお付き合いを避けるようになりました。

そんなある日、私は他の教会の伝道集会に出席しました。「主イエス様から離れてはいけません。主イエス様とのつながりから逃げ出してはいけません。悪魔の思うつぼです」という牧師さんの話を聞いて、私ははっとしました。イエス様といつもつながっていなければだめなんだ。私はかろうじて信者の皆さんの輪の中に踏みとどまりました。

相手の方とのわだかまりは五、六年続きました。そしてそれが解けて後も、私はもう結婚はすまいと心に決めていました。

結婚

私が伝道映画会のお供をした時のことです。「北国に駈ける愛」という映画を上映しながら、鈴木牧師と映画の主人公である三橋萬利さんと奥様の幸子夫人、私の四人で、私の車で、高松、

脇町（徳島）、高知と各地を回りました。その時三橋さんが、車の中で北海道名産のししゃもを出しながら、

「岡本さん、結婚しなさいよ。私のような者でも元気な妻をもらうことができましたよ。結婚っていいものですよ」とすすめてくださいました。三橋さんは幼い頃小児麻痺にかかり、まったく歩けない状態でありながら、奥様の献身的な助けの手を借りて、熱心に伝道活動をなさっていらっしゃるのでした。

私は障害を持っているので、いつも結婚に対して逃げ腰になっていました。三橋さんの言葉を聞いて、「そうだ、結婚しよう」と思いました。

主イエス様は、私にふさわしい助け手として今の妻を備えていてくださいました。私たち二人は期せずして、それぞれに神様からみことばをいただこうとして聖書を読み始めました。私は創世記から読みました。

その時私に与えられたのは次のみことばです。

主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」アブラムは主がお告げになったとおりに出かけた。

（創世記　12・1～4）

私は四十八歳になるまで、三十一年間叔母の家で時計店を営んでいました。結婚に際して、みことばに従って叔母の家を出ようと決心しました。叔母にそのことを話すと、

「食べていけるかよ。近くに家を借りや」と心配してくれました。姉弟のようにして育った従姉も理解してくれました。

私はすぐに野市町に車を走らせ、適当な貸し店はないかと探し回りました。こことという空店がなかなかみつかりません。とうとう他に心あたりがなくなって、早くから野市の町に出て、はんこ屋をしている友人のところに寄りました。するとその友人は私の顔を見るなり、まだ私が何も話さないうちに、

「岡本さん、二軒目の家が空いたが借りませんか」と言うのです。私は即座に、

「借りたいので世話してくれる」と頼みました。

私は、これこそ主なる神様の備えてくださった店舗にちがいないと確信しました。

また彼らをまっすぐな道に導き、住むべき町へ行かせられた。（詩篇　107・7）

主が備えてくださった家で、主が導いてくださった「ふさわしい助け手」と共に、店舗造りにとりかかりました。まず私がこの家に住んで、開店しました。

そして一九七七年五月五日、私たちは神様にも、教会の皆さんにも、友人たちにも、そして肉親にも祝福されて結婚しました。式は教会で、披露宴は会費制で岸本公民館で行なうことができました。教会の青年の皆さんが愛をもって全部準備してくださいました。

新しい店舗は神様に祝福され、私たちの能力以上に繁盛しました。また結婚後六年ほどして、まったく不思議な方法で主から土地を与えられ、それから二年ほどして、家庭集会もできる、私どもには過ぎた家を建てることができました。神様からいただいたこの家を、主イエス様のご再臨まで、数多く用いていただきたいと祈っています。

測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。私は助言を下さった主をほめたたえる。……私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。

（詩篇　16・6～9）

土佐山田キリスト集会の誕生

土佐山田キリスト集会が起こされるために、主イエス様はまず一組の夫婦とその新築中の家をご自分のものとなさいました。

一九八一年六月二十一日日曜日のことです。私は、この日竹本真夫さんと礼子さんが吉祥寺キリスト集会のベックさんによって洗礼を受けるというニュースを聞きました。これは大変なことだと思いました。お二人はすでに香美教会の教会員なのに、そこを出るとは……。

私は教会での礼拝をすませ、妻と一緒に当時まだ新築中だった真夫さんの家に行きました。私たちが着いてしばらくすると、新築中の家の床に新聞を敷いて輪になって座り、集会がはじまりました。

これが土佐山田でのキリスト集会の最初だったのです。やがて私たち夫婦がここに来て共に礼拝するようになろうとは、その時には思いもよらないことでした。私は真夫さんと礼子さんが香美教会に帰ってくるように祈っていました。しかし、そのうちにお二人が以前とはまったく変えられていく様子を見て、不思議に思うようになりました。

真夫さんは歯科医院をなさっているのですが、木曜日を休診日にしておられるようでした。木曜日になると、

「これを聞いてみて。すごいよ」と、私のところにテープを持ってきてくださいました。吉祥寺キリスト集会の方々の証しのテープでした。私は妻と一緒にそのテープを聞きました。何本も何本も、皆さんの証しのテープを聞いていくうちに、私たちは自分たちの信仰と違う何かがそこにあると感じるようになりました。一人一人に聖書のみことばが生きて働き、内側から変えられて行くのはなぜだろう。私とどこが違うのだろう。次々と真夫さんが届けてくださるテープを、何度も何度も聞きました。一度吉祥寺キリスト集会へ行ってみたいという思いを持つようになりました。やがて、その機会が来ました。

吉祥寺キリスト集会の礼拝に出席

私たち夫婦は、妻の妹の結婚式に出席するために東京に行きました。そしてちょうどいい機会だったので、吉祥寺キリスト集会の礼拝に出席しました。

集会所一杯の人でした。礼拝がはじまりました。驚いたことに司会者はいません。プログラム

もありません。どうなっているのかと戸惑いました。男性の方が聖歌の番号を告げると、オルガンの伴奏で賛美がはじまります。何曲か歌うと、別の男性が立って聖書を読んで祈りを捧げるのです。祈りは賛美と感謝の祈りでした。皆さんが次々に立って感謝を捧げるのです。そして感謝の合間に聖歌が……。やがて一人の男性が立って、聖書の「最後の晩餐」の箇所を読まれ、聖餐式のための感謝の祈りをなさいました。それからパンとぶどう液の意味が語られました。

「このパンはあなたがたの罪のために身代わりとなって十字架上で裂かれたイエス様のみからだの象徴です。このぶどう液は私たちの罪の贖いのためにイエス様が十字架上で流された新しい契約の血です。主イエス様のみ苦しみとみわざを覚えていただくものです。主イエス様をご自分の救い主として受け入れている方は、洗礼を受けている、受けていないにかかわらずお取りください」。

まず二つに裂かれたパンが、そのあと大きな杯が回ってきました。教会の聖餐式に慣れていた私には不思議な光景でした。

献金は信者のみ捧げて、信者でない方はしないようにと説明がありました。これは本当だと思いました。後になって知ることですが、信じている者にも月定献金などはありませんでした。一人一人が心から喜んで捧げられるだけを自由に献金し、またそれだけでなく自分の時間と労力も捧げて主イエス様のために精一杯奉仕しているのです。次の聖句を思い出しました。

「あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなた

の父が、あなたに報いてくださいます。」（マタイ　6・3、4）

そして礼拝はなおしばらく、皆さん方の感謝と祈りによって続きます。女性の方々はベールを頭にかぶって、男性に合わせて礼拝していました。やがて奏楽と共に、私には大変長いと感じられた礼拝が終わりました。私たちの教会のように「説教」が中心の礼拝ではなかったのです。

このあと少し間をおいて「福音集会」がありました。これが教会でいう「説教」の時でした。「学び」とか「メッセージ」と言っていました。そこにもプログラムはありませんでした。聖歌が歌われ、司会者は祈って、聖書を読み、メッセンジャーを紹介しました。メッセンジャーは「兄弟」と呼ばれていました。キリスト集会には牧師とか先生と呼ばれる人は一人もいないのです。その日のお話は、聖書の中の特定の箇所を強調することなく、聖書全体が確証している主イエス様を紹介する内容でした。

帰りに大阪の友人のところに一泊しました。その晩、吉祥寺キリスト集会でのことを思い起こしていました。この頃から、私は十九年間お世話になった教会を出て、土佐山田のキリスト集会に移りたいと思うようになり、苦しみはじめました。

教会からキリスト集会へ

当時、妻は教会を変わりたいと私に訴えるようになっていました。私ははじめのうちは今の教会でいいと思っていました。しかし、証しやメッセージのテープを聞いているうちに、私もあの

ような信仰を持ちたいと願うようになってきました。吉祥寺キリスト集会の礼拝に出席し、皆さんと色々なお話をして来てから三カ月くらいの間ずっと悩んでいましたが、ついに十九年間導いていただいた教会から、まだ四、五人で家庭礼拝をしている土佐山田キリスト集会へ移らせていただこうと決心しました。

一九八二年八月初旬に、土佐山田で二泊三日のバイブル・キャンプが行なわれました。それが終わった直後の八月八日日曜日、物部川の河口近くで洗礼式が行なわれました。私は、以前受けた洗礼が滴礼であったので、聖書に基づいて浸礼で洗礼を受け直しました。これは私にとって、心から自分の罪を悔い改め、今までの歩みと訣別する時でもありました。

この日受洗したのは、森本恵子さん、私、私の妻の三人でした。これが土佐山田キリスト集会の二度目の洗礼式となりました。罪深い私には、河口の濁った水がふさわしく思われました。

竹本真夫さんが聖書を読んでくださいました。

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさらない。（詩篇　55・22）

このみことばが、私の中にまだ残っていた迷いと心配をすっかり消し去りました。そして私は真夫さんのお祈りのあとで、ベックさんによって洗礼を授けていただきました。

「愛する岡本広海兄弟。父とみ子と聖霊との名によって私はあなたに洗礼を授けます。アーメン」

私は深々と水に沈められ、そして引き上げられました。続いて妻基子が、そして森本さんが、同じようにみことばと祈りと共に受洗しました。

私たち夫婦の、小さな集会での信仰生活がスタートしました。毎月私たちの小さな群れのために、吉祥寺キリスト集会からベックさんご夫妻はじめ多くの皆さんがいらしてくださって、私たちに信仰の素晴らしさを味わわせてくださいました。

私たちの歌える聖歌は最初は僅か五、六曲でしたが、少しずつレパートリーも増えていきました。礼拝だけでなく、水曜日の夜「祈り会」を持つようになりました。一人一人が救っていただきたい親類や知人の名前を記した手帳を携えて行き、共に祈り合うようになっていきました。そして「聖歌の伴奏ができる方を与えてください」という祈りも聞かれて、イエス様は素晴らしい伴奏者を私たちの群れに加えてくださいました。次々と集会に集う方々が加えられていきました。主のみわざを目の当たりに見ることができて感謝でした。「祈りは聞かれる」ことを知りました。

わが神、主よ。あなたがなさった奇しいわざと、私たちへの御計りは、数も知れず、あなたに並ぶ者はありません。私が告げても、また語っても、それは多くて述べ尽くせません。

（詩篇　40・5）

一九八二年九月五日日曜日、私は再び吉祥寺キリスト集会の礼拝に出席することができました。その前日、姉の息子、正己君の結婚式に出席するため、私は東京に来ていました。その晩は吉祥寺の飯守さんのところに泊めていただきました。翌朝、中学生の礼拝に出席したあと、大人の礼

拝に出席しました。

真の礼拝の素晴らしさをしみじみ味わうことができました。初めて吉祥寺キリスト集会の礼拝に出席した時は、何か奇妙な感じがしましたが、この日は聖霊に満たされ、聖霊に導かれるままに賛美し、感謝することができました。静まり、祈りを捧げ、賛美する。主イエス様に栄光をお返しする。聖餐式で主イエス様の救いのみわざを新たに覚える。そして主イエス様に感謝し、主のみ名をほめたたえつつ、礼拝は終わっていく。これは本当の礼拝だと思いました。

「真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」（ヨハネ　4・23、24）

軽井沢バイブル・キャンプへ

私は軽井沢のバイブル・キャンプへ行きたいと長いこと願っていました。キリスト集会に集うようになって六年目にやっと念願がかなって、一九八八年七月二十一日から二十四日のバイブル・キャンプに参加することができました。私は、まだ自分の中に不信仰と古い殻が残っていることを知っていました。その自分の古い殻を早く脱ぎ捨てたいと祈っていました。キャンプに行けばこの状態から抜け出せると信じていました。

高知を出て、五時間くらいかかってキャンプ場に着きました。夕方になるにつれて、続々と参加者が集ってきました。写真やテープのメッセージで知っていた江藤さんが私に声をかけてくだ

さいました。ごあいさつをしていますと、突然、

「岡本さん、今夜か、明日になるかもしれませんが、私の学びの時に司会をお願いします」と、いきなり頼まれました。

「はい。させていただきます」と言ってお受けしました。心が落ち着かなくなりましたが、でも感謝でした。

私には一つの悩みがありました。妻の腎臓病のことです。朝ごとに妻の顔色を見て、「今日は調子がよさそうだ」とか、「今日はよくないなあ」などと一喜一憂していました。いつも主イエス様に信頼してすべてをおゆだねすることができたら、何の心配もなくなるだろう、思い煩っている自分は何と不信仰なのだろう、と思っていました。

その日の夜の集会で、江藤さんは「主のご真実」を証ししてくださいました。息子さんが心に深い悩みを持って、食事も喉を通らなくなり、体がやせ衰えていったこと。あらゆる治療を試みても効果がなかったこと。しかし最後に、みことばに導かれ、ご夫婦ですべてを主イエス様におゆだねした時、平安が与えられたこと。

江藤さんのお話を聞いて、私は信仰の目が開かれた思いがしました。私は現実に目を奪われ、主イエス様がいつも私たちと共にいてくださり、すべてを備えてくださることを見失いかけていました。

私はなんと目の前の出来事だけに心をうばわれていたことでしょう。それゆえに、主イエス様を見ることができなくなっていました。私はその場で、妻のことを一切主イエス様にゆだねよう

と決心しました。それと同時に、平安が私の心をおおっていました。

私はこのキャンプで、多くの方たちが新しい人たちを伴って来て、イエス様を懸命に伝えている様子を見ました。私は自分自身を連れてくるのがやっとでした。キャンプでの自由なお付き合いは楽しく、大切な時であることを知ることができました。

一九九〇年四月一日、二日、坂出の皆さんの祈りが実って、坂出の地で初めてのミニ・キャンプがあり、私も一日目の夜の集会に出席しました。その夜のベックさんのメッセージの中で、私は二つのみことばを心に刻んで帰って来ました。

いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。

（ルカ　18・1）

イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。」（ルカ　18・27）

みことばは神様が全能であることを確証しています。それなのに、私は祈る時神様をなんと小さい方としていたことでしょう。ベックさんのお話は、私の心に一つのことを鮮やかに刻みつけました。神はなんでもおできになる方である。神は答えてくださる神である。望みの神は生きておられ、私たちの祈りをいつも聞いてくださるから、私たちは祈るべきであります。

私は、それまで自分が一番願っていることを、素直に、率直にイエス様に打ち明けていなかっ

たことに気づかされました。「神様はこんなことはしてくださらないだろう」と、みちからを軽んじるような気持ちでいたことを悟りました。

聖書には、イエス様に出会った人が叫ぶような祈りをもって近づいた様子が記されています。

イエスがエリコに近づかれたころ、ある盲人が、道ばたにすわり、物ごいをしていた。群衆が通って行くのを耳にして、これはいったい何事ですか、と尋ねた。ナザレのイエスがお通りになるのだ、と知らせると、彼は大声で、「ダビデの子イエスさま。私をあわれんでください。」と言った。……イエスは立ち止まって、彼をそばに連れて来るように言いつけられた。彼が近寄って来たので、「わたしに何をしてほしいのか。」と尋ねられると、彼は、「主よ。目が見えるようになることです。」と言った。イエスが彼に、「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを直したのです。」と言われると、彼はたちどころに目が見えるようになり、神をあがめながらイエスについて行った。（ルカ　18・35～43）

私は早速祈りはじめました。「主イエス様、基子を治してください」。「どうして欲しいのか」とイエス様が私に問われるので、「妻の腎臓を治してください」と、正直に祈りました。素直な祈りができた時、主は私の祈りを聞いてくださる、必ず私たちに最善をなしてくださる、と確信することができ、安心してイエス様にすべてをおゆだねしました。

ここ数カ月妻は風邪に悩まされ、腎臓もその影響で悪化しているようでした。しかし、そのような一見つらく思える状態のうちにあっても、主イエス様が共にいてくださり、最善をなしてく

ださっていることがわかりました。

主イエス様は最近二週間のうちに二回も、我が家で家庭集会を開かせてくださいました。はじめの時は櫻本さんが、次の時は池田さんと土佐山田のバイブル・キャンプで受洗したばかりの内田さんとが来てくださいました。櫻本さんは、「主イエス様のご再臨が近い、私たちがイエス様のことを伝えるのに残されている日は僅かしかない、語れる間にできる限り多くの人々に主イエス様のことを伝えましょう」と教えてくださいました。内田さんはアルコールの恐ろしさ、それから救い出された喜びを、聞く者と共に涙を流しながら証ししてくださいました。神様にも人にも、心からの謙遜を見せておられました。

私は今日までの色々な体験を通して、「確かに神様のなさることに不可能はない」と知りました。私たち土佐山田キリスト集会の一人一人にも、次々に試練が与えられます。けれどもそれら一つ一つを通して、私たちは、まったく主の前にへりくだる時、いつも勝利と平安がいただけるということの実証を見させていただいています。

私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。

しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。

（ローマ　8・35、37）

私は、私をキリスト集会の群れに入らせてくださった主イエス様のご愛を心から喜んでいます。また、主から来る平安を心から感謝しています。今私が願うのは、ただ、私と妻のそれぞれの肉親の者たちが主イエス様を知り、救われることのみです。

兄弟たち。私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです。

（ローマ　10・1）

ただ主イエス様にのみ、ご栄光が帰されますように。

▼ 岡本さんの家の家庭集会で。後列右端に広海さんとベックさん。1991年夏。





右から岡本夫妻、伊藤翔平君、さをりさん、井上スエ子さん、伊藤早紀ちゃん。

今あるは神の恵みです。

岡本基子

一九四〇年高知県東津野村郷に生まれる。東津野村郷小、中学校、清和女子高等学校卒業。一九六六年結婚、一九七一年死別。一九七二年キリスト教書専門店を始める。一九七七年再婚。家族は夫広海さんと小鳥二羽――手乗り文鳥ピーコ、セキセイインコのコーチャン。

今あるは神の恵みです。

今私はちょうど半世紀生かされ、五十歳になりました。慢性腎炎の持病を持ちながらも、主人にも回りの人にも愛され、いたわられ、主のあわれみによって平凡だが平安な家庭を与えられております。これまでの人生を静かに振りかえってみると、人生の岐路に立たされた時、いつも主のあわれみとお導きを豊かにいただき、感謝でございます。

神の恵みによって、私は今の私になりました。

（Ⅰコリント　15・10）

私は、四国山脈、四国カルスト天狗高原の麓、東津野村郷に生まれました。両親はクリスチャンで、姉、妹二人弟二人の六人兄弟の次女として育ちました。東津野村は夏は涼しく、その昔宣教師の方が避暑に来られ福音の種が蒔かれた所だと聞いています。私の子供の頃はクリスチャンも多く、いろいろな教派を超えて牧師さんがいらしてくださり、不定期ですが家庭での集まりも

盛んでした。

過疎と共にクリスチャン人口も減りましたが、少数ながら今も家庭での集まりは続いています。私が子供の頃には日曜学校もあり、私も行っていました。家では毎朝家庭礼拝がありましたが、早く学校に行って遊びたいので讃美歌は、「うるわしき朝も静かなる夜も……」の四五四番、一番短い讃美歌を歌ったものです。聖書の話はあまり覚えていませんが、母が聖句を書いて壁に貼っていたことを思い出します。また父が初めて高知市からクリスマスツリーの飾りを買ってきてくれた時大変うれしかったことも当時の楽しい思い出です。

ある時私は日曜学校で、ラザロと金持ちの話を（ルカ16・19～31）聞き、私も天国に行きたい、天国に行ける者になりたい、と永遠に対する思いが与えられましたが、その時にはまだ十字架の意味もわからず救いの確信もありませんでした。

主を恐れることは知識の初めである。　（箴言　1・7）

私が高校に入学する時、父は「何よりもまず神様のことを知るべきだ。そうすれば必要なものは、すべて与えられる」と言っていました。それで私は高知で唯一のミッション・スクール、清和女子高校に行くことになりました。姉は清和女学校に行きましたし、妹たちも清和で、姉妹四人ともに清和でお世話になりました。学校では毎朝チャペルで礼拝があり、聖書の時間もあり、日曜日には教会に行くことを勧められ改革派教会に行きました。

高校二年のクリスマスに友達と滴礼の洗礼を受け、感激の涙を流したことを今も覚えています。

卒業と同時に三年間の寮生活も終わり、弟と間借りして、弟は高校に私は洋裁学校に通いました。

回りが未信者ばかりになり、いつの間にか礼拝を休んで映画に行ったりするようになりました。教会を休むと罪意識におちいって平安をなくすのに、喜んで光の中を歩む信仰もなく、かといってイエス様を忘れてしまうこともできず、良心の痛みを覚えつつも、わがままで自分勝手な若い時を送りました。自分の目の梁には気付かずとも人の目の埃はよく見えるという聖書のたとえのように、ボーイフレンドができてもすぐに人格的な魅力を感じなくなり嫌になって別れるといったような惚れっぽくて厭きやすい娘でした。結局自分ではどんなに楽しく遊んでいるつもりでも、心の底から満たされることはありませんでした。今思えば、その頃の私は神様に求めなければならないものを人に求めていたのではないかと思います。

いろいろなことがありました。母が病気をしたり、父が長く病気をして、高知市の病院に入院したり……。通院のために高知市でアパートを借りて間借りの生活。母は父に付き添い、私が十五歳年下の小学生の妹さおりの面倒を見ながら、田舎の家で酒類、米、食料品、雑貨、たばこの販売をする店を手伝いました。

私は一九六二年に自動車の免許を取りました。酒や米の配達に大変役立ちました。自動車学校に一緒に行っていた方と恋愛しました。彼は自分は無神論者だと言っていました。私はクリスチャンです、と彼に宣言したものの、この頃は聖書もほとんど読まず、教会にも行かず、名ばかりのクリスチャンでした。親の心配をよそに恋愛結婚をしました。

父は四十年間村議会議員をしていましたので、私の家は人の出入りの多い家でした。母は父が

元気になっても高知市南万々に建てた家に住み、さおりを清和女子中学校に通わせながらキリスト教の専門書店、高知福音書房を開店しました。父は東津野と高知を行ったり来たりの生活でした。田舎の店は専売品もありすぐには名義変更ができませんでしたから、父の名義のまま、実質は私共の店として経営をまかされました。また家は別棟でしたが父の食事や身の回りの世話も私の仕事でした。店にはいつも良い働き手が与えられ中でも西森春子さんは長くよく助けてくれました。

この頃から私の腎臓は悪くなりはじめていたようです。疲れて疲れて、ある日とうとう動けなくなり高知の病院に行ったところ、検尿の結果大量のたんぱくと赤血球が出ているとのこと、すぐ入院といわれました。念のため高知中央病院に行ってみましたがやっぱりすぐ入院をすすめられ、家の近くの病院に三カ月入院しました。疲れていたので寝られることがうれしかった。私自身も回りの人たちも病気とは思っていませんでしたので、いくら疲れたといっても家では寝ていられませんでした。地区のママさんバレー大会に人数が足りないと駆り出され、疲れはてながらもバレーボールを楽しんだりしていました。

病院では母が届けてくれるテープを聞き、ひさしぶりに落ち着いて聖書も読みました。

キリストは永遠に存在されるのであって、変わることのない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

（ヘブル　7・24、25）



◀左から和田周作さん、宗勝さん、ヒロ子さん、芳明さん。

主は私の助け主

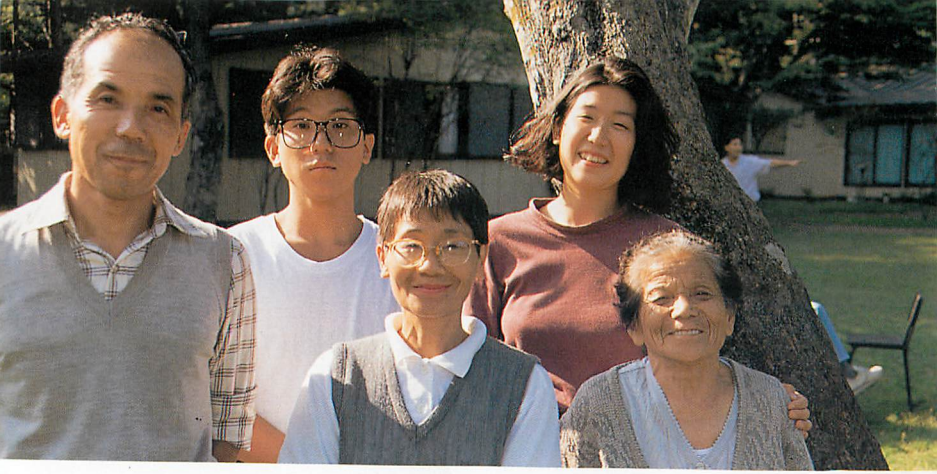
和田宗勝（長男）
横浜市出身／瀬ヶ崎小／市立六浦中／県立横浜立野高校在学中

僕は救われる前は怒りっぽい性格だったので友達に嫌われた時期がありました。しかし親を通してイエス様を知り、聖書の一つ一つのみことばに助けられました。僕は小学校六年の時ベックさんとお話し、主のご臨在を確信し1987年に受洗しました。もし主との出会いがなければ僕はどうなっていたか分かりません。主イエスによって救われた後も、いろいろな試練によって、さらに苦しくなるのは分かっています。しかし僕はいつでも主に頼れるということを知ってから楽になりました。中一の時徒競争で不良グループのような人と一緒の組になり「一位をとるなよ」とおどされました。僕は主に祈りました。でもこわい。主への思いとサタンの思いが僕の心でくすぶりました。運動会の当日、僕は一位で走り抜けました。そしたらおどした人が「よくやったな」と言ってくれました。主のみ声に従ってよかった。このことは今でも忘れられません。これで僕は主とがっちり結ばれていることを確信しました。「主はすべての道において正しく、またすべてのみわざにおいて恵み深い。すべて主を愛する者は主が守られる」（詩篇145・17、20）

暗やみから栄光へ

和田周作（次男）
横浜市出身／瀬ヶ崎小／市立六浦中学校在学中

神様はこんな僕をこの地球上の50億人の中から救い出してくださったことを感謝しています。イエス様はいつも僕に正しい判断を教えてくださいます。僕はイエス様をよく知らなかったころ、自分のわがままから人に迷惑をかけたり、友達のものをとったり、悪いことを数多くしていましたが、イエス様を知って謝ったらみんな赦してくれました。「自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」（Ⅰヨハネ1・9）そして1987年に受洗しました。今では神様が、光の中へ、栄光へと導いてくださって、とても平安な毎日を送っています。でもサタンの誘惑はあります。少しでもイエス様を離れると何もできない弱い人間だということをよく体験します。だからいつも主から目を離さないで歩んでいきたいのです。僕の好きなみことばです。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。御霊を消してはなりません」（Ⅰテサロニケ5・16～19）



神は私達のうちに

柳田　進
㈱大都勤務
新潟県出身／西越小／西越中／県立西越高校卒／妻　ひろ子／子供　一男一女／母

私は聖書を手にしてまだ長くない者です。部厚い聖書はなかなか読み進むことができず、その深奥を知ることは至難なことです。しかし私が今まで正しいとしてきたことが、多く誤っていたことに気付かされています。小学4年で父を失い、母を援けて弟妹達を成長させた私は「頼れるものは己のみ」の人生観が身につき、目に見えるものの外は信じない頑なさがあります。猛烈社員の一人と自認して、企業の発展を願い、家族には惨めな思いをさせまいと懸命に働いてきた私でしたが、先に主イエスを知った妻や子供達にとっては価値感の違う異邦人に見えたことでしょう。孤立感と焦燥感の中にある時、吉祥寺キリスト集会に導かれ、主イエス様に出会うことができたのです。「だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです」（Ⅰヨハネ4・12）

イエス様に愛されて

柳田ひろ子
モード原勤務
新潟県出身／地蔵堂小／地蔵堂郷中学／県立巻高校／藤本学園洋裁科卒／夫　進／子供　一男一女

冬が終わりました。キャンプが始まると言って、子供達が落ちつかなくなりました。81歳になる主人の母がまっさきに行くと言いました。主人も重い腰をあげました。3月の軽井沢はまだ寒く静かでした。ベックさんが私と主人を見て、「みんな来たのか」と聞かれました。ご自分のことのように「よかったよかった」と大層喜んでくださいました。そして家族全員の写真を撮ってくださいました。長い年月、それぞれの重い荷を背負って生きてきた私の家族の一人一人を、イエス様がほんとに愛されて、一つにされたことを知りました。若い頃から十二指腸かいようや胃けい室をわずらっていた私も、イエス様との出会いがあってから血を吐かなくなりました。主にすべてをゆだねるようになり、思い煩いがなくなったからです。イエス様はまず娘を愛され、その娘を通して家族に福音が伝わりました。主がなされたみわざは、本当に大きな恵みです。

◀左から柳田進さん、毅さん、ひろ子さん、知子さん、トシヨさん。

わたしの所に帰りなさい

柳田　毅

神奈川県出身／北相武台小／相武台中／法政二高／法政大学在学中

私の母は、私がまだ赤ん坊の頃から私を乳母車に乗せて教会に通っていたそうです。物心ついた頃には日曜学校に通っていました。そして自然と神様を信じるようになりました。しかし、成長するにつれて神様から遠ざかり、自分のやりたいことを追いかける生活になり、ほとんど神様を忘れて生きるようになりました。また、人に迷惑さえかけなければ何をやってもかまわないし自分のやりたいことを一所懸命がんばるのがよい生き方だと思っていました。でも、そのような生活をしているうちに、自分の心が段々と自分中心になり、優しい気持ちのない空しい心になっていることに気付きました。家族もバラバラになってしまいました。そのような私達を神様は憐み、妹を通して吉祥寺キリスト集会に導いてくださいました。そして昨年のクリスマスには祖母と共に洗礼を受けました。再び信仰が与えられたことを感謝しています。

主にあって私達は一つです

柳田知子

神奈川県出身／北相武台小／相武台中／相武台高校／厚木南高校通信制在学中

子供の頃家の近くの教会に導かれ、福音を聞く機会があったにもかかわらず、自分の好き勝手な道を行き、イエス様を悲しませてきました。けれども、そんな者をも神様は深く愛してくださり、精神的苦しみを通してお救いくださいました。「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」（詩篇119・71）救われた今でも、本当に罪深く、悔い改めの乏しい者ですが、主イエスは、卑しく人々に蔑まれるような者のためにこの世に来られ、すべての者の罪を負って十字架上で死なれました。どう感謝していいか分かりません。また神様は、私の家族のことをも心配してくださり、それまで分裂し、いがみあっていた家族がイエス様によって一つにされました。「…すべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです」（Ⅰコリント12・13）

感謝でいっぱいです

柳田トシヨ

新潟県出身／羽田小卒／二男二女

私は柱と頼む主人を1948年に失い、小学４年の長男を頭に４人の子供を懸命に育ててきました。５年前火災で家を焼失したので子供達と一緒に暮らすことになりました。身を粉にして働いてきたのに友達もいない所で暮らすようになり、私は何のために生きてきたのかわからないような気持で毎日毎日を過しておりました時、孫の知子に誘われて吉祥寺キリスト集会に導かれました。ベックさんから「イエス様を信じていれば天国に行けますよ」とお聞きして、昨年のクリスマスに孫の毅と一緒に洗礼を受けました。沢山の花束にかこまれ喜び一杯でした。今ではバイブル・キャンプに家族一緒に参加したり、家庭集会に参加したり、テープを聞いたりの平安な毎日を過しています。



生きる喜びを神から

宇田川芳夫

北海道小松フォークリフト㈱代表取締役
東京都出身／桃園第二小／成城中
／成城高／同志社大卒／妻　淑子
／子供　二男
住所　札幌市東区北43条東1-2-3
ファーミイ太平館201
〒065 電011-752-6225
礼拝　月３回　家庭集会　月２回

昨年の11月から転勤により札幌に住むようになりました。北海道には三つの海に囲まれた果てしなく拡がる豊かな大地がありました。いつか行ってみたい、住んでみたいという思いがみ心によりかなえられました。そして、キリスト集会の皆さんとの祈りとお付き合いの中で妻と共に喜びと感謝の日を過ごしております。

私には新島襄の「良心の碑」と「寒梅の詩」に感激していた青年時代があります。しかし、それは信仰には結びつきませんでした。社会人となり、現在まで31年間一つの会社に勤務し続け、その間、新潟での単身赴任中1983年６月に妻の入院、手術（胃がん）というできごとに遭遇し万事窮したことがありました。すでに信仰によって生きていた妻はその後回復し、もう８年になります。私は1988年に受洗しました。

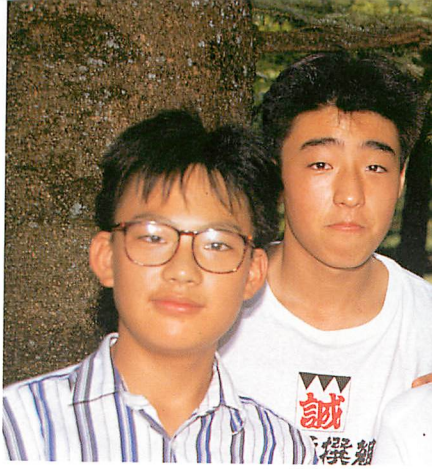
神は自我が人一倍強く、傲慢で会社人間、企業戦士であることを誇りとしていたようなちっぽけな私を赦してくださいました。さらにとるに足りない私を用いてくださろうとしておられます。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された」（ヨハネ3･16）　万物の創造主である主に感謝いたします。

二人の主人に仕えることはできません

宇田川淑子

神奈川県出身／間門小／大鳥中／
横浜共立学園高／関東学院短大卒
／夫　芳夫／子供　二男

ミッションスクールを卒業した私は、幸せな結婚生活に、いつしか教会の事は過去の思い出となっておりました。子育てに一段落した時にお誘いを受けた家庭集会も、大好きなケーキと聖歌につられカルチャーセンターに通うような気分でした。ところが吉祥寺キリスト集会の皆様方の生き生きとしたお顔と聖書のことばだけを信じて歩んでいる姿を見、私もそのようになりたいと願いました。全部わかったわけではありませんが「求めなさい。そうすれば与えられます」（ルカ11・９）を信じて受洗させていただきました。ところが恵まれた環境の中で主にだけでなく主人にも頼っていた私に、イエス様は救いの恵みを本当に体験させたくて胃がんの末期一歩手前という試練をくださいました。この事を通し、主人や子供、肉親がどんなに心配をしてくれても私の本当の苦しみを理解する事はできず、私の罪のために十字架にかかってくださったイエス様だけが24時間私に付き添って守り導いてくださると確信できたのです。「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません」（マタイ６・24）　札幌転勤も主人と共に主を証しする場を与えられ感謝しています。



すべての栄光は主に

和田芳明

日本航空シニアチーフパーサー
名古屋市出身／小碓小／港北中／
熱田高／慶大中退／妻　ヒロ子／
子供　二男

主イエス様に導かれるまで、出生問題や死への恐怖が私の心を支配していました。しかし職業上の華やかさが一時的にもその悩みを忘れさせてくれました。（テトス３・３） 1973年に家内と結婚、心の安らぎを求めて共に教会へ通うようになりました。ところが1985年８月、日航機の大事故を通して死に対する恐怖におびえ、どうしようもない気持になりました。（ローマ７・24） そんな時、高校の同級の村上ご夫妻から吉祥寺キリスト集会を紹介されました。ベックさんに初めて会った時、ベックさんは２つの質問をなさいました。「あなたは救われていますか」「乗っている飛行機が落ちたら平安に死ねますか」。私は「ハイ死ねます」と答えましたが本当は不安で一杯でした。この強烈な２つの質問で、自分の中にあると思っていた人生の土台が実はなかったことに気がつかされ、主の恵みに触れる機会が与えられました。（Ⅱテモテ１・９、10） 同年夫婦で受洗。88年には聖書(創世記16・11)を通して主は40年ぶりに実母に会わせてくださり(申命記２・７） 今は共に主にある者としてくださったことを感謝します。(エペソ１・３～７)

主の光の中に移されて

和田ヒロ子

松山市出身／直瀬小／城東中／県
立南高卒／元日航国際線スチュ
ワーデス／夫　芳明／子供　二男

「私は切なる思いで主を待ち望んだ。主は、私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きになり、私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった」（詩篇40・１、２） 愛とは何なのか、夫婦とは何か、子供をどのように育てたらいいのか、という悩みの中にあった５年前、「光よあれ」や日航機事故を通して私の内側の暗やみに光があてられました。主人とは恋愛結婚でしたが、本当の心の一致も平安もありませんでした。神様は主人を通して私を守っていてくださったのに、感謝のないごう慢な人間であった私は、聖書の「夫に従いなさい」になかなか従うことができず苦しみました。しかし苦しみの中から主に「私はできません。このような私を憐んでください」と叫んだ時、主がこの不従順でかたくなな私の罪のために死なれたことが分かり涙が溢れました。主は豊かに憐んでくださり、私達夫婦は全く新しいものとされました。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」（Ⅱコリント５・17） 主の恵みが多くの方に注がれますよう家族で祈る毎日です。



◀左から菅原宣昭さん、章子さん、輝美さん、規子さん。

平安を感謝します

菅原規子（長女）

東京都出身／薬円台小／習志野台中／津田沼高／跡見学園短期大学在学中

今から2年前の8月、初めて吉祥寺キリスト集会のベックさんにお会いしました。西軽井沢のお家で、ベックさんはあたたかい大きな笑顔とやさしいまなざしで、私達家族を迎えてくださいました。3日目の朝、ベックさんから「父なる神・イエス様・聖霊」について、十字架の上で身代わりとなって死んでくださったイエス様の愛によって、私の罪が赦されていることをお聞きし、最後にベックさんの後について祈りました。イエス様はいつも私を愛してくださっている事がわかり、イエス様にお従いして行こうと思いました。

その後、大学受験を控えて、不安な心で生活するようになりました。その時、母に誘われて家庭集会に集い、メッセージと主にあるお付き合いの中で聖書のみことばから平安を与えられ、受験校を決める時には、両親と祈りの中から選ぶことができました。結果についても自分の希望とは違いましたが、主のみ心とお従いできました。心配性で自分勝手な私ですが、主に立ち返る時に平安をもつ事ができるので、本当に感謝です。まだ主を知らない祖父母に、友達に、イエス様のすばらしさを証しできるようにと願っています。

弱い私を愛してくださるイエス様

菅原章子（次女）

東京都出身／薬円台小／習志野台中／千葉県立船橋芝山高校在学中

長い間、私は私と同年代の人が元気に運動し、遊びに勉強に頑張っているのを見て、口では言えないほどうらやましいと思いました。なぜかと言いますと私は10歳から腎臓病になったからです。どうして私は病気なのでしょうか、いつ良くなるのでしょうか。誰にも答えられません。将来のことが分からないのは悲しくて辛いことです。でも健康はすべてではありません。心の平安、また生ける望みを持つことは、もっと大切なのではないかと思います。2年前の7月1日に一人のドイツ人の宣教師さんが私の病院を訪ねてくださいました。それがベックさんでした。私が病気になったことは運命ではなく、神様が目的を持って導いておられること、私も無視されないで心配されていることを聞いてうれしくなりました。私もイエス様を頼ろうと思いました。それから1カ月後の8月、家族揃ってベックさんの家に招待され楽しく過ごさせていただきました。その時父も姉もイエス様を受け入れました。イエス様にすべてをゆだねられない私は弱くて心配ばかりしている者ですけれど、イエス様はそのような弱い者こそ愛してくださるから感謝しています。



主の愛と恵みによる真の平安

菅原宣昭
日本鉄道建設公団勤務
北海道出身／鵡川小／鵡川中／日本大学理工学部卒／妻　輝美／子供　二女

家内と２人の子供と共に平穏無事な楽しい家庭生活を送っていた時、突然、次女章子が病気であることが分かりました。以来、章子が肉体的、精神的な苦しみから解放され、健康の回復と心の平安が与えられることだけを願い続けていました。家内はイエス様を信じていつも世話をしながら章子が主に救われるようにと一生懸命祈っていました。1988年の夏主の導きにより家族で軽井沢へ行った時、聖書に出会いました。福音にふれた時、自己中心的な考えに支配され、愛の欠けた罪人であること、また人間の思いによる慰めからは、真の平安は得られないことを示されました。そしてこのように罪深い私のために、イエス・キリストが身代わりとなって死んでくださった、この神の愛と主の恵みを信じ救われました。私が救われて後、２年足らずの間に長女規子が、続いて病気であった章子も救われました。主は家族全員をそれぞれ最も相応しい時に、救いへと導いてくださいました。主の愛と恵みに支えられ、導かれ、与えられる平安を心から感謝しています。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）

あなたの重荷を主にゆだねよ

菅原輝美
神奈川県出身／元町小／加賀中／豊島高卒／夫　宣昭／子供　二女

７年前に思いがけなく次女の章子が慢性腎炎と診断されました。子供が病気になった事は私にとって大変辛い事でした。何とかして治してやりたいのにその手段が自分にはなく、安全な治療法もありませんでした。不安な暗闇の中を出口を求めて長い間歩きました。「イエス様」と祈りながら苦しみ続けていました。そんな時市川キリスト集会のある方から、子供の病気から目を離して主イエス様を見上げるようにと教えられ、子供だけを見ている自分に気がつきました。病気一つから具体的な問題が次々と起こってきます。その一つ一つについて「イエス様」と主を見上げ呼びかけながら祈るうちに少しずつ悩みから解放され、新たな平安をいただきました。この平安を一日も早く章子にもと祈り続けていました。主は私の願いに応えて家族でベックさんと会う機会を与えてくださり、まず主人を救ってくださいました。私には思いがけない主のなさりようでした。続いて長女もバプテスマへと導かれ、章子もバプテスマの証しを決心している事を知った時は心から主を賛美しました。家族が一致して主を賛美できる生活は静かな平和に満たされています。



◀左から岡崎万奈さん、文栄さん、龍夫さん、良弥さん。

あなたの若い日にあなたの創造者を覚えよ

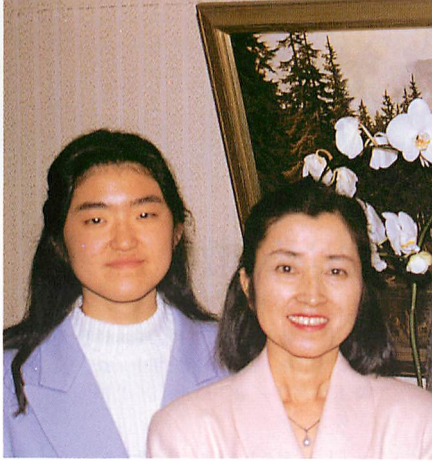
岡崎良弥
埼玉県出身／上福岡市立第五小／芝浦工大附属中、高／芝浦工大機械工学科在学中

僕はこの夏、ドイツの友人とドイツへ行きました。ドイツには素晴らしい大聖堂があり、そこには美しい彫刻、レリーフなどが沢山あります。僕が「教会ではなく集会で礼拝をし、主を信じている」と説明すると、友人は怪げんそうな顔をしました。どうも教会員であることと信仰をもっていることは等しいと思っているようでした。友人は宗教について大変論理的に話せましたが、聖書のことばに基づいてではありませんでした。聖書を必要としない日常、教会員であることが信仰であるかのような考え方……僕は何か変だと思いました。大切なのは主イエス・キリストとしっかりつながっていることだと僕は確信します。論理は必要ではないのです。主イエスを愛し、信頼する、それだけだと信じています。……人がわたし（主イエス）にとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです」（ヨハネ15・5）「一番たいせつなのはこれです。『……心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』」（マルコ12・29、30）

いのちのパン

岡崎万奈
埼玉県出身／上福岡市立第五小／日大豊山女子中／日大豊山女子高在学中

私は4、5歳の頃大人の聖書を両親にもらってから今日まで、毎日欠かさず読んでいます。きっかけは全く覚えていませんが、気づいた時にはもう手元に聖書がありました。初めは一つの手紙を読み終わったら百円もらえるという約束だったのですが、いつの間にか一節でもいいから毎日読むという習慣になってしまっていました。そして、5年生の時にバプテスマを受けました。以来、学校の修学旅行など、一泊する時は必ず聖書を持ち、枕元に置いて寝ています。うっかり忘れてしまった時はとても落ち着かない気分になり、あわてて昨日の分を読むといった具合で、聖書を読まないと不安で不安で仕方がなくなってしまったのです。ですからこの16年間は聖書とイエス様によって成り立っている年月であり、またそれらによって成り立っている私なのです。もし、イエス様と共に育っていなければ、つらく苦しい事があっても必ずどこかに希望があるというような、こんな素晴らしい16年間を過ごせるはずがありません。本当に感謝なことだと思っています。「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」（ローマ8・31）



ほんとうの富

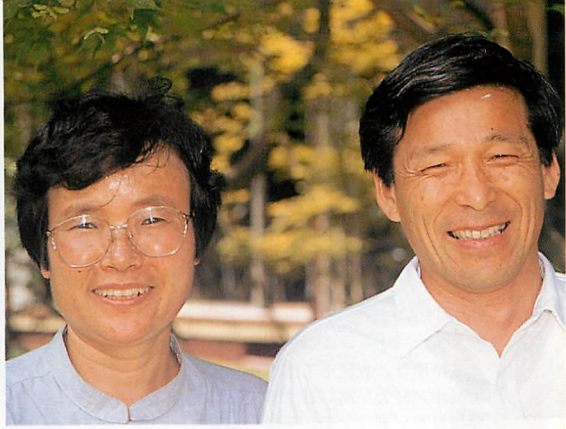
岡崎龍夫
㈱オムコ・オーエムシー代表取締役社長
茨城県出身／北区王子第三小／富
士見中／日大二高／日大理工学部
機械科卒／妻　文栄／子供　一男
一女

私は中小企業の２代目として育ち、36歳の時会社に組合運動が起こり、初代が引退し社長となりました。それからの５年間は苦悩と恐れと絶望に近い歳月でした。しかしそれはイエス様が備えてくださったものでした。聖書のいう力強い生き方は、その時にはまだ信仰からは得られませんでした。しかし組合運動に対処する苦悩の中で、私は復活して今も生きておられる神なる方イエス様にお会いしました。この方と共に生きる生活は喜びと力に支えられたものでした。しかしいくらイエス様と個人的にしっかり結びついていることこそ大切だと話しても、教会の中では冷やかな反応が返ってくるばかりという体験をし、イエス様を十字架につけた人間の罪の姿を知りました。吉祥寺キリスト集会でイエス様との親しい交わりの中にいる人達を見た時、罪の縄目から解き放たれた人達の感謝の祈りに喜びと休息を覚えました。溢れる主の祝福によって会社も発展していますが、苦労の多い人生の中で最大の富は、良い時も悪い時も感謝することのできる方を知ったことです。「主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦労は何もそれに加えない」（箴言10・22）

豊かなみのり

岡崎文栄
宮崎県出身／宮大附属小、中／県
立宮崎大宮高／国立音楽大学声楽
科卒／夫　龍夫／子供　一男一女

洗礼を受け10年余が過ぎた頃、主人に与えられた試練を通して、私達家族はイエス様との親しいつながりを知りました。それまでの信仰は、教会の中での汲々とした感謝の少ないもので、まるで私の罪のために死んでくださったイエス様は、墓の中に葬られたままであるかのようでした。イエス様を個人的に知って初めて「わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」（マタイ28・20）という聖句が実感となって私の心に入ってきました。ああ、イエス様は生きておられるのだ。「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」（ヨハネ７・38）喜びが溢れてきました。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです」（ヨハネ15・５）私はようやくイエス様という岩の上に家を建てることができました。患難の中にあっても、主を見つめ続ける時与えられる平安は、この上ない喜びです。



主は私の救い

辻田雅彦

トヨタ自動車を経て真和工業㈱勤務
長崎県出身／長与小／長与中／長崎工業高卒／妻　ハル子／子供二女

「主は、私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救いとなられた」（詩篇118・14）私の洗礼の時に吉祥寺キリスト集会の方から贈られた聖句です。

健康を損ない、いつも病気がちだった私は、イエス・キリストに出会って健康を取り戻せたことを感謝しています。自分の頑張りと一般的な価値感のみで生活をしていた過去を振り返った時、喜びのない味けない年月だったと思います。吉祥寺キリスト集会の人達の顔が喜びに溢れているのに接し主は素晴らしいと感じました。「顔が、水に映る顔と同じように、人の心は、その人に映る」（箴言27・19）「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい」（コロサイ3・15）主イエス様に出会うまでは感謝の心がありませんでしたが、現在はいつも感謝の心と祈りを持って幸せです。「神の国とその義とをまず第一に求めなさい」（マタイ6・33）

これからの人生は主を賛美し主と共に歩むことができますから、本当に感謝です。

将来の不安から解放されて

辻田ハル子

愛知県出身／挙母小／崇化館中／豊田東高卒／夫　雅彦／子供　二女

主人の体が弱いので、私は将来がとても不安でした。主人は入退院をくり返していました。このまま人生が終わってしまうのはとてもたまらないと思い、本を読んだり講演会に行ったり、何とかしなくてはともがいておりました。特に三浦綾子さんの本が好きでした。その中によく聖書のことがでていましたので読んでみたいと思いましたが、本屋でも見つからず、といって教会へ行くのはためらわれ、なかなか聖書を手にすることができませんでした。そのうちに主人の兄夫婦がクリスチャンになったことを知り、私も聖書をいただいて読み始めました。薬や色々な製品はどうやって使えばいいのかそれを作ったメーカーが一番よく知っています。そして人間は神様が造られたのだから、人がどのように生きたらよいのかは聖書を読めばわかるのだと確信しました。聖書を読み、それにそって生きることの喜びを知りました。

さらに主は、私の信仰に絶対反対していた主人も「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）の約束どおり、共に主を賛美する者にしてくださいました。

左喜久さん、右敬子さん。▶



主は天と地を造られた方である

塩瀬喜久

テレビ北海道勤務
愛知県出身／八名井小／八名井中
／都留高／早稲田大学卒業／妻
敬子／子供　一男一女

「初めに、神が天と地を創造した」（創世記１・１）1941年、太平洋戦争が勃発した年にこの世に生を受けた私の人生は、日本の世情の変化、経済の発展とまさに軌を一にしたものでした。昭和20年代の混乱と貧困の少年時代。昭和30年代の夢と希望を抱いた学生時代。経済の高度成長期の昭和40年代。企業戦士の一員として世界の経済大国を築いた50年代。そして今、経済の一大強国となりながら世界の人々から白い目で見られる日本。私自身も物質的には少年時代に描いた夢を実現したかに見えましたが……。「人が富を得ても、その人の家の栄誉が増し加わっても。人は、死ぬとき、何一つ持って行くことができず……」（詩篇49・16、17）一生懸命頑張って目標を達成しても、後には何が残るのでしょう。そういう時に私は神様と出会ったのです。「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び……」（ヨハネ15・16）今年の２月に突然今まで住んだことのない北海道へ転勤になりました。全て神のご計画であったのです。今や神のお造りになったすばらしい北海道の大自然に抱かれて、家族と共に喜びの日々を送っています。

罪からの解放と安らぎをいただいて

塩瀬敬子

香川県出身／仲南小／琴平中／琴
平高／東京文化学園短大卒／夫
喜久／子供　一男一女

私は信心深い両親のもとで育ちました。両親の説く教えに従って歩もうとしても従えない自分の姿に失望し、心の奥に満たされぬ思いを抱きつつ過ごしておりました。そんな時吉祥寺キリスト集会へ導かれ、自分が真の神から遠く離れたみじめな存在であることを知らされました。その後家庭の中に起きた問題を通して、聖霊の導きで罪深く無力で裸である自分の姿が示され、主のみ前に心から悔い改める時が与えられました。「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」（Ⅰヨハネ１・９）私の罪は赦されているという確信と平安が与えられました。最善を成してくださる主に問題をお委ねした後、主人と娘が救われました。また生前父に贈った聖書にはそこここに書き込みがあり、父が真剣に聖書を読んでイエス様を求める者と変えられていたことを後で知りました。私達一人一人の罪のために十字架上でいのちを捨ててくださった主のご愛に深く感謝します。天国での父との再会に希望を置き、札幌の地で主の豊かな恵みを覚えつつ過ごしております。



イエス・キリストの愛

星野隆三
東京造形大学デザイン学科教授
東京都出身／熊谷東小／浜川中／小山台高／千葉大学工学部卒／トヨタ自動車㈱／1987より現職／妻広子／子供　二男

信仰を持ってから長い間、「信仰とは、イエス・キリストを心の中心に置くことだ」と、知って行動してきました。しかし常に自分の古い性質を拭えず、わがままで自己中心的でした。ところがベックさんに「信じる者は、イエス・キリストに完全に自分を明け渡し、全てを聖霊の導きに委ねることだ」と言われ、自分の無力さを認め、主と共に歩む新たな喜びの信仰に導かれました。

私は青春時代に、勉学・スポーツ・趣味・仕事・友達など様々なものに打ち込みました。ところがどれも私の人生の柱（生きがい）になるものはなく、ついに希望も生きがいも無くなった私は、「消えたロウソク」のような空しい日々を過ごすようになりました。

ところが私には留学という夢があり、宣教師の家で英会話と聖書を学ぶ事になりました。そこで知った聖書のみことばにより、私の心にロウソクの火が点り、その結果私は1973年のイースターに受洗しました。

その後、留学・結婚・子供の誕生・海外赴任・転職・子供の進学など様々なことがありましたが、私はいつもイエス・キリストの愛によって支えられています。

主は私と共に

星野広子
東京都出身／目黒八雲小／目黒第十中／桜美林高校／桜美林大学英米文学科卒／夫　隆三／子供　二男

悩み多かった高校時代を過ごし、これではいけないと嫌なことは一切振り向かないで部活に熱中していた大学時代に、教会へ導かれ、受洗しました。しかし、頭だけの信仰でしたから新生を体験するはずがありません。卒業後、念願だった英国への学びの道を主は開いてくださいました。ロンドンでの初めての聖日に、46年間日本で伝道されていたビー宣教師にお会いしました。この方のイエス様に在る祈りの生活を目の当りにして、信仰生活のすばらしさを知らされました。共に聖書を開き、祈りました。ある日、ホームシックにかかり、一人で聖書を読み、祈っていると「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない」（ヘブル13・5）と、主が私の前に立って語ってくださったのです。初めての経験で、心に平安が与えられ、喜びに満たされました。これからは「主が私と共にいてくださる」という確信をいただきました。結婚して15年、その間二人の子供が与えられ、いつも主は共にいて私を支えてくださいました。昨年、吉祥寺キリスト集会に導かれ、主と共に日々歩める幸いを感謝しております。



光の中に導かれて

小川一夫
太平洋銀行㈱勤務
千葉県出身／菅野小／早稲田中学／早稲田高校／立教大学経済学部卒／妻　美智代／子供　一男
連絡先　市川市菅野3-22-6　〒272
電　0473-26-8449

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」（詩篇119・71）　かつての私にとって最も尊いものは仕事でした。私は仕事が第一で家族を顧みることもなく、自分の力に溺れる者でした。入社以来すべてが順調に進み自分の力に満足していた時、突然試練が与えられたのです。その解決不可能な問題は、10年近くかかって積み上げた実績をいとも簡単に崩してしまうものでした。人生はこれで終ったと投げやりな私に妻は主に祈ることを懇願しました。私は祈りました。そして祈りは聞かれました。難問は夢のように解決されたのです。「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです」（Ⅰペテロ５・７）　あわれみ愛してくださる主のみ力に私は喜んで無条件降伏しました。主は仕事の試練を通して私の目を開き光の世界へと導いてくださったのです。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです」（ヨハネ８・12）　溢れるほどの恵みを与えてくださる主に心から感謝します。

主が愛してくださる

小川美智代
東京都出身／数矢小／共立女子学園卒／夫　一夫／子供　一男

主が与えてくださった恵みの数々はあまりに多くてのべ尽くせません。私が12歳の時に両親は離婚しましたが、不安定な家庭にあって愛することも愛されることも否定しながら成長しました。人は結局自分しか愛することができない、という思いが幼い頃から私の内に根付いていたために、結婚した後も主人にさえ心を開くことができませんでした。夫や子供を心から愛したい、何が真理なのかを知りたい、そうした思いで主を求めるようになりました。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」（ヨハネ14・６）「わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません」（ヨハネ６・37）　主の愛にふれて、人間のちっぽけな愛に囚われていたことを知らされました。その後主はお約束どおり家族を救いに導いてくださり、離散していた私の両親も不思議な方法で救ってくださいました。両親へのこだわりもいつの間にか主が取り除いてくださいました。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」（Ⅱコリント５・17）　畏れつつ主のみ名を賛美いたします。

主に委ねた人生に平安あり

高田英彦
文具店経営
東京都出身／池雪小／大森十中／
高輪高／日本大学卒／妻　茂子／
子供　一男二女
住所　宮城県仙台市泉区松陵５丁目
2-3　〒981-31　電022-375-5815
礼拝　隔週日曜昼１時半



1978年、私は長男のネフローゼという難病を通して自分の無力さ、創造主なる神を無視していた高慢さ愚かさに気付かされ、イエス様の元にたち返ることが許されました。それ以来贖い主なるイエス様にすべてを委ねる人生が始まりました。それは気負いのない自由と平安そのものです。1988年４月出エジプト記４章12～15節により住み慣れた東京を去り、22年間勤続した会社を退職して仙台に移転、文具店を開業しました。主の恵みのうちに家族が守られ感謝の毎日です。自宅での礼拝や集会で皆さんと共に主の祝福にあずかれる幸いも本当に感謝です。「これは、あなたがたにとって、むなしいことばではなく、あなたがたのいのちであるからだ」（申命記32・47）「あなたがたの神、主が命じられたすべての道を歩まなければならない。あなたがたが生き、しあわせになり、あなたがたが所有する地で、長く生きるためである」（申命記５・33）７月には東北地方初めてのミニキャンプも備えられました。さあ、生きることに疲れている人、楽になりたい人は思い煩っていないでイエス様のもとに集いましょう。必ず平安が約束されます。

私たちの国籍は天にあります

高田茂子
秋田県鹿角市出身／曙小／八幡平
中／鹿角服装高等女学院卒／夫
英彦／子供　一男二女

もの心がつき始めた頃、私は両親や兄弟のいない寂しさなどから、死を考えたりしたこともありました。結婚し子供を与えられてからは子供を育てていくことに生きがいを見い出すようになりました。しかし心の空洞は中々埋めることができませんでした。子供が病気をしたり自分に至らないことがあるとすぐ不安になったり、みじめになったりしていました。心の中には死の恐怖があり、とても孤独でした。また人をねたんだり、人を許すことができず苦しんだりしていました。でもこのようなみじめな私のためにイエス・キリストが十字架にかかってくださったということがわかった時、神様の救いのみわざをやっと確信することができました。人間を造られた神様に祈ることはとても平安です。孤独からも死の恐怖からも解放されました。

いつか必ず主人や子供たちともこの世の別れがやってきます。でもやがて天国で再会できるというお約束がありますから何の心配もありません。なぜなら私達の国籍は天にあるからです。今では主の恵みのうちに守られ、すべてをゆだねた毎日を過ごさせていただいております。主に感謝します。



主の愛に導かれて

永川（えがわ）　誠
公務員・山田郵便局
鹿児島県出身／和泊小／和泊中／大島高校卒／妻　智子／子供　三男

私は23歳の時、東京のある教会で洗礼を受けましたが、そこには平安も喜びもなく、いつの間にか教会を離れていきました。結婚と同時に郷里の徳之島へ転勤し、妻と三人の子供たちと幸せな生活を送っていましたが、教会へ行きたいという思いが増してくるにつれ、主に導いてくださるように祈っていました。島へ来て4年目に試験に合格し、鹿児島に転勤になりました。この試験はすぐに廃止になりましたから、転勤できたことは主のご計画であったことを確信しています。鹿児島に来ても、一番願っていた教会へはなかなか導かれませんでした。ある時、不思議な方法で、主は私たちを吉祥寺キリスト集会へと導いてくださいました。初めは、教会らしい建物もない奇妙な集会だと思いましたが、「光よあれ」を読んでいくうちに、これこそ私が求めていた所だと思いました。自分がすでに救われて聖霊をいただいていること、救われるために自分で立派な人になることなど必要ないことが分かり、心の中が軽やかになり、平安と喜びで一杯になりました。1989年に妻と一緒にえびのでのバイブル・キャンプで浸礼による洗礼を受けました。

主は生きておられます

永川（えがわ）智子
東京都出身／小岩小／昭和学院中・高校／夫　誠／子供　三男

私は24歳の時、主人と出会いました。結婚と同時に主人の両親がいる徳之島へ転勤で帰ることになりました。海に囲まれた島で、頼るのは主人だけ、方言も分からず、習慣も驚くことばかりで心が満たされず、自然だけが心を慰めてくれました。主人はクリスチャンでしたが私は聖書を読むこともなく、イエス様に出会うこともありませんでした。島から出たい思いが増すにつれて、イエス様に頼ってみようという気持ちになり、祈り続けました。主人が試験に合格して鹿児島に転勤になり、どこかもっとイエス様のことがよく分かる所をと願っていましたら、吉祥寺キリスト集会に導かれました。聖書を通して、イエス様は私が生まれる前から今に至るまでずっと導いてくださり、助けてくださっていたことを知り、心から感謝いたしました。1989年のえびのバイブル・キャンプで、イエス様をまことの救い主として心に受け入れ、それを証しするために主人と共に洗礼にあずかりました。これからもイエス様についていきたいと思っています。そして、多くの方々が、生けるまことの神様に出会われますように祈っております。



従い委ねた今

飯島信太郎
東京都出身／青南小／立教中／立教大予科／西南学院高／西南学院大中退／ウエラ・コスメルト退／妻　陽子／子供　二女／孫　四人
住所　東京都目黒区上目黒4-33-17
〒153　電03-3712-7846
家庭集会　月１回不定期

クリスチャンになる前の私は、末期的症状のアルコール依存症でした。30余年間の仕事に絡んだ酒との関わりを口実に、自分勝手な生活の連続で家庭は崩壊し、絶望的な生活でした。「大酒飲みとむさぼり食う者は貧しくなり…ぼろをまとうようになるからだ」（箴言23・21）その時期に「光よあれ第２集」の染野さんの証しに出会い、まず娘と妻が吉祥寺集会に導かれ、私もイエス様を信ずる者となりました。しかし私の病状はますます悪化し、入院先でベックさんとお話をする機会を与えられ、イエス様を信じ、すべてを委ねる心の準備ができ、退院直前に受洗しました。ただ憐んでください、赦してくださいと祈るだけでした。受洗の日、集会から病院への帰路、私の心は平和に満たされました。イエス様は私に新しい歩みを与えてくださいました。「求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです」（ヨハネ16・24）人間的な力ではアルコール依存症から回復できません。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます」（マタイ19・26）心から感謝します。

罪を示されて

飯島陽子
東京都出身／石神井小／川村女学院／ドレスメーカー女学院本科卒／夫　信太郎／子供　二女

私たち家族は４年前までは全くバラバラでした。主人はアルコール依存症、次女は体が弱く、私も病気がちで家の中は暗く悲惨そのものでした。わがままな私は自分の罪に気がつかず、主人から逃れるために12年間別居生活をしていました。こんな私たちにイエス様は不思議な方法で救いの手をさしのべてくださいました。聖書にふれ、自分の罪を示され、傲慢で冷たく閉ざされた思いも解け、主の憐みと愛に感謝することができました。最初は信仰なんて…と笑っていた主人もイエス様を信じて救われ、今までの罪を全て赦していただくことができました。「苦しみにあったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」（詩篇119・71）一人一人が悔い改めた時、主は驚くべきみわざによって祝福してくださり、家族を一つにしてくださいました。娘の万里子も結婚し子供が与えられ、主人の妹の家族にも福音が広がっています。わが家で家庭集会も始まり、一人でも多くの方々が導かれるようにお祈りしています。４年前主人の母は家族の救いを祈りつつ天に召されましたが、天国で再会できますから感謝しております。



死もいのちも

白石光一
東海大学医学部付属
東京病院内科
釧路市出身／日進小／教大付属釧
路中／釧路湖陵高／東海大学卒／
妻　萬里子／子供　一女

私は内科医として、多くの病気の方々に接し、死に至る経過をも見る立場にあります。人間にとって最も恐しいものは死であり、たとえ死に至る病いだと分かっても、私達はその事を患者に話せないのが現状です。今日の病院診療は、まず、病気が早く診断でき、病気を早く治すことを目標にしています。私も病気を早く治し、患者が死なないようにしようと医療に従事してきましたが、その結果は、自分の力が及ばないものばかりであることに気付かされるだけでした。また私は、救いを求める魂の叫びを聞き逃していたのです。私自身にはそれに答えることができませんでした。しかし真実の愛すなわち主イエス・キリストの愛だけが、魂の叫びに答えてくださるのです。医療も医学もすべて神様からの賜物であり、それを医者の高慢によって使うことなく、主のみこころをそのまま受け入れ、主に祈り従う医療が行なわれるべきです。死もいのちもすべてが主の内にあり、病いの結果がどのようなものであっても主イエスを信じることによって、大いなる希望、主にある永遠のいのちにあずかることができます。祈りゆだねて診療に従事して行きたいと思います。

絶望から希望へ

白石萬里子
東京都出身／香蘭女学校中学・高
校／津田スクールオブビジネス卒
／夫　光一／子供　一女

父はアルコール依存症で家族はばらばら、生きていることのむなしさをかかえてさまよっていた私に、主は愛をもってご自身へと導いてくださいました。私は今まで神様から離れて生きていたことを悔い改め、イエス様に従うことを決心しました。最初にイエス様が私にくださったみことばは「さあ、娘さん。恐れてはいけません。あなたの望むことはみな、してあげましょう。」（ルツ３・11）という夢のようなものでした。

まず母が救われ、翌年には父が入院を決意し、入院中に主を信じて救われ、アルコールから解放されました。十数年間別居していた父夫婦は主のみ恵みによって再び一緒に生活するようになり、結婚が遅れていた私にはクリスチャンドクターの夫が与えられ、結婚後娘が与えられたのです。大好きだった祖母も救われて平安のうちに天に召されました。私達は天国で再会できるという確信がありますから楽しみです。

すべての人がイエス様に愛されているのです。ただ悔い改めて主を信じるだけで平安と生ける希望をいただけるのです。一人でも多くの方が１日も早くイエス様と出会うことができますように心からお祈りします。

御任ご夫妻と三人のお子さま▶



苦しい時からの神だのみ

御任(みとう)克彦

歯科医
韓国人二世(大阪府)／大江小／天王寺中／清水谷高／東京歯科大卒／愛妻　佳子／子供　二男一女

私たちの家族は今小さな試練のただ中にいます。もし信仰を持つ以前の自分だったらこの程度の試練でさえも耐え切れず、離婚や死さえも考えたでしょう。

私は半年ほど前に、余りにも苦しくて藁をもつかむ思いでイエス様を受け入れた者です。こんないいかげんな者でも主を信じることにより全ての重荷を主に委ね（マタイ11・28）しかも今のこの試練を通して将来にとてつもなく大きな幸福が用意されていることを強く確信できます。つい10カ月前まではバリバリと仕事をし社会的にも家庭的にも順風満帆でした。でも外面的には充実していても、実はこのガラスの幸せがいつくずれ落ちるかと常におびえていました。一方、今の自分は無職で住所を転々と変え、身内の目を忍んだ生活は、はた目には全くみじめな家族です。しかし自分自身は全然変わっていないにもかかわらず、ただ「主を信じる」その一言だけで今は満ち足りた充実の日々です。「真の主を知ることから来る心からの平安」、今地獄の苦しみの真っただ中にいる両親と妹に「どうか一日でも早くこの平安を！」と日々、妻と心を一つにして切に祈らずにはおられません。

主にある平安

御任(みとう)佳子

群馬県出身／北小／北中／前橋女子高／東京歯科大卒／夫　克彦／子供　二男一女

「彼に信頼する者は、失望させられることがない」（ローマ10・11）偶像礼拝の問題でどうしても夫の両親に従うことができず、夫もまた間に立って苦しみました。あまりにも苦しむ夫を見ていることができず、ベックさんに相談したところ、「この苦しみはご主人が救われるためのものだよ」と言われました。八方ふさがりのなか、主の力強いみ手によって引き寄せられ信仰を持つに至った主人を見ると、本当に主を賛美せずにはいられません。

夫婦が同じ土台に立ち、私達の上には常にイエス様がいらっしゃること、その素晴らしさのゆえに他のすべてのことが価値のない物のように思われます。「悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています」（Ⅱコリント6・10）

物質的には多くのものを失いましたが、それを補ってあまりある「主の平安」をいただいたことは言葉につくせぬ喜びです。今、私達の心からの願いと祈りは両親もともにこの「真の喜びと平安」を知る者になってもらいたい、ということです。



川股ご夫妻、お母さまと三人のお子さま。▶

私は主の家に住まいます

川股孝志

東京電力勤務
宮城県出身／若柳小／若柳中／若柳高／東北大学工学部卒／妻　恵美子／子供　二男一女

大学紛争の混乱の中で、希望を失っていた私を主は憐んでくださいました。上京後まもなく私の心の扉を叩き続けてくださって、自己中心的な思いが示され教会に導かれました。主イエス様の十字架の死が私の罪を取り除く唯一の道と、かたくなな私に忍耐強く主は語りかけられました。私がいったい何者だというので、主が心に留めてくださったのでしょうか。（詩篇８・４）高慢な私が悔い改めて主に赦していただくために、数年間主をお待たせすることになりました。

病床の義父の見舞いがてら、ベックさんが私の家庭を訪れてくださいました。人の目を気にする幼い信仰の私に、日々主に喜ばれるように歩むべきとのアドバイスが与えられて、集会に加えられました。多くの方々にいただいた聖句を静かに味わいながら（エレミヤ15・16）、義父は平安のうちに天に召されました。

聖霊に満ちあふれ生き生きと主が臨まれる集会で、主のご愛に満たされて安らぐことは何と幸いなことでしょうか。「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追ってくるでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう」（詩篇23・６）

イエス様は私の主です

川股恵美子

東京都出身／大森第六小／大森第八中／大森高卒／夫　孝志／子供　二男一女

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」（詩篇119・71）

20年前、失恋を通して教会に導かれ、自分がどんなに高慢で嘘つきで打算的な生き方をしてきたかを示されました。十字架の贖いを信じ全ての罪を赦していただき、イエス様が照らしてくださる所を歩んで行けばいいのだと、平安になりました。その後はクリスチャン同士の結婚に導かれ、いつも神様に守られ、恵まれた歩みをしていましたが、いつの間にかイエス様の救いに甘えてしまい、間違っていると心のどこかで思いながら、自分の思いを一番大切にして生きていました。昨年吉祥寺キリスト集会に導かれ、こんな私を主はずうっと愛し続けていてくださったことを知りました。「わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない」（イザヤ43・25）　この愛の前に、「イエス様は私の主です。私はしもべです」と心から悔い改めました。条件をつけず、ありのままの私を愛してくださるイエス様に信頼しゆだねて「宗教」ではなく「信仰」によって歩めます日々を、感謝しています。



共にいてくださる主

友野雅志
㈱ハイテック・システム・マネージメント代表取締役
鹿児島県奄美大島出身／伊津部小
／金久中／鶴丸高／東京大学教育
学部卒／妻　和子／子供　一男

思春期から人生の生きる意味を求めながら、その結果は生きる希望を失い、人は悲しみの中で生きて死んでいくだけだと思っていました。自分自身の罪と苦しみの真暗な心の中で、'これまでの人生は無かったことにする、ここから新しい人生のスタートだ、という奇蹟がもしもあるなら、と考えたものです。結婚し、夫婦の心のすれ違い、私の両親との不和、その中でなすすべのない私に、イエス様は十字架のみわざにより私たちの罪の身代わりになられるほど私を愛してくださっていることを示してくださいました。本当に新しい人生のスタートでした。その後今の事業を始めましたが、経済的に日々の生活にも困る状態が続き「…おのののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである」（ヨシュア1・9）という主の慰めと励ましにすがり一日一日をすごしました。苦しみの中で、主に依り頼んで歩むことのすばらしさを知りました。いいところの全くない私のために十字架にかかられた主、甦られ、天に昇られ、今も守ってくださり、また来られる主に心から感謝しています。

イエス様と出会って

友野和子
沖縄県出身／本部小／本部中／本
部高卒／夫　雅志／子供　一男

結婚をしてからはさまざまな人間関係に悩み、やがて教会へ行くようになりました。それまで、自分の価値観ですべてのことを決定して歩んでいた私ですが、聖書との出会いによってものの考え方がだんだんと変わってきました。人間の中に在る「自我」を単なる「人間の性質」としてとらえていましたが、それは、「罪である」と聖書ははっきり言いきっているのでした。また、神さまを否認して、自己本位に生きていることも罪であると……。すなわち、神さまから離れて自分勝手に歩んでいた私自身こそ罪人であることを知り、イエス様の前に泣いて悔い改めました。それから、私の内側にいいようもない平安と喜びが訪れました。それは、本当に不思議な解放感でした。イエス様は目には見えないお方ですけれども、まちがいやすい私に、絶えず聖書を通して、あるいはキリスト集会の方々を通してみこころを教えて導いてくださいます。言いつくせない感謝です。

「主のみおしえは完全で、たましいを生き返らせ、主のあかしは確かで、わきまえのないものを賢くする」（詩篇19・7）



生ける望み

南原祥子
神奈川県出身／横浜国立大鎌倉附属小／湘南学園中／湘南学園高／東京ＹＷＣＡ学院卒／子供　一女

私は長い間特に問題もなく、一見幸せの中におりましたので神から遠く離れ、それが罪であることも知らず、自己中心の生活を続けておりましたが、突然主人の不治の病いを宣告され、それまで主人に頼りきって生きていただけに、真暗闇の中に放り出されたような衝撃に襲われました。それまでにも色々な趣味の合間に家庭集会でメッセージを数回うかがっていましたが、良いお話としか受け止められませんでした。しかし愛する者の死を目前にした時、人間の無力さを思い知らされ、人間の営みの背後にこれを支配なさる神の存在を感じざるを得ず、この大きな試練は私達家族を魂の滅びから救ってくださろうとする大いなる神の愛であることがわかりました。

今は娘と二人きりの生活ですが、日々イエス様のご愛とあふれるばかりの恵みの中で、救われるまでには体験したことのない喜びと平安に満たされ、天国での主人との再会を待ち望みつつ歩めますことに心から感謝のできる毎日です。「それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ」（エレミヤ29・11）

絶望から希望へ

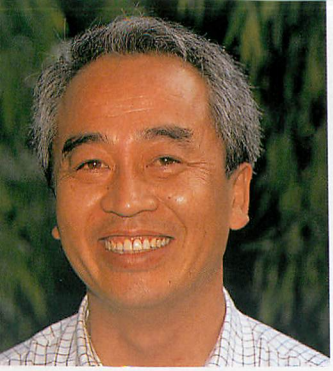
南原恵理子
東京都出身／晃華学園小／晃華学園中／晃華学園高卒／成蹊大学在学中

中２で父を亡くすまで、私は何不自由なく幸せに過ごしてきました。父が召され、私と母には絶望の生活が待っているばかりのはずでしたが、そんな中で母が救われ、絶望が希望に変えられました。私も吉祥寺キリスト集会に時々顔を出すようになりました。しかし救いには導かれず、むしろ反発を感じていました。

そのような状態で高３の受験期を迎え、そこで初めて人間の力をはるかに越えた神様の不思議な働きを体験することができました。それからは吉祥寺キリスト集会にも自主的に行くようになり、多くの友達を与えられて集うことが楽しくなりました。その年の12月の軽井沢バイブル・キャンプでイエス様を信じることができ、４月のイースターに洗礼を受ける恵みを与えられました。

「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです」（ヨハネ15・16）

今は大好きな父がいない寂しさはありますが、イエス様が私達二人を養ってくださり、毎日恵まれた生活を送ることができることを心から感謝しています。



自由に生きられるようになった

山田　健
山田測量事務所
横浜市出身／蒔田小／蒔田中／鶴見工高／攻玉舎短大卒／妻　絹子／子供　一男一女

「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです」（ローマ７・15）　本当に私の生き方は自分で何をしているのかが分かりませんでした。自分の人生とか、これから先のことを考えると不安で不安でたまらなくなるので、なるべく考えないように努めて自分の目を他の方へ向けていました。けれども何をしても不安は募るばかりで、ただ自分の感情を隠すことがうまくなっただけでした。そんな頃キリスト集会に集っていた妻から聖書の内容について尋ねられ、読んでいるうちにローマ人への手紙７章に出会い、これは本当にすごいものだと思いました。そして聖書には真の自由があると確信しました。イエス様を信じた今本当に心が軽くなり、平安と喜びを自分のものとすることができるようになり感謝しています。「イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです」（Ⅰコリント２・２）　この聖句のように決心したのですが、たよりない自分に揺るがない信仰を与えてくださるように毎日祈っています。



母の死を通して

上間かな恵
沖縄県庁非常勤職員
沖縄県出身／城東小／城北中／首里高／東京ＹＭＣＡ国際ホテル専門学校卒

「私たちは、みこころによりご計画のままをみな実現される方の目的に従って、このようにあらかじめ定められていたのです」（エペソ１・11）　クモ膜下出血で母が召されて４年になります。日がたつごとに主イエスのご計画の緻密さを示され感謝の毎日です。

幼い頃から教会へ通ってはいましたが、救いの確信は得られず、なぜ人は死ぬのか、自分の中にある醜いものは消せないのか、と疑問だらけの苦しい毎日でした。しかし、主イエスを信じる者にとって死は終わりではなく、主イエスの十字架を通して私の罪は赦されたことを母の死をもって主は私に示してくださいました。この世の始まる前からこんなにも小さく罪深い私達の一日一日をご計画なさっていた主の人知では計り知れない深い愛を思う時、苦しみも大きな喜びと感謝にかえられます。「この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです」（ローマ５・５）

主のお導きのままに祈りの日々を歩んでいきたいと願っています。



私の主、神、わが救いの力よ

中俣照子

新潟県出身／入舟小／工芸中／工芸高／文化女子短大卒／夫　達

私は子供の頃からこつこつと努力することが好きで、学生時代も勤めてからも、洋裁、手芸、織物などの制作に努力していました。結婚してからは、子供に恵まれない淋しさを紛らわすためにさらにお茶、お花なども加わりました。しかし年を経るに従って物を作ることに虚しさを覚え、心は満たされることがなくいつも隙間風が吹き抜けて行くようでした。自分の心を強くし人間性を高めようと実践倫理をやり、子供が授かるようにと仏教団体に行き先祖供養の写経を何枚も書き、名前を変えたりして私なりの努力をしましたが、頑張ることに疲れはて、何もかもが虚しく、うつ病のような状態になりました。そんな頃子宮がんが発見され手術を受けました。そして全く時を同じくしてイエス様に出会ったのです。心身共にギブアップの状態の時、一方的な主の恵みにより救われました。自分を高める努力から180°方向転換をし、やっと心の空洞を埋める真理に辿り着いた喜びで一杯です。イエス様の十字架に感謝し心の平安をいただいている毎日です。「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます」（Ⅰテモテ２・４）



新しい歌を授けてくださった

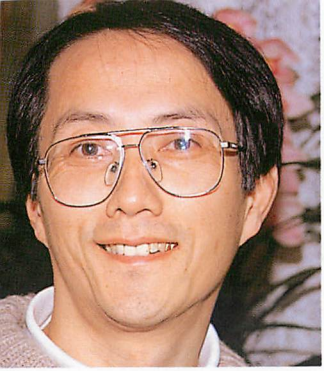
笠井博子

福岡県出身／上庄小／瀬高中／広島音楽高／東京音楽大卒／夫　庸三／子供　一男一女

住所　千葉県印旛郡印旛村吉高1886-105　〒270-16　電0476-98-2686

家庭集会　月１回土曜昼２時

イエス様に出会うまでの私は、空しさの中で生きる目的も意味も見つけることができず、いつも心がうつろでした。20歳を過ぎた頃には「生きることがこんなに空しいものなら早く終わってしまいたい」と思うようになりました。結婚し子供が生まれると「何も確かなものを持っていない私が、一人の人間を育てることなど絶対にできない」と、毎日絶望感が増すばかりでした。「主は、私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きになり、私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巌の上に置き、私の歩みを確かにされた。主は、私の口に、新しい歌、われらの神への賛美を授けられた」（詩篇40・１～３）主が私を救うために十字架の上で死んでくださったことを知った時、愛されている喜びで一杯になりました。今もその喜びは増々溢れ、主を賛美せざるを得ません。本当に感謝です。主は私だけではなく主人や子供達をも導いて、主を中心とした家庭の幸いを与えてくださいました。救いのみ業は、私たちの周囲の多くのご家庭にも成就され、毎週開かれる家庭集会では主を賛美する歌声が高らかに響き渡っています。



すべてを主に委ねて

小沢章雄
医師（精神科）常盤台病院
静岡県出身／鷲津小／静大附属浜松中／浜松北高／三重大学医学部卒／妻　伸子／子供　二男

私は10代の頃から神経病的な悩みで苦しみ孤独で自己愛的な道をさまよっていました。その原因が自己中心的な生き方にあることを20代になって知り解決策を求めて悪戦苦闘しました。心理学、哲学、仏教、精神医学を学びましたが根本的な解答は得られず、文系の大学を中退し、医学を修め精神科医として仕事を始めました。自分の知識と経験を頼りに患者を「治療」していましたが本当の愛を知らない自分が患者を慰めることなどできないことを知りました。苦しい30年間、もはや自分の力ではどうしようもない状態に陥った時に主イエス様は「私のところに来なさい」と導いてくださいました。主を受け入れた時から私には今まで体験したことのなかった平安、希望、喜びが与えられました。すべてを主に委ねる時、主イエスはいつも私達と共にいてくださいますから感謝の毎日です。「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる」（詩篇37・5）主は私達を変らぬ愛をもって憐んでくださっていますから感謝です。



奇しいみわざを体験して

田嶋巳恵子（ミエコ）
自営業
長野県出身／軽井沢小／小諸高等女学校卒／子供　一男一女／孫三人

私は幼稚園の保母をしていた娘の頃、1949年に洗礼を受けました。長いこと名前だけのクリスチャンでした。昨年の9月に姉が召され、そのことを通して私に救いの確信が与えられたのです。「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」（ローマ10・13）とのお約束通り、昨年5月病床の意識も薄い姉をお救いくださったのです。姉が永遠の命をいただくことができず滅びに至るのではと、私は必死の思いで聖霊が姉の心に働いてくださるようにと祈っていました。そのとき、小さく、はっきりと「イエスさま…」と一度だけ言うことができた姉の平安に満たされた顔は、その後の私達家族の信仰を変えたのです。主に示されて、長いこと連っていた教会を、信仰のきびしさに従うためにも決断して去りました。それは長い道程でしたが、主は何と実りゆたかな救いを備えてくださったことでしょうか。94歳の祖母にも、息子夫婦にも信仰の確信が与えられたのです。主は私のような者を、みことばが生きて働くところに導き出してくださったのです。大いなる聖霊の働きを体験し、感謝の日々です。



主がくださった意志

長谷川明子
横浜市立大学医学部病院内科医
神奈川県藤沢市出身／湘南白百合学園小、中、高／北里大学医学部卒

私は人一倍我が強く、「親の所有物ではないのにひかれたレールの上を歩かされ、一個人として尊重されていない」と反発を感じながらも、医学部に合格してしまったので、しかたなく重い心を抱きながら勉強していました。医学が勉強したくて自分の意志で入学したと言える人が羨ましく、スランプに陥りましたが周囲には本心が言えず、大学をやめる勇気もなく途方に暮れていました。精神的に苦しく解決を求めていた時、あるクリスチャンの友人と出会い、次第に問題解決の糸口が見えてきたのです。私は、両親が私の自由を奪ったと考えて数々の愛のない態度をとってきましたが、それが私の罪であり、罪のない神のみ子である主イエス・キリストが十字架にかけられたのは私のためであったこともわかるようになりました。主は私を自らの意志で学ぶ者に変えてくださり、医師となった今も働く喜びを与えられ、分岐点で祈ると進むべき方向を示してくださいます。「彼に信頼する者は、失望させられることがない」（ローマ10・11）「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです」（ピリピ2・13）











西軽井沢国際福音センター





主なる神は、私たちの祈りを聞き届けてくださるお方です。('90 秋)





主なる神は、信じる者から離れず、決して捨てないと約束しておられるお方です。('90 秋～'91 春)







西軽井沢国際福音センター





主なる神は、奇蹟をなしてくださるお方です。



主なる神は、ご自分の宮を建ててくださいます。('92 新春)



「あなたがわたし(主)の前で願った祈りと願いをわたしは聞いた。わたしは、あなたがわたしの名をとこしえまでもここに置くために建てたこの宮を聖別した。わたしの目とわたしの心は、いつもそこにある。』—— I 列王記9・3('91 夏)

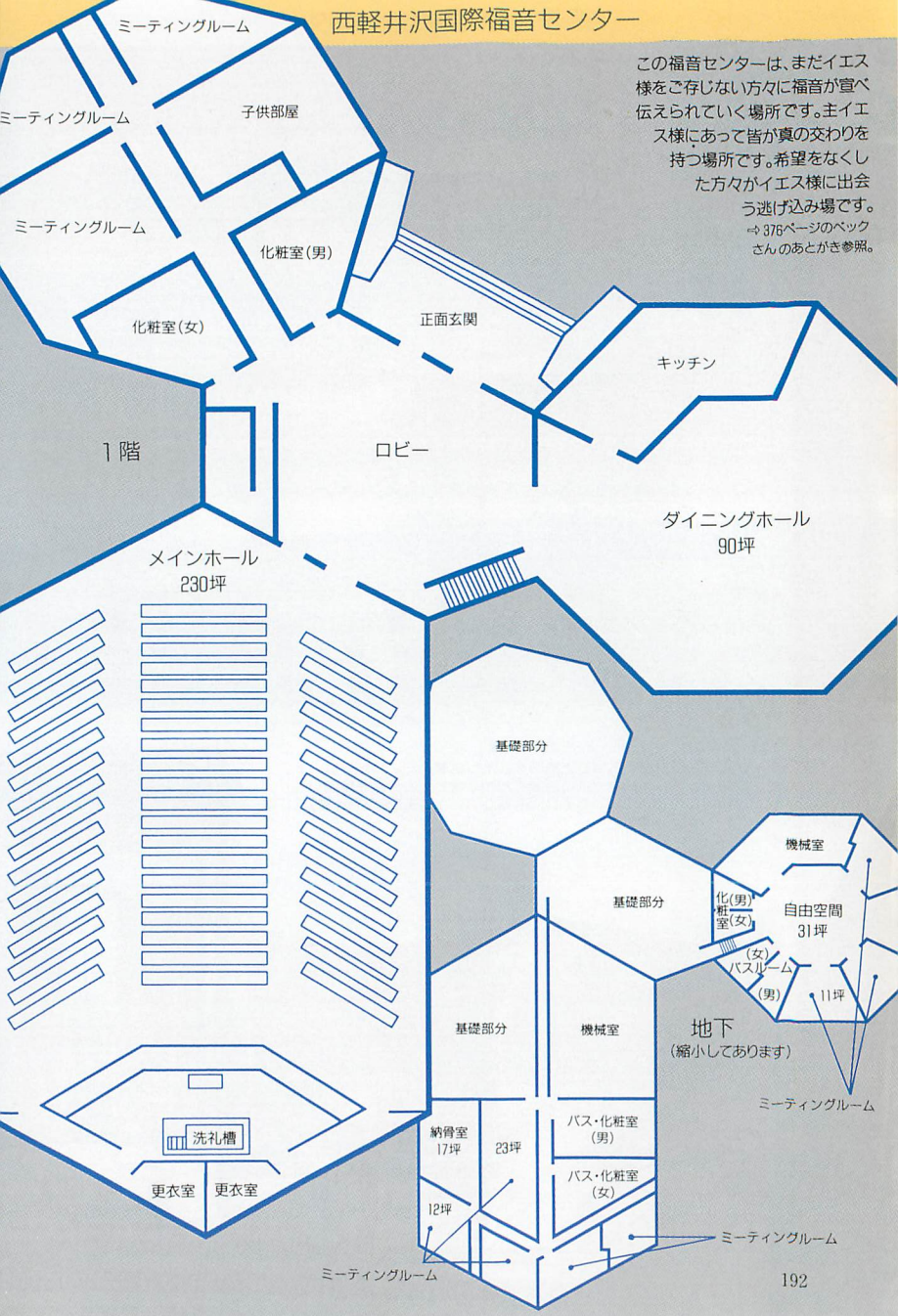
⇨373ページのベックさんのあとがき参照。



西軽井沢国際福音センター

この福音センターは、まだイエス様をご存じない方々に福音が宣べ伝えられていく場所です。主イエス様にあって皆が真の交わりを持つ場所です。希望をなくした方々がイエス様に出会う逃げ込み場です。

⇨376ページのベックさんのあとがき参照。



この聖句に出会ってほっとしたことを覚えています。また結婚については聖書にはこのように書かれています。

男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。（創世記　2・24）

私たちの結婚はこの聖書の基本に反していました。子離れしていない親と親離れしていない私。主人もやりにくかったと思います。私は、いつも主人を父と比較して見ていたようです。育った環境が違えば、物の考え方、見方が異なってくるのは当然ですけれども、私たちはお互いに自分の思いや立場を主張し、相手の立場を考えるゆとりもなく、意地を張り合っていました。当然うまくゆかず、とうとう結婚五年で離婚話になりました。この頃私は聖書のコリント人への手紙第一、七章を読みました。けれども愚かにも自分の思いを通しました。両親や親しい方々数人に集まってもらい、私たちは協議離婚をすると宣言したのです。皆さんは驚いてもう一度やり直すようにすすめてくれました。父も、

「どんな条件でも聞いてやるからやり直せ」と言ってくれましたが、二人ともどうしても素直にやり直すとは言えませんでした。もう一度みんなで集まってあげるからそれまでよく考えるようにと言われ、その夜は別れました。

次の日の夕方主人は急に「おれはひとりではやっぱりようやっていかん。おれが悪かった、もう一度やり直してくれ」と言いました。それなのに私はどうしても素直になることができず、

「私も一人でやってみるから、あなたも一人でやってみたら？　お互いに別々にやり直してみ

よう」と冷ややかに言ってしまいました。間もなく、ドーンという異様な音がしました。とり返しのつかない惨事でした。主人は猟銃で自殺をしてしまったのです。とり返しのつかないこと……。私は茫然として、どうすることもできませんでした。一九七一年九月二日の夕方の出来事でした。私は三十一歳、それまでにも人の死に出会ったことはありました。けれども、これほど死を恐ろしいと思ったことはありませんでした。

謝られたけれどやり直すと言わなかった、と話したので、主人の家族は怒り、遺体も主人の家に連れ帰り仏教で葬儀をしました。葬儀の時も人の視線が痛かった。針のむしろのように思えました。つらかった。どうしてこんなことになってしまったのか、いったいどうすればいいというのか、つらくて、悲しくていたたまれない思いでした。未だに自分の立場ばかり考え、言い訳したい気持ちでいっぱいでした。愛の足りない者でした。

葬儀も法事もむなしさだけを感じました。お経の中に「この家の守り神になって守りたまえ……」と聞いたときのむなしさ。「生きている人の世界と死の世界はまったく別な世界だ。人の声の届かないところ、人の力のおよばない世界が死の世界ではないか。坊さんのお経も届くまい……死の世界は神の領域だ、人間は生きている時に自分のことさえ守れないのに、どうして死んで神になり、この家の者を守れるだろうか……」。

すべてが終わった時、どっと疲れが出て私は寝込んでしまいました。店は西森春子さんが開けてくれました。母も福音書房を休んでずっと帰ってきてくれました。

ある時母が聖書を開いてくれました。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（Ⅰヨハネ　1・9）

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（Ⅰコリント　10・13）

母はこのところを開き、

「基子、神様がこのように聖書で約束してくださっているのだから、このみことばを信じよう」と言って一緒に祈ってくれました。私は「主人を許せなかった罪、人ひとり死に追いやった罪を本当にお赦しください」と心から祈りました。私の心の重荷はあまりにも大きく、イエス様におすがりするよりほか道はありませんでした。

この二つの聖句を二枚の障子紙に大きく書き、襖に貼りました。この聖句を読みながら、心に浮かぶことを何でも祈りました。主はすべてをご存知であるということが慰めであり救いでした。

私は二カ月ぐらい寝込んでいました。そのうちに自動車の免許の更新があり、人に顔を見られたくない思いでしたが、「今免許を捨てたら、よう取り直せない」と思い、更新に行きました。それからは人と顔をあわせるのも苦にならなくなり、店に出たり配達もしたりと、また仕事をは

じめました。

その頃こんな夢を見ました。魔法使いのおばあさんが出てきて「あんたに祟るぞ」と言うのです。私は「私にはイエス・キリストがついている。祟れるものなら祟ってみい」と怒鳴ったところで母に、「どうしたの。うなされていたわよ」とゆり起こされました。寝汗をびっしょりかいていました。その後こわい夢を見たことはありません。夢の中でも私を守ってくださる主に感謝しました。

私は夢中で働きました。父が留守の時は西森春子さんのところへ泊まりに行かせてもらいました。春ちゃんのご家族には親切にしていただき、うれしかった。

一年ぐらい働いて、また腎臓を悪くし三カ月高知市民病院に入院しました。入院中は聖書を読んでいました。

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」（マルコ　8・34）

この聖句が私の心にせまってきました。私は、これからはイエス様に本気で従っていきたいと素直に思いました。私の地上の生涯がたとえ悲しみばかりの生涯でもよい、地上の生涯には限りがある、永遠に比べれば限りがある……そう心に決めて聖書を読みました。聖書が私にとって限りない慰めの書となりました。

退院してから一カ月くらいの間は、高知の家で寝たり起きたりしながら、良い仕事があれば高

知に住みたい、教会生活もしたいと新聞広告などを見ていました。でも、病気が全快したわけではありませんでしたから、なかなか適当な仕事はみつかりませんでした。

そんな時福音書房のお客さんから電話があり、「聖書を買いたい」と言われるので店まで来ていただきました。今まで聖書を売ったことはありませんでしたが、お客様の相手はできました。口語訳の大型革表紙の聖書が入用の方でした。私はその聖書を手にした時とても美しいと思いました。高知にもこんな立派な聖書、高価な聖書を買う人がいるのかしら、と思うと私の胸に熱いものが流れ、これから私は聖書を売ろうかしら、と思いました。さっそくその夜父に電話し、

「私は高知に住んで教会生活をちゃんとしたい。この福音書房を私がしたらいかん？」と話すと、父は、

「それはいい。生活の必要は見てやるから」と二つ返事でオーケーしてくれました。父も母も私が希望を持って生きて欲しいと祈っていたのだと思います。

こうして福音書房を始めましたが、この時私は書籍に対する知識もまったくなく、出版社のことも、高知のクリスチャン人口も、教会の数も、教派についてもまったく知りませんでした。ただ信仰だけ、イエス様の十字架の贖いが私の罪のためであったと信じる信仰だけでした。売り上げは少なく、福音書房の経営は苦しく、経済的には戦いでした。月十二万円ぐらいの売り上げから始まりました。月曜から土曜日まで朝十時から夜七時まで店を開けました。教会は母が行っていた家の近くの高知インマヌエル教会に導かれました。どんなに売り上げの少ない日でも、とにかく今日一日静かに終わった、とイエス様に心から感謝のお祈りをして終わることができました。

平凡な静かな一日を感謝しました。

私は教会に行って、福音書房の仕事をするようになって、すぐに喜びに満たされたわけではありません。悲しくつらく寂しい時が多かった。でも教会は休みませんでした。「今日は行きたくないなあ」と思う時も行きました。病気でないかぎり休みませんでした。「私の罪のために死んでくださったイエス様に感謝するために行くんだ。誰のためでもない、イエス様を礼拝するために行くのだから休まないで行こう」と、自分に言い聞かせながら。

福音書房では健康のため車を持たないことにしました。各教会の方々もご来店のお客様も、注文品をご自分で持ち帰って協力してくださいました。感謝でした。

売り上げは少ない店でしたがお客様とのお付き合いは楽しいものでした。私は店のウィンドーに大きな字で聖句を書いて貼り出しました。下手な字も恥ずかしいとは思わず、毎週毎週聖句をとりかえて貼りました。通行人や信号を待っている人たちが聖句を読んでいるのがわかりました。

幸いに田舎の店がよく売れ、その売り上げの一部を父は福音書房のために使わせてくれました。自分の生活費は最少限にして、少しずつ本を仕入れていきました。時々この店をやめさえすれば経済的には楽になると思うことがありました。売り上げの少ないことで両親にぐちを言ったこともありました。その都度両親は、「その店は売り上げの額ではない、貴い仕事だ」と励ましてくれました。その頃私は妹と同居していましたが、店を留守にしないといけない時はいつも妹が店番をしてくれました。売り上げよりいつも仕入れの多い店で経営はまさに戦いでした。

小さい店でもひとりは不便です。教会の牧師の紹介で林智子さんが店を手伝ってくださること

になりました。二人で聖書を読み、祈ってから毎日の仕事を始めました。林さんは笑顔のとても美しい方で一緒に働いていると心が和みました。

そのうちに、私はまた入院する必要があると言われ、市民病院に六カ月入院しました。イエス様はすべてご存知なので、この時のために林さんをそなえてくださっていたのだと、感謝しました。この時は県下の多くのクリスチャンの方々が見舞ってくださり、多くの人に愛された福音書房と私たちであることを実感しました。

今福音書房を経営している増井さんはその頃は花輪屋さんに勤めておられました。同じインマヌエル教会でしたので、礼拝や祈り会などで顔をあわせるたびに、

「僕を福音書房に雇ってくれませんか」などと声をかけられました。「僕のような者はだめですか？　僕はこの仕事をしたい。三浦綾子さんの本などを持って車で伝道のために売りに行きたい。いい仕事ですよ、雇ってください」と熱心に毎週毎週声をかけられました。いい仕事といっても経営はまた別です。今でさえ毎月毎月持ち出しの経営なのです。増井さんを雇って多少売り上げは伸びても経営を考えると無理だと思いました。けれどもあまりにも増井さんが熱心なので、ふっと、「これがイエス様の導きだとしたらいくら私が反対しても止まらない」と思いました。祈りつつ聖書を読んでいる時、

神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。

（ピリピ　2・13）

このみことばを与えられ、主が増井さんの心に働いておられるのならどうしようもないと思うようになりました。父も「増井さんなら信仰的にもよい方だ、神様がなんとかしてくれるろう」と言って増井さんを雇うことにしました。車も買いました。案の定すぐに赤字が大きくなりました。この頃福音書房はやっと年商一二〇〇万円ぐらいの売り上げの店になっていました。経営の上から見ると売り上げの少ない店に三人もの人手はいりません。ふと「私はもうこの店にはいらない人間だな……」と思いました。

福音書房を始めた頃は二度と家庭は持つまい、もういやだと思っていましたが、店に来られるご夫妻には暖かいものを感じ、クリスチャンの家庭はちがうと思うようになりました。その頃お客様で再婚をすすめてくださる方がありました。「岡本広海さんはいい方ですよ、うちの娘をやりたいぐらい」とその方は言われました。岡本さんはお店にはよく来てくださり話をしたこともあるけれど、特別な感情を持って見たことはありませんでした。が、この店には私はもういらない人だと思っていた矢先だったので「イエス様のお導きかな」とも思いました。もし自分が家庭を持つなら何を望むだろうかと自分の心に聞いてみました。生涯信仰生活のできる人。一緒に教会に行ける人。それだけでした。岡本さんならそれができると思いました。私は他に何も欲しいものはありませんでした。岡本さんは足がお悪いけれど、私は、そんなことはどうでもいい、自分の腎臓の方がもっと悪いくらいだもの、と思いました。私は岡本さんが、時計屋さんということだけしか知りません。お店も見たことがありません。私は創世記二十四章のリベカが結婚を決意するところを何度も何度も読みました。心の隅ではやっとここまで愛し育ててきた福音書房が

いとおしい、離れたくないとも思いました。

このことは主から出たことですから、私たちはあなたによしあしを言うことはできません。（創世記　24・50）

この聖句をいただき祈りました。「神様、私にはこの再婚が良いのか悪いのかわかりません。このことがあなたのご計画なのでしたら、最後まであなたが責任をもって導いてください」と祈りました。

それで彼らはリベカを呼び寄せて、「この人といっしょに行くか。」と尋ねた。すると彼女は、「はい。まいります。」と答えた。（創世記　24・58）

「人は素直にならないといけない時もある、手放さなければ得られない物もある。今『はい』と言わなければ……」と導かれました。それから毎日岡本さんを愛するように私の心に愛をくださいと素直に祈りました。香美教会の山崎牧師のお宅に岡本さんと二人で結婚しようと思うと相談に行きました。山崎牧師は、

「岡本さんもあなたもいい方だけれど、個性が強いから、今まで通りいい友達でいたら」と言われました。が、私たちは結婚することにしました。

信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。（Ⅰテモテ　6・12）

二人して信仰の戦いをしようと導かれて再婚しました。福音書房は増井さんが買い取ってくださり、どんどん大きく成長し、高知のクリスチャンに愛される店となっていること、感謝です。

教会は香美教会に移り教会生活を送っていました。店も小さいながらも祝福されました。

今から約八年前、竹本真夫さんが店に来て、

「姉が行っている吉祥寺キリスト集会のテープだからちょっと聞いてみて」と言って一本のテープをくださいました。さっそくテープを聞いて驚きました。イエス様に出会った人の生き生きとした救いの確信に満ちた証しのテープでした。「これはすごい。すごいね」と夫婦そろって喜んでテープを聞きました。竹本さんは毎週一本ずつテープを届けてくださいました。どのテープを聞いてもみことばに導かれて現実の生活の中で信仰が力となっている様子や新しく造り変えられて、家庭が建て直されたり、家族が救われていくさまが語られていました。聖霊の豊かな働きを見て圧倒されました。私が行っている教会では、人の証しを聞く機会がほとんどなく、ずい分ちがうと感じました。伝道に対するパワーを感じ、ただ夢中になって聞きました。特に男性の方の証しは驚きでした。教会では救われる男性がほんとうに少ないからです。

東京で妹のさおりの結婚式がありました。その時吉祥寺キリスト集会に行って驚きました。大きい集会所が人でぎっしりとつまっていました。どのお顔も生き生きと輝いていました。イエス様のことを楽しく語り合い、何よりも皆さんが心から喜んでいる姿に圧倒されました。私もこの人々のようにキリストのかおりを放つ者になりたい、と切に思いました。

そして土佐山田での第一回のバイブル・キャンプに出席しました。東京から大勢の方が来てく

ださり、主に在る皆さんとお付き合いする機会を与えられ、この集会は家族が救われていく、すばらしいと思いました。キャンプのために遠くから仕事を何日も休んで来てくださる、主のためにおしみなく時間をささげている皆さんの姿に、言葉では表わせないけれども、信仰の姿勢というか、みことばに対する謙遜な態度とでもいうようなものを感じました。純粋な信仰に惹かれて、キャンプの後、結婚式もしていただき長い間いろいろお世話になった教会の皆様には申し訳ないけれども、教会を変わる決心をしました。主人が手紙を書き、私が届けて一方的に教会を出て土佐山田キリスト集会に移りました。そして主人と森本恵子さんと三人、物部川でベックさんにより水にしずむ洗礼を受けました。より豊かで力ある信仰生活を送りたいと願って……。

主をおのれの喜びとせよ。（詩篇　37・4）

キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。

（Ⅱコリント　5・15）

結婚した頃は借家で狭く、家庭集会もできなかったのですが、駐車場としてお借りしていた場所へ車を置きに行った時、「み心ならこの土地を私たちに与えてください」と時々祈ったりしていました。主はあわれんでそんな私たちの祈りを聞いてくださり、大勢の希望者があったのに、地主さんの方から声をかけてくださり私たちにその土地を売ってくださいました。それも一番良

い時に売ってくださいました。新しい家の部屋は家庭集会ができるように建てました。我が家で集会ができることは本当に感謝です。イエス様を中心にした皆さんとのお付きあいは楽しいです。年ごとに参加できるバイブル・キャンプの数も増し、キリスト集会の皆さんとのお付きあいの楽しさも年々増える一方です。

土佐山田キリスト集会に導かれたことを心から主に感謝しています。主人の兄弟、親類、私の兄弟、親類、友人などまだまだ主を知らない方々が多いので、一人でも早く救われて欲しい、主に在る平安がどんなにすばらしいものか知っていただきたいと思います。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）



▲ 右から基子さんの妹井上基恵子さん、基子さん、母の井上スエ子さん。旭川のバイブル・キャンプで。



▲ 1991年秋、ゲストハウスの前で。左から黒田夫妻、ミンヘンさん、野口とも子さん、スーシーさん。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。（詩篇23・1）

黒田清隆

一九三八年前橋市に生まれる。市立敷島小、前橋市立第三中、県立前橋工業高等学校卒業。現在㈱黒田建設代表取締役。趣味は絵画、ステンドグラス制作。家族は妻ヤエさん、長男清輝さん、嫁の朋子さん、次男誠さん、長女佐藤恵さん。

・家庭集会　不定期・住所　前橋市西大室町一三二四―四　〒三七九―二一一・電　〇二七二―六八―二六二二



◀ 1989年9月、ステンドグラス完成の日に。

父の跡を継いで

私は一九三八年に、前橋市で大工棟梁の父の長男として生まれました。私は生まれつきいろいろな物を考えながら作っていくのが大好きで、学校でも図画や工作が得意でした。中学を卒業すると、大工の見習いとして父の友人に弟子入りし、厳しい修行に励むことになりました。しかし一年間、大工の見習いをしているうちに、いろいろと考えることがあり、大工としての実地の習練だけでなく、自分の考えや夢をかたちにして生かすことができる建築や設計の勉強をしたいと思うようになったのです。それで前橋工業高等学校の夜間部の建築科に入学しました。昼間は大工の修行、夜は建築についての全般にわたる勉強と大変でしたが、私は自分の好きな道が開けていく思いで、懸命に頑張りました。四年間頑張ったかいがあって卒業することができましたが、すぐに大きな建築会社に就職し、現場監督の大任を与えられて張り切って仕事をしました。実技ができ、同時に学科も勉強しているというので会社でも重宝がられ、東京の支社で働くことになりました。しかしやがて建設業界は不況に突入し、この会社はあえなく倒産してしまったのです。私は止むなく前橋市に帰り、父と二人で建築請負業を始めることになりました。

妻の全身麻痺

このようにして始めた仕事は順調で、やがて個人経営から株式会社組織にするまでに発展しました。私は一九六三年の二月に、妻のヤエと結婚しました。そして、その年の十二月には長男の清輝が生まれ、六五年には長女恵が生まれ、六九年には次男誠が生まれました。さらに、翌年の

七〇年には土地を購入し、自分の家を建てることになり、喜びの絶頂にありました。ところがそんなさなかに、突然妻が病気で倒れたのです。

日曜日の朝のこと、突然トイレで「どすん！」という響きがしました。驚いて行ってみると、妻が這って出てくるではありませんか。突然体が思うように動かなくなって、それで転んでしまった、というのです。たいしたことはないだろうと思い、私は仕事に出てしまいました。妻はそれから寝ていたそうですが、茶碗を持ち上げるのにも力が入らず、どうも体の様子が変なので、夕方私の母と一緒に病院へ行きました。前橋市では日曜日の急患に備えて、いろいろな病院が当番を決めて診療に当たっています。その日は胃腸専門の病院が当番の日でした。診察の結果は「たいしたことはないでしょう」ということで、妻と母は笑いながら帰ってきました。

ところが、その夜から高熱が出ました。汗がひどく、すぐ全身がびっしょりになるので、数時間ごとに着替えなければならないというありさまです。容体が尋常ではないので、翌日早々に近所のかかりつけの医師の所に行きました。医師は一通り診察の結果、これは私の手には負えない、というのですぐ国立の病院に行きました。いろいろと検査をし、すぐ入院しなければいけないということで、ベッドの空いている病院をさがし、やっとの思いで日本赤十字病院に入院することができました。病名は「ギランバレー」というもので、一日にして全身の運動神経が麻痺して指一本動かない状態になるという恐ろしい病気でした。

ほんの数日前まで喜びいっぱい、夢いっぱいの楽しい日々だったのが、一転してまっくらな日々になってしまいました。当時長男はまだ小学校一年生、長女は幼稚園、次男は一歳半、入院

した妻にはいつもだれかが付き添わなければならず、私の仕事も建築関係ですから勝手に休むこともできず、私はくたくたに疲れ果ててしまいました。しかし人間として、夫として、ここは何としてでも頑張らなくてはと思い、懸命に走り回りました。

その頃の私は、人間としてなんとかしなくては、という思いが強く、ひたすら妻がよくなるように願いました。しかし人間なんて、こんな時だけ何と身勝手なものでしょうか、どこの神様であろうと、どこの仏様であろうと、人がいいと言えばどこにでも出かけ、手当たり次第に拝むありさまでした。また、この病気は難病で、医者が治らないと言っても私は信用せず、私の愛で治してやる、きっと治してみせる、と言って妻を励ましました。

妻はそのような病状の中にありながら、忍耐強く、しかも平安をもって病気と闘っているようでした。妻はその頃すでにイエス様を信じて受け入れていたのです。ですから妻の横にはイエス様がいつも一緒にいてくださったのでした。私のように「人間として」「自分の力で」闘うのではなく、すべてをイエス様のみ手に委ねていたのです。

やがて私は、仕事や看病、子供たちの世話に疲れ果てて、いっそのこと死んでしまったほうがましだという考えにとりつかれ、市内の薬局を回って睡眠薬を買いあさりました。そして妻に子供を会わせて、最後の別れを言うつもりで病院へいったところ、妻の病状が急に悪くなり、病院から「子供をおいてすぐ戻ってくるように」と言われ、ばたばたと走り回っているうちに、死の思いから免れることができました。

また、妻に付き添って私たちを助けてくれていた妻の姉たちも、農繁期になるととても付き添

ってなどいられなくなるので、付き添いのいらない他の病院に移る必要がありました。新しい病院の院長先生は快く引き受けてくださったのですが、もとの病院の担当の医師がこの状態で転院することに不安をもたれたので、新しい病院とよく打ち合わせていただき、妻の病状が快方に向かっていることもあって無事転院できました。

新しい病院で

入院した日に、妻は大変喜びました。というのは、自分の周囲には脳血管障害や交通事故による運動障害の患者さんたちが多く、自分と似た症状の方々が多くて安心できたからのようでした。また、ひさしぶりでお風呂にも入れていただき、気分的にもさっぱりしたようでした。院長先生は、「内科的には何も悪い所はないのだから、これからはリハビリで頑張らなくては……五年もすればよくなるだろう」と言ってくださり、未来に希望が持てるようにもなりました。

妻が新しい病院に移り、私も安心して仕事に励むことができるようになりました。念願のマイホームも思いきって着工することになり、毎日が張りのある生活へと変わっていきました。新しいマイホームには、敷居に段がついている所は一箇所もありません。妻の体を考えて、車椅子ですべて移動ができるように設計しなおしました。「いつ治って退院できるか分からないのだから、あわてて着工しなくても」という意見もありましたが、私は「死ぬ病気ではないのだから、いつかは必ず退院できる。そのとき妻が生活しやすいためにも、建てなくては」と言って皆を納得させたのでした。

本当に、妻は五カ月あまりで立てるようになったのです。そしてすぐに歩行器で歩く練習をするようになり、杖を使って歩くようになり、ついに発病から一年で家の中ぐらいは自分で歩けるまでになり、とうとう退院することができたのです！

新しいマイホームへ

できたばかりの家に妻を迎えて、いよいよ新しい生活が始まりました。私の友達は皆、「黒田、よく頑張ったな、大変だったろう」と、私の苦労をねぎらってくれるのでした。ところが、妻が行っている教会の人たちは、「奥様の病気が治ったのも、新しい家に恵まれたのも、すべて主のお恵みです」と言うのです。これには私はカチンときました。「こんなに頑張って、こんなに努力した私のことを認めてくれなくて、それを主のおかげだなんて、いったい私の苦労はどうなるんだ」と思いました。そして私は「教会の連中なんて、人の心が分からない、思いやりのない連中だ」と勝手に思い込み、また「キリストは、なんてずうずうしい神なんだ」と見当違いな八つ当たりまでするありさまでした。「妻に病気をさせ、私にも苦労をさせ、そのあげく病気が治って幸せになったのはすべてキリストのおかげだったなんて……。妻を愛し、一生懸命看病したのは一体誰なんだ」と思い、イエス・キリストなど信じられないという気分になってしまいました。

また、早くからイエス様を信じている妻にも、ついていけないで傷つくこともたびたびありました。その頃のこと、妻を教会に送っていくと、私にも出席するようにと言うのでいやいや聖書と讃美歌を持って席についたのはいいのですが、仕事の疲れで居眠りをしてしまい、ごとんと聖

書が床に落ちた音で目が覚めました。周囲の方々の視線を感じて恥ずかしく思い、それからますます教会を敬遠するようになりました。もちろん教会には妻を送っていきますから、牧師さんともお話をする機会はいくらでもあったのですが、神様を信じることはできませんでした。私は人一倍、自由でわがままな生き方をしてきましたから、この教会に集まっている真面目一方の人達はきっと私を冷ややかな目で見ているに違いない、と何も知らずに勝手に決めこんでおりました。

一九八五年には、イタリーにスケッチ旅行に行きました。どこの街にも驚くほど多くの教会があり、その一見壮麗なたたずまいに当時の私はただただ感嘆するのみでした。まことに単純にも、日本に帰ったらきっとクリスチャンになろう、とその時思いました。妻を喜ばそうと思って、お土産にキリストの像やらマリヤの像などを買いこんで帰りました。ところが妻はそのような美術品を喜ばず「なによ、こんな偶像……」といった様子で冷ややかにあしらわれ、私はすっかり傷ついてしまいました。日本に帰ったらクリスチャンになろう、という単純な気持ちも見る見るしぼんでしまいました。その頃、私はクリスチャンというものを、外側の形から見ているだけで、信仰というものがどういうものか、何一つ分かっていなかったのです。一見華やかなイタリーの教会建築や壁画、彫刻などの見せかけに惑わされ、それが主が禁じておられる偶像崇拝に結びつく可能性を持つものであることを、当時の私はまったく知らなかったのです。

軽井沢のバイブル・キャンプに誘われて

ある日仕事のことでお客様の田子さんと話をしているうちに、話題が教会のことに移り、私は

「妻はクリスチャンで教会に行っていますが、いつも主が、主が、と言うのです。キリスト教の人々ってどうして何でも主がなさる、と主に頼りきって、自分の意志を大切にしないんでしょうね。それに頭が固くて融通がきかないし……」と悪口を言っていますと、田子さんは、

「実は、私もクリスチャンなんです」と言われたので困ってしまいました。

でもそれがきっかけとなっていろいろ話しているうちに、田子さんも実は日頃から「キリスト教の教会組織」には疑問を持っていて、教会のあり方には納得がいかないことが多いと言われるのです。それですっかり話が合ってしまいました。

しばらくたって、田子さんから電話があり、「軽井沢でバイブル・キャンプがあるから一緒に行ってみませんか？　教会とは違う集まりですよ」と誘われました。何となく行ってみる気になって、私と妻と、田子さんの三人でバイブル・キャンプに参加しました。

軽井沢のバイブル・キャンプでは竹沢さん夫妻とすぐに仲よくなりました。昼食の前に、私はまた「クリスチャンって、どうして主が、主がといって主に頼り、自分の意志を大切にしないのか」といういつもの持論を繰り返し、「妻が病気の時に、私がいかに懸命に努力したか」を話しますと、竹沢さんは「信者でない人は人間としての愛を大切にしているのだから、クリスチャンの人はよく気をつけて物を言わないと未信者の人の心を傷つけてしまいますね」と言われました。今考えると私の持論が間違っていたのですが、それに対してすぐに否定しないで暖かく配慮してくださったのでした。私はこのように人の心を配慮してくれる人達の集まりなら話も通じるし、素直についていけるな、と思いました。

夜になってはじめて、ベックさんに会いました。本当に何のこだわりもなく、おおらかで暖かい方だと思いました。翌日、バイブル・キャンプに集われた方々とベックさんの暖かさに感動し、イエス様のことを考えながら、また来たいという切実な願いを抱いて軽井沢を去りました。このバイブル・キャンプで、今まで長い間さまよっていた私の心はイエス様を知ることによって満たされました。

その後、秋から冬、そして春になるまで、私は軽井沢バイブル・キャンプでの感動が忘れられず、迷える一匹の羊と自分の姿を重ね合わせ、いつとはなしにイエス様と子羊がともにいるステンドグラスの制作に何かにつき動かされるように打ち込みました。

「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。見つけたら、大喜びでその羊をかついで、帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください。』と言うでしょう。あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。」

（ルカ　15・4～7）

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。

（詩篇　23・1、2）

初めての礼拝

その年も暮れのこと、竹沢さんご夫妻のお招きを受け、ご一家の皆さんに暖かくもてなしていただき、クリスチャン・ホームでの楽しいクリスマス・イブの夜を過ごさせていただきました。翌日は、竹沢さんと一緒に車で吉祥寺キリスト集会に行きました。初めて見る吉祥寺キリスト集会の日曜礼拝です。竹沢さんと前の方の椅子に座りました。部屋いっぱいの人です。胸の奥が熱くなってきました。その日の午後には洗礼式もあり、大勢の方々が洗礼を受けられました。また、いろいろな方々とお話をし、イエス様のすばらしさを口々に証しされるのを聞き、私は目には見えないけれど、集会の中心にイエス様がおられて働かれていることを実感しました。私は夢中で家に帰り、その日の一部始終を妻に語り、感動を分けあいました。前橋が吉祥寺にもっと近ければ、と思いました。

年も明けて春五月のこと、西軽井沢のベックさんの別荘に妻と二人で伺いました。浅間山の麓には花が咲き、緑の森の陰に白い別荘が静かに建っていました。数十人の方々が集まっての礼拝があり、その後で皆さんとお話をしました。中でも塩崎さんご夫妻の証しは強く印象に残りました。翌朝、竹沢さんご夫妻と祈っていますと、静けさの中で鶯が鳴きました。その鶯は、私たちのお祈りに合わせるように鳴いていたことを覚えています。

ちょうど帰り道にある高崎のデパートで、私やステンドグラスの教室の生徒方の創作展があるのを思い出して、一緒に見にいきました。私のイエス様と羊の作品も出展されていて、竹沢さんに見てもらうことができました。

それから数日後、ふたたび西軽井沢のベックさんの別荘に妻と伺いました。ベックさんは私に、「あなたは罪を犯したことがありますか?」と尋ねられます。私は罪の意味がよく分からず、「ありません」と答えました。

「では嘘をついたことがありますか?」とベックさん。

「仕事でついたことがあります。明日から仕事にかかります、と言って、事情でとりかかれない時もあります」と私。

ベックさんは、その嘘も罪であると言われ、それから人間の罪の性質について話してくださいました。その人間の罪のために、イエス・キリストが十字架にかかられ、血潮を流してくださったことを知りました。そして私は、この瞬間にイエス様を受け入れることができました。幼子のように素直に、イエス様を受け入れることができました。ベックさんの後について祈りました。今までイエス様に背を向けていたことを謝り、罪を告白し、これからはイエス様に従っていくことを口に出してお約束しました。

この日私は、イエス様と羊のステンドグラスの作品を持ってきていました。それを皆さんに見ていただきました。当時建築中のゲストハウスの工事の方も、仕事から帰って見てくださいました。皆さんが喜んでくださったので、私も嬉しくなりました。長い時間をかけて一生懸命に作った作品がイエス様を信じる人々に喜ばれ、こんな嬉しいことはありません。イエス様を信じ受け入れた今は、このステンドグラスはイエス様の導きによって作らせていただいたのだと確信するようになりました。

洗礼を受ける

一カ月の後、岩本さんたちの婚約式が西軽井沢の山本さんの別荘で行なわれ、出席しました。山本さんはじめ松見さんご夫妻、今川さんご夫妻など多くの方々とお話し、イエス様を信じ受け入れてからの喜びや生活の変わりようなどを語りあうことができました。翌日日曜礼拝の後、ベックさんに突然、

「清隆、洗礼を受けませんか?」と勧められ、素直に、

「はい」と答えました。断る理由などなにもなかったからです。

このようにして、私は一九八九年七月九日に洗礼を受け、イエス様に従う者であることをはっきりと証しすることができました。体が軽くなるほど嬉しく、私は喜びに満たされました。

この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。（ローマ　12・2）

すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエ

ス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

（ローマ　7・22～25、8・1、2）

それからしばらくして、軽井沢のバイブル・キャンプがあり、私はベックさんに突然、「あなたの家で家庭集会をやりましょう」と言われ、びっくりしました。イエス様に従う日々は、真の喜びと平安にあふれています。妻とは日頃、私たちもいつかは近所の方々、思い悩んでいる方々のためにこのすばらしい喜びをお伝えしたい、私たちが導かれたようにバイブル・キャンプにも案内したい、また近くの人々が増えたらわが家で集会ができるようになるとどんなにすばらしいか、と語りあっていました。しかしそれがあまりに早く、私が救われてまだ一カ月しかたっていない時のことでしたから、すっかり当惑してしまいました。私は、これはてっきり妻と竹沢さんの奥さんが私に知らせないでこんなに早く家庭集会を開くようしたのだ、と思いこみ、妻に当たったりしました。前橋市にはまだ私たちだけしかいないのです。もっと前橋市周辺の人々が増えてからでないと家庭集会なんか開いたらベックさんに申し訳ない、と思っていました。するとベックさんは、

「清隆、そんな心配はしなくていいんだよ」と言われます。それでその気になって一九八九年

の十月に、わが家ではじめて家庭集会を開くことができました。自分の力のなさを嘆いたりした私は、このことを通して、自分の信仰の薄いことをはっきりと思い知らされたのです。キリスト集会に集う方々、キリスト集会を祈り支えていてくださる方々に囲まれ励まされ、また、私たちが信仰を深めていくためにもこの家庭集会が用意されていることが分かり、感謝でした。

長女恵もすばらしい配偶者に恵まれ、その結婚式にもベックさんが司式をしてくださり、多くのキリスト集会の方々が支えてくださったことを感謝しております。

最後にこのつたない証しの題名となった私が一番好きな詩篇の聖句をもう一度あげさせていただきます。私たちは、いつまでも、主の家に住まいたいと心から思っています。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。……まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

（詩篇　23・1、2、6）



洗礼の日に妻のヤエ▶
さんと。1989年7月9日。


1988年夏、上高地にて。▶

主は私の羊飼い。緑の牧場に伏させます。（詩篇23・1、2）

黒田ヤエ

一九三七年前橋市に生まれる。総社小学校、共愛学園中学校、高等学校卒業。一九六三年に清隆さんと結婚。趣味は俳句。家族は長男清輝さん、嫁の朋子さん、次男誠さん、長女佐藤恵さん。

主は私の羊飼い。緑の牧場に伏させます。

私は小学生の頃は遊ぶのが大好きな子供で、夕方暗くなるまで夢中で遊び歩き、よく姉が捜して迎えに来てくれたことを覚えています。家は養蚕や稲作をやっている農家で、父は土に働くことしか知らないような真面目な人でした。小学校を出ると、私は共愛学園という私立のキリスト教系の中学校に入学しました。小学生時代の友達は皆近くの中学に行っているので、私は学校から帰ってきても遊ぶ友達がありません。また家には本も少なく、読むものといえば私の学校の教科書ぐらいしかないので気を散らすこともなく、毎日授業が始まる前の三十分の礼拝には必ず出席し、落ち着いて集中することができたように思います。

「いくら豊かな人でも、その人のいのちは財産にあるのではないからです。」

（ルカ　12・15）

私が最初に実感をもって覚えたのは、この聖句でした。ですから、自分の自転車がおんぼろなのもあまり気にならず、わがままを言わない子供だったように思います。礼拝を通して、私は少

しずつ聖書が身近なものになっていきました。夏休みには、結婚した姉やその家族が帰ってきて地蔵の祭りなどで大騒ぎするのですが、私はそんな中にあっても何か孤立していて、神様のみ国はどこにあるのかなどと漠然と考えていました。中学三年生の時には、学校で希望者だけが申し込む「アパルーム」という解説付きの聖書の日課を読んでいました。

高校生になると、私は礼拝のお祈りの中でよく涙が出て困りました。そして次の聖句に出会ったときはその最高潮で、涙が止まりませんでした。罪のないイエス様を十字架につけた人々に対してイエス様が言われた言葉です。

「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」
（ルカ　23・34）

この一言で、私は人間の罪のために十字架につけられ血潮を流されたイエス様に出会ったのです。さらに、

「このように、この小さい者たちのひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではありません。」
（マタイ　18・14）

という聖句によって、一人一人の人間の存在の重さと神様の愛の深さを知ることができました。神様は軒の子雀の一羽一羽でさえも気にかけておられることを知り、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ顧みられるお方であることを知りました。

やがて私は、家から自転車で十五分位の所にあった日本キリスト教団の教会に通うようになりました。雨の日も風の日も、誰に誘われたわけでもないのによく通いました。集まる人々は多くはありませんでしたが、力強い賛美の歌声がいつも流れていました。高校三年生のクリスマスに、決心して滴礼で洗礼を受けました。しかしその洗礼は、教会の中だけで行なわれた個人的な体験にとどまり、家族や友人たちの祝福もなく、私もまた自分の家に帰ってから家族にイエス様や救いの話をするわけでもありませんでした。夜ただ一人で広い畳敷きの部屋で床につきながら、イエス様の恵みのことを考えて喜びに浸っていました。

イエス様に背を向ける

しかし高等学校を卒業し、社会に出ると、私の周囲にはイエス様を信じている人はほとんどいなくなり、私の信仰もまたたく間に薄れてしまいました。教会の組織が少しずつ煩わしいものに思われてきました。受洗して一年もたたないうちに、私は教会をやめたいという手紙を教会の牧師に出しました。牧師は、神への信仰告白は人間の勝手な思いで断ち切れるものではない、と私をさとされました。「神を信じてください」とだけ書かれてある手紙も来ました。それはその頃の私には、とても力のない言葉のように思われました。

二十代になると、教会の束縛から逃れたいという思いが心の奥底にあって、それで家を離れました。友人のお母様の紹介で、吉祥寺の井之頭公園近くの、あるお家にお手伝いさんとして住み込みました。しかし東京の空の下には私には心を許せる友もなく、信仰といっても吹けば飛ぶよ

うな弱いものでしかなく、イエス様のこともほとんど忘れて生活していました。半年後に前橋に帰ることになりましたが、帰ってからも教会に背を向けて、悶々とした日々が続きました。信仰というものは、いつもイエス様を見上げていないとすぐに消えていってしまうものです。また私は、「『隣人をあなた自身のように愛せよ』と聖書にあるけれど、私はとても自分と同じように人なんか愛せない、よい行ないなんてとてもできない、人のために尽くすこともできない。私は本当に駄目で、取るに足りない人間だ、つまらない人間だ」というように、いつも自分を責め立ててばかりいるので、神様の存在がとても息苦しいものに変わっていったのでした。

やがて主人と出会い、結婚しました。一九六三年のことでした。その頃私は、折に触れて祈ることもありましたが、それは密かに一人で祈るだけのものでした。結婚してしばらくは新しい生活に慣れるために夢中で過ごしましたが、やがて生活に馴染むとともに、何かにつき動かされるように、また教会へ行くようになりました。結婚後、七年を過ぎてからのことでした。そしてそれから間もなく、大変な病気にかかったのです。

ギランバレーで全身麻痺に

一九七〇年十一月八日、長男が小学校一年、長女が幼稚園、次男一歳半の時、突然身動きできない体になりました。朝起きて、やっとトイレにいきました。その日のうちに茶碗も持ち上げられなくなり、完全に運動神経が麻痺してしまったのです。ギランバレーという病気でした。家族四人が主人の母のお世話になりました。言葉では言い尽くせない、感謝なことでした。運動神経

が麻痺したといっても、私は意識だけはしっかりしていましたから、病院に運ばれていく途中など、遠くの山や、市内のデパートで売り出し中の七五三の晴れ着などが目に入り、悲しい思いをしました。いくつか病院をまわり、日本赤十字病院に入院しました。やがて治療が始まり、ベッドに寝たきりの状態になりました。私は深い悲しみに沈みましたが、心は平和でした。私の体は病院で守られています。むしろ大変な心労を背負った主人の方が精神的、肉体的に大変だろうと心配でした。私の病気は死ぬような病気ではありません。しかし、このまま動くことができないなら、いっそ死んでしまった方が家族や他人に迷惑をかけずにすむのではないかと思ったりもしました。私はベッドに寝ながら、よく山の中を一人で歩いている自分の姿を想像していました。内科的には落ち着きを取り戻したということで、やがて機能回復のためのマッサージ療法が始まりました。それは激しい痛みをともなうものでした。私はそんな時、「今は険しい山の中にいるんだ。しかしやがては野の花の咲く美しい所もあるだろう、やがては泉の流れる静かな所もあるだろう」と自分を慰め励ましました。そしていつも祈っていました。「私の生命を主のみ手にお委ねします。もし生きながらえるものなら生かしてください。夫や子供たちのこともみ手にお委ねします。生きる力を与え守ってください」と。

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。（ピリピ　1・21）

その頃、まだイエス様を信じ受け入れていない主人は、私の病気が大変な難病であることを知って、藁にもすがる思いで色々な神社にお参りに行っているようでした。私のことを真剣に心配

してくれる主人の心が嬉しくて、私にはとてもそれを止めることはできませんでした。

そんな私も、入院してからたった一度だけ、大声で叫んだことがありました。

「痛いよう！」

それは痛いから叫んだのではなく、一人では何も食べられず、一人ではトイレにも行けず、こんな病気にかかったのはどうしてなのでしょうか、という痛切なうめきだったのでした。

主人が子供たち三人を連れて見舞いにきてくれます。ふと見ると、次男のよだれかけにチョコレートがいっぱいついているのです。なにもしてやれない自分が悲しくて、みんなが帰る後ろ姿に、私は泣きました。

教会の牧師もよくお見舞いにきてくださいました。お祈りをして涙がでても、それを自分で拭うことすらできないのです。

立つこと、歩くことはおろか、手を動かすことさえはるか先のことだと思っていましたが、主の憐みにより、やがて手が動き、半年の後にはどうにか立てるようになりました。ぴくりとも動かなくなった体を、必ず歩けるようになると信じていつも励ましてくれた夫に支えられて、私もリハビリの訓練を昼も夜も目が覚めている限り続けました。私はこのことを通して、どんな絶望の暗闇の中でも必ずイエス様は希望と光を与えてくださることを学ばせていただきました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてください

ます。

（Ⅰコリント　10・13）

やっと退院することができ、夢にまで見た新しいマイホームに帰ることができた私でしたが、最初のうちは椅子に座ってお台所をしたり、掃除するのに手に力が入らず、ほうきを取り落としたりしました。ベランダに布団を干そうとして、布団と一緒に転げ落ちそうにもなりました。またある日のこと、主人は自転車を用意してくれました。いつになったら乗れるのだろうと思っていましたが、ぐんぐん力がついてきました。

教会へもせめて一カ月に一回位は行けるようになりたいと願っていましたが、その思いもかなえられ、主人に送ってもらって礼拝にも出席できるまでになりました。人を愛せない、人を愛せないと悩み続けていた私でしたが、罪だらけのありのままの姿でイエス様の前に立つこと、どうしようもない人間だからこそイエス様の前に立って悔い改めて赦していただくことを身をもって知るようになりました。自分が何かいいことをするとか、自分の行ないによって救われるのではなく、信仰によって、神様の恵みによって救われることも分かり、私がどれほどイエス様に愛されているかを知った時、今までの思い煩いが嘘のように氷解しました。また、このような罪深い私をイエス様は赦してくださったと知ることにより、ともすれば他人に抱いていた憎しみやよからぬ思いからも解放されることができました。しかし、私の信仰は、まだまだよちよち歩きの段階でした。イエス様の十字架による罪の赦しの意味も、分かったようでもすぐにおぼろげになり、ほんとうに頼りない状態にありました。とても生活のすべてをイエス様に委ねると言えるような

ものではありません。教会生活と、実際の日常生活が分離した状態にありました。

教会は教会、生活は生活

ある時、教会の友達が私に言いました。

「人間って、幸せでいる間は神様なんていらないのではないかしら。本当に困った時のために備えて、今日もこうして礼拝に行くのよね」

当時の私は「そうだ、私もその通りだ」と思い、それが大きな誤りだとは気がつきませんでした。教会の中には、「教会は教会、生活は生活」と割り切って考えておられる方々が多かったのです。聖書のみことばは実生活とは関係のない高い所で語られる奥義みたいなものであり、心の奥深くだけで働くものだという考えがあるようでした。ですから、聖書のみことばが生活の中にいきいきと入ってくることがないのです。幸せであろうが困った時であろうが、いつもイエス様を仰ぎ、イエス様を慕って後についていく、という気持ちを持っていなかったのです。ですから、「幸せでいる時は神様なんていらない」というような言葉がでてくるのでした。

このようでしたから、教会で語られる礼拝の説教のことなど、そもそも神様を信じていない主人に話してもしかたがない、と勝手にきめつけて、聖書のことを主人に話したことはありませんでした。私自身が礼拝に出席していても、それほど喜びがあるわけでもないのですから、それを見ている主人がイエス様を求めようという気持ちにならないとしても、それは当然のことでした。当時の私には、イエス様に立ったしっかりした信仰がなかったのでした。

そのような時、私はある方に紹介されて、ベックさんにお目にかかることができました。一九八八年の九月のことでした。

キリスト集会へ

軽井沢のバイブル・キャンプに招かれて、私は恐る恐る行きました。「自分の教会があるのになぜ行くのか」。私は心の中で自問自答していました。「私にだって、教会生活への不満はある。その一部を満たすためならいいではないか」そう考えて自分を納得させました。軽井沢のバイブル・キャンプに着いてしばらくは、教会の雰囲気とあまりにちがっているのでなんとなくなじめませんでした。間もなく竹沢さんご夫妻や塩崎さんご夫妻が話しかけてくださって、少し気分が落ち着きました。塩崎さんの奥様が「どうしてイエス様を信じたか」というお話を皆さんになさいました。それを聞いて心が落ち着きました。

その夜のこと、ベックさんとお会いしました。とてもおおらかで、初めてお会いしたのに、もう何十年前からの知り合いのような気がしたのです。たとえようもなく、温かでした。軽井沢を去る時、また必ず来たい、と思いました。

翌年に再び招かれて西軽井沢のベックさんの別荘に出向き、日曜礼拝に出席しました。竹沢さん、塩崎さんご夫妻ともゆっくりお話をすることができて幸せでした。塩崎さんご夫妻は皆さんの前でお話をなさいました。この礼拝に集っていらっしゃる方々の、主にあるつながりの深さに触れて、イエス様のお働きのすばらしさに圧倒されました。

その一カ月後、ベックさんと本当に深いお話をする機会がありました。ベックさんが人間の罪について話された時、私は今まで経験したことのない強い衝撃を受けました。体中が、びんびんと滝に打たれているような心地でした。人間の罪の性質でした。骨の髄まで滲み通るほどの人間の罪の深さの認識でした。お会いして本当によかった、と思いました。

浸礼による洗礼

一九八九年の七月九日、初めて吉祥寺キリスト集会に行き、主人とともに洗礼を受けました。主人は前の教会の礼拝に私をよく車で送ってくれましたし、牧師さんが訪ねてみえると暖かく迎える人でした。また仕事に熱心だし、趣味も広く、友達も多く、くよくよせず楽天的な性格でした。そんな主人が、まさかイエス様を受け入れて洗礼を受けようなどとは夢にも思っていませんでした。聖歌を歌う時は涙があふれてしかたがありませんでした。吉祥寺キリスト集会の洗礼は聖書に書いてある通りの全身を水につかる浸礼です。私は前の教会では滴礼でしたので、主人とともに浸礼による洗礼を受けました。

ところが、その後が大変でした。前の教会の若い牧師が訪ねてこられたので、吉祥寺キリスト集会で洗礼を受けたことを報告しますと、一応おめでとうと祝福してくださいました。しかし、主人は初めてだからよいとして、私のことが問題でした。洗礼を二度も受けるなんて考えられないことだし、教会を出ていくことも問題だ、特に吉祥寺キリスト集会は勧められない、と言われるのです。それから私は毎日毎日祈りました。ベックさんのメッセージのカセットテープも聞き

ました。「光よあれ」も読みました。コスモスの花畑の草を取りながらも「何が正しいのか、どうすればよいのかお教えください」と祈りました。また「愚かな私の考えちがいや罪をお示しください、お赦しください」と毎日毎日祈り続けました。すると不思議に平安が与えられるのでした。次の聖句を見出したのも、その頃のことでした。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

その年の十月一日、私は吉祥寺キリスト集会の礼拝にいく決心をしました。でも、東京の吉祥寺へは三十年前に一度行ったきりで、とても不安がありました。電車の中はがら空きでした。私は席に隣り合わせた一人のご婦人に話しかけました。そして、今から吉祥寺にあるキリスト集会という所へいくこと、道順がはっきり分からないので不安なことなどを話しました。すると何と、そのご婦人はかつて吉祥寺に住んだことがあり、キリスト集会の場所もご存じだったのです。電車の乗り継ぎの仕方も二通りを紙に書いて教えてくださいました。私は本当に驚いてしまいました。私の隣にこのような方が座られるなんて私はとても不思議に思い、主の導きを感じました。今思い返して、その方のお名前も聞かずに別れてしまったことがとても残念です。前の教会とキリスト集会の間で揺れ動いた私も、その後主の愛と導きによって少しずつ行くべき道がはっきりとしてまいりました。

神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。　（Ⅰヨハネ　3・23）

今では、この聖句のように聖霊に満たされ互いに熱く愛し合っておられるキリスト集会に夫と共に導かれたことを、心から感謝しております。

その後、わが家では家庭集会も開かれるようになり、また長女恵の結婚式も集会の方々のお力添えをいただき、またベックさんも司式をしてくださり、大きな祝福を受けることができました。当日には礼拝も行なわれ、遠路はるばる大勢の方々に集まっていただき、その方々に福音が宣べ伝えられ、感謝でした。結婚式の進行をまとめてくださった若い方々も、ベックさんの司式の結婚式とメッセージに大変感激し、喜んでおられました。

私たちは本当に信仰の弱い者ですが、どうかイエス様が私たちを導いてくださいますように。そしてこの前橋のまだイエス様をご存じない方々が一人でも多く救われますように。最後に、洗礼の日にいただきました私の大好きな聖句を二つ記させていただきます。

「父がわたし（イエス様）を愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。」（ヨハネ　15・9）

「永遠の愛をもって、わたし（主）はあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。」（エレミヤ　31・3）

祈りに導かれて

矢野雅子

一九四四年坂出市に生まれる。坂出市立坂出中学校、香川県立坂出高等学校、明善短期大学家政科卒業。家族は夫琇久さん、長女香子さん、次女皇子さん、三女花子さん。



▲1991年夏えびの高原バイブル・キャンプにて。左から浦里さん、池尻さん、雅子さん、森島さん、池尻しょう子さん。

▼左から津島裕子さん、綾公子さん、矢野雅子さん。



イエス様に出会って

私がイエス様に出会ったのは、もう十年ほど前のことです。私たちが住んでいるこの坂出市に、ご主人の転勤でやってこられたある奥様から「ケーキの会に行きませんか」とお誘いを受けました。その頃の私ときたら、お稽古ごとに、お友達との付き合いにと一週間が七日では足りないほどのハードスケジュールで、その日その日の生活の楽しみを追って過ごしているありさまでした。若い頃「なにがこの世で本当なんだろう」とか、「私はなぜ生まれてきたんだろう」などと人並みに思い悩んだことなどすっかり忘れてしまい、毎日毎日ひたすら自分を楽しませることのみにうつつをぬかしておりました。

ケーキの会は、お名前だけは存じていたベックさんの、その奥さまがドイツのケーキの作り方を教えてくださるとのことで、私は楽しみにしてでかけました。とても楽しい集いで、ベックさんがイエス様のお話をしてくださったのですが、私はそれをほんのつけたりのつもりで聞きながしていました。帰りぎわにベックさんから、リンデさんの「実を結ぶ命」の本をいただきました。

私はまず表紙を見て、亡くなった方のことが書いてあるのにどうして「実を結ぶ命」という題がついているのか、と思いました。それでベックさんに亡くなった方がどうして「実を結ぶ命」になるのかをお聞きしました。その時のお答えは私にとって本当に意外なものでした。ベックさんは「リンデの病気がひどくなったとき、私たちは一度も神様助けてください、とは祈らなかったよ」とおっしゃったからです。私は、「え？　どうして？」と思いました。ベックさんはもう一度「ただ、神様のみ心がなりますように、とだけ祈ったよ」とおっしゃるのです。私には理解

のできない世界でした。何も分かりません。だけど、なぜか涙が出ました。何の涙なのか自分でも理解できないのに、なぜか涙だけが流れました。「私には、そんな心はない……」。ここには何か真実なものがあるような気がしてなりませんでした。

その後、時々ケーキの会に参加させていただいているうちに、私はいつの間にかそれまでスケジュールに振り回されてあれこれと追いかけていた他の楽しみが、少しずつ白けて見えるようになっているのに気がつきました。

その頃のこと、幼稚園の年長組だった次女の皇子が、突然台所で働いている私のところに来て、「あーあ、私、おばあさんになるのいややなあ。年とったらどうしても死なないかんのやなあ、生まれんかったらよかったのに」と言いました。私はそれを聞いて茫然としてしまい、とっさには何も答えてやることができませんでした。私はこの子供の素朴な疑問に答えることができない自分を発見したのです。「こんなことに答えてやることができないなんて、私みたいなものが親でいていいのかしら」「だけどこんなむつかしいことにすぐ答えられる人なんていないだろう」と自問自答しながら、何も答えてあげられなかったことだけがいつまでも心のしこりとなって残っていました。子供に明るい希望を与えてあげたい、励ましてあげたいと願いながらも、子供が言うとおり、いつかは必ず死ぬ未来に向かって続いていく人生を、私自身解決できていないのに、どうして子供を正しく導くことなどできるでしょうか。私は答えが見つからないままに、そのことは考えないでおこうと思いました。けれどこの時イエス様は、すでに私に救いを用意し、このような小さな子供の言葉を通しても、み手をさしのべてくださっていたのでした。そしてケーキ、

ケーキと思って通ったケーキの会で出会ったイエス様のお話の中に、この人生の大問題の解決があり、そのイエス様は「どうして私は生まれてきたのだろう」「死んだらどこへいくのだろう」という疑問に圧倒的な解決をくださり、私が生まれて以来ずっと心に沈んでいたわだかまりをすっかり溶かして、本当に身も心も軽やかにしてくださったのです。

私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。

（ヨブ　1・21）

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

（Ⅰコリント　6・20）

私たちの国籍は天にあります。

（ピリピ　3・20）

私のような者がどうしてこのような大きな恵みの中に入れられたのか分かりませんが、ただただイエス様に感謝するのみです。私の中にある罪を本当に何とかしたいと願った時、祈り方も分

からないままにイエス様の前におそるおそる頭を下げた時、本当に不思議な体験をしました。私自身は自分の罪を言い表わして小さく小さくなっていくのに、なにか背後から私を引き上げてくださる力があって、頭を上げた時には、まったく別世界でした。

「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。（Ⅱコリント　6・2）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

これがその時与えられた聖書の聖句です。このようにして、主ははっきりと私をとらえてくださり、確信を与えてくださいました。

イエス様が備えてくださった友

このようにしてイエス様に救われた私ですが、私には、早くからイエス様によって用意されていた、一人の友がありました。それは、姪の綾公子さんです。しかし、それは通常の叔母と姪の関係ではなく、私は父の外の子供として生まれ、公子さんのお父様は私の「母違いの兄」に当たります。世間的な常識でいうと、このような関係の場合、親しいお付き合いなど考えられないことなのですが、当時坂出に住んでいた私の父の家族の全員が本当に考えられないほど優しい人々

ばかりで、また家も近かった関係で、しょっちゅう遊びに行き、私は物心がついたときから何かよそと違う家だなあと思いながらも卑屈になることもなく、ぼんやりと、のびのびと過ごさせていただきました。綾公子さんはその頃は兵庫県の西宮に住んでおられましたが、父が勤めている会社は東京に本社があり、月に一度ぐらいは出張して、いつも東京から私と五歳下の公子さんに同じおもちゃや人形を買って送っていたようでした。大きくなってから、ふとした機会に私の家でその頃のおもちゃや人形がでてくることがあり、二人して笑いあったものでした。

私は思春期になると人並みに出生のことを悩むようになり、「私は生まれてこなければよかったのかもしれない」などと日記に書きつけたり、「何が真理なのか」と思い詰めたりした記憶もありますが、それも主人が現われてからは忘れていったように思います。

母は私が小さい時からリューマチで寝たり起きたりの生活でした。世間体をとても気にして、きびしくきびしく育てられました。それで反発して、よく母とは口喧嘩をしました。主人と結婚した時は、内心ほっとしました。口やかましい母からのがれることができ、世間の目からもやっと解放され、のびのびとした自由な気分を味わうことができました。しかしそれでも、心の底には何か解決しない、もやもやしたわだかまりのようなものがいつも沈澱しているのでした。

その後、公子さんは西宮から坂出に帰ってこられ、お医者さんと結婚して一時東京におられましたが、ご主人の転勤で再び坂出の地に落ち着き、また昔のように親しいお付き合いが始まりました。私がイエス様を知って救われて間もなくのこと、公子さんのお家は開業医として医院と家を新築されることになり、この世的には多くの富と満足を手に入れられたかに見えました。しか

しこの頃から公子さんはかえって虚しさを感じられるようになり、イエス様を求めるようになられ、やがて罪を悔い改めてイエス様に従うことを決心し、救われたのです。育ってきた環境が随分違うのに、私に続いて彼女が救われたことは、喜びでもあり、驚きでもありました。主の恵みに感謝いたしました。

私もその頃は結婚して子供が与えられていました。そしてイエス様は私たち小さな者を顧みて救いあげてくださり、坂出という小さな市に、共に祈りあうことのできるよき友、「主にある姉妹」を備えてくださったのです。すべてはイエス様の憐みのご計画でした。このご計画はまもなく、さらに大きな一つのかたちとなって現われてくるのです。

坂出キリスト集会の誕生

私は救われて後、しばらくは喜びでいっぱいでした。小さな町で生まれ育ったせいで、友人知人も多く、自分の力でイエス様の救いのすばらしさをいろいろな方にお伝えしたいと思い、がんばってみました。このころはイエス様を知りはしたものの、まだイエス様に導かれる、ということは知りませんでした。公子さんとは趣味も共通したものがあり、お稽古ごとなどいつも一緒に通っていましたが、救われた後は二人ともお稽古にも興味をなくし、この世の楽しみを追う生活からは離れました。しかし自分の力でがんばる信仰は、当然のことながらすぐに喜びが消え、いつの間にかすっかり眠りこんだ信仰になってしまいました。いつも身近にいてくださる公子さんも、一緒に仲よくお付き合いくださって、二人手をとりあって冬眠をしてしまいました。

しかし、イエス様は私にささやいてくださり、数年前からふたたび背後から突き動かされるように心の渇望を覚えるようになり、「もう一度、救われた頃のあの喜びをとり戻したい」という気持ちが強く起こってくるようになりました。

やがてその頃、私の主人の叔父ががんになり、公子さんと「二人で祈りましょう」と、お祈りを始めました。公子さんは毎朝十時半にはお天気だろうが雨が降ろうが必ず来てくださるので、私はただ待っていればよく、本当に感謝でした。その内、主人の叔父は亡くなりましたが、お祈りは続いていました。やがてお祈りの後で、私の手元にあるメッセージのカセットテープを、初めからもう一度聞きなおしてみようということになり、二人で少しずつテープのメッセージを聞き始めました。そうすると、何と多くの恵みの聖句を聞き漏らしていたかに気がつかされました。二人で、「知らなかった!」「知らなかった!」と驚き合う毎日でした。お恥ずかしい話ですが、それまで私たちは「イエス様、どうすればいいのですか」と祈ったことさえなかったのです。そしてそのことに気付かされてからは、毎日「イエス様、どうすればいいのですか」と祈るようになりました。このようにしてイエス様は、日々私たちに必要なみことばを与えてくださり、養い育ててくださいました。私たちは毎日発見があり、毎日喜びがあり、毎日が嬉しくてたまりませんでした。また「私たちは何も知らない者だ」ということもやっと分からされてきました。そしてイエス様が教えてくださり導いてくださるお方だということを初めて体験的に知ることができるようになりました。

いつしか私たちは、「どうかイエス様が導いてくださる真実の礼拝を捧げられる場所をお与え

ください」「どうか群れの中に男性の働き手をお与えください」と祈るようになりました。

「もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」（マタイ　18・19、20）

この祈りは聞き届けられ、イエス様の憐みと導きによって、ささやかながら坂出キリスト集会が生まれたのです。礼拝の場所も、公子さんのお父様の会社の会議室が与えられました。この会社は、公子さんにとっては祖父、私にとっては父の先代が明治時代に興した会社で、このほど創業百年を記念して改築が行なわれたばかりでした。私たちがそこを望んだのではなく、公子さんのお父様の方から「どうぞ」と提供された場所で、イエス様が与えてくださったのだということが本当によく分かりました。イエス様は私たちの祈りに最善の時に応えてくださる方であることをここでも体験しました。なにも分からない私たちですから、祈りが聞き届けられるたびに手を取りあって「うわ、すごい！」「イエス様はすごい！」と感激しています。イエス様、どうかこんな幼い何も分かっていない者ですが、このキリスト集会の群れの中にいつまでも加えてくださいますように。どうか鈍い者ですから手取り足取り導いてくださいますように。心砕かれて、いつもイエス様のおそばにいさせてくださいますように。

このようにして、坂出キリスト集会はイエス様が立ててくださいましたが、それとともに多くの主にある兄弟姉妹をも群れに加えてくださいました。昔、私が救われて間もなく、自分の力に

頼って周囲の方々にイエス様のことをお伝えしようとしたときはまったく何の効果もありませんでしたが、イエス様が集めてくださる、ということはこんなに力強く、すばらしいことなのか、と体験させられ続けています。「光よあれ」を読んで一週間めにキリスト集会を訪ねてこられた方は、すでにイエス様との出会いを体験なさっておられ、たった一人で喜びに満たされてやってこられました。縁もゆかりもなかったいろいろな方々が、このようにしてイエス様のもとに呼び集められ、ともにイエス様を賛美するとき、まったく心を一つにすることができます。そしてお互いになつかしくさえあるのです。「私にはこのキリスト集会があるから、もう何があっても孤独ではない」とおっしゃる方のお声を聞くと、私は「どうかイエス様、私もこの群れの中から漏れませんように」と願わずにはいられません。イエス様のご計画は私たちには測り知れませんが、どうかみ心だけがこの坂出キリスト集会の上になりますように。

このようにして、イエス様は小さな者の祈りに答えてくださり、私たちが願った以上のものをくださいました。これから先も、この小さな群れが、どのようになっていくのかまったく分かりませんが、イエス様が導いてくださる道は間違いがなく、最善であることを体験しましたから、これからも毎日、「イエス様、どうしたらいいですか」と日々の導きをイエス様に委ねていこうと思います。私たちが何かをしたからなどでは決してなく、一方的にイエス様が祈りに導いてくださり、この恵みをくださいましたから、本当にイエス様に圧倒されます。どうかイエス様、この恵みの中に、一人でも多くの方々をお加えくださいますように。

あなたは豊かな所へ私たちを連れ出されました。（詩篇66・12）

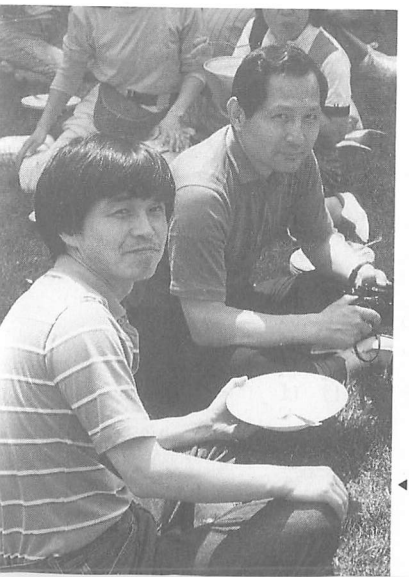
西軽井沢のベックさん宅で。左から左武郎さん、馨さん、碧さん、
▼望さん、深見さん、上田さん、久仁子さん、杉田さん、汀さん。



森島左武郎

一九四五年多治見市に生まれる。西宮市立高木小、西宮市立甲陵中、兵庫県立鳴尾高、京都市立美術大学卒業。㈱日建設計大阪本社インテリア部勤務。一九六九年久仁子さんと結婚。お子様は長女望さん、次女汀さん、三女馨さん、四女碧さん。

- 家庭集会　不定期
- 住所　兵庫県西宮市高木東町一二―一四
〒六六三・電　〇七九八―六五―三七一九



◀ 左から森島左武郎さん、武井さん。
1989年軽井沢バイブル・キャンプにて。

「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」

（黙示　3・20）

一九八六年七月の、軽井沢で行なわれた夏のバイブル・キャンプでのことでした。長い間私は、この聖句は未信者に対して語られているものだとばかり考えていました。しかし、実は主を受け入れたと思っていた私自身への主の語りかけだったのです。それを素直に認め、それまで二十六年間、主は私の心の外に立って扉をたたき続け、内に入りたいと願ってくださっていたのに、それを知らないで外に立たせたままでいたことを主にお詫びして、「このようなわがままな者ですがどうか内にお入りください」と祈りました。そうすると、心の中にふわっと温かいものが広がって、今まで満たされなかった渇きがいやされ、いい知れない安心感と満ち足りた思いが与えられ、とても嬉しくなってなぜか涙がとめどなく流れ出てきました。やっと、帰るべきところに帰ってきた、という感じでした。

熱心な教会活動に惹かれて

私は一九四五年、敗戦の年の三月、一家が岐阜県多治見に疎開中に、五人兄弟の四番目として生まれました。私と妹は、上の三人とは少し年が離れ、私もいわば末っ子同様にわがままに育ちました。

私が最初に聖書に触れてイエス様のことを知ったのは、西宮に引っ越してきてからのことです。小学校四年生の時学校の友だちに誘われて、すぐ近くの日本キリスト教団の教会の日曜学校へ連れていってもらいました。小さな教会でしたが、大学生や保育園の保母の先生方など若い信徒の方々が皆一生懸命に日曜学校の奉仕をしておられました。当時、牧師はその教会には住んでおられず、一人で数カ所の教会を兼務しておられ、朝の礼拝が終わるとただちにもう一つの教会へと急がれるという、いわゆる「兼牧」という形でした。そのため、信徒たちが協力して留守を守り、牧師を支えていました。でもそのうちきっと、専任の牧師を迎え、いつも牧師館におられる牧師に悩みごとも相談も、いつでも聞いてもらえるようにしたい、また礼拝堂も保育園の園舎ではなく、いつでも祈りと礼拝を捧げることができるような会堂が欲しい、と皆が願い、そのことが成しとげられるように皆で協力しあって頑張っていたように思います。

ですから教会の中はあらゆる年齢の方々が心を合わせてそれぞれの力に応じて熱心に奉仕活動をしておられました。私は、そのような若い情熱と意欲を持っておられる信徒や、特に日曜学校の教師の方々に惹かれて、夏のキャンプやクリスマス、またイースターやバザーなど、次々に催される行事が楽しくて、嬉しくて、いつも教会に入りびたっている毎日でした。

私の写真アルバムは、小学校、中学校、高校を通して、教会学校の思い出のものばかり、学校のものはわずかで、アルバムの大半は教会学校の記録で占められています。多くの友人や教師の方々に出会うことができ、その方々が私を教え、愛し、導いてくださったことを感謝しています。今思いおこしてみますと、それらの楽しい活動や、いろいろな行事は、神様を中心に神様の栄

光のためだけに行なわれたものであったかどうかはよく分かりません。もちろん何をするにも教会の営みは神中心でないはずはないと考えておりましたし、たとえそれが人間的な意欲や熱心や努力であっても、主は喜んでくださらないはずはない、それどころかクリスチャンの理想とはあのように優しく、頑張る人たちのようになることだ、早くそのようになりたい、と思っていました。つまり、神様の秩序を尊重し、その方法におゆだねするという考えはまったくといっていいほど持っていなくて、人間の「考えや行ない」など人間の中に「良いもの」を期待し、神様がそれらを用いてご自分の計画を成しとげられるのだと考えておりました。

洗礼を受ける

一九六〇年、高校一年生のクリスマスに、滴礼の洗礼を受けました。当時私は、洗礼とは教会の信者として入門することであり、信仰を完成させるのはそれからの問題だと考えていました。罪の自覚と悔い改めの気持ちはあまりありませんでした。妹とよく喧嘩をし、母を困らせ心配をかけたりするようなわがままな性格を持っていることなど、漠然とした罪意識はありましたが、自分の中には良いものなどまったくないのだ、自己を神とするその高ぶりがイエス様を十字架につけて殺したのだ、というところには思い至っていませんでした。

「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。」（ヨハネ　15・16）

私の当時の入信の動機は、この聖句をよく理解せず、今考えると、自分中心で思い上がったものでした。私はその頃、パスカルの「パンセ」を読み、どうせ一度きりの人生ならパスカルの言うように神様がいらっしゃる方に「賭けてみよう」と思ったのです。つまり、信じる信じないは自分の勝手で、自分が中心となった選択だ、と傲慢にも考えていたのです。

したがって、今までの自分の罪を悔いて、神様ごめんなさい、これからは自分中心から神様中心の生活へ一八〇度方向転換します、という回心ではなく、教会に入会することにより自分の人生を規定し、自分にとてもよくしてくださっている教会学校の先生や優しい大学生の若い信徒の方のような生き方がしたい、という願いを抱いての決心でした。

高校時代をずっとそのような中ですごし、一時受験勉強のために教会生活をしばらくお休みしました。この高校の三年の時、教会学校の同じ分級のクラスメイトの中に今の妻が入ってきました。これはまったく神様のプレゼントです。

一年の浪人の後大学へ入学してからは、私が長い間親しみ、よくしていただいた教会学校の教師として参加してお返しをしたいし、また以前輝かしく、うらやましく思えたあの先輩たちのようになりたいと意気ごんでいました。時間も比較的自由で意欲もありましたから、青年会、教会学校と、今の妻と一緒にいることができるということもあって、一生懸命になっていました。

そのころ、やっと長年の念願がかなって、専任の副牧師をお迎えすることができ、いよいよ一人前の教会の組織作りがスタートするんだと教会全体がはりきっていました。しかし、いざお迎えしてみると、長年の期待があまりにも高すぎて、こうあってほしい、あああってほしいなどと

牧師に対するいろいろな要望が強すぎて、それらが教会の運営においても、また人間的な領域においても十分に応えられないとなるとかえって失望が大きく、また批判もでるという状態でした。結局二年足らずで別のところに赴任されるという結果になってしまいました。私自身も牧師批判に積極的であって、主につながり、主に立てられている「器」であるはずのその方に対して共に重荷を担いあい、とりなしの祈りをするという姿勢は持っておりませんでした。自分の中にある「熱心」が、何に対してのものであるかをはっきりと主イエス様に教えられていないことは、大変危険なことです。

結婚と奉仕の生活

その後大学を卒業し、就職一年目の冬に私たちは結婚しました。教会学校で知り合い、奉仕する中で主に結びあわされた伴侶であると感謝しておりましたので、私たちが受けた主の恵みを今度は世代の若い子供たちにも受けてもらいたいと願って家を開放し、二人そろって教会学校の奉仕をできる限り続けていこうと決めていました。そうすることによって、私を育んでくださった先生方、とりわけすでに天に召された先生方への感謝を表わすことになると考えました。そして中学生や高校生の教会学校の生徒たちと一緒に、夜遅くまで語りあい、いろいろな活動を盛んにやっていました。また教会はその頃には再び「兼牧」の状態に戻ってしまっていましたので、教会を支えるために神学校から若い女子の神学生が派遣されてきておられて、教会の陰の奉仕や、教会学校のお手伝いなどをしてくださっていました。いつも讃美歌を口ずさみながらお一人で

黙々と礼拝堂の清掃をしておられました。

ちょうどその頃、妻はこの神学生の方の影響もあり、福音派と呼ばれるその神学校へ聴講生として出席しはじめ、私もその神学校の聖会に出席し、神学生の一人と話しているうちに次の聖句を聴いて大変驚きました。

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。

（Ⅰコリント　6・19）

この私のからだのうちに聖霊が住んでいてくださるなどということは、今まで聞いたことがありませんでした。神様は近くにいらっしゃり助けてくださるとは知っていましたが、この自分のうちにおられるというこの聖句のお約束は衝撃的でした。そして、神学校の寮の一室でその方と一緒に主に祈り、内におられた聖霊を知りもせず、大切にもしていなかったことを悔い改め、また感謝しました。このことがあって後、しばらくの間は、ものを食べたり、触れたり、この世のものとの接触に抵抗を感じるほどでした。聖霊については今まであまり語られず、聖書では読んでいたはずでしたがほとんど知りませんでした。ですから、うちに住まわれる聖霊を、何か奇妙な感覚で捕えたように思います。

しばらくして、私たちの教会は、再び専任の牧師を迎えるようになりました。その方は、この教会からの献身者であり、私の教会学校の先生でもありました。本当にいつも身近におられ、私

も共にいたいと思っていた方でした。趣味も共通していましたし、尊敬していました。

その方は神学校卒業と同時に結婚し、新婚旅行をかねて赴任してきてくださいました。ご夫妻そろって献身的に教会の建て直しのために努力され、私たちもおよばずながら協力していこうと決意したものです。牧師はまず、教会がはっきりと聖書のみことばの上に立っていること、ただ単に人間的な親しさや家族的と言われるだけのものにとどまらず、主のみ体として建てあげられることを目指されました。礼拝出席を尊重し、聖書をよく読み、祈り、そして伝道する教会、その方法として四年サイクルのスローガンを掲げ、テーマを組み、各種委員会活動や信徒訓練を組織化し、さらに話し合いを緊密にすることで会員相互の意見を一致させ、年間計画や将来計画を立てて展望を共有することなどが教会を成長させることだと確信しておられ、私自身も積極的に提案し、協力を惜しみませんでした。こうした状態が十年ほど続きました。会員の数は増えて礼拝出席者は三十人ほどから八十人以上になり、伝道礼拝時には百人を超えるまでになりました。

「異言」が入ってきて

それからしばらくして教会に、「異言」が入ってきました。異言というのは、意味の分からない言葉や声をお祈りの中に入れることを言います。それまで教会では、イエス様を信じて洗礼を受ければ聖霊がすべての人に与えられると教えられ、またそう信じていたのですが、その頃から聖霊を受けたしるしとしての「異言」が語られるようになり、皆がそれを求めるなかで「異言」を与えられる人も増え、その「異言」の意味を解きあかす人が現われないままに、さらに癒しを

求めて大声で祈るなど、これまでの教会にはなかった異様な心理的興奮状態を体験するようになりました。最初は喜んで受け入れ、これこそ信仰にリバイバルの火がともされ新しい出発の転機がやってきた、と期待しておりましたが、やがて信徒間に不満や不一致が生じ、聖霊の実であり結果である愛、喜び、柔和、自制などに満たされるはずのものがそうはならず、思いもかけぬ方向にすべてが動き出しているようでした。私自身も異言を話す練習をお風呂でするなど、救いの確信の乏しさや喜びのない現状を一挙に打開する決め手として、またしるしとして、「異言」を求めました。

しかし、それも私には与えられないので、やはり自分が霊的になまぬるく、聖書を読むことも祈ることも不熱心だから、不信仰だから「異言」の賜物が与えられないのだと、むりやり自分の心を納得させていました。（編集注・異言の問題についてベックさんは、「実を結ぶ命」の一二七ページ以降において、「…異言を語ったり、どうしてもいやされることを催促したりすることを絶対にしないように忠告いたします。なぜならば、そうすることによって、多くの人々は悪魔の支配下に陥ってしまうからです。」と実例をあげて明快に書いておられますので、ぜひ、あわせてお読みください。）

疲れ果て、平安を失って

このような状態がしばらく続きました。そのうち、自分の生きがいとも思って奉仕をさせていただいてきた教会役員としての務めや、会堂建築委員、併設されている保育園の仕事など、さら

にこれこそ私たちのライフワークと考えていた教会学校の教師の仕事さえ、何か「しんどい」ものに感じるようになってきました。

年齢も四十歳を過ぎ、会社での仕事は責任が加わる一方で、社会情勢の多様化につれ、設計の仕事にも複雑な問題が次々と現われ、悩むことも多くなってきました。家庭内では子供の教育について能力以上の期待をして、子供たちを傷つけました。体力も今までのように無理をして、ただがむしゃらにという訳にもいかなくなってきました。そのころ、妻も同じように信仰上でいろいろな疑問を持ち始め、次第に平安を失っていったようです。

「私」中心の信仰

このように、四十歳を過ぎる頃までの私の信仰生活は、結局その中心が「私」であって、主イエス様ではありませんでした。少しでも「良い人」になって、さすがはクリスチャンだと人に思われたいし、また同時に、人にも、特に教会学校の子供たちにも「良い子」になるように求め、子供の内にある本当の渇きや、不満にはまったく目が開かれていない盲目の信仰でした。主は私の内に入って、自由に働きたいと願っておられるのに、私はそれを閉め出し、自分の肉に頼って働こうとしておりました。自分の肉に期待し、自分の肉で仕上げようと懸命になり、とどのつまり失敗し、疲れはてていたのです。

だれが自分の数々のあやまちを悟ることができましょう。どうか、隠れている私の罪をお赦しください。あなたのしもべを、傲慢の罪から守ってください。それらが私を支配し

ませんように。そうすれば、私は全き者となり、大きな罪を、免れて、きよくなるでしょう。私の口のことばと、私の心の思いとが御前に、受け入れられますように。わが岩、わが贖い主、主よ。

（詩篇　19・12～14）

主のみ名を呼び求める者は

このような時、吉祥寺キリスト集会のことを知らされました。以前同じ教会に集われていて、東京へ移られた一人の方から「光よあれ」の本とテープが送られてきたのです。最初、私はあまり興味を持ちませんでしたが、妻は心を動かされ、一九八六年の正月に、岡本に来られたベックさんご夫妻を迎える家庭集会に初めて参加しました。その後、二月、三月と開かれた家庭集会に、妻は私の妹夫婦と共に出席しました。妹の主人のお母様はがんで闘病中でしたが、心の平安を求めておられ、今まで一度も聖書を読んだことがなく、教会へも一度も行ったことがないにもかかわらず、ベックさんとお話をした後で素直に主に従われ、イエス様に頼ることのすばらしさを体験なさったことを知らされ、

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。　（ローマ　10・13）

というみことばが真実であり、何も「信仰問答会」を受けなくても、「教会生活の実績」がなくても、主のみ名を呼び求める者はだれでも救われるというみことばがそのまま信じるに足るものであることをはっきりと示されました。妻はその後一人で上京し、吉祥寺キリスト集会が開いた

「喜びへのコンサート」に出席し、長澤文枝さんの証しを聴き、また吉祥寺キリスト集会の礼拝や家庭集会にも初めて参加し、帰ってきてその素晴らしかったこと、今まで見たこともない喜びと輝きに満ちているクリスチャンたちに会って非常なショックを受けたことをくわしく聞かせてくれました。

私はそれらの話を聞いてとても心が惹かれましたが、その反面、長い間一つの教会しか知らず、組織された教団や教派以外は異端か、さもなければ教理上の問題があるところだというふうに独りよがりに考えておりましたから、警戒心も人一倍持っていました。でもとうとう四月に、岡本の小山さんのお宅の家庭集会に初めて参加し、ベックさんのあの温かい握手によって迎えられ、メッセージと食事のなごやかな集いの中に包みこまれて不思議な落ちつきを感じました。お聞きした聖句は次のものでした。

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

（ローマ　3・23、24）

私は今まで、神の教会はどこでも同じで、信仰は一つ、み霊も一つだから、自分の住んでいる所に一番近い教会に集い、そこで奉仕し、主に仕えることが一番主に喜ばれることだと考えていました。私はあの教会、この牧師と移動する信徒を快く思っていませんでしたので、教会を転出することは頭から考えておらず、何か良い方法か手段があれば私たちの教会に採用し、教会運営

に役立てたいというふうに考えていました。それに私には、長い間導いてくださった沢山の友人たちがいるし、まして今負わされている責任があるではないか、などと複雑な思いを抱きながら、七月の軽井沢のバイブル・キャンプに、家族六人が小山さんとご一緒に参加しました。

軽井沢バイブル・キャンプで見たもの

そこで見たものは、まことに、神の家そのものでした。私は以前、自分の信仰が弱くなったと思われた時はよく、よその聖会や伝道集会などに参加し、熱狂的な集まりに出会った時には感情の高まりを信仰の深さだと思って喜んだり、また神学校の先生の格調ある説教を聞いて自分のわずかな知性を満足させて安心したりと、忙しく浮き沈みをくりかえしておりました。

そのような経験とはまったく異なり、軽井沢のバイブル・キャンプで見たものは、もっと静かで、自然で、なごやかなイエス様の集いでした。特にそのように思われたのは、日曜日の礼拝でした。礼拝はいつしか始まり、誰の指示も命令もなく、男の方々が示されるままに自由にみことばを朗読して、神様に素直な感謝の祈りを捧げ、皆で聖歌を賛美するのです。その後パン裂きとぶどう液のためのみことばと感謝が捧げられ、バプテスマを受けた人もまだの人も、ただイエス様を主として受け入れていることだけを条件に、共に聖餐にあずかるのでした。

「真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」（ヨハネ　4・23、24）

神様の前に一人一人がひとしく置かれ、聖霊の支配にある自由と喜びに包まれた礼拝であり、またさらに、イエス様が私のような罪人のためにご自身の栄光を捨て、十字架について代価を払ってくださったことによって、私たちは神様の前に正しい者とされていることを、深く味わわせてくださる礼拝でした。人間に説得されたり、教えられて知るものではなく、ただ神様のうちに包まれることによって、そのことを啓示してくださいました。また、主の前にまったくへりくだって、正直に話されるいろいろな方々の証しや、キャンプに集われた沢山の方々との率直なお付き合いを通して、主が生きて働いておられるさまを見せられました。朝早く起きて、軽井沢の木立の中を散歩していても、主が「わたしは天にも、地にも満ちているではないか」と仰せられている声が響いてきて、主に対する畏れを感じました。

しかし、これまでの信仰生活とのあまりの違いに、心のかたくなな私は、大きな感動を受けながらも、主に出会ったモーセの顔が光を放つので恐れて近づけなかったアロンやイスラエル人のように、喜びに満たされて輝いている皆様と素直にお話ができなかったように思います。やはり、これまでの信仰生活のキャリアが障害になっていたのだと思われますが、その後、高知、軽井沢とたて続けに夏のキャンプに参加させていただき、そのいずれを通しても、救われたクリスチャンの方々が、ご自分の弱さや、みじめさ、また失敗を正直に告白され、それだからこそイエス様の十字架に徹底的に頼っておられる姿勢をうかがい、まだ自分の力に期待して失敗をくりかえしていた私自身との大きな隔たりを発見しました。

私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそキ

リストの死は無意味です。ああ愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に、あんなにはっきり示されたのに、だれがあなたがたを迷わせたのですか。

（ガラテヤ　2・21、3・1）

だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。

（ガラテヤ　6・3）

クリスチャンとは、自分の弱さを知り、それを正直に主の前に認め、キリストの強さに接ぎ木されて神様の栄光を現わす者であって、イエス様に近づけば近づくほどその光に照らされて自分の罪が明らかになり、自分が小さくなってイエス様が大きくなることだと示されて、内心ほっとした気分になりました。

主が支配してくださる自由な礼拝を一度味わった後、今までの教会生活のすべてが形式的で息苦しく思えて、礼拝出席が続けられなくなってしまいました。そうするうちに、色々と困難が多いと思われた教会からの転出も、祈りのうちに備えられました。

神戸キリスト集会の誕生

やがて九月から、阪神間にある岡本のマンションの一室でパン裂きの礼拝が始まりました。本当に小さな集いでしたが、主の導きとしか言いようがありません。何か心細い思いはありました

が、それだからこそイエス様だけに頼ることを学び、心配して聖日を迎えますが、必ずあふれるような祝福と平安を与えられる礼拝を守ることができました。

神の御霊によって礼拝をし、キリスト・イエスを誇り、人間的なものを頼みにしない私たちのほうこそ、割礼の者なのです。（ピリピ　3・3）

それから四年がたちました。夢のようです。色々なことを学ばせていただきました。苦しみあえぐ多くの方々が神戸キリスト集会にやってこられ、その一人一人が主に出会って救われていかれるさまを目の前で見てきました。主が生きておられるとしか言いようのないあざやかさです。人の働く余地はまったくありません。人はただ黙して祈るのみです。

兄弟たちよ。私はあなたがたに知らせましょう。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。（ガラテヤ　1・11、12）

人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。（ミカ　6・8）

初めて主を受け入れてから三十年になりますが、ようやく、主の前にへりくだること、主にお

ゆだねすることがどれほど大切かを学ばせていただきました。「実を結ぶ命」のリンデさんの学びの中に、次のような文章があります。

「要求や命令をもって主に近づく者は、主を侮る者です。それに対して、主に信頼し、主にすべてを明け渡し、主を崇拝する者、それこそ主をほめたたえる者です。」

主を侮り続けた私ですが、そのような私を、ずっと忍耐して待っていてくださったイエス様に本当に感謝します。みことばの約束を成就してくださる真実なイエス様を、心から賛美します。

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」

（エレミヤ　29・11）



1988年12月、ニューヨークで家族そろって。▶

栄光と支配がキリストにありますように。

（Ⅰペテロ4・11）

森島久仁子

一九四四年神戸市に生まれる。諏訪山小、松蔭女子学院中、高、短大英文科卒業。伊藤忠商事大阪本社受付勤務、次いで一麦保育園に保母として勤務。家族は夫左武郎さん、長女望さん、次女汀さん、三女馨さん、四女碧さん。

幼い頃から教会へ

私は三人姉妹の長女として、サラリーマンの家庭で育ちました。両親の仲はあまりよくなく、どちらかといえば暗い家庭でした。父の両親、父の弟二人、妹一人と同居していましたから、大家族の中で小さくなっていました。母は一日中働き通しでしたが、身体が弱かったこともあり、病気になると実家に戻らされていました。こんな家庭でしたから、母の期待はいつの間にか長女の私にかかり、母は教育ママ的になって私に幼稚園もエリートコースを受験させ、小学校一年生から英語を習わせ、すべて母の計画通りに私を歩ませようとしていたのでした。

幼稚園はキリスト教系で、日曜日も先生につれて行っていただいて教会に通っていました。小学校の間もずっと教会へは通っていましたが、とりたてて印象に残っているようなことはありません。それでも、主イエス様にお祈りをしたことは覚えています。中学の受験は、母の希望通りにはいきませんでしたが、ミッション・スクールに入学しました。毎日の礼拝や、聖書の授業も

素直に受け入れることができました。日曜日には礼拝に行くようになり、中学二年生のクリスマスに滴礼の洗礼を受けました。

イエス様が神様であると信じていましたが、私に罪の自覚はあまりなく、イエス様が十字架にかかってくださったことの意味も分からず、すべてが漠然としていました。まして十字架のみわざが罪多い私自身のためだとは思ってもみませんでした。高校一年生の時、西宮へ転居しました。私といっしょに洗礼を受けた友人が教会を移ることになり、私もその友人の家の近くの日本キリスト教団の教会にいっしょに移りました。しかし、私は、教会というものを高校生の男女交際の場という程度にしか受け取っていませんでしたし、その頃は主を仰ぐこともなく、名ばかりのクリスチャンでしたから、自分本位に生き、めくらめっぽうに闇の中を歩んでいました。

「やみがあなたがたを襲うことのないように、あなたがたは、光がある間に歩きなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこに行くのかわかりません。あなたがたに光がある間に、光の子どもとなるために、光を信じなさい。」（ヨハネ　12・35、36）

高校三年の時、一番下の妹が友人に誘われてすぐ近くの教会に行くようになりました。その教会は少し裏通りにあったので私はまったく気が付かず、こんなに近くに教会があるなんて知りませんでした。それで妹に誘われて行くことにしました。

さあ、主に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、いやし、私たちを打ったが、また、包んでくださるからだ。（ホセア　6・1）

私たちは、知ろう。主を知ることを切に追い求めよう。主は暁の光のように、確かに現われ、大雨のように、私たちのところに来、後の雨のように、地を潤される。

（ホセア　6・3）

奉仕の生活へ

日曜学校で、同じ学年の分級の中に、後の主人がいました。私は高校を卒業すると短大に進みました。その頃、教会の方々から日曜学校の教師やオルガニストをすすめられ、奉仕をすることになりました。一日も休むことなく、熱心に教会に集いました。そして短大二年の頃から後の主人との交際も始まり、いっしょに奉仕活動をするようになりました。日曜学校や青年会など、日曜日は朝早くから出かけて一日中教会にいるという生活でした。週報を印刷したり、お年寄りの方々を訪問したり、そして主人とはいつもほとんどいっしょでした。

短大を卒業すると、伊藤忠商事に勤め、受付の仕事をしました。他の部署と違って残業などはありませんでしたから、その余暇を利用して通信教育で幼児教育の勉強を始めました。やがて兵庫県保母試験を受けて保母の資格を取得し、三年間勤めた会社を辞め、教会に隣接している保育園で保母として勤務するようになりました。保育園の園児が日曜日に教会に来てくれるようになることを願っていたからでした。

保母になって二年目に主人と結婚しました。共働きでした。私はいつも、日曜学校の子供たちに神様のことをお話するのに、あまりにも自分の知識が少ないことを感じていました。その頃教

会には神学生の方が土曜日と日曜日に奉仕に来ておられましたので、いろいろと教えていただき、その方のすすめもあって、神学校に聴講生になり、しばらくの間通っていました。しかしまだ、すべてをイエス様にゆだねることの本当の意味は分かっていませんでしたし、救われたことの確信もありませんでした。当時私たちが行っていた教会は、一人の牧師が数カ所の教会を兼ねるという「兼牧」で、教会に牧師は住んでおられませんでした。その方の説かれる信仰は、私が学んだ信仰とあまりにも違うように思えました。いつもその二つを比較して批判する気持ちになったり、反対に自分を責めたり、といった連続でした。時たま開かれる特別伝道集会にもよく出かけました。その時は熱気に当てられて自分も何か燃えているように錯覚したりする、といった具合でした。当時の教会での生活は、私が自分の力を頼りに懸命に戦うのですから、すぐに疲れて倒れてしまいます。その頃は主ご自身が戦ってくださるということ、つまりすべてを主におゆだねすることを知らないのですからそれも当然でした。

主があなたがたのために戦われる。あなたがたは黙っていなければならない。

（出エジプト　14・14）

やがて長女を妊娠し、ひどいつわりが始まりました。

明くる年に長女の望が生まれ、三年後に次女の汀が、三年後に三女の馨が、そして四年余り後に四女の碧が与えられました。それぞれ聖書にちなんで名前をつけました。その間、育児や家庭のこと、日曜学校のことを主が与えられるままに務めてまいりました。

「イエス様を信じるというのは、このようなものではない」という気持ちがところが四女が与えられてからは、一人で考えることが多くなり、段々と落ち込んでしまうようになりました。ちょうど長女の望が生まれた時に、ある牧師ご夫妻が教会に住んでくださるようになりました。私は、何がどう、といったはっきりしたことはないのに、「イエス様を信じるというのは、このようなものではない」という気持ちがいつもありました。はっきりとした真実があるのに、自分は何か大切でないことに目を向けているように思えて仕方ありませんでした。そのうちに祈禱会や婦人会にも行けなくなってしまいました。

そんな時に、私の母が脳梗塞で倒れて入院し、父と私で看病することになりました。私は母が死ぬのではないかと思うといても立ってもいられず、自分は落ち込んでいたのですが、母がイエス様を信じるようになり、天国に召されてほしいと思い、幼子のようになった母に絵本でイエス様のことを話しました。ある日父から、母がイエス様を信じ洗礼を受けている夢を見たということを聞き、母は必ず救われるという確信が与えられました。母は失語症になり片眼が不自由になりましたが、回復して退院し、その年のクリスマスに両親がそろって滴礼の洗礼を受けました。嬉しいことのはずなのに、なぜか私はまた沈みこむようになり、両親への愛が足りないのではないかという思いに捕われ、自分が責められてなりませんでした。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られ

ます。　（詩篇　139・2）

そしてその頃、次から次へといろいろな問題が私にふりかかってきました。主人は仕事がいつも忙しく、その上教会の役員会や保育園の理事会に出かけることが多く、私の悩みを聞いてくれるひまもありませんでした。主人はまた、私の落ち込みも大したことはないと思っていたようです。子供たちも次々と病気をしたりしました。

教会のことも私の悩みの原因でした。献金が、何かお賽銭みたいに扱われているように思えてなりませんでしたし、人が教会の中で支配していて、神様を追い出しているように思いました。イエス様がくださっているはずの「永遠のいのち」のことも曖昧で、喜びはありませんでした。天国への希望も確信もありませんでした。教会での葬儀や結婚式も、その当人が中心のように思えました。イエス様は形式だけのようでした。私は行き詰まって「なぜ？」と自分自身に向けて叫んでいました。自分で何とかしようと思っていました。主を仰ぎ見ませんでした。

彼らが主を仰ぎ見ると、彼らは輝いた。　（詩篇　34・5）

子供たちも入院したり退院したり、また新しく病気が与えられたりと、主はどんどんと私が主ご自身に拠り頼むようになるために私を追い込んでいかれるのでした。

その頃、教会に「異言」が入ってきてそれを語る方が出始め、異様な雰囲気になり、「癒し」が声高に祈られるなど、私はますます「これは違う！」という思いが強くなっていきました。

送られてきた録音テープと本

そんな時、私はふと思い立って、以前同じ教会におられて東京に引越された方に手紙を出したのです。その方は、ちょうど吉祥寺キリスト集会の存在をお知りになった直後で、私にもお手紙をくださり、しばらくして、メッセージの録音テープや「光よあれ」の本などを送ってくださいました。その方を信頼していましたから、すぐに聞いてみました。初めはよく心に響いてきませんでした。それでも録音テープを一つ一つ、ゆっくりと心を静めて聞いていくと、「みことばは力だ」と言われている所が私を大きくとらえました。また、メッセージは、みことばをみことばで説明しているというような感じでした。語られる方が、心からイエス様を信頼し、信じきっておられるという真実が伝わってきました。中心はイエス様で、語っている方の姿はありませんでした。イエス様だけが大切で、自分は大切ではないという態度でした。

あの方（イエス様）は盛んになり私は衰えなければなりません。（ヨハネ　3・30）

ちょうどベックさんが神戸に来られるということを知らせていただき、ぜひお会いしてみたくなり、岡本の小山さんのお宅での家庭集会に初めてうかがいました。集われた方々がお互いを「兄弟」、「姉妹」と呼びあっておられるのが印象に残りました。ベックさんご夫妻が席から立ち上がって玄関まで出迎えてくださり、大きな手で握手してくださいました。私は緊張しすぎてその日のメッセージのことは何一つ覚えていませんが、主のことを語ってくださった温かいその口調ははっきり覚えています。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。

（Ⅰコリント　1・18）

この目で見て

私は「光よあれ」の表紙に並んでいる、証しを書かれた方々のお顔がどうしてあのように輝いておられるのか、同じイエス様を信じているのに私たちとあまりにも違うことが不思議でした。友人の誘いもあり、家族のすすめもあって、一人で東京へ行ってみることにしました。土曜日の家庭集会、吉祥寺キリスト集会の礼拝、武蔵野文化会館で開かれた第三回喜びへのコンサートなどに集わせていただきました。家庭集会はある方のお宅でしたが、何十人という方があふれるばかりにおられ、そのお一人お一人の顔が輝いておられました。礼拝は、週報も司会者もなく、聖霊に満ちた集会のすみずみにまで、神様の秩序が自然に流れているという感じでした。十字架の血潮をしのんでのパン裂きがあり、献金もクリスチャンだけが、主とご自分だけで決められた金額を各人が自由に袋に入れておられました。今日初めて集会に見えた方のご紹介があって、その他は何の報告もなく、それぞれ一人一人が主イエス様につながっておられることがよく分かりました。集会が主催しておられた喜びへのコンサートでは、がんの長澤文枝さんの証しを通して天国への希望だけが輝いて見えました。涙もなく、静かに淡々と語っておられ、深い感銘を受けました。私は喜びに満たされ、また複雑な気持ちで西宮に帰りました。教会を出たいと思いました。何にもつながらなくて、イエス様だけにつながりたいと思いました。それから半年近く祈り続け、

主におゆだねする気持ちが与えられました。自分では決して動く態度をとらず、忍耐して待ちました。もとの教会にいることが主のみ心なら、どうぞそのようにしてくださいと祈りました。

ある日、録音テープでメッセージを聞いていると、一つのみことばが魂に響きました。

「わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」（ヨハネ　21・22）

すべてのことについて、「それがあなたに何のかかわりがありますか」と、イエス様はこの聖句をもって私に鋭く問われました。私のとるべき態度は、ただ「イエス様に従う」ことだけだと示されたのです。主は私に、私は何もできない者であることを知らせ、私が役に立ったり、人に影響を与えるようなことができるといった高慢な思いを砕かれたのでした。形式的なことから離れてイエス様だけを見上げ、信頼することこそがみ心でした。当時、教会で責任役員であった主人に打ちあけてみました。主人は私の信仰だけを見て、受け入れて、賛成してくれました。ただ主人自身は、教会の総会が終わった後ですべての役を辞めさせてもらってから自分がどうすべきか考えると言いました。私一人が教会を出て、子供と主人は残りました。その頃には神戸キリスト集会はまだなく、日曜日は私一人自宅に残ってテープでメッセージを聞き、祈りと賛美で礼拝しました。イエス様だけがお頼りするお方でした。

わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。（エレミヤ　33・3）

神戸に点った信仰の灯

次の日曜日、長女の望が残り、二人で礼拝を守りました。次の日曜日、小山さんのお宅で四人で礼拝を守りました。次の日曜日、主人と子供たち、主人の妹夫婦の藤原さん、奥田健次さん、博章さんも加わって礼拝を守り、そして九月から神戸キリスト集会が始まりました。ベックさんが来られ、お部屋が一杯になりました。それから狭くなったこともあって、阪神間の摂津本山にある田中公会堂に移り、今に至っています。公会堂がお借りできない時も、また葬儀や結婚式、記念会など、その都度ふさわしく主が場所を与えてくださいます。聖書に書かれている古い時代の幕屋が主の導きで守られたように、私たちも守られていることを感じます。主のみ心のなりますようにと祈るのみです。

あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。」（ヤコブ　4・14、15）

これからどのように主がなさるのか私たちには分かりませんが、主のなさることは完全であり、無意味なことは一つもありません。たとえ、目に見えることでは悪く見えても、主は、その時その時の最善をなしておられ、すべてのことをそれぞれにふさわしく、とり扱っておられます。私たちのキリスト集会には、規則も会則もなく、出入りも自由で、キリスト集会の中心になる人は

いません。イエス様が中心です。すべて、主と私の関係なのです。誰一人、自分の考えを押しつける方もありません。神様の秩序が、自然に流れています。これらは、主と私が結び合わされていると自然に分かってくるのです。

「わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。」（ヨハネ　15・2）

私は三十年余りの信仰生活の中で、神様のことはよく知っていると自負してきました。しかし、何も知らなかったことが分かりました。

人がもし、何かを知っていると思ったら、その人はまだ知らなければならないほどのことも知ってはいないのです。（Ⅰコリント　8・2）

キリスト集会に導かれて初めて、この三十年余りの私の信仰生活は、信仰と思い込んで知らず知らずのうちに自分が自分の思いで働いていたということが分かり、その罪を知らされました。そして主が生きて働いておられるみわざを無視している自分を知らされました。毎日主のみ前で、自分自身がまったく駄目な存在であり、みじめで、不真実な者であることの悔い改めを、心からささげられるようになりました。自分の本当の姿を、主ははっきりと教えてくださいました。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。（ローマ　7・15）

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

（ローマ　7・24）

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。

（エレミヤ　17・9）

自分の中に何一つ良いものがないことを知った時、イエス様はこの私を喜んで受け入れてくださり、主ご自身が働いてくださいました。それがおゆだねするということでした。長女の望が大きな手術をした時も、私は何の不安もありませんでした。望自身も苦しみの中でお頼りし叫んだのは「イエス様」であって、お父さんでもお母さんでもなかったと告白しています。親として子供にしてやれるのは「イエス様だけにお頼りし、従っていくことができますように」と祈ることだけです。他に大切なものはありません。

「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」

（マタイ　6・33）

一九八七年、夏の高知のバイブル・キャンプで、子供たち四人がそろって物部川で洗礼を受けました。子供たちは川に全身を沈められた時、イエス様と自分だけのことを思ったようです。今家族六人そろって、また私の両親も、神戸キリスト集会で喜んで礼拝を守っています。そして主

にある多くの兄弟姉妹とのおつきあいの中で、祝福されて毎日を過ごしています。

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

（使徒　4・12）

渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

（黙示　22・17）

▼1964年2月23日、結婚式に。



森島左武郎さん、久仁子さん夫妻とベックさん夫妻。
▼初めて左武郎さんがベックさんとお話した日に。



キリストの下僕の下僕

熊谷邦雄

一九四〇年名古屋市に生まれる。大阪市立榎並小、桜宮中、都島第二工業高校、兵庫栄養専門学校卒業。日本団食、キングタイガーを経て、ビッグベアー（弁当店）独立開店。味の実設立。家族は妻祐子さん、長女有記さん、次女至芳さん、長男太郎さん、三女千里さん、次男順さん。趣味は文学。

・日曜礼拝　毎週朝十時・家庭集会　毎日曜日

・住所　宮崎市南花ケ島町二七二―一二三〒八八〇・電　〇九八五―二六―三三二四

ベックさん夫妻と左から熊谷邦雄さん、次女至芳さん、三女千里さん、洗礼を受けた長女有記さん、



世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。

（Ⅰヨハネ　5・5）

無神論者であることを誇りにしていた私が、天地万物を創造された神を賛美、礼拝する者に変えられましたのは、ただただ神の憐みによるものであります。

当時私の家庭は、破滅寸前の状態にありました。一針突いただけで破裂してしまう風船玉のようでした。無理をして店舗付き住宅を新築したのはいいのですが、多額のローンと身内からの借金の返済のために私たちは必死で働かなければなりませんでした。その上、四番目の子供が生まれ、その養育も加わって、心身ともにくたくたに疲れ切っていました。やがて家の経済を第一とする私と、子供の教育を第一とする妻が対立するようになりました。私は「なぜ夫に従えないのか」と妻を責めました。妻のほうも、「お金よりも子供の教育のほうがずっと大切です」と言って一歩も引きません。妻は両親が教育者で厳格な環境に育ち、私は放任主義の家庭で育ちました。妻はどちらかというと融通のきかないほうで、私は融通がききすぎるほうでした。お互いの意見が合わず、私は教育ママを地でいく妻を冷たい目で見るようになってしまいました。

家の中の空気がひんやりとしはじめ、何回も何回も衝突を繰り返しているうちに、ついにやりきれなくなり、私は離婚を言いだすようになりました。妻は心労のあげくノイローゼになり、宮崎医大や県立病院に通うようになってしまいました。子供たちは抱きあって泣きました。私は、子供たちを二人ずつに分けると言い渡したのです。

そのとき、妻の妹の武井生子さんによってイエス・キリストの福音が伝えられ、妻と子供たちが救われ、そして私も、これから述べるような抵抗を試みたあとに、主の前にひれ伏し、救われたのです。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

いま、子供たちのあどけない顔を見ていると、つくづく離婚しなくてよかったと思います。もしあのとき、子供たちを離れればなれにさせてしまっていたら、どんなに可哀相だったことでしょう。そんなことになれば、妻はきっと気が違ってしまっていたと思います。気が強そうでいて、人一倍気の弱い妻に対して、ほんとにひどい仕打ちをしてしまうところでした。長女の有記があとになってある方に話したそうです。

「おじちゃん、何が嬉しいって、お父さんとお母さんが仲よくしているのが、一番嬉しいよ」。

それは有記にとって、どんなにつらく苦しいことだったでしょうか。

イエス様を受け入れてからの妻は、少しずつ変わっていくように見えました。食事の前には子供たちと祈り、ベックさんのメッセージのテープを目を真っ赤にしながら一日中聞いていました。食卓についたとき、妻と子供たちが祈り終わってアーメンと言うのを聞きながら、私だけはどうしてもアーメンと言えませんでした。正直言って、のけ者にされたような気持ちになりました。しかしあくまでも、私には関係のないことだと、遠くのできごとを見るような気持ちでおりまし

た。何であろうと妻が信じて元気になってくれればそれに越したことはない、だけど自分はそんなことはごめんだね、とつっぱねていたのです。

妻はどこかで開かれている「キリスト集会」とかに行っている様子でした。ある日妻が、

「いつもごちそうになってばっかりで申し訳ないのよね。あなた何か作ってごちそうしてあげてちょうだい」と言いますので、根が義理堅い性格なものですから、

「それはいけないよ、お前だけじゃなく、子供たちまでごちそうになっているんだったら…」

と、こちらは商売柄お安いご用とばかり引き受けました。引き受けついでに、集会では何やら幼稚なことをやっているようだが、この機会にちょっとのぞいてやるか、という思いがわいてきました。当日、作ったごちそうを持ってキリスト集会とやらに行きました。歌を歌ったり、聖書を開いたり、そして帰る頃になると、「天のお父様…」と皆で祈りましたので、気持ち悪いな、もう二度と行くまいと思いました。

私はクリスチャンに対して、ひどい偏見を持っていました。「なんとお人好しで、気の毒な人たち」、「がんじがらめになっていないで、もっと自由に生きようよ」、「ご苦労さんなこって」、「清く弱い人々」など。

自分のような者は絶対クリスチャンになれない、という変な自信も持っていました。

「私のほうから頼んでも、神様がお断りになりまさあ」と、たかをくくっておりました。

そうこうしているうちに、妻が、軽井沢のバイブル・キャンプに行きたいと言いだしました。

「え、軽井沢？　何を言うんだ。この忙しいのに一週間も家を留守になんかできないだろう

が！」と私は怒りだしました。妻が一週間も店を抜けるということはたいへんなことです。しかも、二歳になったばかりの千里がいます。しかし、妻は頑として聞き入れません。実家の母に来てもらい、千里のことを頼んで、なかば家出のようなかたちで軽井沢に発っていきました。

「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。」（マタイ　5・4）

いま私の一番好きなみことばです。悲しみは悲しみだけに終わるものではなく、必ず喜びをもたらすもの。悲しみは祝福の種子。悲しみはイエス様に近づく道。しかしその頃は、このみことばさえ知りませんでした。

帰ってきた時妻はあきれるほどの喜びようで、そんな妻を私はうさんくさい目で見ていました。明けて二月、いよいよベックさんが宮崎においでになることになりました。当時の私の気持ちからすれば、ベックさんが「乗り込んでくる」と言ったほうが当っているかもしれません。私はベックさんを迎え撃つ準備を始めました。第二次世界大戦で日本が敗けたのは情報不足からだ。「敵を知り己を知らば百戦危うからず」という格言を思い出して、子供の聖書を読み始めました。それまでわが家では、ベックさんのテープを妻が聞けば、私は若い頃習い覚えたお経を唱えるといった宗教戦争をやっておりました。

私は無知で傲慢でした。聖書を調べてやるなどとは思い上がりもはなはだしい態度でした。読んでみて私は旧約聖書の詩篇に圧倒されてしまいました。子供の頃、ダビデ王物語を夢中で読んだことがありましたが、ダビデが詩篇の作者だとは聖書を開くまで知りませんでした。ただ不思

議なことには、四十年近くも前に読んだ物語の内容をすごく正確に覚えていたのです。

詩篇は、およそ三千年前に書かれたものとはとうてい信じられないほど、少しも古さを感じさせず、脈々と流れる泉のように私の心に踊り、溢れるのでした。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。

主はすべてしいたげられている人々のために、正義とさばきを行なわれる。主は、ご自身の道をモーセに、そのみわざをイスラエルの子らに知らされた。主は、あわれみ深く、情け深い。怒るのにおそく、恵み豊かである。主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。父がその子をあわれむように、主は、ご自分を恐れる者をあわれまれる。主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。

人の日は、草のよう。野の花のように咲く。風がそこを過ぎると、それは、もはやない。

その場所すら、それを、知らない。しかし、主の恵みは、とこしえから、とこしえまで、主を恐れる者の上にある。主の義はその子らの子に及び、主の契約を守る者、その戒めを心に留めて、行なう者に及ぶ。主は天にその王座を堅く立て、その王国はすべてを統べ治める。主をほめたたえよ。御使いたちよ。みことばの声に聞き従い、みことばを行なう力ある勇士たちよ。主をほめたたえよ。主のすべての軍勢よ。みこころを行ない、主に仕える者たちよ。主をほめたたえよ。すべて造られたものたちよ。主の治められるすべての所で。わがたましいよ。主をほめたたえよ。

（詩篇　103）

なんということでしょう。昔も、今も、永遠に変わりなく新しいもの。人智をはるかに越えた生きている真理。聖書全体からすればわずか二千分の一にも満たないこの詩に、すべてが含まれているように思われました。

人間は一人の例外もなく死にます。聖書には、「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている。」（ヘブル9・27）とあります。永遠の滅びをまぬがれるためには、生きているうちにイエス・キリストを救い主として受け入れなければならない、と聖書は示しています。私たちはいつ死ぬか、まったく分からないのです。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。」

（ヨハネ　11・25、26）

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたし（主イエス）のことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」（ヨハネ　5・24）

さらに主は「わたしのところに来る者を決して捨てない」と約束されています。信じて永遠の天のみ国に住まうか、ニーチェのように、神は死んだと言って永遠の滅びに至るか。喜びなし、平安なし、光なしの永遠は、考えただけでもぞっとします。

主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができましょう。」（ヘブル　13・5、6）

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。（イザヤ　41・10）

私は少年時代から今まで、一つのテーマを考え続けてきました。自分は死んだらどうなるのか。死後の世界はあるのだろうか。自分の乗っている電車はどこ行きなのか。私は気が狂いそうなほど考えました。たくさんの哲学書や思想書を読みあさりましたが、納得できませんでした。死ん

でみなけりゃ、死後の世界は見えないんだと思い込んでしまいました。努めてその問題から逃げておりました。しかし、聖書を読むようになって、死の問題は解決されました。日ごとに、みことばによる確信がわいてきたのです。死に打ち勝った方は、私たちの主イエス・キリストただひとりであります。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。（Ⅱコリント　5・17）

いよいよ今日は、年貢の納め時という日がやってきました。二月の寒い日でした。初対面のベックさんのお顔は桜色に輝いていました。不思議なことに、この時私は、「あっ！　この人とは会ったことがあるぞ」そう思えたのです。「一生この人とは関わりを持つことになりそうだ」とも感じました。不思議な体験でした。初めてベックさんにお会いした時に、次の聖句を与えられました。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」（マタイ　5・3）

よく知っていることばでしたが、聖書のことばとは知らずに覚えていたのです。「不幸というのは、ドイツ語では、心のふるさとに帰る、という意味だよ」とベックさんに教えられました。心のふるさと、つまり、神のみもとです。なんと素晴らしい福音でしょうか。不幸というのは悲しむことではなく、喜ぶべきことだったのです。本当の幸せをつかみたかったら、本当の不幸を

知ることなのです。これが神のご配慮なのです。

それから、月に一回くらいの割り合いでベックさんが来てくださり、我が家で家庭集会が行なわれるようになりました。しかし、私と妻との信仰に対する態度には違いがありました。妻の信仰は、まったくの従順、すべてを捧げつくす信仰、まことの礼拝者として神に愛される信仰。神を恐れる者でした。それほどまでつくさなくとも、と思うほどでした。こちらは「二足のわらじ」でした。仕事も大事、集会も大事というものでした。この態度は妻の不満をかきたて、よく言い争いをしました。しかし、今は、同じ主を仰ぐ者同士、けんかをしてもお互いに歩み寄り、以前のように決定的なことにはなりません。

「主よ、あなたが見えません。あなたを私に見せてください」と祈りました。妻の信仰一筋の生活にもいら立ちを感じました。聖書は頭で理解するものではなく、ただ素直に信じるものであるということがまだ分かりませんでした。また、祈りの素晴しさも知りませんでした。妻の涙ながらのひたむきな祈りとはちがって、私のは口先だけのものでした。いつかベックさんが、「祈りには上手、下手はない。本物か、にせものかだけだよ」と言われたことがあります。ベックさんの言葉が耳に痛くひびきました。「従いたいのですけど確信がありません、どうしたらよいのか教えてください」。これが私の祈りでした。いつもうしろめたさがありました。そんなある日、ベックさんのテープによって助けが与えられたのです。一日中同じテープを繰り返し繰り返し聞きました。私たちの罪の代価は、すでに二千年前にイエス様の十字架によって支払い済みであることを知りました。私の罪はすでに赦されている。このことを知ったとき私は本当に自由になり、

喜びに満たされました。

「私はすべて、イエス様のものです。どうかみ心のままになさってください」。このように祈りますと不思議にすごく軽くなってくるのです。

「日を重ねて月となし、月を重ねて年となし、年を重ねて墓となすとも」と文豪漱石は書きましたが、「墓となすとも」の先がどうしても彼には見えなかったのです。墓。人間の思い及ぶべき所はそこまでです。いかに漱石が不世出の大天才であったとしても、人間である限り、その先に進むことはできなかったのです。彼は、「気が狂うか、自殺するか、宗教におもむくか」自分の選べる道はこの三つのうちの一つであると書きましたが、そのうちの一つを選ぶどころか、問題解決の糸口さえ見い出せずに死んでしまいました。聖書をよく知っていながら、神を信じることができなかった漱石の傲慢は、現代人にも共通していると言えるのではないでしょうか。私たちに本当に必要なものは、ただ、神のみことばである聖書そのものだけではないでしょうか。

私はやっと確かなものをつかむことができました。私は今まで神に逆らって生きてきました。せめて人生の後半は神のご栄光のために生きたいと願っております。

私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。

（ヨブ　1・21）

宮崎キリスト集会が始まって半年ほどたった時、私の長兄が宮崎にやってきました。兄は私とちがって勉強ができハンサムで、近所の女の子の憧れの的でした。幼い私の自慢の種でしたが、

中学生になって兄は喘息を患い、長い療養生活を送りました。その後、独学で中企業の経理課長を勤めるまでになりましたが、ふとしたことから薬物依存症になってしまいました。兄はそこから抜け出すことができずに職を捨て、家族を悲しみのどん底に落とし込み、年老いた両親を嘆かせておりました。最近十年くらいは特にひどく、そのまま何回も死線をさまよっておりました。行き場もなく、ついに宮崎の私のところにたどり着いた時にはまったく別人のように見えました。しかし「主は見捨てられず」です。ちょうどその日はベックさんがわが家においでになる日だったのです。そして、大塚さんが宮崎に来てくださり、ご助力で東京の成松厚生病院に即入院ということになりました。（大塚さんの証し「光よあれ」第四集参照）病院から吉祥寺のA・Aの会（アルコール依存症者、薬物依存症者たちが自発的に集ってミーティングを中心に行なう、回復のための集団療法の会）に染野さん、池島さんに助けられて通っておりましたが、兄は途中で大阪に逃げ帰ってしまいました。しかし、奇跡的にその後立ち直り、働けるようになりました。

私の仕事のことでも恵みをいただいております。宮崎でキリスト集会が始まってから、日曜日には仕事が休めるように、というのが私たちの、特に妻の強い祈りでした。弁当屋の仕事は忙しすぎて、なかなかキリスト集会のための時間がとれなかったのです。このことも主が聞いてくださり、いくつもの不思議が重なって新しい仕事が与えられました。今はまだ、私たちは荒野の中にいますが、これも主のご計画であると感謝して過ごしています。私たちは出エジプト記にあるイスラエル人のように、はじめはよくつぶやきました。信仰の浅い私は妻に助けられました。しかし、さすがの妻も時にはつぶやきが出ました。信仰がなかったらとうてい通り越せるものでは



▲ 宮崎キリスト集会のみなさん方。熊谷さん宅で。

ありませんでした。ウォッチマン・ニーは「苦しみで私を祝福してください」と祈ったそうですが、私たちも同じように、苦しみを主から受け取る訓練ができたことは感謝です。

主は私たちに自我というものが「ゼロ」になる訓練をしてくださっているのだと確信できます。「ゼロ」になることがこれほどむずかしいこととは思いませんでした。つい自分が出てしまうのです。主よ、今日も「ゼロ」になることができませんでした。

私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（Ⅱコリント　4・16～18）



1988年、えびの高原バイブル・キャンプで母柏木▶
千日子さんと共に洗礼を受けて喜ぶ祐子さん。

主は私の喜び

熊谷祐子

一九四五年宮崎県に生まれる。紙屋小、後川内中、小林高校、文化服装学院を卒業。家事手伝い、見習い看護婦を経て、結婚。家族は夫邦雄さん、長女有記さん、次女至芳さん、長男太郎さん、三女千里さん、次男順さん。趣味はパッチワーク手芸。

私は一九四五年、宮崎県の片田舎で子供四人の中の長女として生まれました。父も母も教師でした。そのような両親を尊敬し、とても愛していました。なんでも両親の言うことを聞いていたら間違いない、と思っていました。

高校を卒業して、母の勧めもあって東京の文化服装学院に入学しました。自分の服や身近な人の服ぐらい自分で作れたらいいな、という軽い気持ちでした。しかし都会での寮生活は私を劣等感のかたまりにしてしまいました。細かい仕事の好きな私は、ただただ夢中で学園生活を過ごしました。就職する勇気もなく、卒業後は親を頼りに帰省しました。二年間の勉強では大した縫物もできないことが分かり、実家に近い洋裁学校に通うようになりました。母と楽しい日々が過ぎていきました。

そうしているうちに、登戸の眼科医に嫁いだいとこが人手不足で困っているから助けてやってくれないか、と伯母に頼まれました。再び上京し、見習い看護婦の生活が始まりましたが、心は

いつも不安でみじめでした。そのうち東京を離れようという思いがまた強くなり、実家に帰っていなかの生活が始まりました。お茶、お花、料理、音楽会などを楽しみにして、妹や母とともに平凡な生活を送りました。

一九七四年、高校時代の友人に紹介されて、主人と結婚することになりました。主人は当時、大阪で和食の料理店を経営していました。正直で誠実な人に思え、結婚する決心をしました。私が育った環境とはまったく違う「商売」にも興味がありました。何もかもが初めての世界でした。結婚してみると、自分がいかに世間知らずだったかもよく分かりました。私も主人とともにひたすら働き、店は繁盛しました。主人はこれまで誰が経営してもだめだと言われていた店を努力して盛り返すような人でした。そのことで主人は傲慢になっていたんだと思います。

二番目の子供を妊娠中のことです。主人が熱湯を下半身に浴びて、大やけどをしてしまいました。それを機会に、宮崎に移り住むことになりました。それもあっという間に決まってしまいました。私たちは重大な決定をする時、納得のいくまで話し合ったことはありません。いつも主人が決めてしまうのでした。主人が本当のところ、どういうつもりで宮崎に行くというのか、問いただすこともなく、うやむやなままで引っ越しをしてしまいました。

その頃から家の経済のことや、その他いろいろなことで考え方の相違が目立ち始め、苦しい心の戦いが始まりました。私は完全を求め、理想を求めました。人に「いい人」と見られたいと思って頑張りました。部屋はいつもきれいに。子供はお行儀のいい、よい子に。覚えた洋裁でかわいい服を作り、外見を飾ることに夢中でした。また、自分でやりたいパッチワーク、藤編み、パ

ンフラワーなどの趣味に心を奪われ、子供がやさしい母親を求めていることが分かっていながら、それに応えようとせず、ちぐはぐな毎日を送っていました。一貫性がなく、いつも人の話に動揺し、いらいらした態度で子供に接していました。

主人への不満は、無理をして新築した家のローン返済の苦しみが口火となりました。外見は、いつも一緒に行動する理想的な家族を装い、休みともなるとあちこち子供たちを連れまわりましたが、それは親としての義務感からでした。しかし、いつもむなしさだけが残りました。主人はいつも暗い顔をしていました。

母はその頃、「白い烏がいると主人が言ったら、黒い烏でも白いわね、と同意しておくものですよ。主人を立てて従順にしていなさい」と話してくれました。しかし、言われるように従えば、その無理が反動となって子供に向かいます。子供が夫と同じようなことをすると、私は怒り狂ったように叱るのです。もう二度とあんな怒り方はすまいと思いながらも、同じことを繰り返すのです。そして自分を責め、苦しんでいました。子供をきちんとしつけ、育てるのは母親の義務であり、家庭を守り、楽しくするのも母親の役目であると、いつも自分に言い聞かせていました。そういったすべてのことが思うようにいきませんでした。主人は仕事第一の人です。手伝っている私はその指示に従わなくてはなりません。「さあ、仕事が終わった。子供たちはおなかをすかせているだろう」と帰ってみると、下の二人はよごれた顔で、もう寝てしまっています。毎日その繰り返しでした。主人は本当に真面目な人です。どうにかして私と子供たちを幸せにしてやりたい、という主人の気持ちもよく分かっていました。でも、このままで一生が過ぎてしまうのか

と思うと、不安とむなしさでどうすることもできなくなりました。私の泣き場はお風呂場でした。どうすることもできない自分がかわいそうであわれで、声をひそめて泣いていました。

一九八五年八月、東京に住む私の妹の生子が長女の有記を東京に招いてくれました。有記が五年生のときでした。娘は、妹の話してくれるイエス・キリストにとても真剣な関心を示していましたので、この招待はすてきな贈り物でした。バイブル・キャンプや家庭集会に参加し、子供なりに楽しく過ごしてきた様子でした。東京から帰ってきた娘は私の顔をじっと見て、やがてしくしく泣き出したのです。

「生子おばちゃんはいつもにこにこしているよ。お母さんはどうしてそんなに暗いの…」

おとなしい有記が、私に精一杯訴えるのです。私は心の深い所を突かれ、涙がどっと溢れました。

「お母さんはイエス様を知らないから仕方ないの！」

と私は言い、二人で泣きました。

妹は、常日頃、私にもイエス・キリストのことを話してくれていましたが、私の心は固く閉ざされたままでした。

おのれを閉ざす者は自分の欲望のままに求め、すべてのすぐれた知性と仲たがいする。

（箴言　18・1）

信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

（ローマ10・17）

彼らは、知らない。また、悟らない。彼らは、暗やみの中を歩き回る。地の基は、ことごとく揺らいでいる。

（詩篇　82・5）

しかし、かたくなである反面、とても知りたいとあこがれていたのです。頑張れば頑張るほど闇の中に放り出され、生活はめちゃくちゃになっていくのです。自分の過去を思い返し、ますます頭がおかしくなっていきました。不安や失望が押し迫ってくるのです。これまで歩いてきた道がいいかげんであったことが思い起こされて、悲しくみじめな気持ちになりました。なぜか、父や母が死ぬ夢を見てうなされるのでした。

その頃、私の一番下の妹の千生子も「聖書を読んでみたら」と勧めてくれました。妹が通っている教会の牧師さんが来てくださり、いろいろな話をしてくださいました。その時のお話の内容ははっきりとは覚えていないのですが、ある時突然、「神様に生かされている」喜びで一杯になり、涙が止まらないこともありました。その後何回か機会が与えられましたが、その喜びもつかの間、聖書を開くこともなく、目の前の苦しい生活に流されていってしまいました。自分の力をまだ信じていたのです。私はどうにかして家庭を楽しくよくしたいと思うのですが、「私が我慢したら」、「頑張ったら」という思いがかえって主人を苦しめ、とうとう主人は「離婚しかない」と言い出すようになってしまいました。主人を苦しめていることも十分に分かっていましたので、自分の悪いところを直したいと思い主人にあやまることもありました。しかしその反面で自分を正当化して主人が許せず、主人のいやなところがますます目につき、それを心の中で押し殺して

は爆発を繰り返し、二人の間の溝は深まり、ぼろぼろの状態になっていきました。

その年の夏、妹の生子が東京からやってきました。平安な顔でした。妹は姑のことでとても苦労しているはずなのです。父が上京するたびに今度こそは連れて帰ろうと思った、とよく話していました。そんな妹なのにどうしてあんなに平安でいられるんだろうと不思議に思い、私は妹にすべてを話し、助けを求めました。

「イエス様はすべてをご存知よ。イエス様はご計画を持っておられます」と聖書を開いて、いろいろと話をしてくれました。

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。」

（エレミヤ　29・11～13）

「こちら側に来なさい。少しも怖いことはありません。簡単なことです」とみことばが招いてくださったのです。「神様のご計画を信じよう…」うれしさがどこからともなく溢れてきて、思わず泣きじゃくってしまいました。初めてイエス様の前で妹と一緒に祈りました。

主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が

私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。（Ⅱコリント　12・9）

次の日の朝は、すべてがすがすがしく新しくなったように感じました。木々の葉がキラキラ輝いていました。喜びで、足が宙に浮いているような不思議な感じを味わいました。その時から、妹が持ってきてくれたカセットテープの「絶えず祈れ」やキリスト集会の方々の証し集「光よあれ」のひとつひとつが心の奥深くに届き始め、何かを渇望している私の心を満たし、幸せにしてくれるようになりました。

主よ。まことにあなたはいつくしみ深く、赦しに富み、あなたを呼び求めるすべての者に、恵み豊かであられます。（詩篇　86・5）

夏になると、吉祥寺キリスト集会の方々が次々に宮崎に来てくださいました。その方々と色々とお話できることはほんとうに幸いで楽しいものでした。荒れ果てた私の心は喜びに満たされ、吉祥寺キリスト集会に行ってみたいと願うようになっていきました。その思いはつのるばかりでした。主人の暗く沈んだ顔、仕事仕事の連続する毎日、四人の子供たちのこと、このままではいけないと、主人の反対を振り切って上京しました。

ベックさんはほんとうにあたたかく迎えてくださいました。ずっと以前から知っていたような感じがして感激しました。ベックさんとお話をすることができ、ありのままの状態で主を信頼し、おゆだねすればよいのだと知りました。次の聖句を示してくださったことを覚えています。

「パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

（ルカ　18・11～14）

吉祥寺キリスト集会のみなさんと色々とお話をしてみて、まったく違和感のない家族のような親近感を覚えました。私の求めていた世界がここにあったのです。

軽井沢での初めての礼拝は感動しました。祈られる方々の言葉は私の慰めとなりました。とめどなく涙があふれました。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

（詩篇　119・71）

一九八七年二月五日、開店五年目の当日、ベックさんが私たちの家に来てくださいました。「邦雄に会いに行くよ」と、約束してくださっていたのです。「無神論者だ」、「おれが神だ」と

言っていた主人。「人間がそんなに簡単に変えられるか。変えられるもんならおれも変わりたいもんだ」と言っていた主人。その主人が、ベックさんとお話をした後で、自分から素直に主に祈ったのです。イエス様に本当に感謝しました。

その時から、わが家で家庭集会が行なわれるようになりました。現在は、毎週、日曜礼拝が行なわれています。

上のふたりの娘たちは、わが家が崩壊しかかっていた時はいつ両親が別れるかと泣いていたそうです。そんな私たちの家庭をイエス様がたて直してくださったことはなんと幸いなことでしょう。夢のような現実です。

「わたしは門です。だれでも、わたしを通ってはいるなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。」（ヨハネ 10・9）

その年、一九八七年十一月、今度は主人が軽井沢へと導かれました。そして私たちは、「愛するイエス様、私たちをこれからも憐んでください」と祈る者に変えられました。そして、イエス様の愛の上に確信を持って立ち、お互いに励まし合えるように変えられました。

一九八八年八月、えびの高原でバイブル・キャンプが行なわれました。私たち夫婦にとって、待ちに待った日がやってきました。信仰を証しするため、そのバイブル・キャンプで二十二人の方々と共に洗礼にあずかることができたのです。しかも私の母も一緒に洗礼を受けることができたのは最高の喜びでした。日曜日も祭日もひたすら仕事、仕事だった主人が日曜日を休み、「仕

事と信仰は別だ！」と言い切っていた人が「信仰第一」、「信仰の中に生活がある」と言う者に変えられていきました。そして私のほうも、主人を心から愛せる者へと変えてくださいました。

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。

（エペソ　5・8）

新しくなった家庭に、イエス様は五人目の子供を贈ってくださいました。驚きと戸惑いの中で、主は、

あなたは、あなたの神、主に対して全き者でなければならない。（申命記　18・13）

と示してくださいました。すべてを主のみ手におゆだねいたしました。新たに与えられた喜びと平安を感謝しました。そして、一九八九年七月、男の子が与えられました。イエス様をわが家に初めてお連れした長女有記が、一九八九年八月、えびのバイブル・キャンプで洗礼を受け、信仰を証しすることができました。有記が二年前に軽井沢でベックさんとお会いした時に、家族六人の名前を挙げて祈ってくださったそのことが、一人、また一人と成就するのでした。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

イエス様は、時には子供たちをも試練に会わせられます。どんなに苦しい時にも、親子が共に

イエス様の前にひざまずき祈れる幸いを心から感謝しております。そしてひとりひとりの子供たちを、イエス様は責任を持って導いてくださいます。子供たちが心配や思いわずらいを棄てて、ただイエス様を恐れて歩む者になってほしいと祈り続けております。

キリストは永遠に存在されるのであって、変わることのない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

（ヘブル　7・24、25）

イエス様に救われる前の私は、暗やみの中を手探りで歩いていました。今は、イエス様が私の歩みのともしびです。このすばらしい事実を、私の愛する人々に話さずにはいられないのです。イエス様は、人間のちっぽけな愛ではなく、大きな愛で包んでくださいます。そして私のすべてをご存知です。

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。

私はあなたの御霊から離れて、どこへ行けましょう。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう。たとい、私が天に上っても、そこにあなたはおられ、私がよみに床を設けても、そこにあなたはおられます。

（詩篇　139・1～3、7、8）

私の病気と主の導き

故 谷山雄二

一九四九年熊本市に生まれる。市立五福小、市立藤園中、県立済々黌高、日本電子工学院卒業後、受託ソフト開発㈱中央コンピュータシステムに勤務。家族は、妻郁子さん、長女真実子さん、長男真一さん、次男真隆さん。

・谷山雄二さんは、この証しを書かれて後、一九九二年一月二日、天に召されました。次の奥様の郁子さんの証しの末尾にその時のことが書かれてありますので併せてお読みください。



▲ 左から長女真実子さん、ベックさん、故雄二さん、郁子さん、次男真隆さん、長男真一さん。1991年秋、沖縄バイブル・キャンプにて。

▼ 左からご両親の谷山一喜さん、トキエさんと故雄二さん。別府バイブル・キャンプで。



生まれて初めての入院、それも期間は二カ月ほどと聞かされて、大きなショックを受けました。少し前から身体のいたる所にしこりができ始めていたので、変だとは思っていましたが、私はそれまで入院をするというような大きな病気をしたことがなく、気にしながらもついつい病院にいくのを遅らせていた結果が、この宣告でした。一瞬、仕事のこと、家庭のことなどが頭をよぎりました。一九八四年の六月のことでした。

しかしこの時はまだ、そのしこりが「悪性リンパ腫」だとは聞かされておらず、「良性ですから治しましょう」という医師の言葉をうのみにして、早く治したい一心で懸命に医師の指導を守りながら、ひたすら一日も早く回復するように務めました。

その甲斐あってか、治療を受けるごとに治癒していくのが自分でも分かるほどの回復の早さで、約一カ月後には退院することができました。ただ、薬の副作用で、髪の毛が抜け落ちてしまい、自分の容貌の変化に自分自身でついていくことができず、すっかり気分が沈みこんでしまいました。また、会社の同僚と久し振りに会うのに、こんな格好ではいやなので、かつらを着けて出勤しました。

私は、魚屋を営んでいた父と母の間に、次男として生まれました。私が生まれるのとほぼ同時に三歳だった長男が他界し、やがて私と両親の三人家族になってしまいました。家業の魚屋はやがて経営に行き詰まり、家を手放すことになりました。それからの両親は、家を買い戻すために懸命に働きました。当時の骨董品が今でも大切にしてあって、何としても買い戻したいという両

親の気持ちを伝えています。このような波瀾の多い生活の中で育った私は、決して裕福だとは言えませんが不自由な思いはせずに育ちました。父は板前を定職とするようになり、私が小学校五年生のころまでは熊本市に住んでいました。やがて、父は住み込みで阿蘇の保養所を任されることになり、一家は阿蘇へ引っ越すことになりました。私は慣れた環境や友人と別れるのがいやで、強く引越しに反対し、とうとう一人で熊本市内にとどまることになり、いとこの家にお世話になりました。このころから私は何かにつけて両親に反抗的な姿勢を取っていたように思います。父は神道で、私にも朝昼夜と神棚を拝むことを強要しました。私はそれが嫌で、このことでよく親子喧嘩をしました。また父は自分ではなかなか結論を出さないところがあって、そんな父親のもとにいるのが嫌になり、できるだけ離れていたいと思ったのです。そんな私でも両親は私を自由にさせてくれ、私は両親の苦労や優しさが分からないで自分勝手なことばかりしていました。高等学校に入学してから生活のリズムが崩れ、大学進学を諦めて、その当時からにわかに注目され始めたコンピュータの仕事をしようと決心し、上京して日本電子工学院に入学し、東京での生活が始まったのです。

卒業後はコンピュータ関係の会社に就職し、一九七四年の一月に、結婚しました。最初の子供は流産し、長女の真実子は蜘蛛膜下出血脳内水腫という病気で生まれました。成長が危ぶまれる中を、私は毎日出勤前に病院に母乳を届けにいきました。その後普通の生活ができるまでに回復し、左目に後遺症が残り視力が落ちていますが、元気で明るい子に成長しています。長男の真一は血液不適合で交換輸血をしましたが、現在は探究心の旺盛な優しくきさくな子供として元気に

成長しています。次男の真隆は、母体の中ですでに血液不適合が分かり、担当の医者から死産か重度の身体障害をもって生まれる可能性があると言われましたが、生まれてみると幸いなことに五体満足な赤ん坊で、元気に成長し、現在は喘息はありますがのびのびとした明るい子供になっています。

次々に心配ごとが起きてくる中で、妻は色々と苦労しましたが、私は仕事優先で家庭のことなどは二の次三の次、子供の出産にも一度として立ち合ったことがありませんし、仕事もコンピュータ関係の開発先に常駐しっぱなし、といった生活でした。このような生活に私は何の疑問も持たず、妻に対しても俺は家族のためにこんなに忙しい生活をしているのだから、とわがままを言い、自己主張をし、傲慢そのものでした。

第一回目の入院は、そのような時に起こったできごとでした。退院後、会社は私の健康状態を心配してくれ、上司の方のはからいもあって、今まで勤めていた東中野の職場から自宅に近い厚木に転勤させていただきました。引き継ぎを済ませ新しい職場に通勤し始めた頃は体調もよく、以前と変わらない調子で仕事ができました。ちょうど職場では新しいソフトウェアの開発が始まろうとしている時でもありましたし、後輩が多く、仕事にも自信がありましたから、傲慢で、自己中心的で、結構ワンマンぶりを発揮しながら仕事をこなしていきました。リンパ腫も小さくなり、確かに回復しているように思われましたし、治癒していくという喜びがありました。

病院に入っていた頃、私の病気を心配した両親が、見舞いに来てくれ、数年ぶりに病院で会う

ことができました。私は、自分の本当の病名を知らず、親なんてうるさくて面倒なものだなどと思っていましたから、嬉しがるどころか「たいしたこともないのに、わざわざ上京してこなくてもいいのに」などと考えていました。

私は新しい職場で懸命に働きました。家庭では子供が三人、それも一番下は生まれたばかり、それに住宅ローンの返済もあり、一家の大黒柱としてのあせりがありました。会社には入院のため長期休暇をとっていて負い目を感じていましたし、上司に迷惑をかけたという思いもあり、その穴埋めに少しでも頑張らなくてはという気持ちで一杯でした。

ですから家庭のことは妻に任せっきりで、残業や付き合いで遅くなっても家に電話一本かけるわけでもなく、子供のことでもいざこざがたえず、ほんとうに妻には思いやりのない夫でした。

夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みをともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。

（Ⅰペテロ　3・7）

このように五年ほど頑張った結果、会社での評価はもとのように回復し、昇進の道も開け、私の立場も環境もかなりよくなって、さあこれから、と有頂天になっているとき、またもや入院することになり、私の夢も希望も一瞬にして打ち砕かれてしまいました。この二度目の入院は、一九八九年二月末から六月中旬まで約四カ月間入ることになりました。

「だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。」

（マタイ　23・12）

入院していたある日、妻からがんの告知を受けました。今まで信仰など持ったことのない私でしたが、ベックさんはじめ多くの方々が見舞ってくださり、その方々を通してイエス様のことを知るようになり、私の信仰の第一歩が始まりました。といっても本当のところはゆっくり考える暇もなく、突然来られたベックさんのお話を聞き、その後でベックさんの後について無我夢中でお祈りをし、主イエスを受け入れた、というのが本音です。

この四カ月間、治療には抗がん剤を使用するため、抵抗力の激減や食欲不振、吐き気がありました。身体の抵抗力が回復するまでは次の段階に入らないという方針でしたので、治療と治療の間に休みがあり、気分の悪ささえ通り越してしまうと、抵抗力がなくても見かけ上は病人に見えず、見舞いに来てくれた友人からも「一体どこが悪いんだ?」と言われるほどで、病状を説明するのに大変でした。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。

（Ⅰペテロ　1・8、9）

入院中の唯一の楽しみは、たまの日曜日に子供たちが来てくれることでした。また、薬の副作用も、第一回目の入院のときほどひどくはありませんでしたので、結構時間をもてあましていて、よく妻が持ってきてくれていた「光よあれ」や、メッセージが録音されたカセットテープを聞き

ました。カセットテープを聞きながらすぐ眠ってしまったらしく、内容についてはあまりよく覚えていません。また、当時医学生だった辻さんがよく聖書の福音について語ってくださり、それによってもはげまされていました。

退院後は、吉祥寺キリスト集会や、厚木の家庭集会に参加しました。しかし、病室でベックさんとともにイエス様を主として受け入れるお祈りはしたものの、ほんとに自分がイエス様に愛されているのだという実感がわきませんでした。その後も妻に誘われて集会に参加しているだけで、イエス様を本当に心から愛し、祈り、すべてをゆだねて生きていくということができないでいろいろと悩み、今一つふっきれるものがありませんでした。それでも、今まで妻が集っていた教会と違って、このキリスト集会には自由があるなあ、と感じていましたし、キリスト集会にこられる皆さん方がどことなく明るく、悩み事をもっているように見えないのが不思議でした。そういう状態ですから、聖書やイエス様を中心にして、家庭、職場、また自分を振り返って考えてみたこともなく、ただなりゆきのままに集会にでていろいろな方々とお話をしていただけでした。なにしろ、主に対してのお祈りを、口にだして言うことすらできず、家族と外で食事する場合も、他人の目が気になって、食前の感謝の祈りなんかとんでもありませんでした。家庭で家族一緒に祈る時も、妻や長男の役目になっていました。

やがて、いつも肉的な欲望だけで行動している自分が気になり始め、自分が悔い改めてイエス様に従うことをはっきりと決心しよう、洗礼を受けてそのことを周囲の人々にも知ってもらおうと思うようになり、その年の十一月に浜名湖で開かれたバイブル・キャンプで娘とともに洗礼を

受けました。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

（Ⅰテサロニケ　5・16～18）

いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。（ピリピ　4・4）

その後、皆さんの前でお話する機会があり、私は両親のことを話しているうちになぜか胸が一杯になってきて、心が大きく開かれた思いがしました。この時の気持ちは、言葉では言い表わすことができません。その時、切実に私が今まで両親を親とも思わずなおざりにしてきた罪を悔い改めたいと思い、迷信的な偶像崇拝をしている両親に福音を伝えたいと思い、主に「両親にもイエス様を紹介しなさい」と導かれている思いがしました。

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」

（申命記　5・7～10）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
（使徒　16・31）

これまでの生活を振り返ってみると、イエス様に出会えて本当によかった、という気持ちと、もっと早くイエス様を知って悔い改め、新しい生活に入っておけばどれだけよかったか、どれだけその後の生活が違っただろうか、と残念に思う気持ちが半ばします。でも、主が備えられた時は最上の時ですし、イエス様は今も私たちを愛してくださって、それとなく訓練をしてくださって導いてくださっているから感謝です。また、そのイエス様の愛に気がつかず、すぐに自分の肉的な思いを優先し、自分の欲求を追い求めている自分にも気がつかされる毎日です。これからは、すべてを主イエス様に委ねきり、みことばに従っていきたいと思います。また、そんな自分を、本当に幸せに思います。

「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」
（ヨハネ　15・16）

「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」
（黙示　2・10）



左から故雄二さん、郁子さん、1991年秋沖縄で。▶
一人おいて右は受洗した豊里さん。

私たちの救いであられる神

谷山郁子

神奈川県に生まれる。相模原市立麻溝小、上溝中、県立厚木高卒。全共連厚木事務センター勤務の後一九七四年に雄二さんと結婚。長女真実子さん、長男真一さん、次男真隆さん。

主人の病気

不安な気持ちで、もしや、と恐れながら主人の検査結果が出る日を迎えました。やはり恐れていた通り、主人の病気は悪性のリンパ腫で、それもかなり進行しているため、すぐに入院すること、そして主人には病名を告げないようにとの主治医の説明でした。私はその説明を、怒濤の渦巻く中で気が遠くなるのを必死でもちこたえる思いで聞きました。その場にいるのがやっとでした。帰りには貧血を起こし、どのようにして二時間の道のりを帰宅したのか、まったく覚えがありません。一九八四年六月二十六日。私にとって、絶望の宣告の日でした。

翌日から、小学校二年、幼稚園の年長組、生後六カ月の三人の子供を母に預け、看病のため一日ごとに病院に通う日々が始まりました。その頃子供たちは、長女は新生児期に蜘蛛膜下出血脳内水腫の手術をしてまだ通院中であり、長男は血液不適合で交換輸血をし、次男も血液不適合で生まれるなどそれぞれに問題を持っていて、私はこんなに小さな三人の子供を抱えてこれから先どのように生きていけばいいのか、なぜ、私ばかりがこういう目に会うのかとすっかり打ちひし

がれ、頭の中に自分の一生がみじめに崩れさっていくさまがあらゆる角度から映し出され、何も知らずに入院している主人のことなど考えるゆとりすらないありさまでした。

その頃私は、住んでいた団地の中で開かれていた、ある教会の開拓伝道の集いに誘われてよく出ていました。月二回開かれる伝道の集いでしたが、参加してまだ日が浅いこともあって、そこで引用される聖書の聖句は何一つ理解できませんでした。そして主人の入院によって一日おきの病院通いが始まると、とてもそれどころではなく、お誘いを断るようになっていきました。ある日、私より先にイエス様を信じた友人が、「頼れるのは神様おひとりよ。ご主人でも他の誰でもなく、ただ神様おひとりだけよ」と熱をこめて私に話してくれました。この一言で、暗い奈落の底に急降下し続けていた私の心がぴたりと止まり、目の前がふっと明るくなるのを感じました。それから少しずつ、聖書を読み始めました。あるとき、私の大きく底知れぬ深さにまで開いた心の穴に、次のみことばが飛び込んできました。

「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養っていてくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。」

（マタイ　6・26）

この聖句は不思議な力をもって私を打ちました。ここにあるのは一体なんだろうと思いました。

「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心

配します。労苦はその日その日に、十分あります。」（マタイ　6・33、34）

ここに書かれてあるような世界は、一体どこにあるのだろう、ほんとうにこうだったらどんなに嬉しいことだろう。誰がこのようなことをさせてくださるのだろう。知りたい！　本当に知りたい！　しかしその一方では、私が今、藁をも摑みたい気持ちでいるから、どんなことでもありがたく思えるのではないか、ただ実体のない言葉に過ぎないのではないか、と、心の底から素直にはなれませんでした。

病院に通う往復の時間は、私にとっていろいろと考える時であり、また、本を読む時でもありました。しかし、考えれば考えるほど、結婚するまではあんなに順調だった私の生活がなぜ一転してこのような惨めなものになってしまったのか、なぜ、私ばかりにこのような思いもかけないことばかりが起こってくるのか、一体私の人生って何なんだろう、こんなはずではなかったのに……と、自分のことばかりを考え、何者かに一生懸命訴えている自分に気がつきました。しかしこの時、主はすでに私をしっかりと摑み、私の心に働きかけておられたのです。

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。（詩篇　139・1～3）

この聖句で、主は私の苦しみのすべてをご存じであり、私が歩くのも伏すのもよろめくのもご

存じであると知った時、「なぜ私が、私だけが……」と自分のことばかりを第一に考えていることが大きな罪であることに気がつき、私ははじめて、三十五歳の若さでがんと闘っている主人の姿に本当の意味で目をとめることができました。そして、私がどれほど愛のない、むごい自己中心の人間であるかに気がつかされ、この罪の思いを捨て去ることができるものなら捨て去りたい、と痛切に思うようになりました。しかし自分で、捨てたい、といくら願っても、自分ではどうにもなりません。この罪の思いから解放してくださるのは、私の罪のために尊いいのちを捨ててくださったイエス様の十字架のご愛にすがる以外にはない、と知った時、私はこの方を自分の救い主として受け入れ、今までのイエス様にそむいてきた罪と、自分中心、自分が正しい、という傲慢の罪を心から悔い改めて赦していただこうと決心しました。

教会での生活

このようにして私は、伝道の集いで主を受け入れ、やがて厚木にある福音派の教会で洗礼を受けました。やがて教会員としての生活にも慣れ、毎日聖書を読み、祈り、聖書の学びも順調に進み、毎日が喜びにあふれ、心から感謝する日々が続きました。

そんな五月の新緑もまぶしいある日のこと、牧師ご夫妻のお嬢様が突然天に召されました。私は主人のこともあってショックを受けました。ご葬儀で、牧師ご夫妻が主に完全に信頼しきっておられる深い信仰に打たれ、私たちの国籍は天にあるのだと確信することができ、またこの教会に導かれてよかったと思いました。そして、主人の病気のことで死というものをいつも意識して

いた私は、死を越えて働く生きた希望を垣間見た気がしました。

しかし、日がたつにつれ、日曜日の礼拝での牧師のお話は、「あなたがたに罪はなかったか？礼拝はきちんと守っているか？　献金は収入の十分の一を捧げているか？　私に合わない人はこの教会を出ていってもかまわない……」といった調子で私たちが激しく責められるばかりであり、主の恵みや信仰の喜び、また救いの確信などはいっさい語られず、天に召されることは本当に喜びなのか、聖書のみことばの力は本当に真実で生きているのだろうかといった疑問が次々と湧き起こってきて、次第次第に平安や希望が感じられなくなり、その教会に集うことが重苦しくなってきました。

さらに追い打ちをかけるように、ある熱心な教会員のご婦人の一人が、「教会のために試練を乗り越え、牧師を支え、みんなで頑張りましょう！」という内容の証しをされました。主が与えられるいろいろな試練を、主のお導きを待ち、すべてを主に委ねることをしないで、私たち人間の力で頑張って頑張って、教会や牧師を支えていかなければならないのなら、私にはとてもできないことでした。それで心がますます苦しくなり、主のみ心はどこにあるのだろうかと、思い悩む日々が続きました。重苦しい毎日でした。このような時、私は教会の親しい方とともに「私たちはいったいどうすればいいのか、主よ導いてください。私たちはあなたに従います……」と、毎朝熱心に祈り求めました。それは、せっぱつまった気持ちでした。

そんなある日のこと、私たちの教会からすでに吉祥寺キリスト集会に導かれていたあるお友達から、「健全な成長」という、ベックさんのメッセージを録音したカセットテープをいただきま

した。それを聞いているうちに、私は少しずつ、心が開かれていくのを感じました。今まで教会に喜んで出席していたのは、「教会に出席できる自分、学べる自分、いろいろなことにご奉仕できる自分」を喜んでいたのではなかったろうか、自分の中には少しでも「イエス様、こんな私を憐んで助けてください、イエス様、こんな私をお赦しください、イエス様、あなたがなしてくださることだけが私には喜びです」といえるような心があったのか、イエス様と一緒にいられることを現実の体験として一度でも喜んだことがあったろうか、と深く考えさせられました。

思えば教会では、何をするにしても、主のご栄光が現われるというよりは、それを行なった人間、頑張った人の功績だけがはっきりと残り、信仰の実を見ることはごくわずかなものでした。皆で主のみ旨を祈り求めはするものの、どうしても人間の思いや考えが先になり、主のために働いていると思い込んでいるのですが、その実は「働いている自分」を喜んでいるにすぎないことを、はっきりと示されました。私は、どうすればいいかを、聖書の中に必死で求めました。

去れよ。去れよ。そこを出よ。汚れたものに触れてはならない。その中から出て、身をきよめよ。主の器をになう者たち。あなたがたは、あわてて出なくてもよい。逃げるようにして去らなくてもよい。主があなたがたの前に進み、イスラエルの神が、あなたのしんがりとなられるからだ。

（イザヤ　52・11、12）

「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」

（エレミヤ　33・3）

信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。

（ヘブル　11・8）

これらの聖句に出会ったとき、そのあまりの適切な導きに、私はもう一度主の前に心を整えて祈りました。「主イエス様、私はただ教会を出たい、と思っているのではありません。主が示されたことに対して、私はどうすべきかを教えてください。私はあなたに従います」と。しかし心のどこかには、このようにしてもし教会を出るようなことになったら、なんと自分勝手な愛のない人間だろうと思われはしまいかという恐れがありました。しかし、それにもまして、正しく導かれたい、喜んでいたい、という切実な気持ちが次第次第に高まってくるのを抑えることができませんでした。

「先の事どもを思い出すな。昔の事どもを考えるな。見よ。わたしは新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている。あなたがたは、それを知らないのか。確かに、わたしは荒野に道を、荒地に川を設ける。」

（イザヤ　43・18、19）

主はこう仰せられる。「人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者はのろわれよ。そのような者は荒地のむろの木のように、しあわせが訪れても会うことはなく、荒野の溶岩地帯、住む者のない塩地に住む。

主に信頼し、主を頼みとする者に祝福があるように。その人は、水のほとりに植わった木のように、流れのほとりに根を伸ばし、暑さが来ても暑さを知らず、葉は茂って、日照りの年にも心配なく、いつまでも実をみのらせる。」（エレミヤ　17・5～8）

これらのみことばに支えられ、私はいよいよ教会を去る決断を迫られていることに気がつきました。それでもまだ決心がつかなくて、ベックさんにお目にかかった時、なにもかも包み隠すことができないままに素直にこの問題を持ちだしてご相談しました。この時、ベックさんは、「イエス様はキリスト教を広めるためにこの世に来られたのではなく、信じる者に永遠のいのちを与えるために来られたこと、教会の会員になることが大切ではなくて、イエス様に自分のすべてを明け渡して従っていくことが大切である」ことなどを話してくださいました。そしてさらに、「教会の組織は、多くの場合人間の思いで人が人を束縛し、教会員を管理せざるをえなくなるのでみ心に添わなくなることが多いこと、そして今の私たちにとっては、教会のことが問題なのではなく、主人が救われることがもっとも大切であること、しかも主人はもうイエス様のみ手の中に移されているのだから、感謝の祈りをささげて主の前に静まって待つべきであること」などを、私にもよく分かるように懇々と話してくださいました。このお話で私の心は晴れわたり、今まで経験したことのない喜びが湧きあがり、豊かな心に満たされて、主人は必ず、しかも近いうちに救われる、と確信することができました。

時が来れば、わたし、主が、すみやかにそれをする。（イザヤ　60・22）

このようなことがあった後では、私はどうしても教会の方々と力を合わせて頑張ることができず、また牧師ご夫妻のご方針に従うこともできず、ひたすらイエス様の救いの確信を求め、罪深い者であることを悔い改め、祈りながら、導きのままに教会を去りました。

そして、その日を境に、教会制度という枠から解放され、イエス様の直接のお導きにより、毎日毎日主を礼拝せざるをえないほどのあり余る恵みをいただき、イエス様の訓練を喜び、イエス様に従い続けていきたいと願う者に変えられていきました。

主人への告知

教会に属していた約四年の間は、主人に真の病名を告げないでいることに心の負担はなく、ひたすらご奉仕や聖書の学びなどの外見的な「教会生活」さえ送っていれば、やがては主人も救われるだろうといった、主の目から見て第一になすべきことをしていない私でした。イエス様の前に静まることをせず、イエス様にすべてを明け渡しもしないで、自分の思いにとらわれて祈っていた祈りなど、イエス様が聞き届けられるはずはありませんでした。ですからベックさんに、「教会のことなど問題ではないよ。ご主人が救われることだけが第一だよ。ご主人の救いのためにイエス様の前に静まり、祈って待たなくては」と言われた時、びっくりすると同時に、やはり、という心の底からの納得と、大きな希望があふれてきたのです。そしてその時、私は長い間、イエス様と主人に対して罪を犯し続けてきたことを、はっきりと示されたのです。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。

あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。（イザヤ　59・1、2）

こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です。（ヤコブ　4・17）

そのとき示された罪とは、次のようなものでした。

主人の病気は、その背後にあってすべてを益としてくださるイエス様の与えたもうたものであることを、頭では理解していましたが、「信仰」によって受け止めていなかったこと。

「かなり進行している状態だから、本人の精神状態を考えて告知しないほうがよい」という主治医の人間的な言葉の方を重視していたこと。

また、本当のことを知ったら主人は絶望し、自暴自棄になり、家庭の崩壊につながるのではないか、それなら私の胸だけに納めて、主人に仕える「いい妻」でいる方がいいのではないかと、「いい妻」なんかになれるはずもない私が、人間の頭で考えたことを第一にしてきたこと、などでした。

私たちに与えられた主人の病気は主人自身に対する恵みのため、あるいは主人を通してイエス様の大いなる恵みのみわざが現われるためであるから、イエス様にすべてを明け渡して委ね、イエス様の導きを感謝して待ち望むことが必要だったのです。

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。（箴言　3・5、6）

私の何度めかの、しかも大きな悔い改めでした。その日からというもの、主人にはいつ真実を告げるべきか、いつ今までのことを謝るべきか、イエス様の導きを求めて真剣に祈り求めました。その時を知るために、ひたすらイエス様の前に静まり、祈り続けました。

主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かされる。主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。

（詩篇　37・4～7）

このようにして三カ月が過ぎた頃、主人は全身のリンパ節がぱんぱんに腫れ、二度目の入院をすることになりました。イエス様が与えてくださった時だ、と思いました。イエス様を信じる者はみな永遠のいのちに移されていること、そしていつも平安があり、喜びがあり、希望があることなどを主人に証しし、今まで本当の病名を言わずに嘘をついてきたことを心から謝りたい、と思い、いつも聖書の聖句を伝える手紙を書き、それを持って病院に通いました。しかし、あれほど悔い改めた私のはずなのに、証しをすることも、真実を告げることも、謝ることもできず、むなしく重苦しい思いを抱いて帰宅する日が続きました。

私はひたすら祈り続けました。「イエス様、私は弱くなっています。恐れています。どうかこんな私をお導きください……」。それでも、どうしても主人に真実を告げられない私を憐んでくださったイエス様は、あるとき私に「わたしを知らないで生きる十年の月日と、たった今日一日だけれどわたしを知って生きるのと、あなたはどちらを選ぶか」と問いかけられたのです。私は即座に「イエス様のみもとでしたら、今日一日のいのちのほうがいいです！」と答えました。

いよいよ、主人に真実を告げるべき時がきたことを、そしてイエス様がその時を備えられたことを、私ははっきりと知ることができました。

主人を見舞った後は、いつもは玄関で「さようなら」と言って別れるのですが、その日私は、いったん玄関を出ようとしたものの、イエス様にうながされて再び病室のある七階に戻り、エレベーターホールの片隅で主人にすべてを話しました。

イエス様ご自身が語ってくださることを信じて、また真実を話した後はすべてイエス様が責任をとってくださることを信じて、主人にすべてを告げ、四年ちかくも嘘をついてイエス様の恵みを遅らせてしまった罪を謝りました。

私は懸命に、知っている聖句で主人を励ましたのですが、まだ信仰を持っていない主人にとっては寝耳に水で、どんなに辛く、ショックだったことでしょうか。きっと将来を断ち切られた思いがしただろうと思い、今でも胸が痛みます。

しかしイエス様は、私の力が及ばないことも知っておられ、その後すぐにベックさんをはじめ、多くの助け手を遣わしてくださり、またこのことを知っていてくださる全国の、キリスト集会の

方々のお祈りに支えられ、主人はイエス様を受け入れて救われました。

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」（エレミヤ　29・11）

主は、あなたを守る方。主は、あなたの右の手をおおう陰。昼も、日が、あなたを打つことがなく、夜も、月が、あなたを打つことはない。主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。（詩篇　121・5～8）

その後も、キリスト集会の多くの方々がひっきりなしに主人の病室を訪ねてくださり、退院して後もバイブル・キャンプや家庭集会を通して主人をいろいろと導いてくださいました。そしてその年の十一月十二日、浜名湖で開かれたバイブル・キャンプで、主人は長女の真実子と一緒に洗礼を受けたのです。この恵みと喜びを、全国で祈り続けていてくださった皆様にどのようにお伝えし、感謝すればいいのか……本当に大きな大きな主からの祝福でした。

神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」と言われました。したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。（ローマ　9・15、16）

初めの愛から離れてしまって

新年を迎える頃になると、主人は肺に水が溜まりはじめ、夜は寝汗でシーツまで濡れ、毎日三十七度台の微熱が続いて苦しそうな日が多くなりました。それでも主人は高熱の日以外は会社に通い、主治医の先生も会社の方々も驚かれるようなありさまでした。主人の弱りゆく身体を支えて働かれている主のお力を目のあたりに見て、感謝しながらその年も暮れ、新たな春を迎えることができました。

主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。（Ⅱコリント　12・9）

その年の三月も末のこと、熊本にいる主人の父から、喜寿のお祝いをするから家族そろって来るように、との連絡がありました。なんでもホテルで盛大にやるらしく、普段父がお世話になっている方々に子供として主人がお酌をして回り、お世話になったお礼を述べて回らなければならないことになっているようでした。しかし、その日その日をかろうじてイエス様に守られて過ごしている主人にとって、そのような務めをはたすことは到底無理なことに思えました。それでも主人は、父親に孝行することができるいい機会だと思ったらしく、無理を承知でかけることを決意しました。また、それを通して、父や母、親戚の皆さんに福音を伝え、イエス様の救いを伝える証しの場になれば、とも考えたようでした。

「それはあなたがたのあかしをする機会となります。それで、どう弁明するかは、あらかじめ考えないことに、心を定めておきなさい。どんな反対者も、反論もできず、反証もできないようなことばと知恵を、わたし（イエス様）があなたがたに与えます。……わたしの名のために、みなの者に憎まれます。しかし、あなたがたの髪の毛一筋も失われることはありません。あなたがたは、忍耐によって、自分のいのちを勝ち取ることができます。」

（ルカ　21・13～15、17～19）

熊本に着いてみると、想像以上に立派な喜寿のお祝いでした。ホテルの広間ではまるで結婚式のように金屏風をとりまわし、主人の父はお師匠さんと三味線を弾いたりカラオケで歌ったり、主人は来客にお酌をするやらお礼をのべるやらで大忙しでした。そんな中にあっても、夜にはイエス様を証しする機会が与えられ、大勢の方々の中で、主人は、「いわゆる宗教と、イエス様を信じる信仰ははっきりと違うこと、イエス様は愛のお方であり、今までイエス様を信じなかった罪を悔い改めてイエス様を主として受け入れた者は、罪を赦されて永遠のいのちに移されること、イエス様を中心にした人々の集まりは、すばらしい祝福と喜びに満ち溢れていること」などをはっきりと証しすることができました。聖書のお約束通り、何も事前に準備などしていかなくとも、主がその場その場で語るべき必要な言葉を主人に与えられ、皆様にお話することができたことは大きな喜びでした。

翌日、主人は何を思ったのか、父の家の後片付けや掃除をし、不要なものやごみを燃やしたり

し始めました。だんだんと疲れが全身に出始めた主人を見て、私は「もういい加減に止めなさいよ。少しは自分の身体のことも考えたら……」と、きつい口調でなじってしまいました。帰ったらきっと具合が悪くなって寝込んでしまうに違いない主人の姿が目に浮かび、私は誰にもぶつけられない心配と不満をこのような形で主人にぶつけていたのです。

案の定、帰って二日もすると、熱が出始め、三十九度を越える日が続くようになりました。咳がひどく、咳き込むと喘息の発作のようになり、夜は苦しくて眠ることができず、二週間のうちに七キロも痩せ衰えてしまいました。かかりつけの病院にいくのに、片道二時間の道が耐えられないので、まず近くの大学病院で応急の処置をしていただき、それからやっとの思いでかかりつけの病院にたどりつく、といったありさまでした。主人は苦しさのあまり不機嫌になるばかりで、祈ることもまれになり、すぐに怒るので子供たちも主人を恐れるようになりました。このような状態でしたから、やがて私までが体調を崩し始め、イエス様がいてくださらなければとっくの昔に家庭が崩壊しても不思議はないような状態に追い込まれ、私はくじけそうになりながら、しかし確かなみことばに支えられて、この試練をなんとか耐えしのぶことができました。

私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。

（Ⅱコリント　4・8）

その後主人はますます咳がひどくなり、咳き込むと内臓が飛び出してしまうのではないかと思われるほどでした。そんな発作がひときわ激しく続いた時、いつもは我慢強い主人が「もう死に

たい」と言い出しました。それを聞いた時、私も「イエス様、どうしたらいいのですか、すぐにお答えください、もう限界です」と心の中で叫びました。しかし、この叫びは、主人の苦しみを助けてあげたい、分かち合いたい、という思いからでた叫びではありませんでした。私の心の底に潜んでいた、私自身をがんじがらめに縛りつけていた罪からくるどうしようもない叫びだったのです。そしてわれ知らず、私は主人に激しい言葉を投げつけていたのです。

「あなたはいいわよ、ご両親にイエス様のことも伝えられたし、思い残すことはないでしょうよ。でも、私や子供はどうなるの？　いつもいつもあなたのことを心配して祈り続けている私たちはどうなるの？　すこし無理するとこんなにひどいことになる体なのに、無理して熊本に行ったりして……。今まであなたの身体をかばってきた私はいったいなんなのよ！」ぽろぽろ涙をこぼして、私は言いつのりました。言っているうちに、私が疲れて熱があって寝込んでいる時でも主人は何もしてくれなかったことや、私が一生懸命なにかしてあげても「ありがとう」の一言も言ってくれなかったことや、その主人がご両親のこととなると自分の体を痛めてまで懸命に尽くしていることなどが次々と思い出されてきて醜い気持ちが一挙に爆発してしまったのです。心の奥底に潜む自己中心の醜い心でした。そしてそれを、イエス様ははっきりと私に示されました。すべてはイエス様のご計画であり、イエス様はすべてを益としてくださることが分かっているのに、私はこのように目の前のものに振り回されて、その背後にいらっしゃるイエス様を見上げ続けることができなくなっていたのです。

神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。私をあな

たの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。あなたの救いの喜びを私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。（詩篇　51・10～12）

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

（詩篇　139・23、24）

イエス様は私の心を探り、私がこのような罪を持ち続けているゆえに、イエス様の恵みを受けられないでいることを悲しんでくださり、「自分が正しい」と思う傲慢の罪や「不信仰」の罪を今一度明らかに私に示し、心の底から悔い改めるように導いてくださったのです。

しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。

（黙示　2・4、5）

ほんとうにそうなのです。神様のおっしゃる通りなのです。初めの愛から離れてしまっていたのです。私は自己中心の醜い考えで人を裁き、いつも人を見てはつぶやいてばかりいて、私などイエス様の前では塵に過ぎない存在であることを忘れていました。このようなとるにたらない私の罪をつぐなうために、十字架にかかって血を流してくださったイエス様、そのイエス様の大き

な愛を身一杯に受けていながら、私の中には愛のかけらすらなかったのです。ほんとうに辛い辛い悔い改めでした。そしてイエス様は私が心の底から悔い改めるように導いて助けてくださり、心の中の曲がった道を修正してくださいました。私は、心から感謝の祈りを捧げました。

あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜わったのです。

（ピリピ　1・29）

神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい。

（ピリピ　2・13、14）

その後主人は、いろいろと経験したことを通してイエス様のすばらしいお導きを皆様の前で証しできるまでに回復しました。そして私も、初めの愛に戻れるように、またこれらの試練を決して忘れることのないようにお導きくださいと祈ることができるようになりました。

イエス様は私たちを愛してくださったその愛のゆえに、絶えず私たちが喜びに満ちあふれた生活をするようにと導いてくださいます。そして私たちが自分の罪を心から悔い改めるとき、イエス様はそのあふれるばかりのご愛をもって、私たちを赦してくださいます。

たとえ私たちを取り巻く環境が、どんなに絶望的で、悲惨であっても、主イエス様と一緒に歩む人生は、平安と希望にあふれていますから本当に感謝です。

天に召されて

この証しを書き終えて後、一九九二年一月二日の午前十時三十八分、主人は天に召されました。召されるその日、朝、私が行くまでの間、二時間あまり苦しんで、呼吸もできないような状態でしたが、私が「お父さん、苦しいの」と聞くと、「うん、聖書を読んで」とひとこと言いました。私が枕元のブザーを押しながら「イエス様がいらっしゃるでしょう」と言いますと、うんうんってうなずきたいのですがうなずくことができないので、後ろにうなずきました。そして私が「お父さん、ほんとに短い間、でも長い間、どうもありがとう」と言いますと、またうんうんってうなずいて、そしてほんとうに息を引きとりました。

主人が、人生の最後の瞬間に、私に全生涯をかけて知らせたかったことは、「ほんとうにイエス様がいらっしゃる。そのイエス様にすべてをおゆだねして生きてきたことは、ほんとに正しかった、幸せだった」ということだったのだと思います。

そしてイエス様はその瞬間に、きっと主人に、「もういいよ、十分だった。あとのことはわたしにまかせなさい。もう、わたしのもとに来て休みなさい」と言ってその温かいみ手で抱きとってくださったに違いありません。私はそのことを確信して、深く深く感謝しております。

イエス様にすべてをおゆだねして主人が歩いたこの三年、特に召されるまでの一年は、たとえ主人がこの世の栄華と栄誉をすべてきわめたとしても、九十歳、百歳まで長生きしたとしても、とても及びもつかないほどすばらしい一年だったと、私はそばで見て、確信しています。



▲ 右から若山芳猛さん、昭子さん。



◀ 1984年、ベックさんに初めてお会いした日に。

いたんだ葦を折ることもなく

（マタイ12・20）

若山芳猛

一九三八年福島県に生まれる。新山小、双葉中、双葉高、東北大学工学部卒。㈱クラレ在籍のまま岡山理科大附属高校機械科教諭に出向。妻昭子さん、長女光子さん（保健婦）。



◀ 左から故敦さん、芳猛さん。スキー場にて。

おいたち

日本全体が戦争に向かってひた走りに走りだしていた一九三八年、私は福島県の太平洋に面した片田舎に生まれました。父は軍隊にとられて出征するには年を取り過ぎていましたから、私たち家族は一緒に住むことができ、戦争による直接の苦難を経験しないで済みました。その当時は「天皇は現人神（あらひとがみ）である」と言われていて、天皇の写真を拝んだり、神社の前を通る時おじぎをするように両親から言われ、それをきちんと守っていたことを覚えています。終戦になったのは小学校二年生の時でした。

その小学校の高学年になった頃だったと思いますが、アメリカ人の宣教師がやってきて、隣町に教会が建ちました。どうしてそのような田舎町に宣教師がくることになったのか、今もって不思議なのですが、やがて私は日曜学校に通うようになりました。聖書に触れて知ったイエス様のことは新鮮な驚きでしたが、時々もらう飴玉もまた、甘さに飢えていた私には魅力でした。伝道集会には、隣近所の大人たちもよく行きました。しかし戦後の日本の社会が急速に経済力をつけていくにつれて、かつてはアメリカからプレゼントされた中古衣料の山に目の色を変えて飛びついた大人たちも、そのような物にはもはや目もくれなくなっていきました。日曜学校に行っていた友だちも一人減り二人減り、結局男子は私一人になってしまいました。

「主われを愛す」、「いつくしみ深き」などの讃美歌を歌い、「あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。（マタイ6・3）」といった聖書のことばを聞いて覚えたりしました。今思うと、その頃に聞いたいろいろな聖書の断片が、私の心の

中で神様を恐れることの訓練の始まりになっているように思われます。

私が中学生の時、六歳上の兄がその教会で洗礼を受けたこともあって、私は大人たちの集まりにも時々顔を出すようになりました。その結果少しずつ、現人神などと言って人間が「神の権威」を持つことは間違いだとか、人間が作った偶像の神や仏を拝むことはよくないといったようなことを考えるようになりました。そして自然に家にあった神棚や仏壇を拝まなくなりました。

やがて中学から高校へと進みますと、私は能力もないのに人並みに大学進学を考えるようになりました。どうしても入りたい大学があって、その大学に固執したために、三年間も浪人生活をすることになってしまいました。郵便局勤務のサラリーマンだった父の資力を考えると、それは無謀で甘い計画だったと今では思います。ですから両親には迷惑をかけたと思っています。

浪人生活をしている時、宮城県の仙台市にあった教会でバプテスマを受けました。その教会は子供の時通っていた教会と同じ系統で何となく安心感があったこともありましたが、直接の動機はやはり劣等感や孤独に耐えられなかったためだと思います。教会に行って安らぎを得たいと思ったのです。

大学に入ってからは、日本育英会の奨学資金や兄からの仕送り、それにある企業からの給費などを受けて、何とか学生生活を送ることができました。また私は柄にもなくラグビー部に入りました。激しい格闘技でありながら紳士的にルールを厳しく守るというラグビーの精神に日頃からあこがれをもっていたのです。それに私には楽しいこともなかった浪人生活の遅れを、この機に一挙に挽回しようというあせりもありました。しかしあこがれだけではだめで、練習さえも体力

がついていかず、合宿中のある日、親から偽の呼び出し電報を打ってもらい、合宿から逃げ出してしまいました。

日曜日にはまじめに教会の礼拝に出ました。しかし教会生活は楽しく喜びに満ちていたかというとそうではなくて、だんだんと義務的、形式的になっていきました。ですから、アルバイトをしてそのお金で楽しそうに遊びに行く他の学生たちがうらやましく、自分は何か損をしているのではないだろうかといつも思っていました。それでも、そういう気持ちを持つことはいけないことだし、ましてそれを口に出してはいけないと自分に言い聞かせていました。そのような気持ちはずっと後まで残っていて、娘が教会で洗礼を受けたいと言いだした時にも、私は次のようなことを言うような愚かな親でした。「若い頃は世の中のことをよく知って、楽しんで、その後で洗礼を受ける方がいいよ。お父さんの経験からそう思う」と。

やがて、学生生活が早く終わってほしいと思うようになりました。勉強がだんだん辛くなってきたのです。工学部を選んだのは実は私の打算からで、工学部を出てさえいれば将来は安泰だというその頃の時代の波に乗ったためだったのです。

卒業し就職してからは、赴任先の近くのいろいろな教会に通いました。二年ほどして妻と知りあい結婚したこともあり、教会にはますます熱がなくなり、時折思い出したように教会へ行くという生活になってしまいました。子供が二人与えられ、裕福ではないけれど幸せな家庭でした。

やがて上の子が小学校に入学する頃、「教会へ行きたい」と言い出しました。どうしてそうなったのか覚えていませんが、子供につられて私たちも再び教会へ通うようになりました。子供が

小さい間は、社宅の中ですべてが間に合いますが、子供が幼稚園とか小学校に入るころになると、地域との関係が生まれてきます。私たちも、三重県の四日市に住んでいたころから、そのような生活が始まりました。そして教会にも、久しぶりに出席することになったのです。私たちは家庭内では特に問題はありませんでしたし、教会へ行っても牧師さんが説教をするという形での日曜日の礼拝に満足していました。教会生活とはこういうものだ、と思いこんでいました。

子供がだんだんと大きくなってくると、彼らは私自身の子供の頃のことに興味をもち、いろいろと聞きたがるものです。ですがそういう時私は、「忘れた」と言って何も答えてやりませんでした。家族の者はそういう私のことを「お父さんには自分では言いたくない暗い過去があるんだね」と言っていました。

私はそれを聞いても無視していましたが、事実はその通りで、私は家族にさえ過去の私自身の失敗や挫折の歴史を知られたくないと思っていましたし、とても自分から話す勇気などありませんでした。妻も私のこのような態度を理解できなかったと思います。私はお酒が体質的に合わずまったく飲めません。また煙草も嫌いです。そして一見まじめそうな態度をとって自分の心を明かしませんでしたから、妻は私が一体何を考えているのか、まったく分からなかったそうです。私だけが家庭内に何の問題もないと勝手に思いこんでいただけで、実は私自身のそのような態度こそが家庭内の大問題だったのです。

突然の衝撃

そのように自分勝手で自分の殻に閉じこもっていた私に、突然大きな衝撃を受けるできごとが起こりました。一九八三年四月二十九日、その日の午前中私はテニスの試合に出ていました。何回戦めかでゲームに負けて、降り出した小雨の中を家に帰りました。妻はアルバイトに出ていましたし、長女の光子は自分の部屋で勉強していました。当時中学二年生だった長男の敦は、その日は柔道の試合があって、会場に行っているはずでしたのに、彼は家にいました。体が大きくて上級生たちからも期待されていた彼が試合に行かなかったことについて、私は非難しました。仲間も監督の先生も困っているだろうし、本人が一番に反省すべきだときつく注意しました。三人で昼食を食べ、彼は自分の好きなそばを私のためにも用意してくれました。私は散髪に出かけました。そして私が家を離れているその間に、敦は自ら死を選んだのです。縊死でした。

彼は小学校時代は剣道をし、中学校に入ってからは柔道部にはいり、大学に行ったらラグビーをするんだと言っていました。急に体が大きくなり、心のバランスがくずれやすい時期であり、新学期スタート直後の気の滅入る時ではありました。何が彼の心の中にあったのか分かりませんが、私は直接の原因にかかわったということで非常に悩み苦しみました。

考えてみると、彼は勉強もよくできて、体が大きくて体力があり、先生たちからも可愛がられ、同級生からは慕われて、ほんとうは何の問題もなかったのですが、私たちは欲ばってもっと頑張れ、もっと頑張れといろいろな意味でプレッシャーをかけ続けていました。

小さい頃からやさしい心をもち、素直でおおらかで、体が大きくて、私にとっては敦は希望で

あり、宝でした。しかし彼は小さい時から肩から上が他の子供より上に出てしまい、目立つことを気にするようなところがありました。またある時は喧嘩に強くなりたいなどと口にすることもありました。

その頃の私は、いろいろな意味で自信にあふれていました。やっと与えられた会社での地位にほっとし、十回ほどになろうという転勤の連続と長い社宅暮らしの後でやっと得ることができた新築の我が家に落ちついた喜びに浸り、長女光子は高二、長男敦は中二で二人とも何の問題もないと思いこんでいましたからすべてに安心しきっていました。妻はパートのアルバイトをしながら、好きなバレーボールやテニスに精を出す毎日でした。一家団らんの折には「我が家は何て幸せなんだろう」とよく言いあったものでした。

その前年のクリスマスに、長女光子は教会で滴礼ながら洗礼を受け、「次は敦の番だね」と話し合ったものでした。丁度そのような時のことだったのです。

私は悲しみと絶望のどん底に落とされ、どうしたらよいか分かりませんでした。この世に多くある「宗教」の考えからすれば、信者にはご利益によって幸せが来るはずなのに、私が経験したことは息子の死という最悪のできごとでした。十九歳の時に、バプテスマを受けて以来、熱心ではないが教会につながっていたと思っていた私は、今まで私がやってきたことはいったい何だったのか、信仰とはいったい何だったのかと深く思い悩みました。

なぜ私がこの試練を経験しなければいけないのか。どうしてよりによって、この私にこのようなことが起きなければいけないのか。私たち家族などよりもっと問題がある人々が沢山いるでは

ないか、なぜ、どうしてですか……と主に向かって尋ねました。

悩んだ末にたどりついた結論は、「私の身の上に起きたことには大きな意味がある」ということでした。そのわけは、かりに誰か他の人がそのような経験をしたとしても、私は心からその人に同情することをしなかっただろうし、ましてそれを自分のこととして考えることなどできず、一見親切そうな顔をしながら、実は極めて冷淡な態度しかとれなかっただろうと思い至ったからです。それは人間である限りどうしようもない限界であることも、私が知ることのできた結論でした。慰めは神様からの一方的な憐みによってのみいただくことができるものでした。問題の解決は神様によってなされることであり、人間の力では何一つ解決しえないことだったのです。

ついに私は、すなおな気持ちで神様の前に出ることができるようになりました。その時、神様が私の心にくださったお答えは、「あなたは、わたしに従いなさい。」（ヨハネ21・22）というものでした。私はどのようなことであれ、ただ、イエス様に従っていこうという決心をしました。そうすると、何ともいえない平安が心に満ちてきました。そして私は、イエス様に救われた喜びを、心の底から体験することができました。

このことを通して、私は次のことを知りました。大切なのは「宗教の教え」ではなくて、「まことの神イエス様を個人的に知って、救われる」ことでした。

二つの悩み、そして希望と確信へ

そのころ、私たちは息子の死に関して、二つの問題で悩んでいました。

一つは、彼はほんとうに天国へ行っているのだろうかということ、もう一つは、親として、今私にできることは何か、ということでした。何かをしないと申し訳ないという思い、また息子に許してほしいという思いでした。カトリックでは自殺した人は葬式もしてもらえない、などと聞いていましたから、第一の問題は深刻なものでした。教会の牧師さんや、何人かの方にも尋ねましたが、確信をもって答えてくださる方はいませんでした。「自殺は罪だ」とか、「自殺した人が天国に行けるとは聖書のどの部分にも書かれていない」とか、そしてそれに続いて、「神は愛だからね」などと問題をぼやかしてしまう答えしか返ってきませんでした。

そうした中で、翌一九八四年二月、同じ会社の方の紹介でお目にかかり、お話をしていただいたベックさんに同じことを尋ねますと、即座に「子どもは天国にいます」とおっしゃいました。この確信の土台は何か、その時はよく分かりませんでしたが、聖書の全体を通して告げられている答えとして、そのことが最近になってようやく分かりかけてきたように思います。

親として今私にできることは何だろうかという第二の問題については、その当時教会員のある方が「この苦しみは一生涯背負い続けなければならない十字架です」と強調されたこともあって、すすめられるままに息子のためにとりなしの祈りをつらいつらい思いで続けていました。このことについてもベックさんは、「それは必要ない。なぜなら彼の霊は今すでに天国の最善の場所にいるのだから、親はそのために何の祈りも必要ない、ただ感謝すればよい」と言われました。

その時、ハイムズーフンク（heimsuchung）というドイツ語の言葉も教えていただきました。「不幸」という言葉には「心のふるさとへの道標」という意味があるということでした。この試

練は、私がイエス様を個人的に、体験的に知るために必要なものだったことがよく分かりました。私はこの重い悲しみの末に、やっと一筋の光を見出したのです。

「二羽の雀は一アサリオンで売っているでしょう。しかし、そんな雀の一羽でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません。また、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。」（マタイ　10・29、30）

イエス様はこのようにおっしゃっておられます。ですから敦の死も、神様の愛のみ手の中でのできごとだったと思うのです。イエス様はその瞬間も、敦のいのちに責任をもってくださっていたはずです。ついうっかり見落とすなどということは、全能の神がなさるはずがないのです。

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」（イザヤ　43・4）

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。（イザヤ　63・9）

敦は、保育園の頃から、当時私たちが住んでいた四日市の教会の日曜学校に、姉の光子と二人

で通うようになりました。そして、すなおにイエス様を信じるようになりました。愛であられるイエス様は、聖書の中で幼子たちを呼び寄せながら、こう言っておられます。

「子どもたちをわたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。」（ルカ　18・16）

愛そのものであられ、一人一人の環境の主であり支配者であられるイエス様は、私たちの置かれている場所で、私たちイエス様を信じている者すべてをまどろむことなく見守ってくださっているはずです。

イエス様は、死に勝利されました。どのような死に対しても勝利者となられたのです。限定的にこの死にあっては敗北者になられたということはありえないし、すべての死に対して、そのいのちの責任をもってくださるのです。

何が原因だったのか、私は知ることはできませんが、敦は悩む者、苦しむ者でした。そして叫んだのです。

まことに、主は悩む者の悩みをさげすむことなく、いとうことなく、御顔を隠されもしなかった。むしろ、彼が助けを叫び求めたとき、聞いてくださった。（詩篇　22・24）

私が主を求めると、主は答えてくださった。私をすべての恐怖から救い出してくださった。……この悩む者が呼ばわったとき、主は聞かれた。こうして、彼らはすべての苦しみ

から救われた。……主はそのしもべのたましいを贖い出される。主に身を避ける者は、だれも罪に定められない。（詩篇　34・4、6、22）

「わたし（主）、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。」（イザヤ　43・25）

このようにイエス様は、敦のいのちに責任をもっていてくださり、次の聖句にある通り、敦のためにも十字架の上で血を流してくださったのです。

もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の御前で弁護してくださる方があります。それは、義なるイエス・キリストです。この方こそ、私たちの罪のための、――私たちの罪だけでなく全世界のための、――なだめの供え物なのです。（Ⅰヨハネ　2・1、2）

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。（Ⅰヨハネ　4・9、10）

「殺してはならない」（出エジプト20・13）という十戒のことばは、人間モーセを通してイスラエルの人々に与えられた神様の命令でした。しかし、創造のはじめから存在していた愛なる神のみ心は次の通りです。

すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。私たちは、この御子のうちにあって、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。（エペソ　1・4～7）

ヘテ人ウリヤを殺したダビデは、「私は主に対して罪を犯した」（Ⅱサムエル12・13）と悔い改めた後では、主は「わたしの心にかなった者」として彼をお受け入れになりました。また、エジプト人を打ち殺したモーセは、四十年間にわたる主からの訓練を受けた結果、「地上のだれにもまさって非常に謙遜であった」と言われ、「主は、人が自分の友と語るように、顔と顔とを合わせてモーセに語られた」（出エジプト33・11）と言われるようになりました。ここには人間の理解を越えた、主の愛、赦しがあります。私たちにはその深い意味は理解できませんが、主は「わたしは、恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」（出エジプト33・19）といわれます。殺人の罪を犯しても、生き残った人には悔い改めるチャンスがありますが、自殺した人

の場合、悔い改めるチャンスがないかのように見えます。主はこの者を完全に見棄てたまうのでしょうか。

そうではなくて、悩み苦しみ、叫びつつ死んでいった者に対しても神様は深い憐みを与えられるのではないでしょうか。イエス様は真実をつくしてくださる方です。

また、愛そのものであられるイエス様は、イエス様を信じ受け入れた人に、永遠のいのちを与え、滅びることがなく、だれもイエス様の手からその人を奪い去ることはないと、はっきりと約束してくださっています。永遠のいのちとは、文字通り、永遠に失われ得ないものです。

「わたし（イエス様）は彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」

（ヨハネ　10・28）

ですから敦は今、イエス様に迎えられ、しっかりとみ手に護られて天国にいる、と私は確信するのです。

それ以外には、あり得ないのです。

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・

イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。

しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

（ローマ　8・32～35、37～39）

このことがあって後二年間ほどは、敦の思い出の残るもの、場所、食べものの何を見ても、思っても、悲しくなることがありました。しかしだんだんと次のことに気づきました。それは、敦は私たちのものではなく神様からの預りものであったこと。また悲しみの大きな原因は、この地上のものを良しとする自分中心の考えから来ていること。ですから、あの子はこの食べものが好きだったと思うと悲しくなり、あの場所で一緒に……と思うと辛くなっていたのです。

天国で敦と再会する時に、そこで知る天国の食べものや住まい、また他のすべてのものは、親の私たちがこの地上で提供できたものよりはるかに優れたものであったと分かるでしょう。「敦に何もしてやれなかった」という悔恨の思いはこうして癒され、親である私が敦を守って幸せにしてやれる、敦の人生に全責任を持つことができると思っていたことは大変な思い上がりであっ

たことに気がつきました。

天国では、私たちの想像も及ばないすばらしいいのちがあると約束されていますから、それを信じる時、この悲しさも希望と喜びに変えられていきました。

教会への絶望、そして主の訓練

私たちは葬儀の次の日曜日から教会の礼拝に出ました。

神様からの慰めをいただきたいと思って出席した私たちに、ある方から「このような時には来なくともよいのに」とか、「変わった信仰を持っている」とか言われ、だんだんとその教会へは行けなくなりました。しかたなくほかの教会にも行きましたが、どこの教会も似たりよったりでした。このようにして教会に絶望していた時に、ベックさんご夫妻は頻繁に私たちの所に立ち寄ってくださり、励ましてくださいました。

教会に行っても慰めや希望、平安やよろこびが得られないと分かった私たちは、導かれるままに家で家族と他数人の方々で礼拝を始めることになりました。それは敦の一年目の記念日からでした。ところがこうしてやっと大きな悲しみから立ち直り、慰められ、希望を見いだしたかに見えた私たちには、さらに主の訓練が待ち受けていたのです。それは、喜びと平安の静かな生活というよりは、むしろ自分たちの罪深さ、愚かさ、傲慢さ、愛のなさを知らされ、神様へのへりくだりを学ぶための訓練の始まりでした。

私は元来人の好き嫌いの激しい、人付き合いの悪い、話下手な人間でした。ですから毎週の礼

拝で人々と会うのにだんだんと疲れてきて、礼拝が終わるとすぐ別の部屋に一人で行って横になり、新聞を読んでいるようなこともありました。私のわがままだったのですが、そういう時妻は一人で何役もこなして皆さんのお世話をしていました。私たちは何とかして皆さんに喜んでもらいたいと努めましたが、それらはすべて人間的な思いから出たものにすぎなかったことが後で分かりました。私たちは息子を失った悲しみを打ち消すために、代わりに愛を注ぐ対象を無意識に求めていたのだと思います。特に妻は子どもの時の耳の病気が原因で、片方の耳が聴こえないという障害をもっていましたから、耳の障害をもった方々には特別の同情の思いを持っていました。そのためもあって、やがてそのような方々が大勢来られるようになりました。

私たちは、我が家での集会のことを、まごころからさせていただこうと努めていました。しかし一生懸命になればなるほど、私たちに対する非難の声が大きくなるのです。私はがっかりしてしまい、どうしたらよいのか分からなくなりました。

私は子どもの時から自分の心を明かすことができなくて、無理に心の中を言い表わそうとすると言葉が詰まってしまうという性質がありました。それが息子の死という極限状態に追いやられ、ますます心の扉を固く閉ざすことになり、悲しみを内に秘め、妻と話しあうことさえしなくなってしまいました。妻もまた非常に悩んでいたのですが、私は自分の殻の中に閉じこもり、妻と二人で共通の問題として主に祈っていこうとはしませんでした。それほどまでに私たち夫婦はお互いに神様の前に正しい関係ではなかったのですが、そのことにもまったく気がつきませんでした。そうこうしているうちに、私が心を閉ざしてどのような悩みがある時も妻の相談相手になろうと

しなかったものですから、疲れ果てた妻は耳に障害のある方々だけが自分の悩みを分かってくれる相談相手だと思うようになっていきました。

それにまた、妻は、何とかしてこの人たちが救われれば、イエス様はきっと喜ばれるはずだと思いこんでいたようです。しかし、人間の努力によっては人間を救うことができないのは、当然のことでした。

妻も私もそれぞれに悩んだのですが、心は離れていく一方でした。このために家の中はめちゃくちゃになり、妻はそのことが原因で離婚を口にするようにさえなりました。精神的にも混乱が深まって家出をしたり、最後には入院をするまでになりました。私たちの状態は、まさに次の聖句の通りでした。

「しかしわが民は、わたしの声を聞かず、イスラエルは、わたしに従わなかった。それでわたしは、彼らをかたくなな心のままに任せ、自分たちのおもんぱかりのままに歩かせた。」

（詩篇　81・11、12）

このことは家庭集会を開いている私の家の中で起きた問題でもあり、私はほんとうに悩みました。ある時は娘と二人でひっそりと礼拝をしました。そして私は次のみことばを思いました。

彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。

（ローマ　4・18）

いつどうなるか分からないけれども、神様が何とかしてくださるだろうとだけ思って祈りまし

た。やがてそうしているうちに、混乱し悩み苦しんでいる妻のことが気の毒になり、かわいそうに思えるようになりました。なぜなら私こそ、本当はその悩み苦しみをしっかりと受け止めてやり、引き受けてあげなければならなかったのですから。そして、人間的な思いが支配していた我が家での集会のあり方や、集会の中で私のとってきた態度の誤りにも気づきました。

しかしこのような状態で、家で礼拝や集会を続けることはもはや不可能でした。「もう私にはできません」と言うつもりで、一九八六年、元旦礼拝に一人で東京に行きました。吉祥寺キリスト集会の方々にお会いして、そのことを伝えたいと思ったのです。結局は言い出せなくて、非常にみじめな思いで家に帰ってきたのを覚えています。

妻の入院生活はその後に始まり、数カ月続きました。

主の憐みと解放

そして四月になったある日のこと、私たち夫婦が共に悔い改め、主を見上げて心から主の赦しと助けを祈ったとき、主は憐んでくださり、奇蹟的にすべてが一挙に解決したのです。

気がついてみると、家族三人だけの礼拝になっていました。悩み苦しんだ後で、主からのプレゼントとして、家族の完全な一致が与えられました。

ただ、黙って主の前に静まろう、と努めました。そしてひたすら各地のキリスト集会の方々とお話をしたいと思い、軽井沢のバイブル・キャンプにたびたび出かけました。家族三人、車で片道十二時間のキャンプ通いは楽ではなく、必ずしもいつも喜びに満ちたものでもありませんでし

た。へりくだりを学ぶためのものでした。

その頃にできはじめた広島や神戸のキリスト集会にも、よく出かけました。家族三人で身軽ですから、土曜日の夜の家庭集会に出てその夜のうちに帰るとか、日曜日の朝早く車で走っていって礼拝をしてその日のうちに帰るようなこともよくありました。傷心の私たちにとって、各地のキリスト集会の方々とお話できることはほんとうにうれしく、心あたたまるひとときでした。

教員生活へ

ところが一九八七年、私の生活にはまたまた大きな変化が起きたのです。

一月末のある日、勤務先の上司から、高校の教員として出向するようにという話がありました。構造不況といわれていた合繊会社の社内事情の中で、次の出向はおそらく私であろうと覚悟していましたし、管理職の場合出向を断わればそれは辞職するという意志表示だととられてしまうような雰囲気がありましたから、私は受け入れる決心をしました。しかし落ちついて考えてみると、二十数年間にわたって勤めた会社を出るに当たって、難しい人間関係やきびしい労働条件を強いられる出向勤務が多い中で、この仕事はむしろ神様のご配慮によるものであろうと感謝するようになりました。

こうして私は教員の道を歩むことになりました。次の文章は岡山県高等学校教育研究会工業部会編集の「工業教育」に、その頃の気持ちを「自己紹介」として書いたものの抜き書きです。

企業出身一教員の自己紹介

私は会社員から教員という職業に移ったことについて、これは神様から与えられたものだと思いました。私はクリスチャンとしての信仰でもって、そのように受け取ったのです。なぜかというと、たとえ自分から教員になりたいと思ったとしても、今から教職の単位を取り、免状をいただき、それから採用試験を受けてどこかの学校の教員になるなどというプロセスは、時間的にも、経済的にも、ましてや会社に在籍したままでは絶対に不可能なことであったからです。そして、むしろ教員になれることに喜びを感じるようになりました。

さて四月一日に辞令の交付をうけて、いよいよ教員生活が始まりました。教室での授業の進め方や生徒の心理などについて最少限の知識を伝授してもらい、受け持ちクラスの全生徒四十名の前に立ったのは四月八日でした。そして新任教員として生徒たちに挨拶をすることになりました。私は自分の今までの仕事のあらましと、そして教員として生徒たちの前に立つことになったいきさつを述べた後で、二つの話をしました。その一つは次のようなことでした。

「皆さんの顔をこうして見ていると、懐かしいような、悲しいような、まぶしいような気がします。なぜかというと、私には今生きていれば皆さんと同じ高校三年生だったはずの長男がいたからです。しかし彼は中学二年の時に天に召されました。名簿を見ると息子の通っていた同じ中学出身の生徒がいたり、生年月日が近い人がいたりして私は複雑な思いがします」。

二つめは「私は新米教員です。皆さんは学校については私よりよく知っているのだから、いろいろと教えてほしい、皆さんは先輩なんだから。しかし人生については、私は現実に、齢を

とっている分だけ、皆さんよりも先輩です。ですが私は自分を自慢するつもりはありません。むしろ自分の失敗とか挫折とかを皆さんに話して、それを踏み台にして、皆さんに成長してほしいと思います。

私は実は大学入試に三回失敗して、三年間も浪人をしているのです。それは見方によっては暗黒の青春といえるでしょう。失敗の人生だったと人はいうかもしれない。長い人生には、いろいろなできごとがあります。しかし今振りかえってみてそれらに出会ったことは、私にとってしあわせだったと確信をもって言うことができます。なぜなら、それらのことによって私という人間がつくり上げられているからです。

皆さんはこれから社会に出て、いろいろと失敗、挫折を経験するでしょう。すでに今その真只中にいる人がいるかもしれません。その時には、私が何を信じ、何に支えられて生きてきたかをこれからの皆さんとのかかわりの中で知って思い出してほしいのです。そういう経験をもった一人の先輩として、私を見てほしいと思います」と話しました。

次に教育について私見を述べさせていただきたいと思います。私はこれまでの教育は、基本的には物づくりのための教育が主流ではなかったかと思うのです。戦前の教育、つまり人を物とし、天皇の兵士という名の消耗品づくりに狂信的にかかわってきた教育は、戦後、大量の物＝商品づくりこそ善であるという考え方に立って、またもや企業の戦士づくりを始めたのです。私はそのような昭和三十年代に工学部を出、高度成長時代の物づくりの戦士の一員となっていたわけです。

この物づくりを優先する教育の中では、優秀な性能をもつ規格化された物などではありえない人間が落ちこぼれていくのは当然だったわけです。これが教育の実情ではなかったかと思います。そしてさらに、この教育における「戦前」と「戦後」は、容易に可逆的であるところに問題があります。

ともあれ、自動車運転の仮免許証にならって、生徒に仮免教員といわれている私は、これからどうしようか、と考えます。今まで企業にいた経験から、教科書には載っていない現場の生の知識を伝えることはできます。しかし、それだけでは物づくりのためだけの教育に加担することになります。それはよくない、というのが私の考え方です。

これからの私にとって一番大切なことは、教員になろうとする前に、一人の人間として私自身がどうなのか、私自身がどう生きようとしているかを生徒の前に「あかし」することではないかと思うのです。何（What）を教えるか、どのように（How）教えるかの問題ではないと思います。

人間の生まれつきの性質は悪なのですが、この天地を創造された唯一の神という絶対者を知り、主イエスを信じ、罪を悔い改めて救われれば、主イエスの十字架のみわざによって罪は洗い流され、義と認められる、と聖書は語っています。ですから人間はもともと罪を犯し、失敗をするものです。しかしその失敗に気がついたら、いさぎよく、勇気をもって悔い改める態度をとることが絶対者を恐れる生き方ではないかと思います。私はそういう生き方をしたいと考えています。

ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。

（詩篇　20・7）

これは紀元前千年頃のユダヤの王ダビデの信仰告白です。その当時の人々にとって、いくさ車や馬こそは戦闘能力や権力を誇示する最高の「物」であったろうと思います。ダビデはしかし、そんな「物」より主のみ名を賛美しよう、神を知っていることを誇りにしよう、私は主を恐れる、と言っているのです。

今の日本では大多数の人々が、自分自身を中流以上だと思いこんでいます。それほど「物」が豊かになり、そして「物」を誇りにする人が多くなっています。

しかし一番大切なことは、絶対者なる神を恐れることではないかと思います。

以上が「自己紹介」からの抜粋です。このようにして始まった教員生活も早くも三年以上が経過しました。そして私はいつも受け持ちのクラスの学年最後の授業で、次の聖書のことばをプレゼントすることにしています。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。

（伝道者　12・1）

それは、私が子どもの時に聖書の神様を知っていたことが、失敗と挫折の連続だった私の人生

の中でどれだけ大きな意味をもっていたかを生徒の一人一人に伝えたいからですし、いろいろな試練の只中にあっても、どれだけ大きな慰めであり、希望であり、力であったかを伝えたいと願うからなのです。

いたんだ葦を折ることもなく

今までの人生を振り返って見ると、それはあっという間に過ぎ去ったようであり、その中でうまくいったものは何一つなかったといえます。しかしただ一つ確信をもって言えることは、イエス様を知っていてよかった、正確にはイエス様に知られていてよかった、という実感です。

「我慢して頑張れば、辛抱すれば、努力すれば、必ず何とかなる」と自分の力を信じて生きてきた傲慢の罪からも解放されて、真の自由を得た幸いを今やっと知ることができました。

イエス様の十字架のみわざによって私たちの罪はとっくに解決されているのだ、ということが分かって、心から解放されました。イエス様は私たち人間を、ただ恐れさせたり不自由にしたりするお方ではなく、私たちを真理を知る存在にし、自由にしたいと願っておられるのです。

「そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」

（ヨハネ　8・32）

私の場合、神様を恐れる思いが、自分を規則ずくめにして頑張ることの好きな性格とあいまって、私自身を暗く重苦しくし、平安のない、喜びのない状態に長い間おいていたことも分かりま

した。それは間違いでした。

主よ。あなたは、みことばのとおりに、あなたのしもべに良くしてくださいました。

（詩篇　119・65）

私は昔の日々を思い出し、あなたのなさったすべてのことに思いを巡らし、あなたの御手のわざを静かに考えています。

（詩篇　143・5）

彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともない。（マタイ　12・20）

この聖句にある通りに、イエス様は「いたんだ葦、くすぶる燈心」そのものであったこの私を選んで、捨てず、その上背負って救い出してくださいました。

私自身はあい変わらず頑固で、イエス様の命令になかなかすなおに「はい」と従わない者であり、家族や周囲の方々にも愛のない者でありますが、イエス様はこのようにどうしようもない者のためにも次のように約束してくださっていますから、ただ感謝するばかりです。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ　41・10）

生きていくのに疲れた方々に

最後に、もう生きていくのに疲れた、自殺したい、と考えておられる方々に特に申しあげます。死は解決ではありません。死は、終わりではありません。すべての人は、死んだあとで裁きに会うことが定められています。

そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている。

（ヘブル　9・27）

イエス様を知らないで、イエス様を信じないままで死ぬことは、永遠に希望も喜びも光もない状態で苦しむようになることであり、その苦しみは、今、この世での苦しみとは比べものにならないほどひどいものです。ですから、肉体の死によっては、何も解決しないどころか、かえって苦しみを増し加える結果になってしまいます。

本当の解決は、ただ主イエス様を知り、信じ、従うことによってのみもたらされます。主イエス様は救い主であり、すべての悩み、思い煩いから、たとえそれがどんなに大きなものであろうとも、必ずあなたを解放してくださいます。

主は捕われ人を解放される。

（詩篇　146・7）

もしあなたが、まだイエス様をご存じないようであれば、どうぞ今すぐにイエス様の所に来てください。イエス様はあふれるような愛をもって、あなたに次のように呼びかけておられます。

そして、あなたを必ず真の救い、真の解決、真の平安、真の幸せへと導いてくださいます。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ　11・28）

またもしあなたが、イエス様を信じ受け入れた後で、なおかつ自殺の思いにとらわれ、またその衝動と闘っておられるようであれば、その方にはぜひ次のことを考えていただきたいのです。

自殺は、自分の思いを主の思いに優先させるという、わがままの結果です。私たちは、「救われるために救われた」のではなく、「主の器として用いられるために救われた」のです。ですから意識して自殺することは、「主の栄光を現わす」ことには決してなりません。そうして主は、愛するあなたが自殺することを、決して決してお喜びにはならないでしょう。どうかこのことを、よく考えてみてくださるように、心からお願いいたします。



左から昭子さん、芳猛さん。1990年西軽井沢▶
国際福音センターの基礎工事を手伝う。

主は「真実をもって私を悩まされ」ました。（詩篇119・75）

若山昭子

一九四二年に大阪に生まれる。柏原小、柏原中、八尾高校卒業。
一九六五年夫芳猛さんと結婚。長女光子さん。

子どものころ

私がはじめてイエスさまのことを知ったのは、小学校一年生のときでした。近所に牧師さんの家族が移ってこられて、そこで日曜学校が始められました。戦争が終わって間もない頃で、たのしみもなにもない時代でしたから、讃美歌を歌ったりお話を聞いたりするのがうれしくて、中学生のころまで続けて行きました。

私の家では、祖母と母がある宗教を熱心に信心していました。信者たちは毎月一回集まって、お酒を飲んで大騒ぎをします。私はいつもこの日がいやでいやで、特に日曜日と重なることを恐れました。私たちが日曜日に讃美歌を歌い礼拝のお祈りをしていますと、私の家からは鐘や太鼓がやかましく聞こえてきます。恥ずかしくて泣きたい気持ちでした。

私はどちらが本物なのかと、家でも日曜学校でもしつこくたずねました。母は、山の頂上を目指すのにどこから登りはじめても同じなように、どの宗教を信じても結局同じことだ、と言うのです。私は同じことなら、静かで感じのよいキリスト教に入りたいと思いました。

しかし、どちらが本物か、ではなくて、真理は一つであるように、まことの神さまは唯おひと

りであって、何を信じても山登りのように道を極めれば同じところに到達するというわけではありません。そこに救いがあるか否かが一番大切です。そしてイエスさまだけが人を救うことができになります。また、まことの神さまを信じる信仰と宗教とは決して同じものでないことを、私は後になってキリスト集会に導かれてはじめてわかりました。

母はいつも色々なことで悩んでいました。そして自分の宗教にひたすら解決を求めていましたが、救いはありませんでした。母は、罪は埃のようなものだから放っておくといくらでも積もってしまう、だから日ごろから心がけをよくして常に埃を払い落とさなければならない、と考えていました。また、自分でどうすることもできないものは前世からの因縁であり、せめて子供に累を及ぼさないように因縁抹消につとめなければいけないとか、人を助けると我が身が助かるなどと言ってはその宗教にのめりこんでいました。

私が高校に入学するころ、父が結核にかかりました。その当時、抗生剤は高価で健康保険も使えず、私たちの家は毎日の薬代にも困るありさまでした。父と母は家で歯科技工の仕事をして、いつも夜中まで働いていました。苦しかった生活がようやく落ち着こうとしている矢先の、父の病気でした。また、苦労続きで疲れ果てていた両親の心は荒れすさんでいました。父の心は母から離れ、母も父と一緒に仕事ができなくなり、信心していた宗教にますますのめりこんでいきました。そのような両親の間で、私は学校の合間に仕事を手伝いました。私が母のかわりに働くことで母がその信心の中に生きがいを持てるならそれも仕方がないと思って、卒業後もそのまま仕事を続けました。

就職と結婚

そうして四年余りがすぎたころのある日、得意先の歯医者さんから「お父さんにもらっている給料の倍出すから、ここで働かないか」とすすめられました。その方は私が給料どころか小遣いすらも貰っていないのを知って大変憤慨され、「今一番したいことは何か、私がお父さんに言ってあげる」と言ってくださいました。突然のことでしたので、私は何と答えてよいのかとまどいました。その歯科医院は大阪の中心のオフィス街にあり、私は品物を納めに行くたびにそこで出会うOLたちをうらやましく思っていましたので、「私もOLになりたい」と思わず言ってしまいました。その歯医者さんは、ちょうどその時歯の治療に来ておられた方に就職を頼んでくださいました。父に対しても「病気もよくなったことだし、娘を自由にしてやりなさい」と強力に説得してくださいました。それで私はある合繊メーカーに就職させていただくことになりました。

入社してしばらくたったころ、隣りの席の男性（今の主人）から、会社の近くの教会で聖書研究会があるから、と誘われました。私も聖書を正しく学びたいと思って何度か行ってみましたが、キリスト教倫理についての勉強会は難しくて堅苦しいものでした。しかも若い男性と一緒に行くのもどうかと思い、あるとき教会に行くのを断りました。そうすると「結婚してほしい」と告げられました。その時の気持ちは、うれしいというよりもこれでやっと自由になれる、という安堵感の方が大きかったと思います。私のような者でもそう言ってもらえる人に巡りあえて、ほっとした気持ちでした。

結婚によって家を出ることができる、これからは自分の人生を歩むことができる、と自分のこ

とばかり考えていました。この人は父とは正反対で、お酒もたばこもきらいという真面目なクリスチャンなので、この人と結婚すれば母のような苦労はしないですみそうだし、私はきっと幸せになれるのではないかと思いました。

両親からは結婚の準備も何もしてもらえず、タンス一つないゼロからのスタートでした。結婚式は聖書研究会に行っていた教会でしていただきました。これからは二人の力で幸せを築き上げて行くのだ、と思っていました。

後に、吉祥寺キリスト集会で行なわれた婚約式の録音テープを聴き、いままで教会では聞いたこともなかった「聖書に示されている本当の結婚の意味」「家庭の中での神さまの秩序」について初めて知りました。この大切なことをもっと早く教わっていたらどんなによかったかと、残念でなりません。

私たちは、日曜日には教会に行き、宗教的な雰囲気をたのしんでいました。礼拝が終わると、銭湯から出てきたような、なにやらさっぱりした気分になり、これが信仰だと思っていました。

息子の死

主人と私が本気になってイエスさまに救いを求めたのは、一九八三年四月二十九日に十四歳の息子が突然逝った時からです。この日は祭日でしたが、私は朝からスーパーの勤めに出ていました。せっかくの休日に家にいてやれなかったことを気にしながら仕事を終えて、食料品の買い物をして夕刻家に帰りました。おみやげのアイスクリームをまっ先に娘と息子の部屋に持って行き

ました。息子の名を呼びながら戸を開けてみました。静まりかえった部屋に息子の姿を見ました。一瞬この子は何をしているのか、と思いました。私を驚かそうとして、変な真似して！と思い、なおも声をかけながら近づいて、気が動転してしまいました。

息子は柔道の帯を首にまきつけていました。私の悲鳴をきいて主人がかけつけ、救急車で病院に運びました。まさかこのまま死ぬとは思いませんでした。一刻も早く意識をとり戻してほしいと願って、息子の体を力のかぎりたたき続けました。

病院で、もう無理ですと言われても、あきらめることができませんでした。植物人間でも、意識がこのまま戻らなくても、この子を生かしてください、と医師にとりすがって必死で頼みました。「神さま、息子を生かしてください。私は神さまのおっしゃることはなんでもします、私は死んでもかまいませんから、どうか息子だけは助けてください」と私は病院の廊下に両手をついて、神さまに願いました。精魂尽き果てるまで祈りました。頑丈そのものの息子の体がこんなに簡単に死んでしまうわけがない、きっと助かるにちがいない、と私は最後までそう思っていました。ですから意識が戻ったら、この一部始終をどう話してあげようかと、その時に息子と手をとり合っている情景までも思い描いていたのです。しかし、息子は生きかえりませんでした。

それでもまだあきらめきれず、体全部がだめならせめて体の一部だけでも生かしてほしいと思い、主人や娘の気持ちもよく確かめないままに、自分勝手に献眼を申し出てしまいました。あの子の目だけでもこの世に生きていてほしい、と思ってしたことでした。なんとしても生きていてほしいの一念で無我夢中でしたが、後になってこのことでも大変苦しむことになりました。私は

息子を愛しているつもりでしたが、それは親のおごり、高ぶり、親のエゴでした。子供のためなら自分は死んでもいいと思っていたはずの私がしたことは、結局、自分の気持ちを慰めるためにわが子の目さえもえぐりとるということだったのです。主が息子をお召しになることをよしとされたにもかかわらず、私はこれほどまでも自分の思い、わがままを押し通してしまいました。

主のご計画を正しく理解して従順に従うことができませんでしたから、私たち家族は、大嵐の海に投げ込まれたような状態になってしまいました。自分の悲しみに耐えることだけで精一杯でしたから、葬儀のことでお世話になった多くの方々にも、その後の生活が軌道に乗るように親身になって助けてくださった方々にも感謝することを忘れて、どうすればこの苦しみを乗り越えることができるかと、そのことばかり考えていました。

私が知りたかったことは、息子の肉体は確かに死んだけれども、その霊はどこへ行って、今、息子はどこにいてどのようにしているのか、ということ、また息子が亡くなった後、私は何に希望を持ったらよいのか、ということでした。息子が天国に行っているのかどうかを知りたくて、親しいクリスチャンの方に手紙を書いたり、あちこち尋ね歩きました。私たちが今まで信じてきたものはキリスト教という「教え」でしたから、「救い」とはどういうものかをまったく知らずにいたのでした。

「天国」に行っています

吉祥寺キリスト集会のことを知ったのは、主人と同じ会社の方から「実を結ぶ命」と「光よあ

れ」第一集をいただいていたからです。息子が召されて四カ月位のころで、つらい時でしたから、救われて喜んでいる方々の証しなど読む気にもなれず、「実を結ぶ命」のリンデさんのすばらしい信仰の証しも、そのころは読んでも訳が分かりませんでした。

また、ケーキの会のご案内もいただきましたが、今さらおいしいケーキを作っても喜ぶ息子がいないのに、と思い、ますます悲しくなりました。でも同じ会社の奥様の熱心なお誘いですから、一度だけ行って、後はお断りするつもりで出かけました。しかしそこでお逢いしたベックさんの奥さまのやさしい笑顔と静かな振る舞いにとても惹かれました。この方はリンデさんが天に召された後、どのようにしてその悲しみを乗り越えられたのか、お聞きしたくなりました。「リンデのことでは、何も心配していません」とおっしゃいました。「悲しんではいない」ではなくて「心配していない」というのはどういうことだろうか、と思いました。

またベックさんともお話をすることができ、私は息子が今どこに行っているのかについて、これまでいろいろな方々を尋ねまわったことをお話しました。ある牧師さんからは「天国にいると信じればいいんですよ。両親は生きている限り死ぬまで息子さんのためにとりなしの祈りをしてあげなさい。それが親のつとめです。この苦しみは一生続くものです。今からこんなに苦しんでいてどうしますか」と言われ、また別の宣教師には「いやー、自殺した者は天国に入れるとは、聖書のどこを探しても書いてありませんから、それは分かりませんね」と言われ、私たちはすっかり希望をなくしてしまっていたのです。

しかしベックさんは即座に「聖書の全体から見て、息子さんは天国に行っています」とはっき

りおっしゃいました。私ははっとしました。私たちは長い間教会に通っていましたが、「聖書全体から」という言葉に出会ったのは初めてでした。そして、息子のためのとりなしの祈りなど必要ないことをお聞きして、これまでにない平安を覚え、かすかな希望の光を見たような気持ちになり、心の中にはじめて明るいものが芽生えるのを感じました。

しかしまだこのころの私は、信仰とは自分に信じこませるもので、自分が信じこむことだと、思っていました。ですから「息子は天国に行っていないはずはない」と誰かれなく聖書を示して説明し、私自身にもいつも言いきかせ、自分を励まし、納得させようとしていました。ほんとうの「天国の希望」を主からのお恵みとしていただくためには、自分の罪深さを知り、悔い改める必要がありました。

主の憐みをいただきました今は、以前のように、息子は天国に行っていないはずはない、と頑張らなくても、また息子のことを無理にあきらめようとしたり、忘れるようにつとめなくても、主におまかせしていればこれからも最善をなしてくださると確信し、先々の希望も与えられ、何も心配しなくなりました。

間違った道へ

私たちは息子の一年目の記念会の日に、数名の方々と家で礼拝をさせていただきました。家庭集会が新しい生きる目標となり、希望となりました。しかしイエス様を信じる信仰とはどういうことかもよく知らずに無邪気によろこんで始めてしまいましたから、私が主の前に正しくされる

ために、主は「真実をもって私を悩まされる」ことになりました。

息子を亡くした悲しみ、嘆きから救い出していただいたのですから、今度は私が主のために働かなくては申しわけないと思い、わが家の集会のことを一生懸命にしようと務めました。しかし各地で開かれている家庭集会などに行ったこともない私は、どうしてよいのか戸惑ってしまいました。なにをしても不備なことばかりのように思われ、何か言われるたびにがっかりしてしまいました。私はいつも他人の目を気にし、自分を守ることに窮々としていました。主人は性格もあって人前で話をすることが苦手で、祈りもメッセージも決して上手でなく、人を気にする私は、歯がゆい思いをしていました。主人も心の中では相当苦しんでいたようですが、ただ黙っているばかりですから、私よりもまだ楽をしているように見えて、私は主人に当たりました。「少しは勉強して、しっかりしてよ！」と激しい言葉で主人をなじりました。

このように、せっかく始まった我が家の集会でしたが、そのことを通して私が、主人と共に悩み、共に祈るために備えられた主の訓練とも知らず、その頃は、私が主人を裁いてばかりいました。自分たちの愚かさ、駄目さを素直に認めてへりくだることをしないで、私が、私がという自己中心の思いに進んでいきました。

わが家の集会に一人でも多くの方に来ていただけるようにと案内書を作って配って歩いたりもしました。「宗教ではなくて信仰です」と人には説明しながら、私自身は子供のときから身に沁みついていた行ない中心の宗教観にがんじがらめになり、へとへとに疲れきってきました。私が努力するところに神さまは働いてくださる。神さまの働きがないのは、まだまだ私の努力が足り

ないからだ、と思いこみ、また、信仰があれば苦労も苦労と思わずにできるはず、信仰が足りないからつらく思うのだと、自分を打ちたたいてがんばりました。「もうこれ以上できません！」と叫びたくても、それを言うのは不信仰で、神さまに対してわがままな態度であって、辛抱と努力、これが信仰なのだ、と間違って思いこんでいました。真の救いを知らない私の信仰は、以前は曖昧なものでしたが、今度もまたこのように間違った方向へと進んで行きました。

苦しみと絶望の果てに

私は生まれて間もない頃の中耳炎がもとで、右側は人の声も聴こえなくなっています。子供のころ、名前を呼んでもすぐに返事をしない、と言ってはよく叱られました。「コラ！　つんぼ」と怒鳴られたりしたこともありました。自分の耳が悪いとは知らず、兄や弟はこのような目にあわないのに、どうして私だけが…と不思議でした。ほんとうの親かどうか疑い悩みました。少し聴こえが悪いだけですのにひどいことを言われましたので、私は大人になっても耳が悪いことをひたすら隠し続け、主人にも長い間打ちあけることができませんでした。ですから、聴こえない人たちの力になってあげたくて、手話を覚えました。

我が家の集会には手話通訳がついているというので、聴覚障害の方々も来られるようになりました。私はこの方々がもし来なくなるようなことがあれば、それは自分の責任だと心配しました。なんとかして続いて来てもらえるように、懸命に努力しました。

やがてそのことで主人と意見が合わなくなりました。私は難聴のつらさが多少わかるだけに、

そのような方々にできるだけ親切にすることが信仰的だと考えました。主人はどちらかというと厳しい態度をとりました。主人に心が合わせられなくなりました。

そうするうちにますます悩みがつのり、心も体も疲れ果て、日中でも寝込む日が多くなりました。聴こえる左耳も耳鳴りがはげしくなって、神経性難聴が進みました。みなで集ってお話をする時も、少しだけ声を大きくしてもらえると聴こえるのですが、聴こえるかどうかのぎりぎりの声で話されるといじわるをされているように思えて、つい疎外感をもってしまいました。私はおつきあいをさけるようになっていきました。

また家族だけでする食事のお祈りの時にも、主人の声が聴こえないのでお祈りが終わったことにも気付かず、お皿のカチャという音であわてて顔を上げるときのみじめさ、主人や娘がにこやかに話していても、同じ食卓にいながら何も聴こえない時のなさけなさ、自分の居場所はもうどこにもないように思い込んでいきました。

とうとうある日、無断で家を出てしまいました。さすがに気がとがめて反省して戻るのですが、何度かくりかえしてしまいました。とにかく家からも皆さんとのおつきあいからも離れることでやすらぎが得られる、私がこれほどまでに悩んでいる難聴の問題を軽く簡単にしか見てくれない健聴者の世界から逃れたいと、自分中心の思いでいっぱいでした。手話で話せる人たちの中に身を置くと、ほっとしました。

そのうちにいよいよ心身ともにおかしくなってきました。見かねて主人が私を精神科に連れていってくれました。診察の結果では、自殺願望が強くて危険なので、監視のできる病院に即刻入

院するようにということで、少し遠方ではありましたが、手話で話せる医師のいる病院に行きました。遠くから頼って行きましたので、主治医からも特別に親切にしていただきました。

しかし病院の治療方法には解決はありませんでした。医師はこと細かに私の生い立ちや環境を聞き、私が話すことをいっさい否定的な言葉を使わず全面的に受け入れ、理解のある態度をとられましたので、私は長年の積もり積もった劣等感がときほぐされていくように思いましたが、しかしかえってこのために、苦しみ悩みの原因を自分の生い立ちや環境のせいにしてしまって、自分の罪から目をそらせる結果となりました。

体が回復するにつれ、自我も元気をとり戻し、あらたなストレスに悩みました。規則づくめの病院の生活に嫌気がさしてきました。たとえば娯楽の時間には、演歌のカラオケに合わせて歌ったり、民謡にあわせて踊ったりするのがありました。これは趣味の問題でしょうが、私はそういったものに溶けこめずに、高ぶった態度をとり、自分勝手なことをしていました。それで「あなたは非常にわがままな性格だ」と言われました。この時はまだ自分がわがままだとは思いもよらず、小さいころからがまんとがんばりでやってきたのに、この私がどうしてわがままなのかと納得できなくて、なおのこと反抗的になりました。主人と娘はしっかり信仰に立ち、はるか先を歩いているように見え、精神病院でさえ落ちこぼれになってしまった私はいよいよ足手まといになっている、と自分勝手に思いこんでいきました。また我が家の集会で大勢の方々と顔を合わせることを思うと家に帰ることもいやで、かといって、病院生活も限界にきていました。そうしたころのある日、突然同室の若い人が規律を守らなかったとかで、私が初めしばらくいた閉鎖病棟に

移されたのを見て、この次は自分ではないかと不安になりました。看護婦さんがいつも腰につけている鍵の束を見るだけで、閉じこめられる恐怖で胸がしめつけられるようでした。行き詰まって、逃げ道を探していた私は、前後の見境もなくしてしまい、とうとう病院を脱け出してしまいました。

完全にくだかれて

この時になってやっと自分の間違いに気付きました。ここまでにならないと、自分の愚かさも、罪深さも、分かりませんでした。主を信頼しないで人の目ばかりを気にし、自分の力に頼って歩んだ結果、もうどこにも逃げ場がなくなってようやく目が覚めました。今度は本当に頼るのは主だけ、と思いました。混乱していた頭もはっきりして、次のみことばが思い浮かびました。

私の皮が、このようにはぎとられて後、私は、私の肉から神を見る。この方を私は自分自身で見る。私の目がこれを見る。ほかの者の目ではない。（ヨブ　19・26、27）

私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。（ヨブ　42・5、6）

思わず、「神さま！」と言ってその場にひれ伏しました。このとき「主を礼拝する」というのはこういうことか、と思いました。今までは頭の中だけの神さましか知りませんでしたし、礼拝

も形だけのものでした。

こうして悔い改めの信仰が与えられ、本当に目で見るように主を礼拝しました。

これまでの私は、後悔と反省はたくさんしてきましたが、真の罪の悔い改めはしていませんでした。悔い改めることなしには罪の赦しはありえず、私にはイエス様の贖いのゆえに自分は赦されているという確信がありませんでしたから、息子のことも、私が息子を死なせてしまった、と悔やみました。私がもっとこうしていたら、ああしていれば、と見当違いのところで自分を責めたてました。心の底では早くこの苦しみから逃れたいと思いながら、それでは息子に申し訳ない、自分が楽になるのは親として無責任ではないか、息子のためにももっと苦しまなければならない、と考えていました。そのようなときに「あなたも子供を死なせるつもりではなくて、子供のためにと何事も一生懸命にしてきたのだから、そんなに自分を責めなくても……」と言われ、なるほど私だって子供のために精一杯尽くしてきたのだから、多少いけないところがあったにしても、すべて子を思う親の思いから出てきたことには違いない、このことはきっと神さまもご存知だから、息子を死なせてしまったことも赦していただいていいのかもしれないと、私は完全に間違った根拠に立って自分を義とし、正しい者としてしまっていたのです。

イエスさまの血潮だけが

しかし本当は、私は主の前には何の言いわけもできるはずがなかったのです。百パーセント私が悪くて、私が間違っていました。その私をもイエス様は愛して導こうとしておられたのに、私

は神さまに従わず、自分勝手な道に来てしまって、もう私の中にはまったくよいものはなにもありません。こんなに罪深い者とは知りませんでした。これほどにならないとわからない愚か者で、無知で頑固でした。神さま本当にごめんなさい、とただただ自分の罪を認めて頭をさげるのみでした。

生きている値打ちもない、とわかったとき、イエスさまの光が見えました。

「人が主に向くなら、そのおおいは取り除かれるのです」（Ⅱコリント3・16）のみことばのとおりでした。神との平和、霊の交わりとはこのことだと思いました。

自分が今どんな状態にあろうとも、主がもう私をとらえてくださっている。私の霊は主のうちにあるとわかると、肉の体が死のうと生きようと、私にはどうでもよくなりました。恐怖と絶望にかわって、主の平安で満たされました。

「神さま、私をみ手にとらえてくださっていますのでありがとうございます」と祈りました。そして生きている間にせめて一言主人にあやまりたいと思い、公衆電話から「ごめんなさい、今さら手遅れだけど」と言いました。主人の声を聞いて思わず「助けて！」と叫んでしまいました。

主は、私をまことの悔い改めに導かれると同時に、急転直下の解決をくださいました。私は泥沼から救い上げられました。それは息子が召されて四年目の春でした。

私は家に帰ることができましたが、自分で自分がゆるせなくて、みじめで、なさけなくて、消えてしまいたい、と自分の罪深さに耐えられなくなりました。心から清めてください、と願いました。そうすると、このような私でも、イエスさまの血潮で洗っていただけたら清くなれる、そ

れ以外では、なにをもってしても清くなれないと分かりました。以前は血潮で洗うなんて気持ちが悪いとか、どうして血で洗ってまっ白になるのかと考えていましたが、自分のどうしようもない罪がわかると、理屈抜きで心から信じました。また私にかわってイエスさまが十字架で死んでくださったことも、主の十字架を見るように思いました。

信仰とは自分で信じこむものだ、と思っていた私が、本当に素直に上からのお恵みとして信じました。十字架の意味もキリスト教の教理として学んだだけでしたが、はっきりと私自身のためであったと、そして福音とはこういうことだと、主は手にとるようにして次々と教えてくださいました。

主にある完全な一致へ

私にはもう一つ気にかかることが残っていました。それは私の自分勝手な歩みを神さまは赦してくださったけれど、主人はどう思っているのかということです。主人は咎めるようなことは何も言わず、むしろ自分が悪かったと言ってくれていました。それでも私は主人の本心はどうか、そのことばかりが気がかりでした。ある方に自分の気持ちを正直に話して相談しました。「ご主人のことは主におまかせして、あなた自身が主の前にどう歩むかです」と言われ、次のみことばを示してくださいました。

天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。（詩篇 103・11、12）

わたし（主）、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。（イザヤ　43・25）

それからは、とにかくイエスさまだけを見上げて、主のみことばに従わせてください、と祈る毎日でした。

やがてクリスマスが近づいたある日、真暗やみの地獄の底から救い出していただいたその一年をかえりみながら聖書をひらいたところが、イザヤ書の45章でした。

「わたしは秘められている財宝と、ひそかな所の隠された宝をあなたに与える。それは、わたしが主であり、あなたの名を呼ぶ者、イスラエルの神であることをあなたが知るためだ。」（イザヤ　45・3）

このようにして、私の記憶の中の暗やみの部分を、主は光にかえてくださいました。まことの礼拝、悔い改め、罪の赦し、そして新しいいのちと、神さまの宝物のことごとくをいただき、なんと豊かに祝福された一年であったかと、感謝で胸がいっぱいになりました。そして、このとき主人とはじめて心を合わせて「苦しみにあったことは私たちにとって幸いでした」と祈りました。この祈りによって、今までのわだかまりは跡かたもなく消え去り、私たちに完全な一致が与えられました。

夫に従って

私はこれまで、主人との結婚は実はまちがいではなかったか、と考えることが時々ありました。性格はあまり合わないし、結婚の動機も親から離れるためであったようで、人を愛するということも知らないで結婚してしまったことを悔いる思いがありました。しかし私の気持ちがどうであれ、神さまが主人との結婚を導いてくださり主人を愛する思いを与えてくださっていたことに気付かないで、私はその時々の感情に支配されて自分中心にわがままいっぱいに生きてきてしまったことを、結婚のはじめにさかのぼって悔い改め、それらすべてを主が備えて導いてくださったことに心から感謝しました。

それからは、私が心配したり思い煩ったりしますと、主人も一緒に悩んでくれるようになりました。あれほど思い煩うことの多かった私が、今ではなにも心配しなくなりました。なにごとも主人に相談して、主人の言うとおりにした方がすべてがうまくいきます。私も本当に楽になるのがわかりました。以前の私は、聖書の中の「妻は夫に従いなさい」のみことばがなければ、もっと聖書が好きになれるのにとか、夫に従えといっても夫によりけりで、主には従えても主人には従えない、などとひどいことを平気で口にしていました。それが今では「主に従うように、自分の夫に従いなさい」（エペソ5・22）が、私には一番うれしいみことばになりました。家庭にあっては夫としての主人に、キリスト集会にあっては主がたてられた兄弟としての主人に、どんなことでも尋ねて頼ることのすばらしさとお恵みをたくさんいただくようになりました。

古いものは過ぎ去って

主のみことばに従わず、自分のわがままを通し抜いた結果、私は本当に気を狂わせてしまいました。聖書にはそのとおりのことが記されています。

主はあなたを打って気を狂わせ、盲目にし、気を錯乱させる。あなたは、盲人が暗やみで手さぐりするように、真昼に手さぐりするようになる。……あなたは休息することもできず、足の裏を休めることもできない。主は、その所で、あなたの心をおののかせ、目を衰えさせ、精神を弱らせる。あなたのいのちは、危険にさらされ、あなたは夜も昼もおびえて、自分が生きることさえおぼつかなくなる。

あなたの神、主に立ち返り、きょう、私があなたに命じるとおりに、あなたも、あなたの子どもたちも、心を尽くし、精神を尽くして御声に聞き従うなら、あなたの神、主は、あなたを捕われの身から帰らせ、あなたをあわれみ、あなたの神、主がそこへ散らしたすべての国々の民の中から、あなたを再び、集める。たとい、あなたが、天の果てに追いやられていても、あなたの神、主は、そこからあなたを集め、そこからあなたを連れ戻す。

（申命記　28・28、29、65、66、30・2～4）

私のこれまでの生き方をふりかえると、なにもかも的はずれのことばかりして、罪の中をひたすら自分中心の思いで歩んできてしまいました。イエスさまはこのような私を数々の悩みに会わせられましたが、もし私にこれらの苦しみがなければ、どのような人生を歩んでいたことでしょ

う。今のような、永遠のいのちにつながる本当のよろこびと平安の生活を知らずに、一時的な自己満足に終わる実体のない生きがいを求めて、きっと虚しい毎日をすごしていたと思います。私にとって、これまでの悩み苦しんだことは重荷ではなくなり、かえってこれらの経験があったからこそ、主のすばらしさ、神さまの救いのすばらしいみわざを知ることができました。

またその後、我が家での倉敷のキリスト集会は、ささやかで小さな群れながらも主にあって一つとされ、自分の罪に気がつくとすぐにその罪を言いあらわし、絶えず光から光へと歩みを共にする、よろこびの集会へとかえられていきました。

しかし、これで自分は少しはいい人間になれた、というのではありません。私の自我は相変わらず強くて、まだびくともしていません。そしてこの自分でもどうしようもない肉の力は今も私を支配します。毎日の暮らしの中で、自分中心のわがまま、愚かさ、頑固さに気付かされ、ほんとうにがっかりしてしまいますが、次の瞬間、ほっとします。なぜなら、自分がみじめで駄目だと思っているときだけ、主を仰ぎ見ることができるからです。自分の罪深さをいつも覚えて、常に悔い改めとへりくだりに導かれたいと願っています。

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。

（エペソ　5・8）

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

（Ⅱコリント　5・17）



◀ 1990年教え子の宮本さんを中にして夫妻で。右端は中山さん。

「光が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。

（Ⅱコリント　4・6、7）



▲ 左から芳猛さん、昭子さん、長女光子さん。1988年軽井沢バイブル・キャンプにて。



▲ 1991年夏、西軽井沢国際福音センター建設現場でアメリカの大工さん、レンガ工さんたちと。

あとがき　西軽井沢国際福音センターについて

ゴットホルド・ベック

「あなたがわたし（主）の前で願った祈りと願いをわたしは聞いた。わたしは、あなたがわたしの名をとこしえまでもここに置くために建てたこの宮を聖別した。わたしの目とわたしの心は、いつもそこにある。」（Ⅰ列王記　9・3）

主なる神は、今も生きて働いておられるお方です。
主なる神は、信じる者から離れず、決して捨てないと約束しておられるお方です。
主なる神は、私たちの祈りを聞いてくださり、それを聞き届けてくださるお方です。
主なる神は、ご自分の宮を建ててくださいます。
主なる神は、奇蹟をなしてくださるお方です。

吉祥寺キリスト集会としてスタートした私たちは、それ以後、二十五年間、軽井沢の地においてバイブル・キャンプを開き続けてきました。参加する方々は、最初は僅かな人数でしたが、主の祝福によって、数人のグループは小さな群れとなり、小さな群れはやがて大きな群れになりました。軽井沢でのバイブル・キャンプは常に主によって祝福され、このキャンプを通して実に多くの方々がイエス様に出会うことができました。

私たちはこの軽井沢バイブル・キャンプに人を集めるために、一度も宣伝をしたり、招待状を

配ったりしたことはありません。それでもキャンプに参加する方々は年々増え続ける一方で、ここ数年は四、五百名、今年の五月などはとうとう六百名を越えてしまったのです。それでも参加できる方々はまだ幸せで、施設が小さいために参加したくとも参加できない大勢の方が取り残されてしまっているのです。

このことは早くから問題になっていて、いつでも使えて、しかももっと大きな集会場が主のために必要であることは明らかでした。

そのため私たちは、何年もの間、日本全国どこからでも人々が集まりやすく、主が必要とされる時に、必要な人数で、必要な日数だけバイブル・キャンプを開けるような集会場が与えられるようにと、熱心に祈り続けてきました。

この祈りは主の聞かれるところとなり、まず、日本列島の中心ともいえる西軽井沢に土地が与えられました。

しかし一方では、ごく少数ながらこのプロジェクトに反対し、そのために集会を離れていかれる方々もありました。このことは、私にとっては大きなショックであり、言い表わせないほどの痛みでもありました。しかし、日本中に広がりつつある主の福音をさらに大勢の方々に宣べ伝えるためには、どうしてもその中心となるべき大きな集会場、センターが必要なことは明らかです。主イエス様によって日本全国に対する思いを与えられた兄弟姉妹方は、懸命に祈り続けました。

また、ゲストハウスの建設、さらに福音センターの建設へとプロジェクトが進むにつれて、多くの試練が次から次へと与えられ、一時はセンターの建設は不可能に見えた時もありました。

主なる神は、私たちの祈りを聞いてくださり、それを聞き届けてくださるお方です。多くの試練には人智を超えた解決が与えられ、ついに一九九〇年には基礎工事と浄化槽の埋設工事を完了し、いよいよ一九九一年の五月から福音センターの建物本体の建設工事が始まったのです。これこそ、主なる神が聾でも唖でも盲でもない証しであり、私たちの幼子のような祈りが必ず聞き届けられるということの証しです。

このようにして建てられた西軽井沢国際福音センターは、人間が造ったものではなく、主なる神のみわざの現われです。

言うまでもなく、この建物それ自体は決して神の宮ではありません。ここは神から聖霊を受けて「聖霊の宮」となった人々が集まる所です。その人々が主イエスにあって一つに組み合わされ、「神の宮」となるのです。

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。

（Ⅰコリント　6・19）

あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。この方にあって、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、このキリストにあって、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

（エペソ　2・20～22）

そして何よりも、この福音センターは、まだイエス様をご存じない方々に福音が宣べ伝えられていく場所です。主イエス様にあって皆が真の交わりを持つ場所です。希望をなくした方々がイエス様に出会う逃げ込み場です。

集会場には一千人の人々のための場所があります。一九九二年のゴールデン・ウィークには、この福音センターで初めての大会が開催される予定です。その日にはおそらく、北は北海道から南は沖縄まで、またドイツからも、その他の国々からも、多くの方々がこの福音センターに集まることになるでしょう。

この西軽井沢国際福音センターでは、年間を通して、全国的な規模、国際的な規模のバイブル・キャンプが随時開かれ、また、日本各地のキリスト集会を中心とした地域的なバイブル・キャンプが次々に持たれます。さらに毎週週末には、悩んでいる方々のための集会も開かれます。悩んでいる方々、つまり離婚の危機にある方、別居しておられる夫婦、登校拒否の子供、自殺したいと思っている方、ノイローゼ気味の方、アルコールや薬物依存症の方、そのご家族は、主イエス様を知ることによって、生きる希望を持つべきです。また、いろいろな職業の方々やその周囲で一緒に働いておられる方々、つまり会社の経営者、大学教授、学校の先生、医者、看護婦、警察官、パイロット、スチュワーデスの方々のためにも、多くのセミナーが時に応じて開かれます。そしてもちろんそのほかにも、主イエス様が必要とされる集会が、随時この福音センターで開かれるようになるのです。

私たちは、もちろん、キリスト「教」のために宣伝をする者ではありません。また、キリスト教の布「教」活動をする者でもありません。そのようなことは、誰にとっても何の助けにもならないからです。

私たちは、真に生きがいのある人生を人々に与えることがおできになる「主イエス様ご自身」を、一人でも多くの方々にご紹介したいだけです。その主イエス様は、今、この瞬間にも、次のようにあなたに呼びかけておられます。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

（マタイ　11・28）

主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心がご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです。

（Ⅱ歴代誌　16・9）

なお、西軽井沢国際福音センターの誕生を機に、主にある全国のキリスト集会を総称して呼ぶ場合は「キリスト集会」としたいと思います。従来の「吉祥寺キリスト集会」ではもはや全国に広がりつつある日本各地のキリスト集会を代表する名前としてふさわしくなくなったからです。また、全国のキリスト集会の連絡のためには、新しくできた西軽井沢国際福音センター内に連絡センターを置きますので、ご利用ください。

一九九一年　クリスマスの日に

ゴットホルド・ベック

基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくのです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えながら読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださるでしょう。

一　みことばの大切さ

ヨハネ17・17　エレミヤ15・16　Ⅰヨハネ5・13　Ⅰペテロ1・23　詩篇119・105、160、162

二　悔い改めと信仰

Ⅰヨハネ1・9　箴言28・13　詩篇32・1～5　イザヤ55・6、7　ヨハネ6・37

三　私たちの身代わりとなられたイエス

イザヤ53・4～6　Ⅰペテロ2・24　Ⅱコリント5・21

四　血潮の価値

イザヤ1・18　ローマ3・24、25　Ⅰヨハネ1・7　エペソ1・7　Ⅰペテロ1・18、19
黙示12・11

五　確信の根拠

イザヤ43・1、25　イザヤ44・22　ルカ7・48　ヘブル8・12　ヘブル10・17
詩篇103・12　ヘブル13・5、6

六　思いわずらうな

マタイ13・22　マタイ6・25～32　ピリピ4・6、7　Ⅰペテロ5・7～9　詩篇55・22

七　試練の時

ヤコブ1・12　ヤコブ4・7、8　Ⅰコリント10・13　Ⅰペテロ5・8～10
Ⅰペテロ1・5～7　Ⅱコリント12・9、10　ローマ5・3～5　ローマ8・28
イザヤ40・29～31

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデのおすすめ

二十歳そこそこのドイツの少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇跡であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ　31・3）

リンデの、主に従い通す態度は、吉祥寺キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起し、多くの人々が自分の支配権をイエスさまに明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。

なおこの本は韓国語版、ドイツ語版が出版されました。さらに病床にあって本の読めない方々のために、ＰＢＡのアナウンサー渡辺康子さんが朗読したテープ（８本１組）があります。



ゴットホルド・ベック編著

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

価三三〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒１８０武蔵野市吉祥寺本町４―９―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）　ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びの内、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第一章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。

私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。

この本は、聖書を「研究」するためにではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



なにものも私たちを
神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）
ゴットホルド・ベック著
各巻とも価三〇〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

光よあれ「私たちは主のもの」証しシリーズのおすすめ

「光よあれ」を読んだのがきっかけで、新しいクリスチャンがたくさん誕生しました。「私もその中の一人ですが、まるで吸いこまれるように一気に読んだあの時の感激を忘れることはできません。多くの方々の証しに感動し、あとがきのベックさんの言葉に衝撃を受け、気がついてみたらクリスチャンになっていました。まさに『光よあれ』です。それは、あっという間のことでした」と、ある方は証しされています。第1集には、山本孝子さんの「み翼のかげで」、野口広教授の「klein aber mein から klein aber Dein へ」、野田繁さんの「虚しさからの脱出」、池田傳一さんの「光の中に移されて」など、また巻末にはベックさんの「神は愛です」というメッセージが収録されています。



光よあれ 第1集　吉祥寺キリスト集会編
私たちは主のもの　25人の証し　シリーズ
価三三〇円

第2集には、アルコール依存症との凄惨な闘いの中から主の恵みによって新生を体験した染野茂夫さんの「駆けのぼりし、主の道」。真の神に出逢った感激を語る宮田清枝さんの「偶像から解放されて」。安宅産業崩壊の過中で主を見出した松見敬三さんの「曙からお昼過ぎまで」。愛する一人娘を失い、主にある恵みを証しされる重田定義教授の「主の御名はほむべきかな」など、また巻末にはベックさんの「無限の宇宙にある神」のメッセージが収められています。



光よあれ 第2集　吉祥寺キリスト集会編

私たちは主のもの　25人の証し　シリーズ

価三五〇円



第3集には、激動する時代の流れの中で少しずつ聖書の福音に目覚めてゆく過程を描いた納富信子さんの「主のご真実に支えられて」、大学紛争のさ中、聖書と出会い、救いを受け入れた蘇畑卓郎さんの「とこしえの磐」、またご夫婦それぞれの立場から信仰に至る道と深い体験を述べられた3組の夫婦による証しなど、また巻末には、ベックさんのメッセージ、「みこころが地でも行なわれますように」が収められています。

光よあれ 第3集　吉祥寺キリスト集会編

私たちは主のもの　42人の証し　シリーズ

価三三〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

光よあれ「私たちは主のもの」証しシリーズのおすすめ(続)





フジテレビのニュースキャスター故山川千秋さんの奥様の証し「ここに主がおられる」、がんで召された笹川郁夫さんの「もはや私ではなく、キリストが私の中で」、大塚二郎助教授の薬物依存症からの脱出記「高慢を砕かれて」などイエス様に救われた方々の多くの証しが満載されています。

光よあれ第4集　キリスト集会篇
私たちは主のもの　66人の証し　シリーズ
価三五〇円

小林幸子さんの「平安と喜びをいただいて」、京都の加藤正光さんご一家の明るい証し、天に召された娘のことを証しした「喜びをもって主に仕えよ」、沖縄の大城紀美子さん、平良孝七さん、高知の江草清子さんほか、日本全国に広がるイエス様のみわざが感動的に語られたシリーズです。

光よあれ第5集　キリスト集会篇
私たちは主のもの　67人の証し　シリーズ
価三八〇円

お申込みの方法は前頁末尾をご覧ください。

主イエスは言われた。

見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。 マタイ28:20

牧師制度がありません

私たちのキリスト集会には牧師制度がありません。会社員、公務員、教師、医者、経営者、芸術家、弁護士、技術者などさまざまな職業を持つ人々が集まって、自発的に責任を分かちあい、一切強制されることなく、純粋に聖書のみことばによりたのみ、主にある交わりを保つものの集いです。

会員制度がありません

もちろん名簿もありません。ですから「会員」になりたくてもなれないのです。いわゆる宗教団体的な制度は一切排除して、主ご自身のみが頭となって働かれ、導かれ、主ご自身が満ち満ちておられることのみを祈り求めている集会です。

組織・会則がありません

私たちの集会には、役員会も、総会も、定例会議も、会則も存在しません。みんなが助けあって重荷を分かちあい、全てが自発的に、喜びをもってなされています。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度がなく、献金は自発的に行なわれ、無記名ですから主のみがご存じです。

日曜礼拝と家庭集会

日曜日には、主の十字架の血潮をしのんでの礼拝があり、その後の福音集会では兄弟たちが交代でメッセージを伝えます。全国には70箇所以上に家庭集会があり、礼拝を行なう所も増えています。

キリスト集会

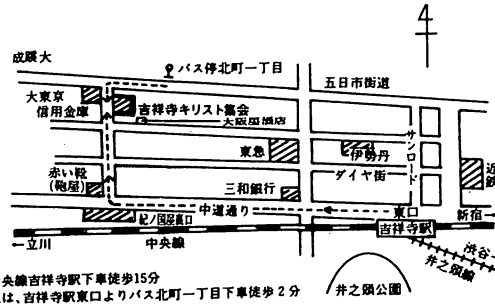
吉祥寺キリスト集会のご案内

私たちは、純粋に聖書の真理だけを学び、伝える者の集いです。会員制度を持たず、出入りは自由であり、いかなる党派、組織にも属していません。この本をお読みになって聖書と福音に関心のある方は、ぜひお気軽においでください。お電話をお待ちします。(住所・電話は1992年1月1日現在のものです)

吉祥寺キリスト集会

G.ベック　0422-22-2016　東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11 〒180

日曜礼拝	10：30　および14：00
日曜メッセージ	12：00　および15：00
子供日曜学校	9：00
中高生日曜クラス	9：00
青年日曜クラス	14：30
火曜学び会	11：00
水曜学び会	19：30
木曜祈り会	19：30
春・夏・秋	西軽井沢バイブルキャンプ



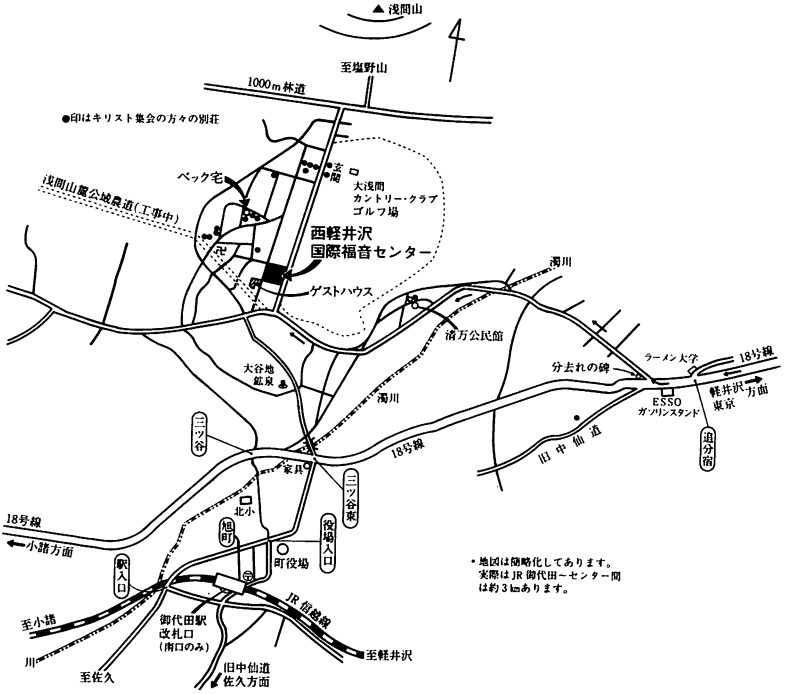
中央線吉祥寺駅下車徒歩15分
又は、吉祥寺駅東口よりバス北町一丁目下車徒歩2分

●AAミーティングへのご案内

AA武蔵野グループは、吉祥寺キリスト集会において、毎週火曜日午後7時よりAAグループ・ミーティングを開催しています。アルコール・薬物などの依存症で悩み苦しんでおられる方、またそのご家族の方、知人の方、参加は自由です。AAミーティングは、希望と信仰による回復のステップです。すでに悲惨な依存症から解放され、家族と共に希望と平和に満ちた生活を送っている大勢の人々が心から歓迎いたします。

西軽井沢国際福音センターのご案内

西軽井沢国際福音センター
0267−32−6400㈹　長野県北佐久郡御代田町塩野４５０−１５〒389-02
西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
0267−32−6444　長野県北佐久郡御代田町塩野４５０−３３〒389-02



• ＪＲ信越線で御代田駅下車。タクシーで約５分＝800円程度。徒歩約45分＝３km。
御代田へは東京上野駅から信越線特急「あさま」で軽井沢乗りかえ、普通で３つ目の御代田駅下車。
• 国道18号線で軽井沢から追分信号を越えて1.5km先、２つ目の追分宿の信号を越えて10km先、左にESSOのガソリンスタンド、右に「分去れの碑」を右折して約３km。
• 道路は禁駐車周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

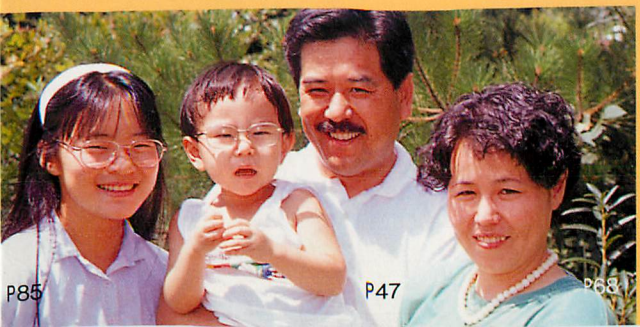












「光が、やみの中から輝き出よ。」
と言われた神は、私たちの
心を照らし、キリストの御顔にある
神の栄光を知る知識を
輝かせてくださったのです。
(IIコリント 4・6)

定価380円(本体369円)